平成18年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

諏訪木遺跡II・上之古墳群第2号墳

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書III—

2007

埼玉県熊谷市教育委員会

平成18年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第2号墳

すわのきいせき　かみのこふんぐんだい　ごうふん

―熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ―

2007

埼玉県熊谷市教育委員会

序

熊谷市は、平成19年２月13日に江南町と合併し、県北初の人口20万を越える都市として新たにスタートいたしました。そして、江南町との合併を機に、熊谷市立江南文化財センターが発足したところでございます。

新市は、丘陵、台地、沖積低地と地形が変化に富み、肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。今後は、江南文化財センターを拠点として、これらの文化財の保護・普及活動を行っていく所存でございます。

さて、熊谷市では市民が暮らしやすく、生活環境の豊かさを実感できる土地利用を図ることを目的に土地区画整理事業を進めております。市内上之地区で進めている上之土地区画整理事業もその一つであります。事業地内には事前の試掘調査により、古墳時代から近世にかけての遺構が確認されました。遺跡の重要性を鑑みて、関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりましたが、土地区画整理事業上やむを得ず計画等の変更ができない街路築造工事に関しては、記録保存の措置を講ずることとなりました。

本書は、平成12年度から計６回にわたって発掘調査を行った諏訪木遺跡と上之古墳群第２号墳について報告するものでございます。諏訪木遺跡の調査では、平安時代から中・近世までの集落跡が確認され、各遺構から土器をはじめとする多くの遺物が発見されました。また、上之古墳群第２号墳は、ごく一部の調査ではありましたが、埴輪がまとまって出土いたしました。これらの成果は、当地域における過去の様相を明らかにする上で大変貴重なものといえます。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りました熊谷市都市整備部都市計画課、土地区画整理中央事務所、並びに地元関係者には厚くお礼申しあげます。

平成19年３月

熊谷市教育委員会
教育長　野　原　　晃

例　言

1　本書は、埼玉県熊谷市上之1903―１番地他に所在する諏訪木遺跡（埼玉県遺跡番号59―016)、上之古墳群第２号墳（埼玉県遺跡番号59―013―２）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。

3　本事業の組織は、第Ⅰ章３のとおりである。

4　発掘調査期間は、下記のとおりである。

平成12年度：平成13年２月13日～３月28日

平成13年度：平成13年５月14日～９月21日

平成14年度：平成14年８月９日～９月13日

平成15年度：平成15年10月14日～11月17日

平成16年度：平成17年１月24日～１月28日

平成17年度：平成17年６月20日～８月９日

整理・報告書作成期間は、平成18年４月24日から平成19年３月23日までである。

5　発掘調査の担当は、平成12年度を金子正之が、平成13～15・17年度を吉野　健が、平成16年度を寺社下博が行った。

本書の執筆・編集は、松田　哲が行った。

6　発掘調査における写真撮影は各年度の担当者が、遺物の写真撮影は松田が行った。

7　本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

8　本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)

秋本太郎　小林　高　鈴木敏昭　村松　篤

埼玉県教育局生涯学習文化財課　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡　　例

本書における挿図指示は、次のとおりである。

1　遺構挿図の縮尺は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

調査区全測図(1)…１／600　　全測図(2)〜(4)…１／400　住居跡・土坑・井戸跡…１／60

掘立柱建物跡・柵列跡…１／80　溝跡平面図…１／200　　溝跡断面図…１／80

火葬跡・近世墓…１／40　　古墳平面図…１／200　　古墳断面図…１／80

2　遺構挿図中のスクリーントーン等は、次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

＝地　山　　＝灰・炭化物

3　遺構挿図中、断面に添えてある数値は標高を示している。

4　遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・陶磁器・かわらけ・縄文土器…１／４

鉄製品・土製品…１／３　古銭…１／２　石器・石製品…１／３・１／４・１／８

5　遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・陶磁器・かわらけ・土製品・石製品・縄文土器・弥生土器・石器断面：白抜き

須恵器断面：黒塗り　　灰釉・緑釉陶器断面：

鉄製品断面：　　瓦断面：　　赤彩：

須恵器底部調整　回転糸切り

回転ヘラ削り

回転ヘラナデ

6　遺物拓影図のうち、向かって左に外面、右に内面を示した。

7　遺物観察表の表現方法は、以下のとおりである。

法量の単位はcm、ｇである。（　）が付されるものは推定値、現存値を表す。

胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で示した。

A…白色粒子　B…黒色粒子　C…赤色粒子　D…褐色粒子　E…赤褐色粒子

F…白色針状物質　G…長石　H…石英　I…白雲母　J…黒雲母　K…角閃石

L…片岩　M…砂粒　N…礫

8　写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

9　土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行　1994）を参考にした。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3　発掘調査、整理・報告書刊行の組織 … 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 5
Ⅲ　遺跡の概要 …… 10
　1　諏訪木遺跡と上之古墳群について …… 10
　2　調査の方法 …… 13
　3　検出された遺構と遺物 …… 13
Ⅳ　遺構と遺物 …… 20
　1　住居跡 …… 20
　2　掘立柱建物跡 …… 58
　3　柵列跡 …… 61
　4　溝　跡 …… 64
　5　土　坑 ……101
　6　井戸跡 ……115
　7　火葬跡 ……128
　8　近世墓 ……128
　9　ピット ……130
　10　古墳（上之古墳群第２号墳）……132
　11　遺構外出土遺物 ……133
Ⅴ　調査のまとめ ……141

挿図目次

第１図　埼玉県の地形図 …… 5
第２図　周辺遺跡分布図 …… 7
第３図　調査地点位置図 …… 11
第４図　調査区全測図(1) …… 15
第５図　調査区全測図(2) …… 17
第６図　調査区全測図(3) …… 18
第７図　調査区全測図(4) …… 19
第８図　第１号住居跡・出土遺物 …… 20
第９図　第２号住居跡・出土遺物 …… 21
第10図　第３号住居跡・出土遺物 …… 22
第11図　第４号住居跡・出土遺物 …… 23
第12図　第５号住居跡・出土遺物 …… 25
第13図　第６号住居跡・出土遺物 …… 26
第14図　第７～９号住居跡 …… 27
第15図　第７号住居跡出土遺物(1) …… 29
第16図　第７号住居跡出土遺物(2) …… 30
第17図　第８号住居跡出土遺物 …… 31
第18図　第９号住居跡出土遺物 …… 32
第19図　第10号住居跡 …… 34
第20図　第10号住居跡出土遺物 …… 35
第21図　第11・12号住居跡 …… 37
第22図　第11号住居跡出土遺物 …… 38
第23図　第12号住居跡出土遺物 …… 38
第24図　第13号住居跡・出土遺物 …… 39
第25図　第14・15号住居跡 …… 41
第26図　第14号住居跡出土遺物 …… 42
第27図　第15号住居跡出土遺物 …… 42
第28図　第16号住居跡・出土遺物 …… 43

第29図　第17号住居跡 …… 45
第30図　第17号住居跡出土遺物(1) …… 46
第31図　第17号住居跡出土遺物(2) …… 47
第32図　第18・19号住居跡・出土遺物 …… 50
第33図　第20号住居跡 …… 52
第34図　第20号住居跡出土遺物 …… 53
第35図　第21号住居跡・出土遺物 …… 54
第36図　第22号住居跡・出土遺物 …… 56
第37図　第23号住居跡 …… 57
第38図　第24号住居跡・出土遺物 …… 57
第39図　第１～４号掘立柱建物跡 …… 59
第40図　第５・６号掘立柱建物跡 …… 60
第41図　第１～６号柵列跡・出土遺物 …… 62
第42図　第１～５・13～18・26号溝跡 …… 65
第43図　第６・46・68～72号溝跡(1) …… 67
第44図　第６・46・68～72号溝跡(2) …… 68
第45図　第７～12・19～25・27～29号溝跡(1) … 70
第46図　第７～12・19～25・27～29号溝跡(2) … 71
第47図　第30～67・73・81～86号溝跡 …… 76
第48図　第74～80号溝跡 …… 77
第49図　第30～45・47～51号溝跡土層断面図… 79
第50図　第52～61号溝跡土層断面図 …… 83
第51図　第62～67・73～77号溝跡土層断面図… 86
第52図　第78～80・82～86号溝跡土層断面図… 89
第53図　溝跡出土遺物(1) …… 91
第54図　溝跡出土遺物(2) …… 92
第55図　溝跡出土遺物(3) …… 93
第56図　溝跡出土遺物(4) …… 94
第57図　溝跡出土遺物(5) …… 95
第58図　溝跡出土遺物(6) …… 96
第59図　溝跡出土遺物(7) …… 97
第60図　第１～12号土坑・第７号井戸跡 ……102
第61図　第13～27号土坑 ……105
第62図　第28～43号土坑 ……109
第63図　土坑出土遺物(1) ……112
第64図　土坑出土遺物(2) ……113
第65図　第１～６・８・９号井戸跡 ……116
第66図　第11～17号井戸跡 ……119
第67図　第18～27号井戸跡 ……122
第68図　第28～32号井戸跡 ……124
第69図　井戸跡出土遺物 ……125
第70図　第１号火葬跡・第１～５号近世墓 …127
第71図　近世墓出土遺物 ……128
第72図　ピット出土遺物 ……130
第73図　上之古墳群第２号墳 ……131
第74図　上之古墳群第２号墳出土遺物 ……132
第75図　遺構外出土遺物(1) ……135
第76図　遺構外出土遺物(2) ……136
第77図　遺構外出土遺物(3) ……137
第78図　遺構外出土遺物(4) ……138

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 8
第２表　第１号住居跡出土遺物観察表 …… 20
第３表　第２号住居跡出土遺物観察表 …… 21
第４表　第３号住居跡出土遺物観察表 …… 22
第５表　第４号住居跡出土遺物観察表 …… 23
第６表　第５号住居跡出土遺物観察表 …… 25
第７表　第６号住居跡出土遺物観察表 …… 26
第８表　第７号住居跡出土遺物観察表 …… 33
第９表　第８号住居跡出土遺物観察表 …… 33
第10表　第９号住居跡出土遺物観察表 …… 34
第11表　第10号住居跡出土遺物観察表 …… 36
第12表　第11号住居跡出土遺物観察表 …… 38
第13表　第12号住居跡出土遺物観察表 …… 38
第14表　第13号住居跡出土遺物観察表 …… 40
第15表　第14号住居跡出土遺物観察表 …… 42
第16表　第15号住居跡出土遺物観察表 …… 42

第17表　第16号住居跡出土遺物観察表 …… 44
第18表　第17号住居跡出土遺物観察表 …… 48
第19表　第18号住居跡出土遺物観察表 …… 51
第20表　第19号住居跡出土遺物観察表 …… 51
第21表　第20号住居跡出土遺物観察表 …… 53
第22表　第21号住居跡出土遺物観察表 …… 55
第23表　第22号住居跡出土遺物観察表 …… 56
第24表　第24号住居跡出土遺物観察表 …… 58
第25表　第２号柵列跡出土遺物観察表 …… 62
第26表　溝跡出土遺物観察表 …… 98
第27表　土坑出土遺物観察表 ……114
第28表　井戸跡出土遺物観察表 ……126
第29表　近世墓出土古銭観察表 ……129
第30表　ピット出土遺物観察表 ……131
第31表　上之古墳群第２号墳
　　出土遺物観察表 ……133
第32表　遺構外出土遺物観察表 ……139

図版目次

図版１　平成13年度調査Ⅲ区全景（真上から）
　　平成13年度調査Ⅲ区遠景（東から）
図版２　平成14年度調査Ⅰ・Ⅱ区全景（真上から）
　　平成14年度調査Ⅰ区全景（真上から）
　　平成14年度調査Ⅱ区全景（真上から）
図版３　平成12年度調査Ⅰ区遠景（東から）
　　平成12年度調査Ⅰ区遠景（西から）
　　平成12年度調査Ⅱ区遠景（東から）
　　平成12年度調査Ⅱ区遠景（西から）
　　平成13年度調査Ⅰ区遠景（東から）
　　平成13年度調査Ⅱ区遠景（西から）
　　平成13年度調査Ⅲ区南東部遠景
　　（南西から）
図版４　平成13年度調査Ⅲ区南東部遠景
　　（西から）
　　平成15年度調査区遠景（東から）
　　平成15年度調査区遠景（西から）
　　平成15年度調査区遠景（北から）
　　平成17年度調査Ⅰ区遠景（東から）
　　平成17年度調査Ⅱ区遠景（北から）
遺　構
図版５　第１号住居跡
　　第２号住居跡
　　第３号住居跡
　　第４号住居跡
　　第５号住居跡（北側）
　　第５号住居跡（南側）
　　第５号住居跡　土器出土状況(1)
　　第５号住居跡　土器出土状況(2)
図版６　第６号住居跡
　　第７号住居跡
　　第８号住居跡
　　第９号住居跡
　　第10号住居跡
　　第11号住居跡
　　第12号住居跡
　　第12号住居跡カマド
図版７　第13号住居跡
　　第13号住居跡カマド
　　第13号住居跡　土器出土状況
　　第14号住居跡
　　第14号住居跡カマド
　　第15号住居跡
　　第16号住居跡
　　第17号住居跡
図版８　第18号住居跡
　　第19号住居跡
　　第20号住居跡

第21号住居跡
第22号住居跡
第23号住居跡
第１号掘立柱建物跡
図版９　第２号掘立柱建物跡
第４号掘立柱建物跡
第１号柵列跡
第２号柵列跡
第３号柵列跡
第４号柵列跡
第５号柵列跡
図版10　第１・２・６号溝跡
第10・12・22・24号溝跡
第11・12号溝跡
第10・12・28・29号溝跡
第６・68・69・70号溝跡
第24号溝跡
第25号溝跡
図版11　第30・31号溝跡
第31号溝跡　磁器出土状況
第32・33号溝跡
第34号溝跡
第35号溝跡
第36～38号溝跡
第39号溝跡
図版12　第40・41号溝跡
第46号溝跡（平成13年度調査Ⅰ区）
第46号溝跡（平成17年度調査Ⅱ区）
第48号溝跡
第49号溝跡
第50号溝跡
第51号溝跡
図版13　第52号溝跡
第52号溝跡　石臼出土状況
第52号溝跡　木材出土状況
第53号溝跡
第54号溝跡
第55～61号溝跡
第62号溝跡
第63号溝跡
図版14　第64・65号溝跡
第66号溝跡
第67号溝跡
第73号溝跡
第75号溝跡（平成13年度調査Ⅱ区）
第75号溝跡（平成17年度調査Ⅱ区）
第81号溝跡
第82号溝跡
図版15　第83号溝跡
第84号溝跡
第85号溝跡
第86号溝跡
第２号土坑
第３～５号土坑
第６号土坑
第７号土坑
図版16　第９号土坑
第10号土坑
第11号土坑
第12号土坑
第19号土坑
第20号土坑
第21号土坑
第22号土坑
図版17　第23号土坑
第24号土坑
第25号土坑
第26号土坑
第27号土坑
第28号土坑
第30号土坑
第30号土坑　板碑出土状況

図版18　第30号土坑　馬頭骨出土状況
第30号土坑　馬歯出土状況
第36号土坑
第36号土坑　土器出土状況
第２号井戸跡
第２号井戸跡　石積断面
第６号井戸跡
第７号井戸跡
図版19　第８号井戸跡
第９号井戸跡
第10号井戸跡
第11号井戸跡
第11号井戸跡　曲物出土状況
第12号井戸跡
第13号井戸跡
第14号井戸跡
図版20　第15号井戸跡
第18号井戸跡
第19号井戸跡
第20号井戸跡
第21号井戸跡　礫出土状況
第21号井戸跡
第22号井戸跡
第23号井戸跡
図版21　第24号井戸跡
第25号井戸跡
第26号井戸跡
第27号井戸跡
第28号井戸跡
第29号井戸跡
第30号井戸跡
第30号井戸跡　曲物出土状況
図版22　第31号井戸跡
第32号井戸跡
第１・２号近世墓
第１号近世墓
第１号近世墓　古銭出土状況
第２号近世墓
第２号近世墓　古銭出土状況
第５号近世墓
図版23　上之古墳群第２号墳
（平成13年度Ⅱ区　西から）
上之古墳群第２号墳
（平成17年度Ⅱ区　北から）
上之古墳群第２号墳
（平成17年度Ⅱ区　西から）

遺　物

土師器・須恵器・緑釉陶器　坏類

図版24　第１号住居跡　第８図１・５
第４号住居跡　第11図１・２・４
第５号住居跡　第12図１
第７号住居跡　第15図１・３・６・10
図版25　第７号住居跡　第15図15・21・22・24・32
第８号住居跡　第17図１
第12号住居跡　第23図１・３・４
第13号住居跡　第24図３
図版26　第17号住居跡　第30図２・３・４・12・19
第31図40・41・42
第18号住居跡　第32図３・４
図版27　第19号住居跡　第32図１
第20号住居跡　第34図１
第36号土坑　第64図１・２・３・４
遺構外　第75図11・36墨書
第77図76・78

土師器・須恵器　甕類

図版28　第４号住居跡　第11図５
第５号住居跡　第12図６
第７号住居跡　第16図33・34・37
第８号住居跡　第17図16
図版29　第８号住居跡　第17図17
第９号住居跡　第18図８
第10号住居跡　第20図17

第11号住居跡　第22図５
第13号住居跡　第24図６
第17号住居跡　第30図21・23・24
図版30　第17号住居跡　第31図44
第20号住居跡　第34図８・11
第21号住居跡　第35図５
第78号溝跡　第58図１
第36号土坑　第64図６

陶磁器類

図版31　第２号溝跡　第53図２
第30号溝跡　第55図１
第31号溝跡　第55図１
第65号溝跡　第56図１
第24号土坑　第63図３
第25号土坑　第63図１・２
第11号井戸跡　第69図１
遺構外　第78図104

土師器（古墳時代前期）

図版32　第６号溝跡　第53図１・２・５
第73号溝跡　第57図３・６

埴輪

図版32　第10号溝跡　第54図６
上之古墳群第２号墳　第74図１
図版33　上之古墳群第２号墳　第74図２～15外面
第74図２～15内面

土製品

（土錘）

図版33　第13号住居跡　第24図７
第１号溝跡　第53図10
遺構外　第77図91

（羽口）

図版33　第12号溝跡　第55図６
第３号井戸跡　第69図４

（紡錘車）

図版34　遺構外　第77図89

鉄製品

図版34　第２号溝跡　第53図15
第36号土坑　第64図７・８・９

石製品

（紡錘車）

図版34　第５号住居跡　第12図７上面・側面
第17号住居跡　第31図47上面・下面

（軽石）

図版34　第11号住居跡　第23図10
第17号住居跡　第31図46

（砥石）

図版34　第16号住居跡　第28図22
図版35　第17号住居跡　第31図45
第10号溝跡　第54図13
第61号溝跡　第56図１
第83号溝跡　第59図15
第８号井戸跡　第69図２

（硯）

図版35　第25号土坑　第64図12

（石臼）

図版35　第52号溝跡　第56図10上面・下面

（五輪塔）

図版35　第52号溝跡　第56図11

（板碑）

図版36　第83号溝跡　第59図16
第30号土坑　第64図３・４
第10号井戸跡　第69図１・金泥

木製品

図版36　第52号溝跡　第56図９

古銭

図版37　第１号近世墓　第71図１ａ～４
第２号近世墓　第71図１ａ～４
第４号近世墓　第71図１ａ～１１

石器

図版35　第27号井戸跡　第69図２

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経過

昭和61年６月６日付け61熊都発第148号で、熊谷市長より上之第一土地区画整理事業（現上之土地区画整理事業）地内の埋蔵文化財の所在及び取り扱いに関する照会が提出された。これを受け、熊谷市教育委員会では、事業地内全域に弥生時代から平安時代の遺跡が所在する地域であり、工事に先立って発掘調査を実施する必要がある旨を回答し、平成７年11月13日から平成８年１月19日にかけて、遺跡の所在確認調査を実施した。その結果、弥生時代から近世にかけての集落跡及び墓が広範囲に分布することが確認された。この結果を踏まえて、平成８年２月９日付け熊教社発第865号で熊谷市教育委員会教育長から熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業代表者熊谷市長あてに次のように通知した。

事業地内には、埋蔵文化財包蔵地（前中西遺跡、藤之宮遺跡及び諏訪木遺跡）が所在する。当該地は現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、なお、発掘調査の実施については、教育委員会と協議すること。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能であると判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。

文化財保護法第57条の３及び第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、代表者熊谷市長より平成12年度が平成13年３月19日、平成13年度が平成13年５月１日、平成14年度が平成14年４月23日、平成15年度が平成15年８月21日、平成16年度が平成16年11月24日、平成17年度が平成17年５月13日及び５月30日付けでそれぞれ提出された。

発掘調査に関わる熊谷市教育委員会からの通知及び埼玉県教育委員会からの通知は、以下のとおりである。

平成12年度	平成13年３月22日付け	熊教社発第1041号
	平成13年５月18日付け	教文第３―1016号
平成13年度	平成13年５月７日付け	熊教社発第148号
	平成13年６月７日付け	教文第３―177号
平成14年度	平成14年８月２日付け	熊教社発第497号
	平成14年５月８日付け	教文第３―67号
平成15年度	平成15年10月１日付け	熊教社発第564号
	平成15年９月８日付け	教文第３―496号
平成16年度	平成17年２月21日付け	熊教社発第871号
	平成16年12月28日付け	教文第３―751号
平成17年度	平成17年６月29日付け	熊教社発第280・281号
	平成17年６月14日付け	教文第３―125・130号

2　発掘調査・報告書作成の経過

(1)　発掘調査

平成12年度

発掘調査は、平成13年２月13日から３月28日まで行われた。調査面積は、Ⅰ・Ⅱ区合わせて415m²である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、２月下旬から３月上旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。３月中旬からは遺構平面図を作成し、下旬には調査区の写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成13年度

発掘調査は、平成13年５月14日から９月21日まで行われた。調査区は４つ（Ⅰ～Ⅳ区）に分かれており、総面積は合計2,143m²である。なお、最も大きい調査区であるⅢ区については、南東部190.8m²分のみ都合によりやや遅れて調査に入ることとなった。

調査は、まずⅠ区からⅡ区、Ⅲ区(南東部除、以下省略)、Ⅳ区の順に重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業を行った。そして、遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業は、Ⅰ・Ⅱ区が５月下旬から６月初旬にかけて、Ⅲ区は６月上旬から８月上旬にかけて、Ⅳ区は７月上旬に行った。遺構平面図の作成は、Ⅰ・Ⅱ区が６月上旬、Ⅲ区は８月中旬から下旬にかけて、Ⅳ区は７月中旬に行った。調査区の写真撮影は、Ⅰ・Ⅱ区が６月中旬、Ⅲ区は９月初旬、Ⅳ区は７月下旬に行った。Ⅲ区のみ航空写真撮影を行った。Ⅲ区南東部については、９月上旬から着手し、上記の作業を順次行い、９月下旬には調査区の写真撮影をして現場におけるすべての作業を終了した。

平成14年度

発掘調査は、平成14年８月９日から９月13日まで行われた。調査面積は、Ⅰ・Ⅱ区合わせて373.62m²である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、８月中旬から下旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。９月初旬からは遺構平面図を作成し、９月中旬には調査区の航空写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成15年度

発掘調査は、平成15年10月14日から11月17日まで行われた。調査面積は335.4m²である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、10月下旬から11月初旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。11月上旬からは遺構平面図を作成し、11月中旬には調査区の写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成16年度

発掘調査は、平成17年１月24日から１月28日まで行われた。調査面積は60m²である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、終わり次第、

遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業に着手し、最後に遺構平面図の作成及び調査区の写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

平成17年度

発掘調査は、平成17年6月20日から8月9日まで行われた。調査面積は、Ⅰ・Ⅱ区合わせて248.5㎡である。

調査は、まず重機による表土除去及び作業員による遺構確認作業から行った。そして、6月下旬から7月中旬にかけて遺構の発掘及び土層断面図の作成、遺物の取り上げ、写真撮影などの作業を順次行っていった。7月下旬からは遺構平面図を作成し、8月上旬には調査区の写真撮影を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成18年4月から平成19年3月まで実施した。第1四半期は、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業等を行い、併行して遺構の図面整理を行った。第2四半期に入ると、遺物の実測・トレース、遺構のトレースを開始し、第3四半期には遺構・遺物の版組を作成した。第4四半期に入ると、遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業、原稿執筆を行った。そして、印刷業者選定の後、報告書の印刷に入り、数回の校正を行い、3月下旬に報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者　熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査

平成12年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	野辺　良雄
社会教育課長	浜島　義雄
副参事	浅野　晴樹
課長補佐	北　　俊明
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	浅見　敦夫
主任	寺社下　博
主任	吉野　　健
主事	松田　　哲
発掘調査員	小林　貴郎
発掘調査員	越前谷　理
発掘調査員	小野寺弘光

平成13年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林　武夫
社会教育課長	岩田　　隆
副参事	浅野　晴樹
課長補佐	北　　俊明
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	浅見　敦夫
主任	吉野　　健
主事	松田　　哲
発掘調査員	小野寺弘光
発掘調査員	蔵持　俊輔
発掘調査員	加藤　隆則

平成14年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林　武夫
社会教育課長	岩田　　隆
担当副参事	田中　英司
課長補佐	藤原　　清
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	浅見　敦夫
主査	吉野　　健
主事	松田　　哲
発掘調査員	加藤　隆則
発掘調査員	船場　昌子
発掘調査員	渡邊　大士

平成15年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	田島　洋利
社会教育課長	平井　　隆
担当副参事	田中　英司
課長補佐	藤原　　清
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡
発掘調査員	船場　昌子

平成16年度

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	増田　和己
社会教育課長	平井　　隆
担当副参事	岩本　克昌
課長補佐	並木　博雄
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡

平成17年度

教育長	飯塚誠一郎
	(～H17.12.22)
	野原　　晃
	(H17.12.23～)
教育次長	増田　和己
社会教育課長	長島　泰久
担当副参事	岩本　克昌
課長補佐	並木　博雄
	(～H17. 9 .30)
副課長	岩上　精純
	(H17.10. 1～)
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡

(2)　整理・報告書作成事業

平成18年度

教育長	野原　　晃
教育次長	増田　和己
社会教育課長	長島　泰久
担当副参事	今井　　宏
副課長	出縄　康行
副課長	新井　　端
	(H19. 2 .13～)
主幹兼文化財保護係長	金子　正之
主査	寺社下　博
主査	吉野　　健
主任	松田　　哲
主事	松村　　聡

II　遺跡の立地と環境

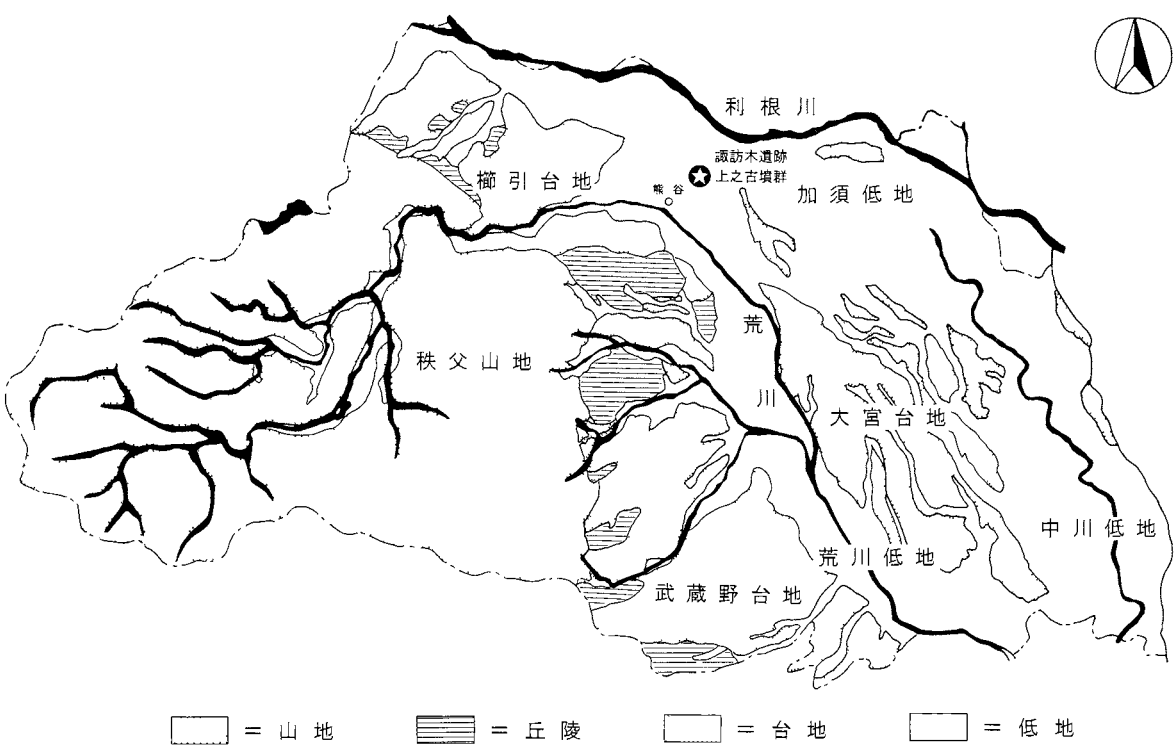
熊谷市は埼玉県北部に位置する県北最大の市である。平成17年10月１日には妻沼町及び大里町と、平成19年２月13日には市の南西に位置する江南町と合併し、人口20万を超える市として新たに発足したところである。

熊谷市は北側で群馬県との境を利根川が、南側では旧大里町及び旧江南町との境を荒川がそれぞれ西から南東方向に向って流れており、両河川が最も近接する地域である。地形的には市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地、北側及び東側には妻沼低地が広がっているが、市の大半は妻沼低地上にある（第１図）。

櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町の波久礼付近を扇頂として東は熊谷市西部の三ヶ尻付近まで、北東方向へはJR高崎線籠原駅から北へ約２kmの距離にある西別府付近にまで延びている。標高は約36～54mを測り、妻沼低地に向って緩やかに下る。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市（旧川本町）菅沼付近を扇頂として妻沼低地へと広がっており、自然堤防や後背湿地が発達している。

今回報告する諏訪木遺跡と上之古墳群は、その新荒川扇状地の縁辺部、標高24m前後に立地している。遺跡は熊谷市東部の上之地区に所在し、JR高崎線熊谷駅からは北東へ約2.0km、荒川からは北へ約3.0km、利根川からは南へ約6.0kmの距離にある。現地表面から遺構確認面までは、約１m前後の深さがあったことから、保存状態は比較的良好であった。



第１図　埼玉県の地形図

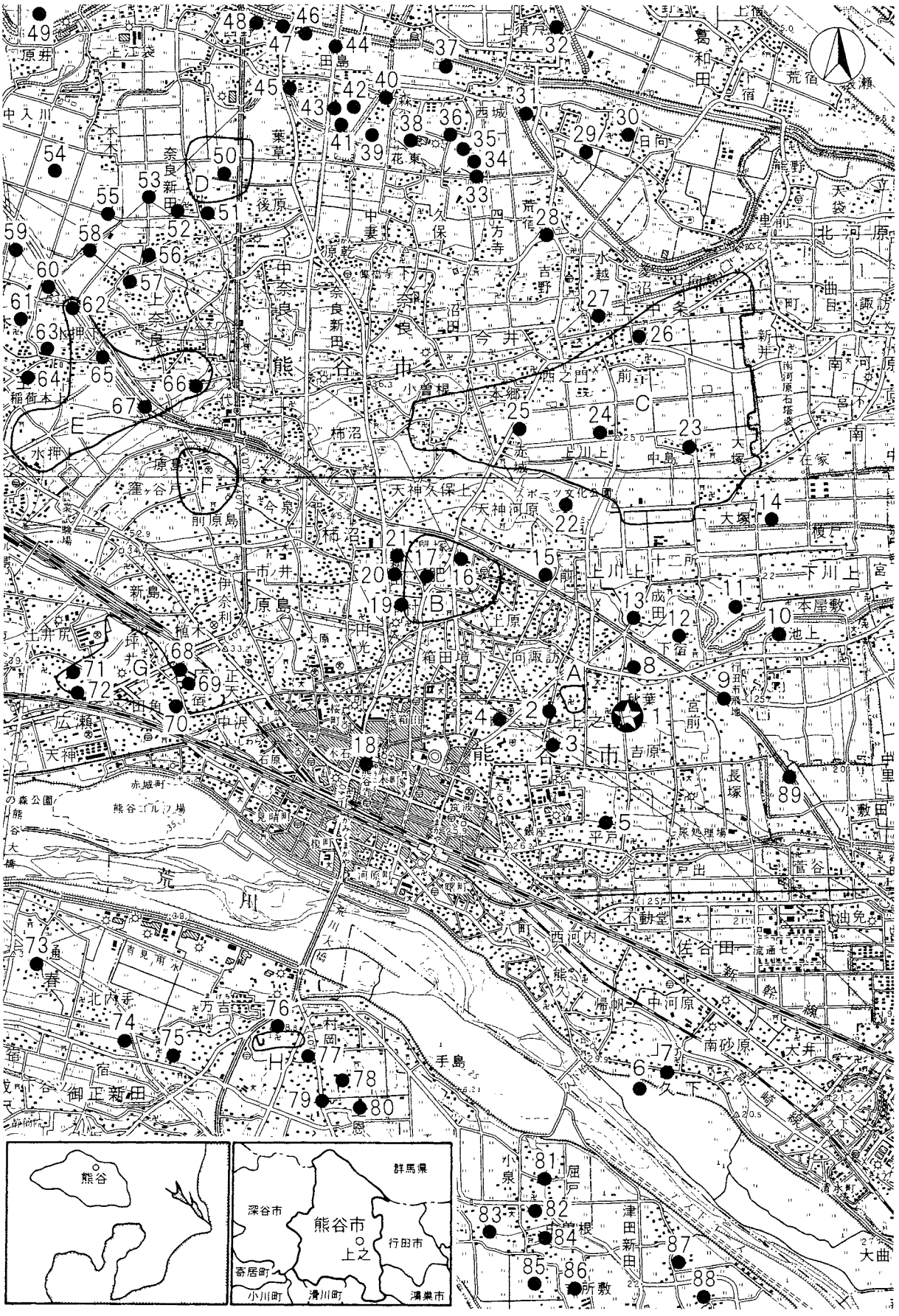
次に諏訪木遺跡及び上之古墳群周辺の歴史的環境について概観する。

旧石器時代から縄文時代の遺跡は、熊谷市東部では確認例が極めて少ない。この段階の遺跡は、主に熊谷市西部から深谷市域にかけて多くみられ、地形的には櫛引台地及び台地直下の妻沼低地自然堤防上に集中する。旧石器時代については、櫛引台地東端に立地する熊谷市籠原裏遺跡（地図未掲載）から出土した黒耀石の尖頭器が唯一の事例である。縄文時代は、早期段階は櫛引台地北端に位置する深谷市東方城跡（地図未掲載）において尖頭器が検出されているのみである。前期になると台地のみならず低地上にも出現しはじめ、中期も特に中期後半、加曽利Ｅ式期の遺跡が爆発的に出現するが、依然として櫛引台地及び台地直下の低地上に集中している。後期になると低地への進出が活発化しはじめ、熊谷市水久保遺跡（32）、西城切通遺跡（37）、場違ヶ谷戸遺跡（45）など櫛引台地から離れた低地上にも遺跡が認められるようになる。今回報告する諏訪木遺跡もその１つではあるが、依然として近辺に確認例はみられず、単独に存在するかのような様相を呈している。晩期は遺跡数が全体的に減少するが、唯一の事例とも言えるのがまさに諏訪木遺跡である。熊谷市遺跡調査会により行われた調査、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた調査では、後期末から晩期の遺物が検出されている。特に後者の調査では、遺構に伴って大量の遺物が出土しており、集落跡の存在が明らかとなっている。なお、諏訪木遺跡の概要については、後述する古代も含めて次章で述べる。諏訪木遺跡以外では、櫛引台地北端に立地する深谷市上敷免遺跡（地図未掲載）がある。遺構からの検出ではなかったが、晩期でも最終末に相当する浮線文土器片が多数検出されており、次代へのつながりがみてとれる資料である。

弥生時代は、まず初期段階である前期末から中期前半は近辺ではみられず、櫛引台地直下の低地上に遺跡が集中する。集落跡は確認されず、再葬墓が多く検出されている。横間栗遺跡（地図未掲載）では、前期末から中期前半頃の再葬墓が13基確認されている。再葬墓一括資料は、1999年３月に埼玉県指定になっている。この他にも熊谷市（旧妻沼町）飯塚遺跡、飯塚南遺跡（ともに地図未掲載）や先の深谷市上敷免遺跡などで検出されており、東日本初期弥生土器を語る上で非常に重要な資料が出土している。また、上敷免遺跡では包含層からではあるが、県内初の遠賀川式土器の壺の胴部片も出土している。

中期中頃になると、これまでの状況と一変して確認例が増す。東日本でも最古段階の環壕集落である池上遺跡（９）、その墓域とされ、最古段階の方形周溝墓が検出された行田市小敷田遺跡（89）などがあり、本格的に展開されることとなる。中期後半は、隣接する前中西遺跡（３）、北島遺跡（22）などで集落が営まれる。前中西遺跡では方形周溝墓も多数検出されており、集落・墓ともに後期初頭まで続くことが明らかとなっている。北島遺跡では、大規模な集落が営まれるとともに墓域も形成されている。そして、特筆すべきこととして水田に引き込む水路や堰までもが造営されていたことが挙げられる。これは当時、本格的な水田経営が行われていたことを物語り、北島遺跡はその規模や内容から東日本屈指の遺跡として注目されている。後期以降は、前中西遺跡、北島遺跡以外に近辺ではみられない。また、遺跡数そのものが少なく、低地上に散在する程度でしかみられない。

古墳時代になると、低地上への進出がより活発化し、前期の遺跡は近年確認例が増加している。隣接する藤之宮遺跡（２）や前中西遺跡では集落跡が確認されており、前者では土器を使用した水辺での祭祀跡も確認されている。北島遺跡では弥生時代に続いて大規模集落が営まれており、墓域も形成されている。中条遺跡（26）では木製農具が検出され、行田市小敷田遺跡では畿内や東海地方の外来系土器が



第２図　周辺遺跡分布図

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
熊谷市			51	東通遺跡	古墳後
1	諏訪木遺跡	縄文後・晩、弥生中・後、古墳、奈良・平安、中・近世	52	西通遺跡	古墳後
2	藤之宮遺跡	古墳、奈良・平安	53	中耕地遺跡	縄文中、古墳前・後、奈良・平安
3	前中西遺跡	弥生中、古墳、奈良・平安	54	別府条里遺跡	奈良・平安
4	箱田氏館跡	平安末	55	一本木前遺跡	古墳前・後、奈良・平安、中世、近世
5	平戸遺跡	弥生中・後、古墳後、平安、中・近世	56	土用ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
6	久下氏館跡	中世	57	奈良氏館跡	平安末～中世
7	市田氏館跡	中世	58	天神下遺跡	古墳前・後、奈良・平安
8	成田氏館跡	中世	59	寺東遺跡	縄文前～後
9	池上遺跡	弥生中、古墳、平安	60	稲荷東遺跡	古墳後、奈良・平安
10	古宮遺跡	縄文、弥生中、古墳前、奈良・平安、中・近世	61	玉井陣屋跡	平安末～中世
11	上河原遺跡	奈良・平安、中・近世	62	新ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安
12	宮の裏遺跡	古墳後	63	水押下遺跡	古墳後
13	成田遺跡	古墳後	64	稲荷木上遺跡	古墳後
14	中条条里遺跡	古墳前・中、奈良・平安	65	下河原中遺跡	奈良・平安
15	河上氏館跡	中世	66	本代遺跡	古墳後、近世
16	八幡山遺跡	古墳	67	下河原上遺跡	近世
17	出口下遺跡	古墳後	68	天神前遺跡	古墳中・後、中世
18	熊谷氏館跡	中世	69	兵部裏屋敷跡	中世
19	肥塚館跡	中世	70	御蔵場跡	近世
20	出口上遺跡	奈良・平安、中・近世	71	高根遺跡	縄文、古墳後、平安、中・近世
21	肥塚中島遺跡	奈良・平安、近世	72	不二ノ腰遺跡	奈良・平安
22	北島遺跡	弥生中・後、古墳、奈良・平安、中世	73	宮前遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
23	中島遺跡	古墳後、奈良・平安	74	宿遺跡	古墳後、奈良・平安、中・近世
24	女塚遺跡	古墳後、奈良・平安、中世	75	万吉西浦遺跡	縄文中、古墳、平安、近世
25	赤城遺跡	古墳、奈良・平安	76	村岡館跡	平安末
26	中条遺跡	古墳、奈良・平安、中世	77	北西原遺跡	奈良・平安
27	中条氏館跡	中世	78	塚本遺跡	古墳、奈良・平安
28	光屋敷遺跡	古墳後、奈良、中・近世	79	西浦遺跡	奈良・平安
29	先載場遺跡	古墳後、奈良	80	腰廻遺跡	奈良・平安
30	八幡間遺跡	古墳後、奈良	81	北方遺跡	奈良・平安
31	東城館跡	平安	82	宮前遺跡	奈良・平安
32	水久保遺跡	縄文後	83	西浦町遺跡	奈良・平安
33	長安寺遺跡	古墳後、奈良・平安	84	宮前町遺跡	奈良・平安
34	西城館跡	平安	85	宮町遺跡	奈良・平安
35	長安寺北遺跡	古墳後	86	仲町遺跡	奈良・平安
36	乙鵜森遺跡	古墳後	87	旭町遺跡	奈良・平安
37	西城切通遺跡	縄文後	88	北町遺跡	奈良・平安
38	鵜森遺跡	弥生後、古墳後、奈良・平安	行田市		
39	森谷遺跡	古墳後、奈良・平安	89	小敷田遺跡	弥生中、古墳前・後、奈良・平安
40	中大ヶ谷戸東遺跡	古墳後、奈良・平安	古墳群		
41	南大ヶ谷戸遺跡	奈良・平安	熊谷市		
42	中大ヶ谷戸西遺跡	古墳後、奈良・平安	A	上之古墳群	古墳後～末
43	鷺ヶ谷戸北遺跡	古墳後、奈良・平安	B	肥塚古墳群	古墳後～末
44	山ヶ谷戸遺跡	古墳後、奈良・平安	C	中条古墳群	古墳中期末～後
45	場違ヶ谷戸遺跡	縄文後	D	奈良古墳群	古墳中期後～末
46	宮前遺跡	奈良・平安	E	玉井古墳群	古墳後
47	実盛館	平安	F	原島古墳群	古墳後
48	下三丁免遺跡	古墳後	G	石原古墳群	古墳後
49	道ヶ谷戸条里遺跡	奈良	H	村岡古墳群	古墳後
50	横塚遺跡	古墳前、平安			

多数出土している。この他にもたくさん遺跡が確認されているが、主に利根川流域沿いの低地上に分布する傾向にある。中期は不明な点が多いが、中条遺跡で確認例がある他、５世紀末の古墳として鎧塚古墳、女塚１号墳（C：中条古墳群）、市の指定史跡になっている横塚山古墳（D：奈良古墳群）などがある。鎧塚古墳は、全長43.8mの帆立貝式前方後円墳であり、墓前祭祀跡２箇所から須恵器高坏型器台（県指定文化財）が出土している。女塚１号墳も帆立貝式前方後円墳であり、全長46mを測る。二重周溝を持ち、盾持武人埴輪などの人物埴輪が出土している。横塚山古墳は、B種横刷毛の埴輪を持つ帆立貝式

前方後円墳であるが、後円部は一部欠損している。

後期になると遺跡数が爆発的に増加する。集落跡の規模は大小あるが、多数営まれるようになる。そして、これらは奈良・平安時代へと継続して営まれるものが多い。古墳は群として形成され、多数の古墳群が台地及び低地上に築造されはじめる。低地上では、今回報告する上之古墳群（A）の他に、肥塚古墳群（B）、中条古墳群（C）、奈良古墳群（D）、玉井古墳群（E）、原島古墳群（F）、石原古墳群（G）などがある。これらは、概ね6世紀から7世紀ないし8世紀初頭にかけて築造された古墳群である。市内の古墳群で特筆すべきことは、利根川流域に近い古墳群（中条古墳群など）では、埋葬施設に角閃石安山岩を使用しているが、荒川流域に近い古墳群では川原石を使用しており、肥塚古墳群ではその両者が混在することが挙げられる。

奈良・平安時代は、前述のとおり、古墳時代後期以降引き続き営まれる遺跡が多い。規模は大小あるが、概して大規模なものが多くみられ、通常の集落とは思えない遺跡がいくつか存在する。その筆頭が北島遺跡である。第19地点の調査では、二重の堀が廻る台形区画内に建物跡が検出された他、他地点でも軸の揃った掘立柱建物跡が多数確認されている。また、遺物では「篁」の文字が刻まれた緑釉陶器をはじめ、多くの鉛釉陶器が検出されており、有力者層を想定させる遺物が数多く出土している。北島遺跡以外では、池上遺跡で整然と配置された9世紀代の大型掘立柱建物跡が確認されたこと、小敷田遺跡では「出挙」の文字が書かれた木簡が検出されたこと、諏訪木遺跡では、区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出されたこと、旧河川で土器や木製品、玉類などを使った水辺の祭祀が行われたことなどが挙げられ、官衙を彷彿とさせる遺跡の集中する地域といえる。

集落以外では、北島遺跡や池上遺跡の東側に中条条里遺跡(14)、行田市南河原条里遺跡(地図未掲載)などの条里遺跡が広がっている。ほぼ東西南北に区割されており、現在もその痕跡を明確に残す。

平安時代末から中世にかけては、武蔵七党やその他在地武士団が台頭してくる段階であり、市内でも館跡が多数みられる。成田氏館跡（8）、久下氏館跡（6）、市田氏館跡（7）、河上氏館跡（15)、熊谷氏館跡（18)、肥塚館跡（19)、中条氏館跡（27）などがある。このうち、諏訪木遺跡の北側に隣接する成田氏館跡は、平安時代末の成田助高から親泰が15世紀後半に行田市忍城を構えるまでの居館とされている。また、県事業団によって行われた諏訪木遺跡の調査では、館跡から南に約300mの所に中世の居館と思われる変形方形区画が検出されており、『新編武蔵風土記稿』に成田氏の一族がこの地に居を構えたという記述と合わせて成田氏に関連する館跡との見解が示されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002)。

中世段階については、館跡を中心にその一端が明らかになりつつあるものの、資料がまだまだ不足している状態であり、今後の資料の蓄積を待つ以外にないというのが現状である。また、近世段階についても同様で、今回報告する諏訪木遺跡をはじめとしていくつか確認例があるが、不明な点が多いというのが実状である。

Ⅲ　遺跡の概要

1　諏訪木遺跡と上之古墳群について

諏訪木遺跡では、本報告分以外にも過去に発掘調査が実施されている。遺跡範囲が広大なことから果たして同じ遺跡として扱って良いか不安もあるが、ここでまず過去の調査内容について把握し、現時点における諏訪木遺跡の概要について簡単に述べておくこととする。また、上之古墳群に関しては、現在までに本報告分を含めて２基のみが確認されているが、本格的な発掘調査が行われたのは今回が初となる。第Ⅱ章でも述べたが、市内には古墳時代後期の古墳群が多数みられるものの、上之古墳群については未知な部分が多い。よって、上之古墳群、主に１号墳についても現時点で明らかとなっていることについて簡単に述べておきたい。

諏訪木遺跡について

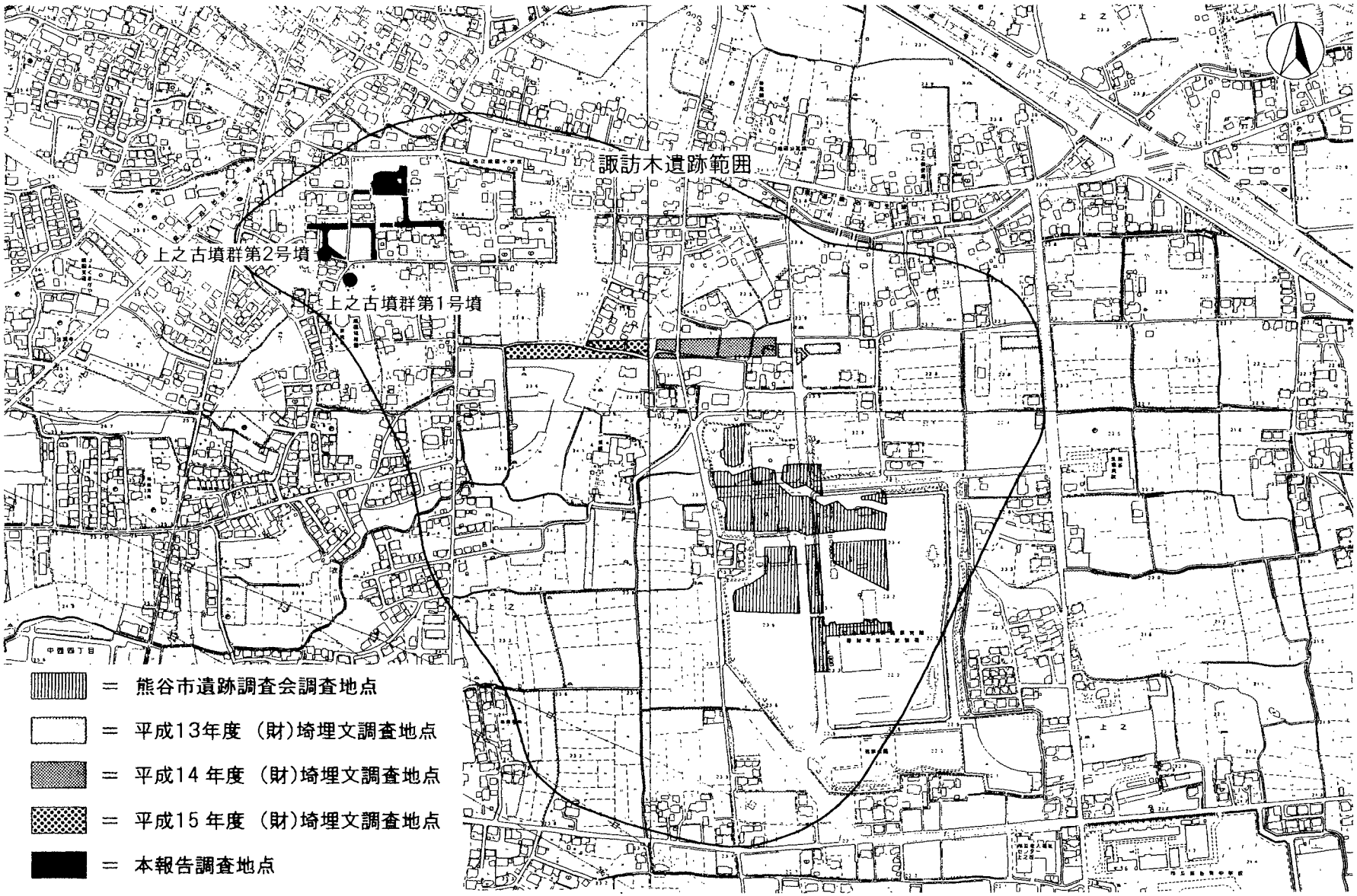
諏訪木遺跡では、本報告分以外にこれまで計６回の発掘調査が行われている（第３図）。調査はいずれも各種開発に伴う事前調査として行われており、それぞれの調査地点で特色ある成果が得られている。未報告分もあり、詳細まで明らかになっていないものもあるが、以下、各調査の概要について述べる。

諏訪木遺跡における最初の調査（以下、第１次調査）は、工業団地建設工事に伴う事前調査として熊谷市遺跡調査会により行われた（熊谷市遺跡調査会2001）。調査地点は遺跡範囲南東部にあたり、調査面積はⅠ～Ⅷ区合わせて28,000㎡である。期間は、平成５年１月11日から平成７年６月30日までである。

検出された遺構は、縄文時代後・晩期の竪穴遺構５基、弥生時代中期から近世の河川跡、縄文・弥生時代から古墳時代の溝跡40条、平安時代の住居跡22軒、掘立柱建物跡31棟、柵列１列、井戸跡14基、区画溝を含む溝跡72条、土坑墓７基、竪穴遺構４基、土坑154基、中世の土坑墓４基、火葬跡３基、井戸跡２基、近世の区画溝を含む溝跡７条、土坑７基などである。この他に時期不明の溝跡５条、土坑14基、ピット多数がある。出土遺物は、縄文時代後・晩期の土器、弥生時代中期の土器、古墳時代後期の須恵器、土師器、ミニチュア土器、石製品、鉄製品、木製品、銅鋺、玉類、耳環、帯金具、奈良時代の須恵器、平安時代の須恵器、土師器、灰・緑釉陶器、三彩陶器、瓦、土製品、鉄製品、銅製品、石製品、木製品、古銭、獣骨、中世の陶器、近世の陶磁器、在地系土器、鉄製品、石製品などがある。

第１次調査で主体となるのは平安時代である。第Ⅱ章でも述べたが、区画溝内に四面庇の付いた大型掘立建物跡や軸の揃った掘立柱建物跡が多数検出され、それらを中心に集落跡が広がっている。また、旧河川では土器や木製品、玉類などを使って水辺の祭祀が行われており、銅鋺や三彩陶器、墨書土器、木製品などをはじめとする特殊遺物の多くは旧河川跡からの検出である。検出された遺構や出土遺物からみて、第１次調査で確認された集落跡は、一般的な集落とは異なる特異なものといえる。

第１次調査以降に行われた調査は、道路建設工事に伴う事前調査として埼玉県埋蔵文化財調査事業団により行われた。調査区の都合から平成13・14年度が各２回、平成15年度は１回の計５回にわたり発掘調査が実施された。調査地点は、遺跡範囲中央からやや北側を東から西に横断している。調査面積は、平成13年度が計3,977㎡、平成14年度が計4,200㎡、平成15年度が4,500㎡である。調査期間は、平成13年度が４月９日から６月30日までと６月11日から９月28日まで、平成14年度が６月３日から７月31日までと11月１日から平成15年３月24日まで、平成15年度が４月８日から９月30日までである。平成13年度調


諏訪木遺跡範囲
上之古墳群第2号墳
上之古墳群第1号墳
＝ 熊谷市遺跡調査会調査地点
＝ 平成13年度（財)埼埋文調査地点
＝ 平成14年度（財)埼埋文調査地点
＝ 平成15年度（財)埼埋文調査地点
＝ 本報告調査地点

第3図　調査地点位置図

査は報告済である（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002）が、その他は現在、報告書作成中とのことである。

平成13年度調査で検出された遺構は、縄文時代後期の遺物包含層１箇所、晩期の土坑14基、古墳時代後期の水田跡１箇所、溝跡10条、古墳時代から古代の溝跡９条、中世の畠跡１箇所、中・近世の溝跡４条、土坑７基、ピット群、井戸跡２基、近世の土坑４基である。出土遺物は、縄文時代後･晩期の土器、石器、土製品、石製品、弥生時代中期の土器、古墳時代後期の須恵器、土師器、中世の陶磁器、かわらけ、近世の漆器、古銭、馬骨などがある。特記事項としては、縄文時代の包含層から後・晩期の土器がまとまって検出されたこと、中世の遺構は成田氏に関連する可能性があることなどが挙げられる。

平成14年度調査で検出された遺構は、縄文時代後・晩期の住居跡12軒、盛土遺構１箇所、平安時代の掘立柱建物跡１棟、古代から中世の掘立柱建物跡６棟、溝跡32条、中世の竪穴遺構１基、柵列跡５列、土坑墓１基、土坑32基、井戸跡21基、畠跡１箇所、時期不明の溝跡54条、土坑65基などである。出土遺物は、縄文時代晩期の土器、土偶、石棒、耳栓、奈良・平安時代の須恵器、土師器、中世の陶磁器、板碑、古銭などがある（埼玉県教育委員会2004）。

平成15年度調査で検出された遺構は、縄文時代から弥生、古墳、平安時代の住居跡34軒、縄文時代の土坑１基、炉跡３基、配石遺構１基、土器埋設遺構１基、遺物包含層１箇所、弥生時代の埋設土器２基、弥生時代から古墳時代前期の方形周溝墓３基、古墳時代の杭列跡１条、古墳時代から中世の溝跡12条、平安時代の水田跡１箇所、中・近世の掘立柱建物跡２棟などである。出土遺物は、縄文時代の土器、土偶、耳栓、石剣、石棒、独鈷石、弥生時代の土器、古墳時代以降の土師器などがある（埼玉県教育委員会2005）。

平成14・15年度調査については、未報告であるため詳細は不明であるが、縄文時代後・晩期の集落跡が確認されたこと、また時期が定かではないが、弥生時代から古墳時代前期の方形周溝墓が検出されたことなどは新知見であり、本報告が待たれるところである。

以上のように、諏訪木遺跡は、縄文時代後・晩期を上限として、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世まで続く複合遺跡であることが現在明らかとなっている。

上之古墳群について

今回報告するのは第２号墳であり、ここでは第１号墳の概要を中心に述べることとする。

第１号墳は、２号墳の南東約50mの距離にある。現在、山林となっているが、墳丘が残存しており、墳丘上には八幡宮の祠が立っている。円墳である。規模は直径約20m、墳丘は約６mの高さを持つ。本格的な発掘調査は実施していないが、平成７年12月１日から４日までの四日間、墳丘周囲にトレンチによる試掘調査を実施したところ、周溝は明確に検出されず、出土遺物も皆無であった。ごく一部の調査であるため断言はできないが、１号墳は埴輪を持たないことから終末期の古墳である可能性が高い。

上之古墳群は、現在２基のみが確認されているが、区画整理に伴う試掘調査や発掘調査により埴輪が検出された箇所があることから２基以外にも古墳が存在していたことは間違いない。古墳群の規模はそれほど大きくないと思われるが、他の古墳群同様、群集墳であったと思われる。

2　調査の方法

今回報告する発掘調査は、平成12年度から平成17年度まで年度ごとに計６回行われた。すべての調査において、まず遺構確認面まで重機で掘削し、その後人力による手掘り作業を行っていった。手掘り作業終了後は、遺構ごとに実測、遺物の取り上げ、写真撮影等の作業を順次行った。実測作業を行うにあたっては、あらかじめ区画整理地内全体を網羅するように設定された一辺５ｍのグリッド方式に従い、交点を基準に水糸で１ｍ間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による方法で行った。今回報告する調査地点のグリッドは、東西が13から49まで、南北は37から62までが該当する。なお、区画整理地内全体のグリッド図については、同区画整理地内に所在する前中西遺跡の報告（熊谷市教育委員会2002・2003）に記載されていることから、本報告では省略した。

3　検出された遺構と遺物

今回報告する地点は、諏訪木遺跡は遺跡範囲北西端にあたり、上之古墳群第２号墳は現時点では上之古墳群の北端に位置している。検出された遺構は、諏訪木遺跡が住居跡24軒、掘立柱建物跡６棟、柵列跡６列、溝跡86条、土坑46基、井戸跡32基、火葬跡１基、近世墓５基、ピット群である。上之古墳群第２号墳は古墳１基である。まず、諏訪木遺跡で検出された遺構と遺物について述べ、次に上之古墳群第２号墳、そして諏訪木遺跡及び上之古墳群第２号墳も含めた遺構外出土遺物について述べる。

住居跡は、平成12年度調査Ｉ区で１軒、平成13年度調査Ｉ区で１軒、同II区で１軒、同III区で19軒、平成14年度調査Ｉ区で２軒の計24軒である。平成13年度調査III区の検出が圧倒的に多い。時期は９世紀前半から10世紀初頭段階までのほぼ１世紀間に収まる。カマドは北壁ないし東壁にあり、平面プランは正方形か長方形を呈する。出土遺物は須恵器、土師器、灰・緑釉陶器、土製品、石製品などがある。

掘立柱建物跡は、平成14年度調査Ｉ区で１棟、平成15年度調査区で２棟、平成17年度調査Ｉ区で２棟、同II区で１棟の計６棟である。ほぼ真北方向を向く。調査区の都合上、規模等不明なものもあるが、庇がつくものが２棟みられた。出土遺物はないが、他の遺構との切り合いから１棟のみ平安時代のものである。その他は柱穴が小さく、平面プランがほぼ方形であることから、中世段階以降と思われる。

柵列跡は、平成13年度調査III区で２列、平成14年度調査Ｉ区で１列、平成15年度調査区で３列の計６列である。南北方向を向くものが５列、東西方向が１列である。柱間は等間隔でないものが多い。時期は、出土遺物及び周辺遺構との関係から平成13年度分の２列が平安時代、その他は出土遺物がないが、掘立柱建物跡同様、柱穴が小さく、平面プランがほぼ方形であることから、中世段階以降と思われる。

溝跡は計86条と多いが、調査区の都合から全形を検出していないため、調査区外で接続するものもあるかもしれない。全調査区から検出された。時期は古墳時代前期から平安時代、中・近世と多岐にわたる。古墳時代前期は北東方向から南西方向に走る。平安時代以降は南北ないし東西方向に走るものが多い。出土遺物は、古墳時代前期が土師器、平安時代は須恵器、土師器、灰釉陶器、瓦、土製品、中世は在地系土器、古銭、近世は陶磁器、かわらけ、瓦、土製品、木製品、石製品などである。この他に流れ込みとして縄文土器、弥生土器、形象埴輪、時期不明の鉄製品、石製品なども検出された。

土坑は平成14年度調査II区以外で検出された。平成13年度調査III区及び平成14年度調査Ｉ区の検出が多い。平面プランは様々であるが、円形及び楕円形を呈するものが多い。時期は不明なものも若干ある

が、平安時代と中世段階以降のものがほぼ半分ずつの割合でみられた。出土遺物は、平安時代が須恵器、土師器、鉄製品、中世がかわらけ、石製品（板碑）、近世が陶磁器、在地系土器、瓦、石製品である。

井戸跡は、平成13年度調査Ⅰ・Ⅱ区、平成16年度調査区、平成17年度調査Ⅰ区以外で検出された。概して地形的に下がる東側調査区からの検出が多い。井戸跡としたものには浅いものもあり、これらについては土坑とした方が良いかもしれない。平面プランは円形ないし楕円形を呈するものが多い。平成13年度調査Ⅲ区検出の１基のみ井筒が石組構造であった。時期は平安時代から中・近世までであり、時期不明のものも多くみられた。出土遺物は、平安時代が須恵器、土師器、中世が青磁、在地系土器、土製品、石製品(板碑)、近世が陶器などである。検出された板碑の銘文等に金泥が残存していたものがみられた。この他に流れ込みとして灰釉陶器や弥生時代と思われる打製石斧も検出された。

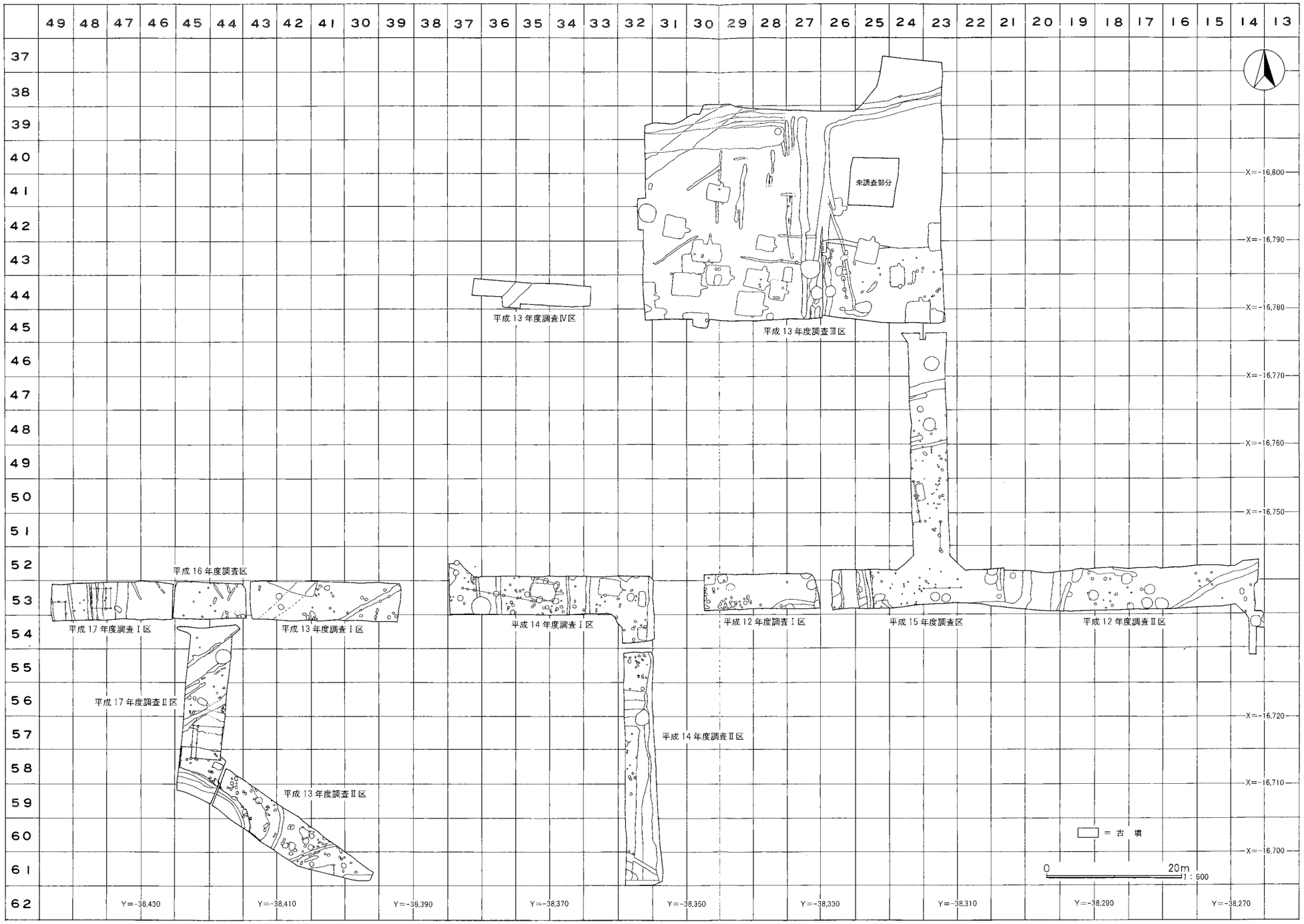
火葬跡は平成13年度調査Ⅲ区検出の１基のみである。遺存状態は悪く、煙道部となる突出部を欠く。焼土層や骨片を含む炭化物層が確認されただけで棺座となる礫などは検出されなかった。

近世墓は５基すべて平成14年度調査Ⅰ区から検出された。いずれも骨は出土しなかったが、比較的遺存状態の良い３基からは桶が確認された。また、１基からは抱石と思われる礫が検出された。平面プランはいずれも円形を呈する。出土遺物は古銭のみである。３基から検出された。寛永通寶（古寛永）が主体となるが、寛永通寶に混じって明の永楽通寶も検出された。

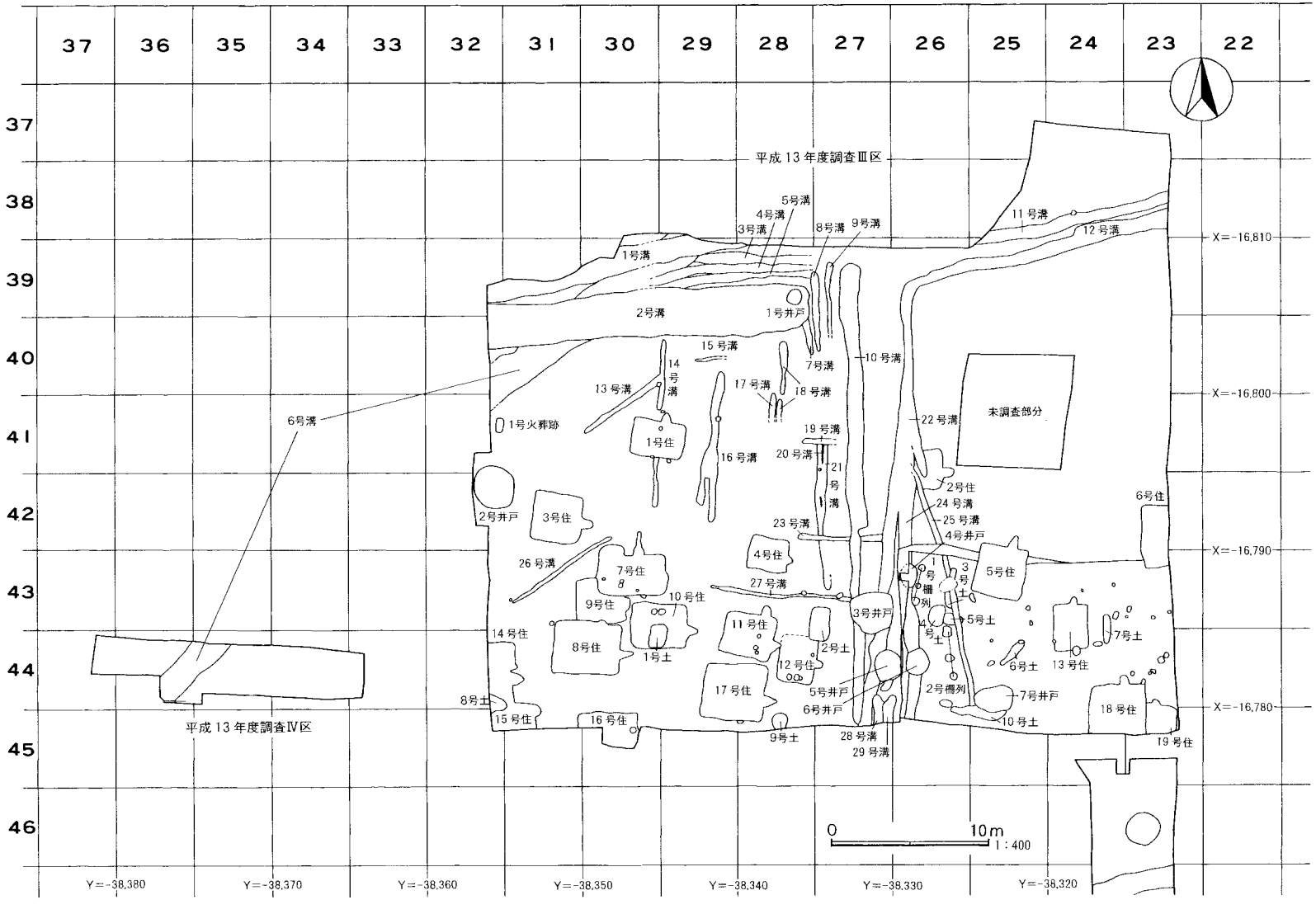
ピットは全調査区から検出された。概して集中して分布する傾向にあるが、規則的に並ぶものはみられない。性格としては柱穴と思われ、建物跡や柵列跡を構成していたと思われる。出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、平面プランが方形のものが多く、中世以降のものである可能性が高い。

上之古墳群第２号墳は、平成13年度調査Ⅱ区及び平成17年度調査Ⅱ区で検出された。円墳である。周溝北東部のみ検出された。墳丘は平面的には確認できなかったが、調査区境の土層断面では崩落土も含めて墳丘盛土があったことが確認された。主体部や葺石などは検出されなかった。出土遺物は円筒埴輪がある。原位置を保っておらず、すべて周溝覆土から検出された。破片での検出が多い。

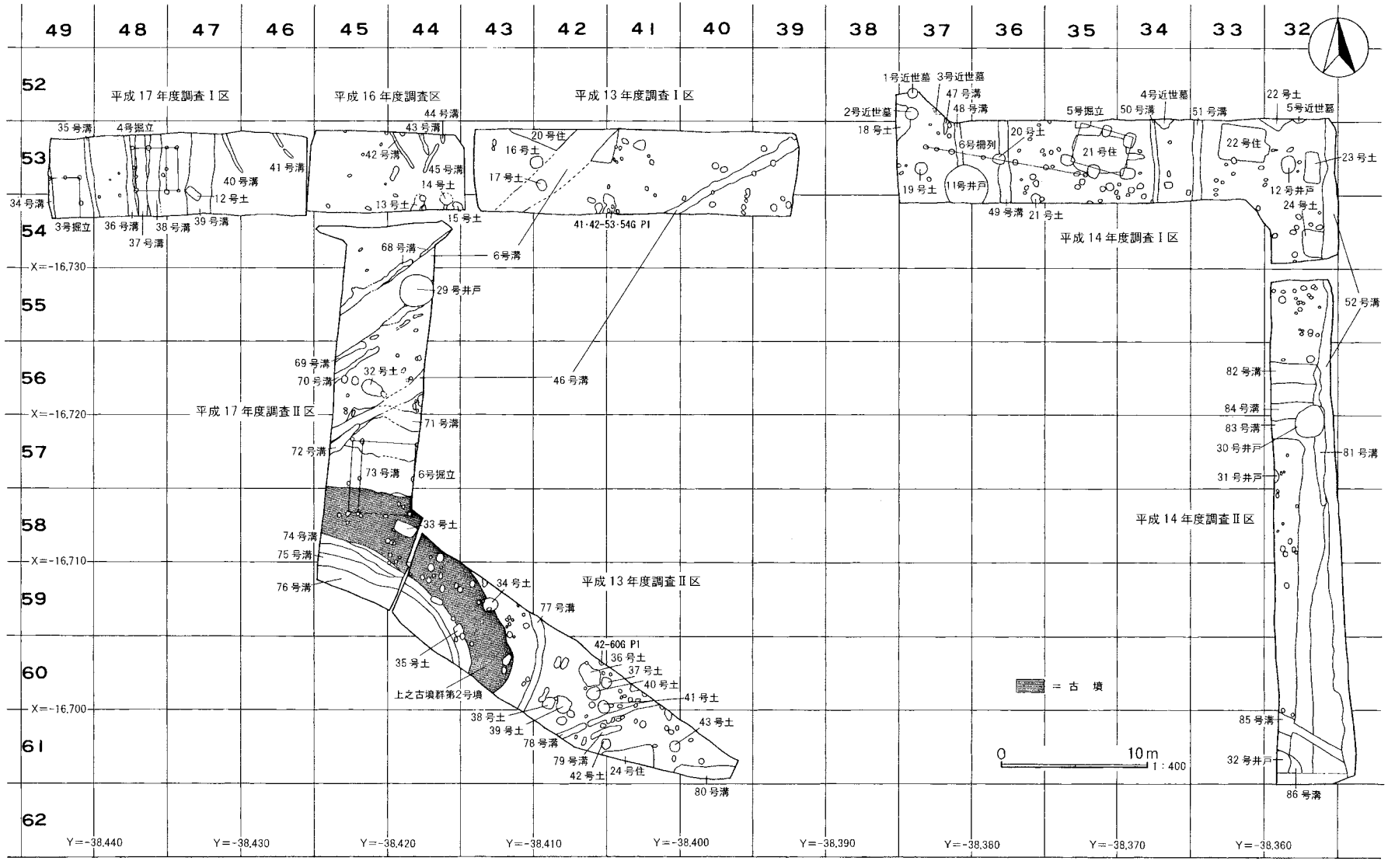
遺構外出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古墳時代前期・後期、平安時代、中・近世と幅広く検出された。出土遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、円筒埴輪、平安時代の須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、土製品、鉄製品、中世の青磁、在地系土器、古銭、近世の陶磁器、在地系土器などがある。縄文時代及び弥生時代は今回の報告では遺構が検出されておらず、遺物のみの検出である。古墳時代後期の円筒埴輪は、上之古墳群第２号墳近辺からの検出が多く、２号墳に付随するものと思われる。その他は諏訪木遺跡に付随するものである。遺構出土遺物同様、平安時代の遺物が多く検出されている。


平成 13 年度調査Ⅳ区
平成 13 年度調査Ⅲ区
未調査部分
平成 16 年度調査区
平成 17 年度調査Ⅰ区
平成 13 年度調査Ⅰ区
平成 14 年度調査Ⅰ区
平成 12 年度調査Ⅰ区
平成 15 年度調査区
平成 12 年度調査Ⅱ区
平成 17 年度調査Ⅱ区
平成 13 年度調査Ⅱ区
平成 14 年度調査Ⅱ区
= 古 墳
0
20m
1 : 600
X=-16,800
X=-16,790
X=-16,780
X=-16,770
X=-16,760
X=-16,750
X=-16,720
X=-16,710
X=-16,700
Y=-38,430
Y=-38,410
Y=-38,390
Y=-38,370
Y=-38,350
Y=-38,330
Y=-38,310
Y=-38,290
Y=-38,270

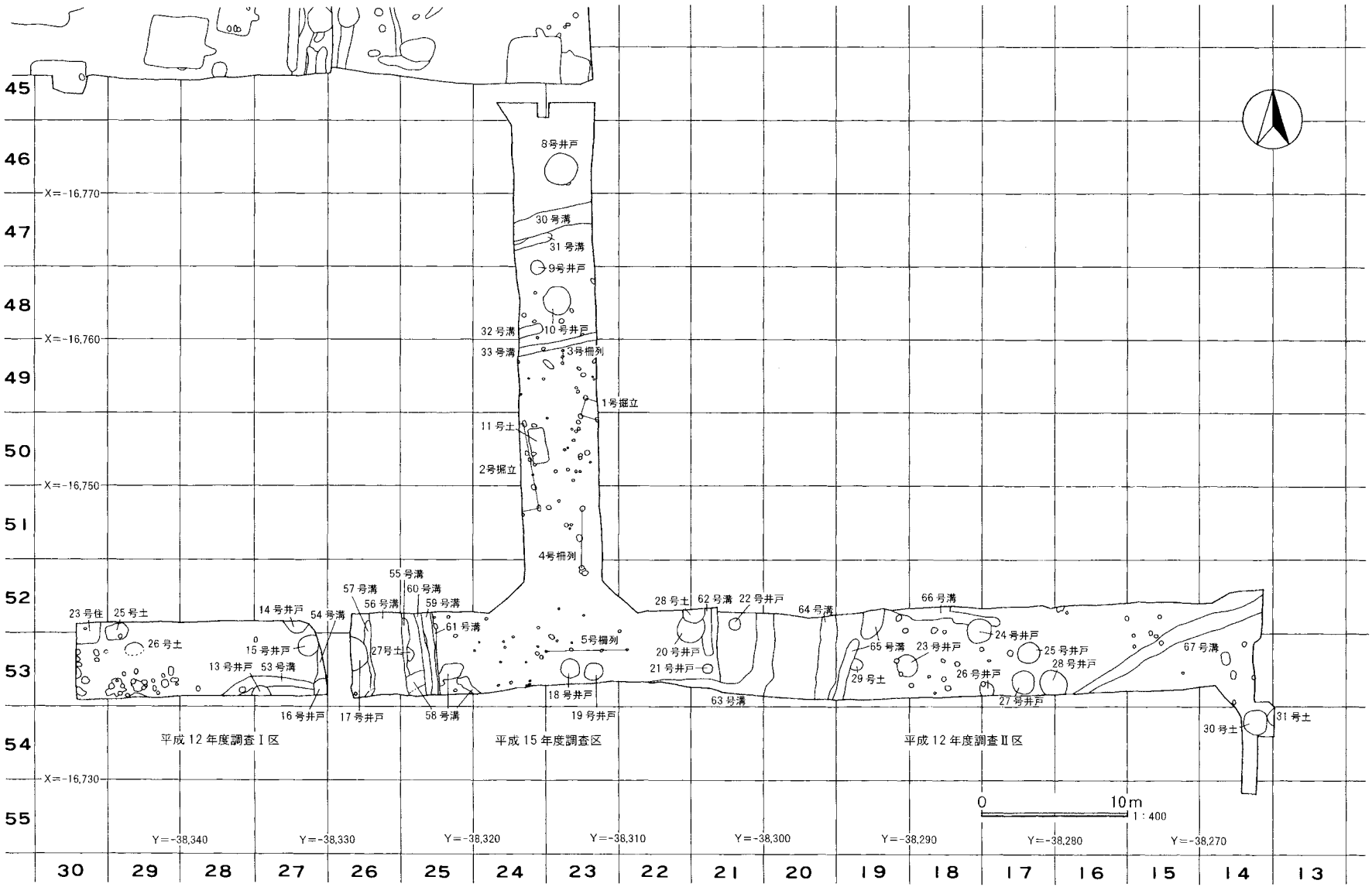
第 4 図　調査区全測図(1)


37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
平成13年度調査Ⅲ区
平成13年度調査Ⅳ区
未調査部分
1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
5号溝
6号溝
7号溝
8号溝
9号溝
10号溝
11号溝
12号溝
13号溝
14号溝
15号溝
16号溝
17号溝
18号溝
19号溝
20号溝
21号溝
22号溝
23号溝
24号溝
25号溝
26号溝
27号溝
28号溝
29号溝
1号井戸
2号井戸
3号井戸
4号井戸
5号井戸
6号井戸
7号井戸
1号火葬跡
1号住
2号住
3号住
4号住
5号住
6号住
7号住
8号住
9号住
10号住
11号住
12号住
13号住
14号住
15号住
16号住
17号住
18号住
19号住
1号土
2号土
5号土
6号土
7号土
8号土
9号土
10号土
1号柵列
2号柵列
3号土
4号土
X=-16,810
X=-16,800
X=-16,790
X=-16,780
Y=-38,380
Y=-38,370
Y=-38,360
Y=-38,350
Y=-38,340
Y=-38,330
Y=-38,320
0
10m
1:400

第5図　調査区全測図(2)


49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
X=-16,730
X=-16,720
X=-16,710
X=-16,700
Y=-38,440
Y=-38,430
Y=-38,420
Y=-38,410
Y=-38,400
Y=-38,390
Y=-38,380
Y=-38,370
Y=-38,360
平成17年度調査Ⅰ区
平成16年度調査区
平成13年度調査Ⅰ区
平成14年度調査Ⅰ区
平成17年度調査Ⅱ区
平成13年度調査Ⅱ区
平成14年度調査Ⅱ区
35号溝
4号掘立
34号溝
3号掘立
36号溝
37号溝
38号溝
39号溝
40号溝
12号土
41号溝
44号溝
43号溝
42号溝
45号溝
14号土
13号土
15号土
20号住
16号土
17号土
6号溝
41·42-53·54G P1
68号溝
29号井戸
69号溝
70号溝
32号土
46号溝
71号溝
72号溝
73号溝
6号掘立
33号土
74号溝
75号溝
76号溝
34号土
77号溝
42-60G P1
36号土
37号土
40号土
41号土
35号土
上之古墳群第2号墳
38号土
39号土
78号溝
43号土
79号溝
42号土
24号住
80号溝
1号近世墓
3号近世墓
47号溝
48号溝
2号近世墓
18号土
6号柵列
20号土
5号掘立
21号住
50号溝
4号近世墓
51号溝
22号土
5号近世墓
22号住
23号土
19号土
11号井戸
12号井戸
24号土
49号溝
21号土
52号溝
82号溝
84号溝
83号溝
30号井戸
81号溝
31号井戸
85号溝
32号井戸
86号溝
= 古 墳
0
10m
1:400

第6図　調査区全測図(3)


45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
X=-16,770
X=-16,760
X=-16,750
X=-16,730
Y=-38,340
Y=-38,330
Y=-38,320
Y=-38,310
Y=-38,300
Y=-38,290
Y=-38,280
Y=-38,270
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
8号井戸
30号溝
31号溝
9号井戸
10号井戸
32号溝
33号溝
3号柵列
1号掘立
11号土
2号掘立
4号柵列
5号柵列
23号住
25号土
26号土
14号井戸
54号溝
15号井戸
13号井戸
53号溝
16号井戸
57号溝
55号溝
56号溝
60号溝
59号溝
61号溝
27号土
17号井戸
58号溝
18号井戸
19号井戸
28号土
62号溝
22号井戸
20号井戸
21号井戸
63号溝
64号溝
65号溝
29号土
66号溝
23号井戸
24号井戸
25号井戸
26号井戸
28号井戸
27号井戸
67号溝
30号土
31号土
平成12年度調査Ⅰ区
平成15年度調査区
平成12年度調査Ⅱ区
0
10m
1:400

第7図　調査区全測図(4)

Ⅳ　遺構と遺物

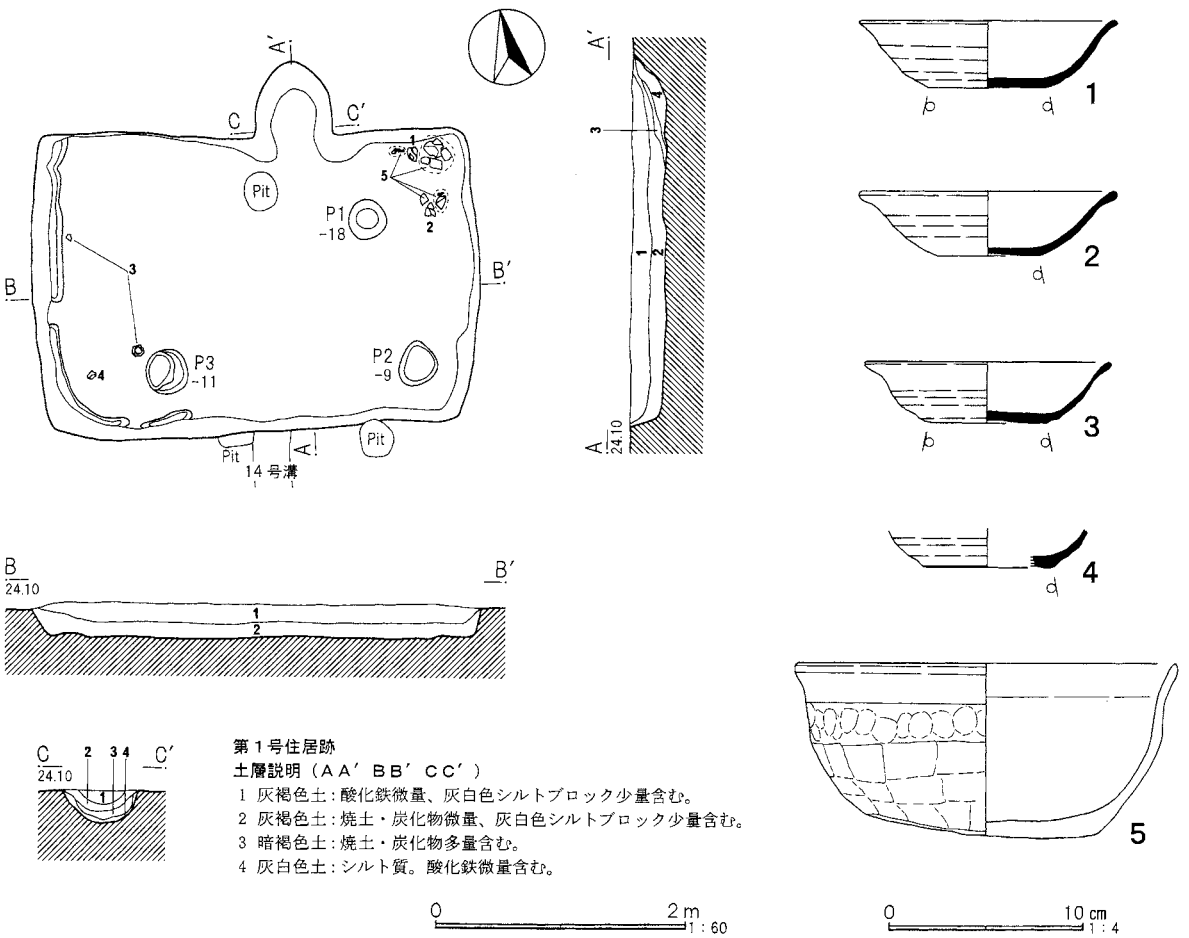
1　住居跡

第１号住居跡（第８図）

平成13年度調査Ⅲ区の29・30―41グリッドに位置する。本住居跡ほぼ中央を南北に走る14号溝跡を切っており、カマド前及び南壁中央付近では後世のピットに切られている。

規模は長軸3.55m、短軸2.45mを測る。平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はN―11°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.28mを測る。床面は、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（１・２層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.60mと短い。袖部は明確でないが、両壁ともやや掘り残し気味に前にせり出していた。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、先端でや



第８図　第１号住居跡・出土遺物

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	13.5	3.55	6.4	ABGHLN	灰白色	B	80%	末野産。
2	須恵器　坏	(13.6)	3.4	(5.4)	ABHL	灰色	B	25%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.0)	3.25	6.4	ABHL	灰白色	B	50%	末野産。
4	須恵器　坏	―	(2.0)	(6.9)	ABHL	灰色	B	底部30%	末野産。
5	土師器　鉢	20.2	9.3	12.4	ABHM	橙色	B	75%	外面やや磨耗。

や鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土粒や炭化物を多量に含む層（３層）、掘り方（４層）が確認されたにとどまる。

壁溝は西壁及び南西隅付近で確認された。幅0.04～0.11m、床面からの深さは0.04m程を測る。ピットは３つ検出された。主柱穴とみて良さそうであるが、いずれもやや浅い。貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（１～４）、土師器鉢（５）がある。１・２・５が北東隅、３・４が南西隅付近の床面直上から検出された。

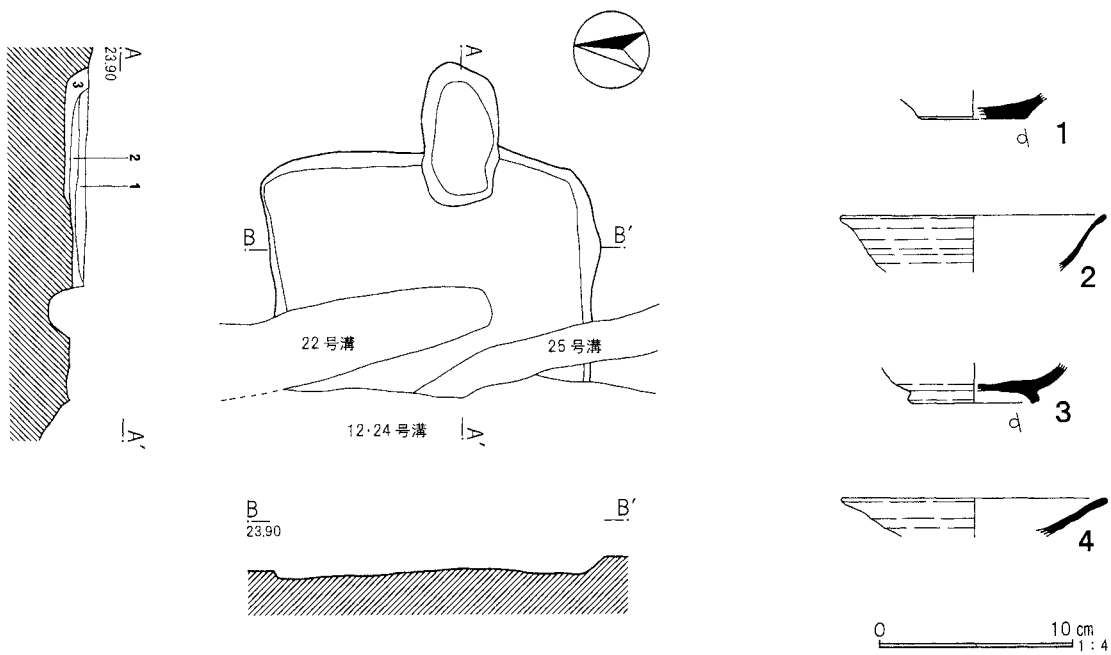
１～４は末野産である。口径13cm、器高3.5cm、底径６cm前後を測る。肥厚した口縁部が外反し、体部は内湾する。底部は回転糸切り痕を残す。５は口縁部横ナデ、体部上位に指オサエ、下位及び底部にヘラ削りが施されている。口縁部から体部はＳ字状を呈する。平底に近い。外面はやや磨耗している。

本住居跡の時期は、９世紀後半を中心とした段階と思われる。

第２号住居跡（第９図）

平成13年度調査III区の26―41・42グリッドに位置する。西側大半を12・22・24・25号溝跡に切られており、遺存状態は悪い。

規模及び平面プランは不明であるが、南北は2.62mを測る。主軸方向はＮ―86°―Ｅを指す。確認面か



第２号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：酸化鉄微量、焼土少量含む。
2 灰褐色土：酸化鉄微量、淡黄褐色シルトブロック少量含む。
3 黒 色 土：焼土・炭化物少量含む。

0　2m　1：60

第９図　第２号住居跡・出土遺物

第３表　第２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	―	(1.4)	(5.4)	ABCHL	灰白色	B	底部25%	末野産。
2	須恵器　坏	(14.0)	(3.0)	―	ABDHMN	灰白色	B	口～体20%	
3	須恵器高台椀	―	(2.1)	(6.8)	ABHL	灰色	B	高台部45%	末野産。
4	須恵器　皿	(14.0)	(2.0)	―	ABDHL	灰色	B	口縁部30%	末野産。

らの深さは最大0.12mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、カマドを除けば二層（1・2層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.69mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、先端でやや鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む黒色土（3層）が確認されたにとどまる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

図示可能な出土遺物は、須恵器供膳具のみである。坏（1）、高台付椀（2・3）、皿（4）がある。いずれも破片であり、覆土からの検出である。そのほとんどが末野産である。

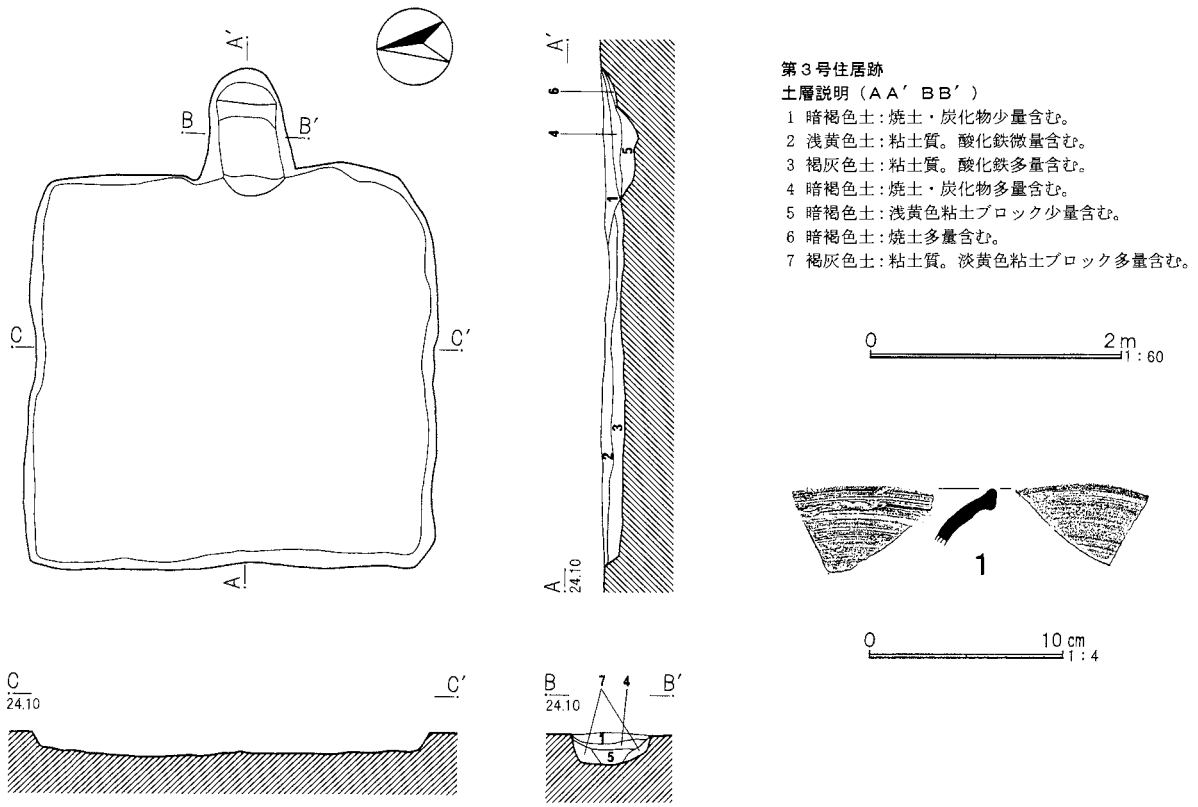
1は底部片。底径が5.4cmと小さく、回転糸切り痕を残す。2は薄手で、肥厚した口縁部が外反する。3は高台部がハの字に開き、回転糸切り痕を残す。4は厚手で、口縁部がほぼ直線的に開く。

本住居跡の時期は、9世紀後半を中心とした段階と思われる。

第3号住居跡（第10図）

平成13年度調査III区の30・31—42グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

規模は一辺3.1m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN—97°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.2mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（2・3層）からなる。ややランダムな層位ではあるが、自然堆積と思われる。



第10図　第3号住居跡・出土遺物

第4表　第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	—	—	—	AKL	灰色	A	口縁部片	末野産。

カマドは東壁ほぼ中央に位置する。壁外への張り出しは0.84mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は壁外にあり、土坑状を呈する。煙道部は土坑状の立ち上がりから先端に向かってほぼ平坦に進み、緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（1・4・6層）、掘り方（5・7層）が確認されたにとどまる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物で図示可能なものは、須恵器甕の口縁部片（1）のみである。末野産。覆土から検出された。

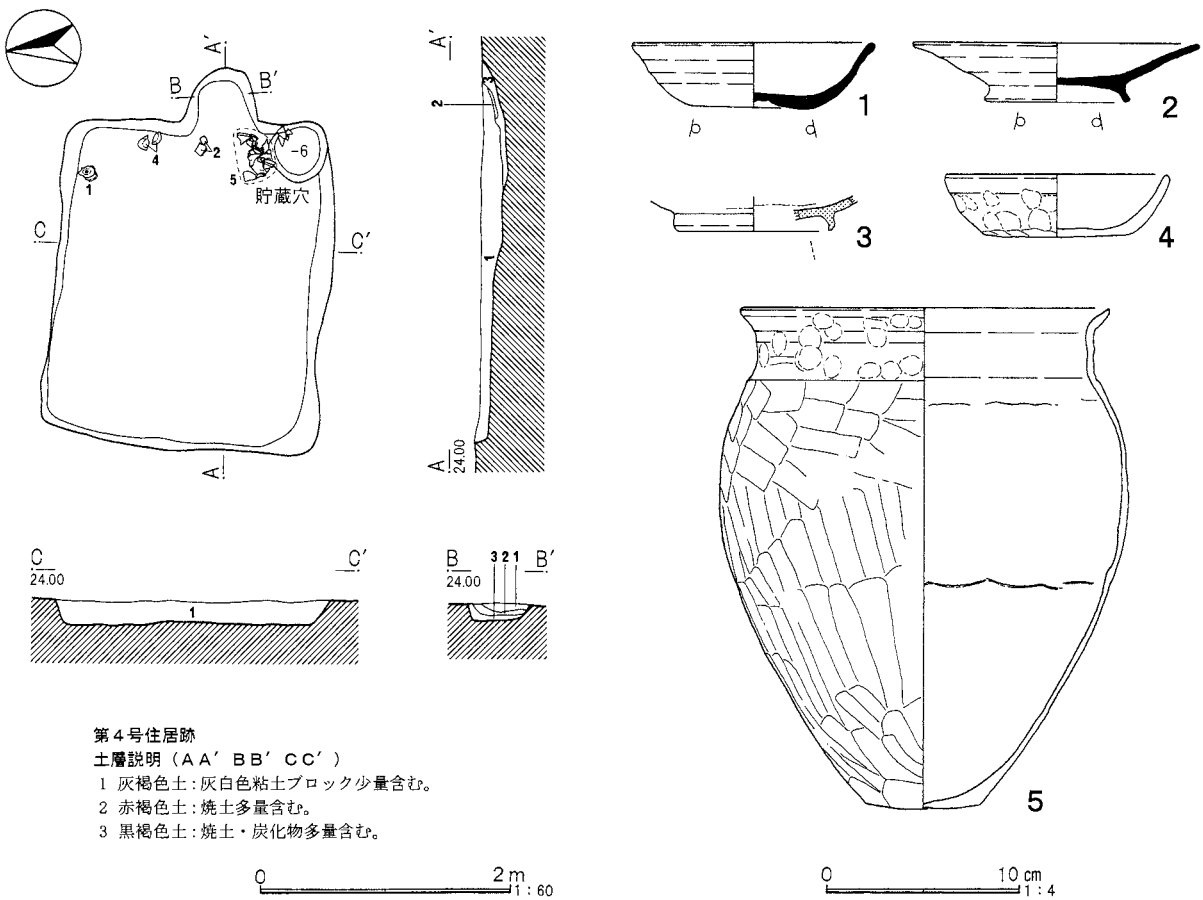
出土遺物の少なさから具体的な時期を判断するのは難しいが、9世紀後半を前後する段階と思われる。

第4号住居跡（第11図）

平成13年度調査Ⅲ区の28―42・43グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

規模は長軸2.62m、短軸2.23mを測る。平面プランはやや縦長の長方形を呈する。主軸方向はN―97°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.19mを測る。床面はカマド前付近でやや凹凸がみられたが、その他はほぼ平坦であった。覆土はカマドを除けば灰褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.43mと短い。袖部は確認されな



第11図　第4号住居跡・出土遺物

第5表　第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(12.8)	3.5	6.2	ABDL	黄灰色	B	70%	末野産。
2	須恵器高台皿	15.0	3.1	7.6	ABCHL	灰白色	B	85%	末野産。
3	灰釉　高台椀	―	(1.8)	(8.5)	B	灰白色	B	高台部15%	灰釉漬け掛け。
4	土師器　坏	12.8	3.3	7.4	ABDHKMN	橙色	B	完形	
5	土師器　甕	(19.4)	26.6	(6.0)	ABEGHKN	にぶい橙色	B	50%	

かった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土層（２層）と焼土粒や炭化物を多量に含む層（３層）が確認されたにとどまる。

カマド南脇の南東隅からは、貯蔵穴が確認された。径は0.47m程、床面からの深さは0.06mと浅い。ピットや壁溝は確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（１）、高台付皿（２）、灰釉陶器高台付椀（３）、土師器坏（４）、土師器甕（５）がある。３は覆土、その他はカマド周辺の床面直上から検出された。

須恵器は末野産である。１は厚手で、口縁部が外反し、体部は内湾する。底部は回転糸切り痕を残す。２は口縁部が直線的に開き、ハの字に開く高台が付く。３は灰釉漬け掛け。胎土は白っぽく、粗い。４は口縁部横ナデ、体部指オサエ、底部はヘラ削りが施されている。口縁部から体部は内湾する。平底。５は口縁部がコの字、胴部以下は倒卵形を呈する。口縁部外面には指頭圧痕が認められた。

本住居跡の時期は、９世紀中頃から後半にかけての段階と思われる。

第５号住居跡（第12図）

平成13年度調査III区の25―42・43グリッドに位置する。本住居跡は、調査区の都合からカマドを含む北側と南側の２回に分けて調査が行われたため、全形は図面上で復元したものである。他の遺構との重複関係はみられなかった。

規模は一辺3.2m前後を測り、平面プランはほぼ正方形を呈する。主軸方向はN―13°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.21mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマド付近を除くと二層（１・６層）からなる。床面中央付近では、炭化物がまとまって検出された。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

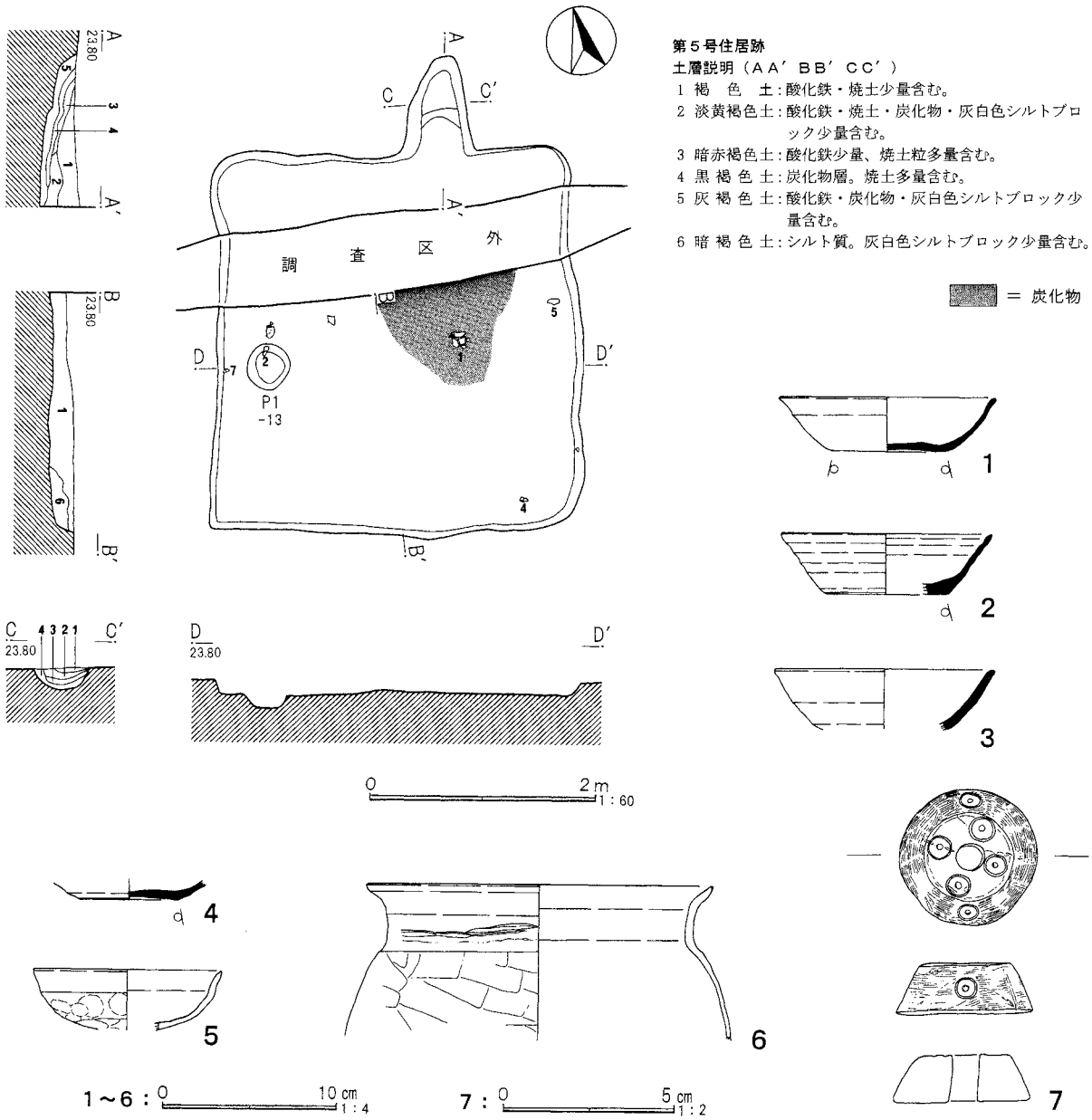
カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外へは0.84m張り出す。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、燃焼部と煙道部の境には高低差0.05mの段が設けられていた。煙道部はその段から先端に向かってほぼ平坦に進み、やや鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（２・３層）、炭化物層（４層）、掘り方（５層）などが確認された。

西壁沿い中央付近では、ピットが１つ検出された。主柱穴とは考えづらい。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（１～４）、土師器坏（５）、甕（６）、石製紡錘車（７）がある。すべて南側から検出された。３・６は覆土、その他は床面直上からの検出である。

須恵器坏は３が南比企産、その他は末野産である。いずれも口径12.5cm、器高3.5cm、底径6.5cm前後を測り、底部は回転糸切り痕を残すが、器形にバラエティがみられた。１・４は薄手で、口縁部が外反し、体部は内湾する。２は口縁部から体部にかけて直線的である。３は厚手で、口縁部から体部にかけて内湾しながら立ち上がる。５は口縁部横ナデ、体部に指オサエ、底部にヘラ削りが施されている。丸底で口縁部と体部の境に稜を持ち、口縁部は僅かに外反する。６は口縁部がコの字状を呈し、端部はやや受口状を呈する。外面にはヘラによる刻みや輪積痕がみられた。７は上面及び側面に竹管状の文様が刻まれており、側面には横位の細かい刻みも描かれている。

本住居跡の時期は、９世紀前半から中頃にかけての段階と思われる。



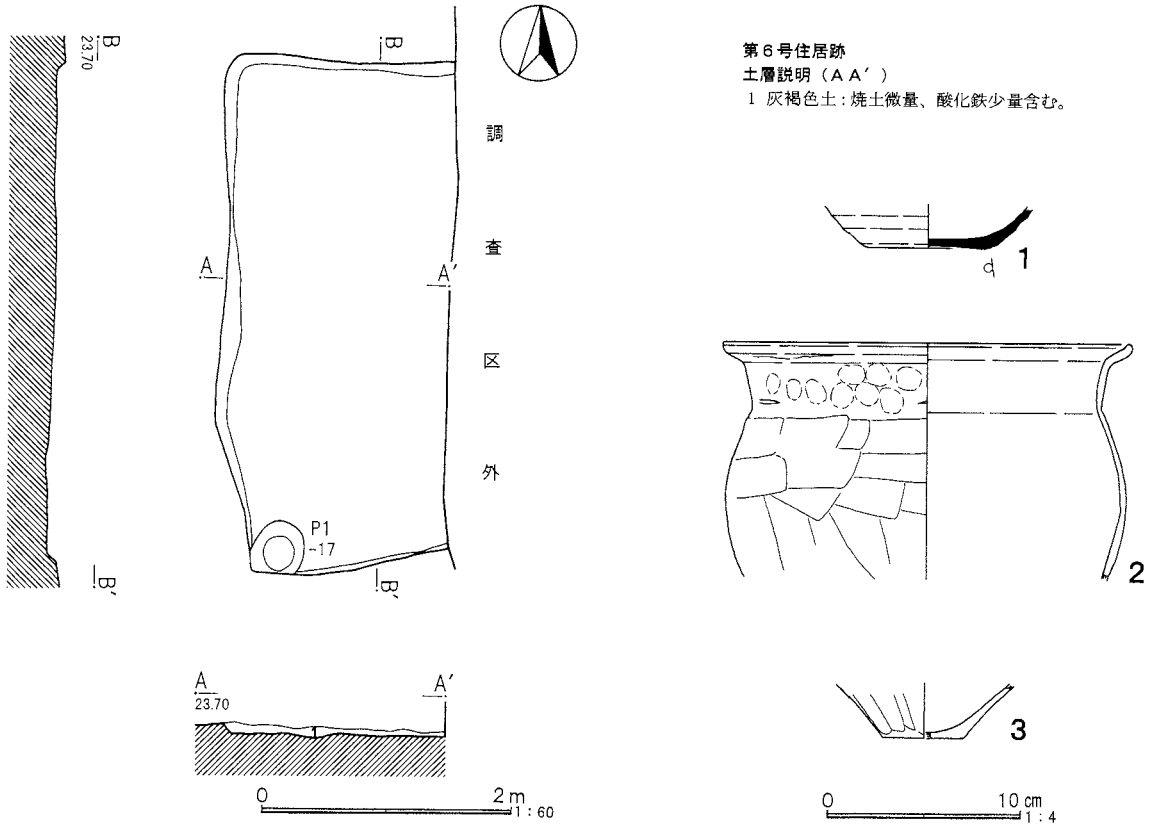
第12図　第５号住居跡・出土遺物

第６表　第５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.6	3.2	6.75	ABGL	灰色	B	80%	末野産。
2	須恵器　坏	(12.2)	3.55	(7.2)	ABL	青灰色	A	20%	末野産。
3	須恵器　坏	(12.8)	(3.5)	—	ABFN	灰白色	A	口～体20%	南比企産。
4	須恵器　坏	—	(1.2)	(6.0)	ABL	灰白色	A	底部45%	末野産。
5	土師器　坏	(11.0)	(3.5)	—	ABDK	橙色	B	30%	
6	土師器　甕	20.2	(9.05)	—	ABEGKM	橙色	B	口～胴60%	
7	石製紡錘車	最大径4.0cm、最大厚1.4cm。重量34.2ｇ。完形。上・側面に竹管状の線刻文様、側面に横位の線刻有。							

第６号住居跡（第13図）

平成13年度調査III区の23―42・43グリッドに位置する。カマドを含む東側が調査区外にあり、検出できたのは西側のみである。他の遺構との重複関係はみられない。



第13図　第６号住居跡・出土遺物

第７表　第６号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(2.3)	(6.6)	ABHL	灰白色	B	底部25%	末野産。
2	土師器　甕	(21.6)	(12.6)	—	ABDGHK	橙色	B	口～胴20%	
3	土師器　甕	—	(2.9)	(4.2)	ABGH	にぶい赤褐色	B	底部40%	

規模及び平面プランは不明であるが、検出された南北は4.12mを測る。主軸方向はN—88°—Eを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.09mと浅い。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は焼土粒や酸化鉄を含む灰褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

南西隅からピットが１つ検出されただけで、カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

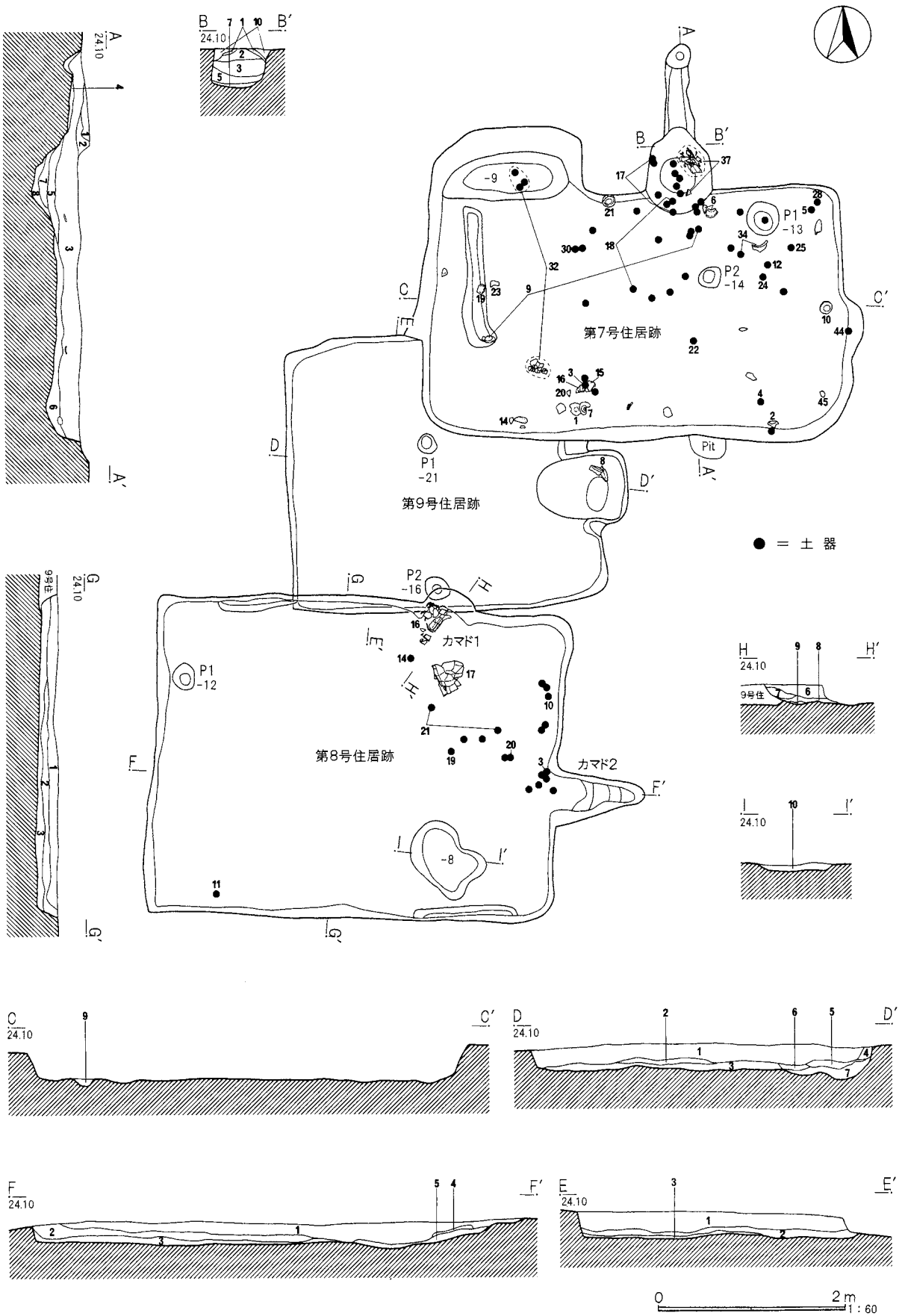
出土遺物は、須恵器坏（１）、土師器甕（２・３）のみである。いずれも破片での検出である。

１は末野産。回転糸切り痕を残す。２は口縁部がコの字状を呈し、やや外に開く。肥厚した端部が受口状を呈する。外面には指頭圧痕や輪積痕、ヘラによる刻みがみられた。３は器壁が薄い。

本住居跡の時期は、９世紀後半を中心とした段階と思われる。

第７号住居跡（第14図）

平成13年度調査Ⅲ区の29・30—42・43グリッドに位置する。南西部で９号住居跡を切り、南壁中央付近と床面に達しないため、図示しなかったが、本住居跡の中央付近を後世のピットに切られている。なお、直接的な重複関係にないが、９号住居跡は８号住居跡に切られており、本住居跡も含めて３軒の住居跡が重複関係にある。新旧関係は、新しい方から８号住居跡→７号住居跡→９号住居跡の順である。



第14図　第７～９号住居跡

第７号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）
1 赤褐色土：焼土層。被熱。
2 灰褐色土：焼土・炭化物微量含む。
3 褐灰色土：酸化鉄微量、焼土・炭化物少量含む。
4 黒褐色土：炭化物多量含む。
5 黒褐色土：焼土・炭化物多量含む。
6 灰 色 土：灰白色粘土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
7 褐 色 土：焼土・炭化物少量含む。
8 暗褐色土：焼土少量、炭化物多量含む。
9 灰 色 土：シルト質。酸化鉄・焼土少量含む。
10 灰褐色土

第８号住居跡
土層説明（ＦＦ′ ＧＧ′ ＨＨ′ ＩＩ′）
1 暗褐色土：焼土少量含む。しまり有。
2 灰褐色土：シルト質。
3 暗褐色土：酸化鉄少量含む。しまり無。
4 赤褐色土：焼土層。
5 黒 色 土：焼土・炭化物少量含む。
6 灰褐色土：焼土・炭化物微量含む。
7 褐 色 土：焼土。炭化物少量含む。被熱。
8 灰　　層
9 灰 色 土：粘土質。焼土・灰少量含む。
10 灰褐色土：粘土質。焼土・炭化物・淡黄色粒少量含む。

第９号住居跡
土層説明（ＤＤ′ ＥＥ′）
1 灰 色 土：焼土・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：褐色粒少量、灰白色粘土ブロック多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。褐色粒少量含む。
4 褐 色 土：粘土質。焼土粒少量含む。被熱。
5 灰 色 土：灰層。炭化物少量、焼土粒多量含む。
6 灰 色 土：炭化物・灰混合層。焼土粒・灰白色粘土ブロック微量含む。
7 褐灰色土：粘土質。焼土粒・灰白色粘土ブロック微量含む。

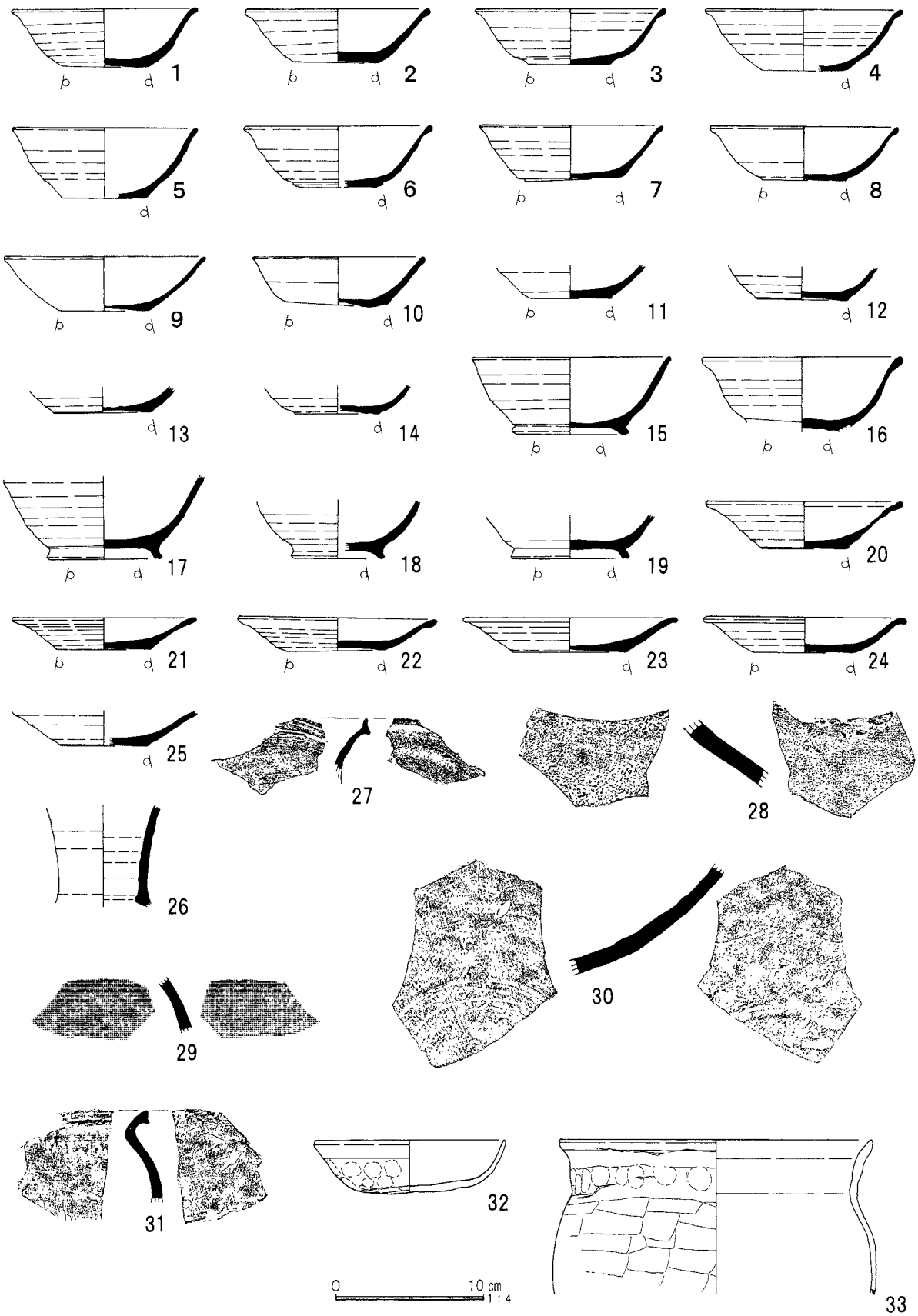
長軸4.84m、短軸2.73mを測る。北西隅に張り出し部があるが、平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はＮ－１°－Ｅを指す。確認面からの深さは最大0.36mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（３・６層）からなる。自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは1.55mを測り、今回報告する住居跡では最も長い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は壁外にあり、土坑状を呈する。煙道部は土坑状の立ち上がりから先端に向かって緩やかに上がり、先端でピット状の落ち込みとなって鋭角に立ち上がる。カマド覆土は、10層が天井部、１層が被熱層であり、その下に焼土や炭化物を含む層（２・３・５・７層）がみられた。

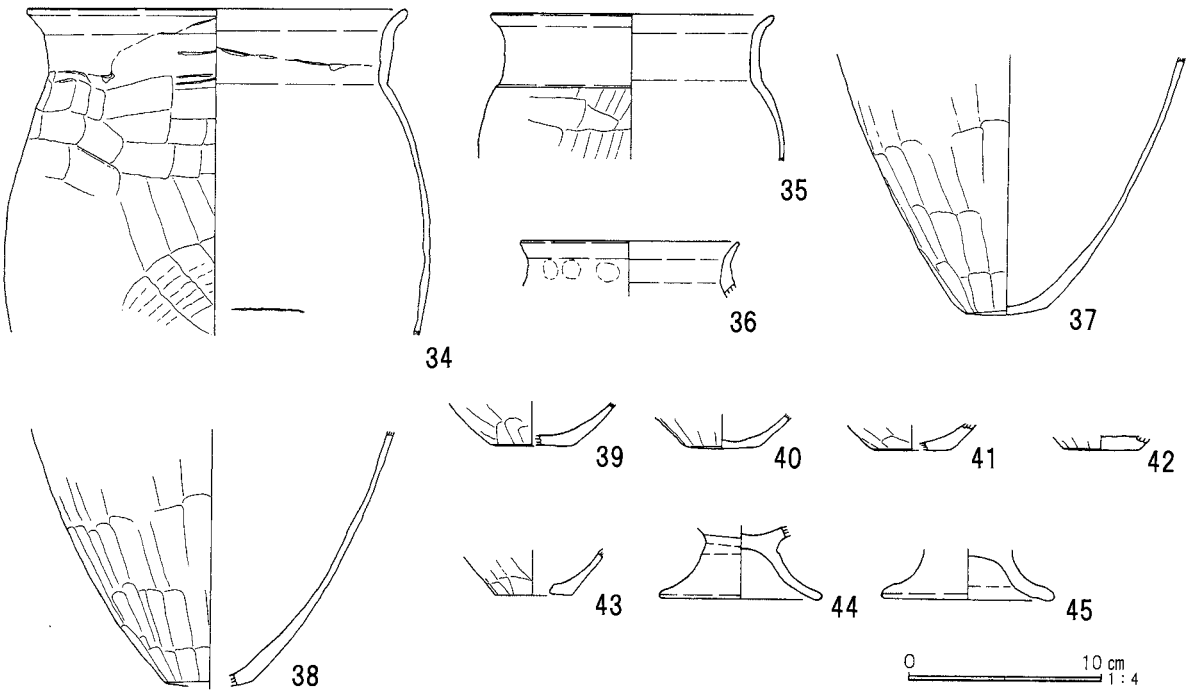
北西隅で確認された張り出し部は、壁外へ0.72m張り出しており、隅丸方形を呈する土坑状の掘り込みとなっている。床面からの深さは0.09mと浅い。性格は不明である。壁溝は西壁からやや離れて走っていた。検出された長さは1.5mと短い。幅0.17～0.31m、床面からの深さは0.07mを測る。その位置から本住居跡が拡張されたことを物語る。ピットは２つ検出された。Ｐ１はカマド東脇に位置することから貯蔵穴の可能性がある。Ｐ２はその位置から本住居跡に伴わないものかもしれない。

出土遺物（第15･16図）は、須恵器坏（１～14）、高台付椀（15～19）、皿（20～25）、長頸瓶（26･27）、甕（28～30）、鉢（31）、土師器坏（32）、土師器甕（33～42）、甑（43）、台付甕（44･45）がある。遺物は住居跡のほぼ全面から検出されたが、カマド付近からの検出が多い。

須恵器は末野産がほとんどを占め、20のみ南比企産である。末野産のうち、19・24・25は酸化焔焼成による。須恵器供膳具の底部は、すべて回転糸切り痕を残す。坏は口径13cm、器高４cm、底径６cm前後のものが主体となる。５のみ深身でやや後出的である。いずれも口縁部が外反し、体部は内湾する。高台付椀は、全形を知り得るものが少ない。15は口縁部の外反が弱いのに対し、16は口縁部が肥厚し、外反が強い。体部は19がやや直線的である以外はすべて内湾し、高台部はハの字に開く。皿は法量にバラツキがあるが、いずれも口縁部が外反し、体部は直線的である。南比企産の20のみ他と比べて深身であり、坏との中間的な様相を示す。長頸瓶・甕・鉢は、すべて破片での検出である。32は口縁部横ナデ、体部に指オサエ、底部はヘラ削りが施されている。平底気味で体部が内湾し、口縁部は直線的にやや外



第15図　第７号住居跡出土遺物(1)



第16図　第７号住居跡出土遺物(2)

に開く。甕は口縁部がコの字状を呈するものの、厚手で形がやや崩れている。胴部の膨らみも弱い。43は甕の底部を穿孔し、転用したものである。44・45は台部である。

本住居跡の時期は、９世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

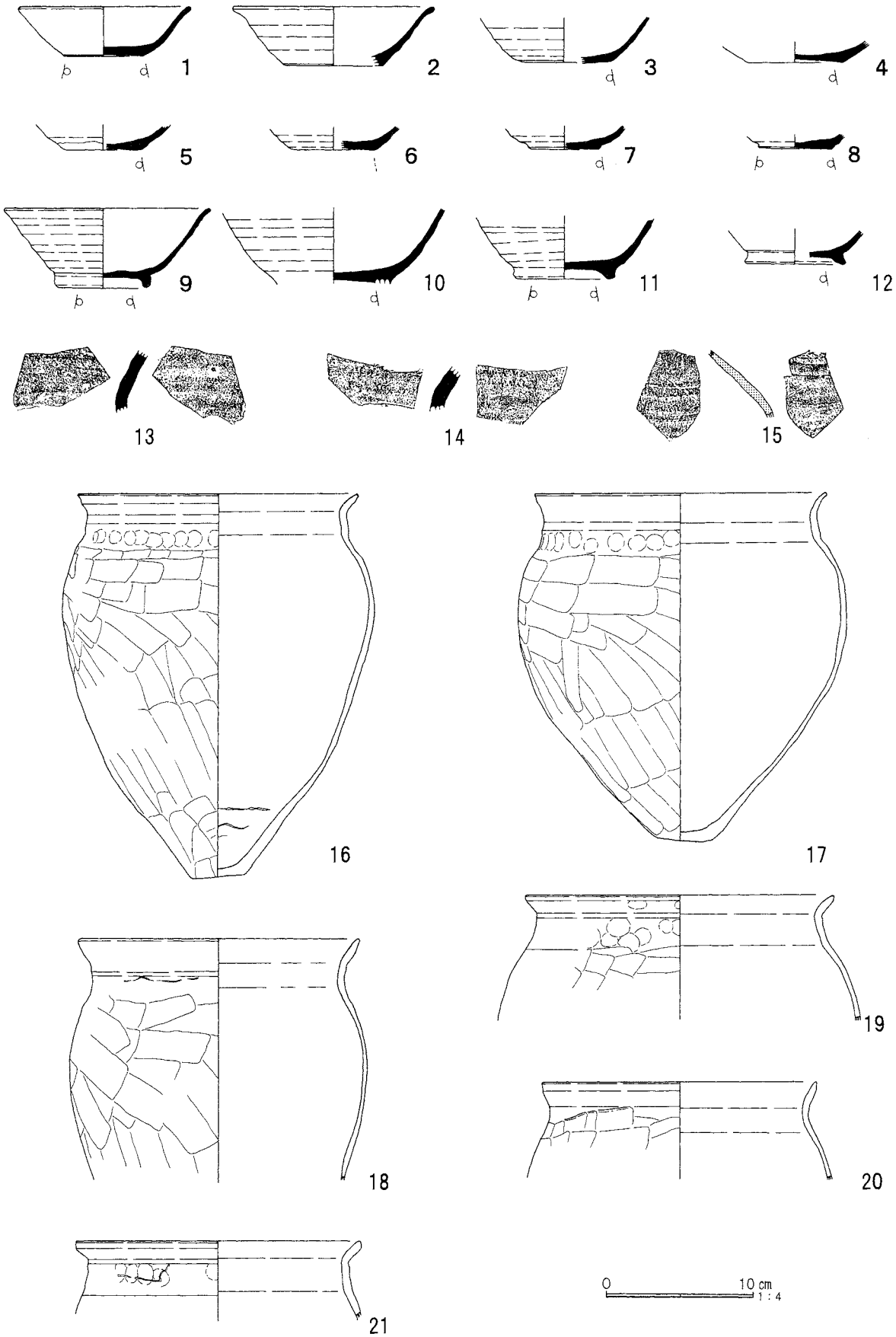
第８号住居跡（第14図）

平成13年度調査III区の30・31―43・44グリッドに位置する。北側で９号住居跡を切っている。

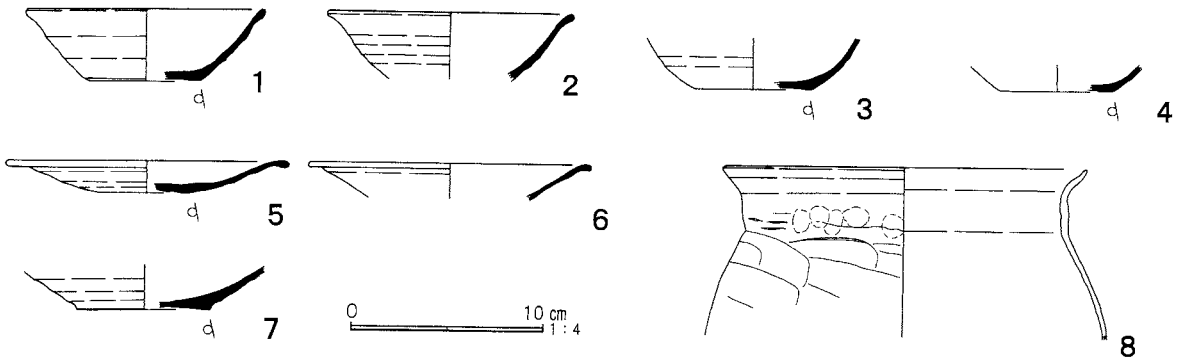
規模は長軸4.39m、短軸3.42mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はN－４°－Eを指す。確認面からの深さは最大0.25mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと三層（１～３層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。

カマドは２つ確認された。カマド１は北壁中央から東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.19mと非常に短いが、煙道部は削平してしまったと思われる。袖部は明確でないが、両壁ともやや前にせり出しており、遺物の出土状況と合わせると本来は存在していたと思われる。焚口部から燃焼部は壁内に収まる。ほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（６・７層）、灰層（８層）、掘り方（９層）などが確認された。カマド２は東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.92mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、燃焼部と煙道部の境には高低差0.1mの段が設けられている。煙道部はその段から先端に向かってほぼ平坦に進み、緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土層（４層）、焼土と炭化物を含む層（５層）が確認されたにとどまる。カマド１と２の新旧関係は、遺物の出土状況などからカマド１が２より新しい。

壁溝は北壁と南壁で確認された。長さは、北壁が0.84m、南壁が1.09mといずれも短い。幅は北が0.04～0.12m、南は0.1m前後を測り、床面からの深さはともに0.05m前後である。ピットは１つ検出さ



第17図　第８号住居跡出土遺物



第18図　第９号住居跡出土遺物

れた。北西隅付近に位置し、主柱穴とは考えづらい。南東隅付近では、いびつな土坑状の掘り込みが確認された。床下土坑であろうか。貯蔵穴は確認されなかった。

出土遺物（第17図）は、須恵器坏（１～８）、高台付椀（９～12）、甕（13・14）、灰釉陶器瓶（15）、土師器甕（16～21）がある。床面直上から出土した遺物は、カマド１・２を含めた北東隅周辺からの検出が多い。その他は、覆土からの検出である。

須恵器は末野産がほとんどを占める。２・６・10は酸化焔焼成による。須恵器供膳具の底部は、６が回転ヘラナデ調整である以外は、回転糸切り痕を残す。坏･高台付椀は、全形を知り得るものが少ない。いずれも口縁部が外反し、体部は内湾する。坏は法量にややバラツキがみられた。高台付椀のうち、９は高台部が他に比べるとほぼ直立している。13・14は頸部片である。15は肩部片。釉がやや剝落している。胎土は灰色を呈し、粗い。甕はいずれも口縁部がコの字状を呈するが、下膨れのものが多く、退化的様相を示す。器壁も厚い。18・20以外の外面には指頭圧痕や輪積痕がみられた。

本住居跡の時期は、10世紀初頭を中心とした段階と思われる。

第９号住居跡（第14図）

平成13年度調査III区の30・31―43グリッドに位置する。北東部を７号住居跡、南側を８号住居跡に切られている。

規模は長軸3.32m、短軸2.94mを測る。平面プランはほぼ正方形に近い。主軸方向はN―89°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.29mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと三層（１～３層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.35mと短い。袖部は両袖とも掘り残してあるが、北側は７号住居跡に切られている。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、先端で鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、被熱層（４層）、灰層（５層）、炭化物・灰混合層（６層）、掘り方（７層）などが確認された。

ピットは２つ検出された。Ｐ１は床面中央よりやや北側、Ｐ２は南壁沿いの８号住居跡カマド１下から確認された。ともに主柱穴とは考えづらい。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第18図）は、須恵器坏（１～４）、皿（５～７）、土師器甕（８）がある。８がカマド、その他は覆土からの検出である。いずれも破片であり、全形を知りうるものは少ない。

須恵器は供膳具のみであり、末野産がほとんどを占める。１のみ南比企産である。坏は口径12.6～13

第８表　第７号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.8	4.05	5.9	ABEL	灰色	B	90%	末野産。
2	須恵器　坏	(12.7)	3.8	5.9	ABHL	灰色	B	60%	末野産。
3	須恵器　坏	13.1	3.8	5.7	ABLN	灰色	B	85%	末野産。
4	須恵器　坏	13.6	4.2	(6.0)	ABDHL	明褐灰色	B	35%	末野産。
5	須恵器　坏	(12.7)	4.8	(5.7)	ABHL	灰白色	B	20%	末野産。
6	須恵器　坏	13.0	4.2	(6.2)	ADL	灰色	B	45%	末野産。
7	須恵器　坏	(12.6)	3.9	7.0	AL	灰色	B	70%	末野産。
8	須恵器　坏	(13.0)	3.7	5.8	ABL	灰色	B	20%	末野産。
9	須恵器　坏	(14.0)	3.75	6.4	ABHLN	灰白色	C	35%	末野産。
10	須恵器　坏	11.8	3.45	7.0	ADHL	灰色	B	完形	末野産。
11	須恵器　坏	—	(2.3)	5.7	ADHL	灰色	B	底部90%	末野産。
12	須恵器　坏	—	(2.3)	(6.4)	ABDHJN	灰黄色	C	底部30%	
13	須恵器　坏	—	(1.8)	(6.8)	AEHL	灰色	B	底部30%	末野産。
14	須恵器　坏	—	(2.0)	(5.8)	ABDHLN	にぶい橙色	C	底部45%	末野産。
15	須恵器高台椀	13.8	5.4	8.0	ABL	灰白色	B	ほぼ完形	末野産。
16	須恵器高台椀	(13.8)	(5.2)	—	ABCL	灰白色	B	口～体50%	末野産。
17	須恵器高台椀	—	(5.7)	7.9	ABDHL	灰白色	B	体～高60%	末野産。
18	須恵器高台椀	—	(4.0)	(6.5)	AHL	灰色	A	体～高45%	末野産。
19	須恵器高台椀	—	(3.0)	8.2	ABCDHL	橙色	B	高台部100	末野産。酸化焔焼成。
20	須恵器　皿	(13.6)	3.25	(6.0)	ABDFHKN	黄灰色	B	25%	南比企産。
21	須恵器　皿	12.8	2.2	6.4	ABDHL	灰色	B	完形	末野産。
22	須恵器　皿	13.8	2.4	6.6	ABDL	灰白色	B	90%	末野産。
23	須恵器　皿	(14.8)	2.4	(8.0)	ABHLN	黄灰色	C	40%	末野産。
24	須恵器　皿	13.9	2.45	6.6	ABHLN	橙色	C	ほぼ完形	末野産。酸化焔焼成。
25	須恵器　皿	—	(2.4)	(6.2)	ABGHLN	赤褐色	C	体～底40%	末野産。酸化焔焼成。
26	須恵器長頸瓶	—	(6.9)	—	AHL	黄灰色	A	頸部25%	末野産。
27	須恵器長頸瓶	—	—	—	AHL	青灰色	A	口縁部片	末野産。
28	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	A	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
29	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰黄色	B	胴上部片	外面自然釉付着。
30	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
31	須恵器　鉢	—	—	—	AL	青灰色	B	口～胴片	末野産。
32	土師器　坏	13.2	3.7	8.3	ABEM	淡橙色	B	80%	
33	土師器　甕	21.6	(10.6)	—	ABCGMN	橙色	B	口～胴70%	
34	土師器　甕	20.1	(17.25)	—	ABGHKM	にぶい橙色	B	口～胴60%	
35	土師器　甕	(15.0)	(7.7)	—	ABCJK	橙色	B	口～胴40%	
36	土師器　甕	(11.6)	(2.9)	—	BCJKM	明赤褐色	B	口縁部20%	
37	土師器　甕	—	(13.8)	4.2	BGKN	にぶい褐色	B	胴～底70%	
38	土師器　甕	—	(13.6)	4.7	ABGHI	外:黒　内:橙	A	胴～底50%	
39	土師器　甕	—	(2.4)	(4.4)	ABGHJ	にぶい赤褐色	B	底部20%	
40	土師器　甕	—	(1.9)	3.8	ABCGJKM	明赤褐色	B	底部55%	
41	土師器　甕	—	(1.4)	(4.2)	BCDGJK	橙色	B	底部40%	
42	土師器　甕	—	(0.8)	4.0	ABDGJM	橙色	B	底部100%	
43	土師器　甑	—	(2.5)	(4.0)	ABDJK	橙色	B	底部40%	底部穿孔、甕の転用。
44	土師器台付甕	—	(3.75)	(8.6)	ABHIJM	橙色	B	台部40%	
45	土師器台付甕	—	(2.7)	(9.2)	ABDHKM	橙色	B	台部30%	

第９表　第８号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.0	3.5	5.6	ABL	灰色	B	75%	末野産。
2	須恵器　坏	(14.0)	4.2	(7.0)	ACHLM	明赤褐色	B	20%	末野産。酸化焔焼成。底部磨耗のため調整不明。
3	須恵器　坏	—	(3.2)	(6.6)	ABHL	灰色	B	体～底30%	末野産。
4	須恵器　坏	—	(1.5)	(6.4)	ABGHL	灰色	B	底部25%	末野産。
5	須恵器　坏	—	(1.8)	(5.2)	ACGN	にぶい褐色	B	底部30%	
6	須恵器　坏	—	(1.6)	(5.6)	ABEGHKMN	にぶい橙色	C	底部40%	酸化焔焼成。
7	須恵器　坏	—	(1.7)	(5.0)	ADL	灰褐色	B	底部45%	末野産。
8	須恵器　坏	—	(1.0)	5.2	ABGHL	灰色	B	底部100%	末野産。
9	須恵器高台椀	(14.5)	5.5	6.7	ABHL	灰白色	B	40%	末野産。
10	須恵器高台椀	—	(5.2)	—	ABDGHLM	灰白色	C	体部40%	末野産。酸化焔焼成。
11	須恵器高台椀	—	(4.3)	7.0	ABCHLM	にぶい黄橙色	C	体～高60%	末野産。
12	須恵器高台椀	—	(2.45)	(7.0)	ABEL	灰色	B	高台部25%	末野産。
13	須恵器　甕	—	—	—	ABL	褐灰色	A	頸部片	末野産。内外面自然釉付着。
14	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	A	頸部片	末野産。内外面自然釉付着。

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
15	灰釉陶器　瓶	—	—	—	BN	灰白色	A	肩部片	外面灰釉やや剝落。
16	土師器　甕	19.6	26.9	3.7	ABCDGHIKM	にぶい橙色	B	80%	
17	土師器　甕	20.2	24.4	3.9	ABEGHJKM	橙色	B	80%	
18	土師器　甕	(19.6)	(16.9)	—	ABCJKM	浅黄橙色	B	口～胴25%	
19	土師器　甕	(21.4)	(8.7)	—	ABDGIKM	赤褐色	B	口～胴20%	
20	土師器　甕	(19.0)	(6.7)	—	ABCHIJ	橙色	B	口～胴30%	
21	土師器　甕	(19.9)	(5.5)	—	ABCHIKM	明赤褐色	B	口縁部20%	

第10表　第９号住居跡出土遺物観察表

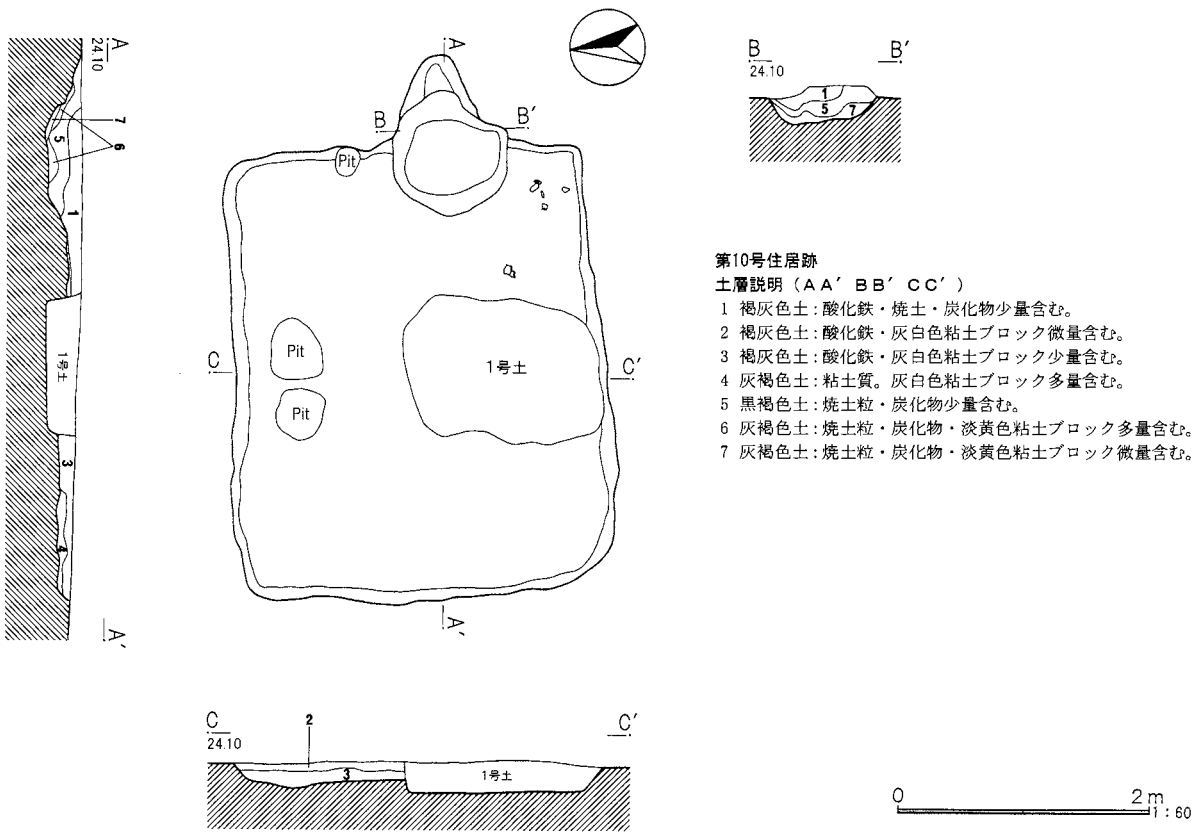
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(12.6)	(3.8)	(5.8)	ABFN	灰色	A	40%	南比企産。
2	須恵器　坏	(13.0)	(3.5)	—	ABHL	灰白色	B	口～体20%	末野産。
3	須恵器　坏	—	(2.7)	(6.0)	ABL	灰色	B	体～底20%	末野産。
4	須恵器　坏	—	(1.3)	(6.0)	ABHL	灰色	B	底部25%	末野産。
5	須恵器　皿	(15.0)	(1.7)	(5.0)	ABL	灰白色	B	15%	末野産。
6	須恵器　皿	(15.0)	(1.9)	—	ABL	黄灰色	B	口縁部15%	末野産。
7	須恵器　皿	—	(2.3)	(7.0)	ABDHL	灰色	B	体～底40%	
8	土師器　甕	19.2	(9.0)	—	ABHJKMN	橙色	B	口～胴75%	

cm、器高3.5～3.8cm、底径６cm程を測る。口縁部が外反し、体部は内湾する。皿は口径が15cm程を測るが、器高と底径はバラツキがある。また、器形も口縁部は大きく外反するが、体部は内湾するもの（１）と直線的なもの（６・７）の二者がみられた。８は口縁部がコの字状を呈し、端部が受口状を呈する。器壁が薄い。外面には指頭圧痕や輪積痕、ヘラによる刻みがみられた。

本住居跡の時期は、９世紀後半を中心とした段階と思われる。

第10号住居跡（第19図）

平成13年度調査Ⅲ区の29・30―43・44グリッドに位置する。本住居跡中央から南側を１号土坑、カマ



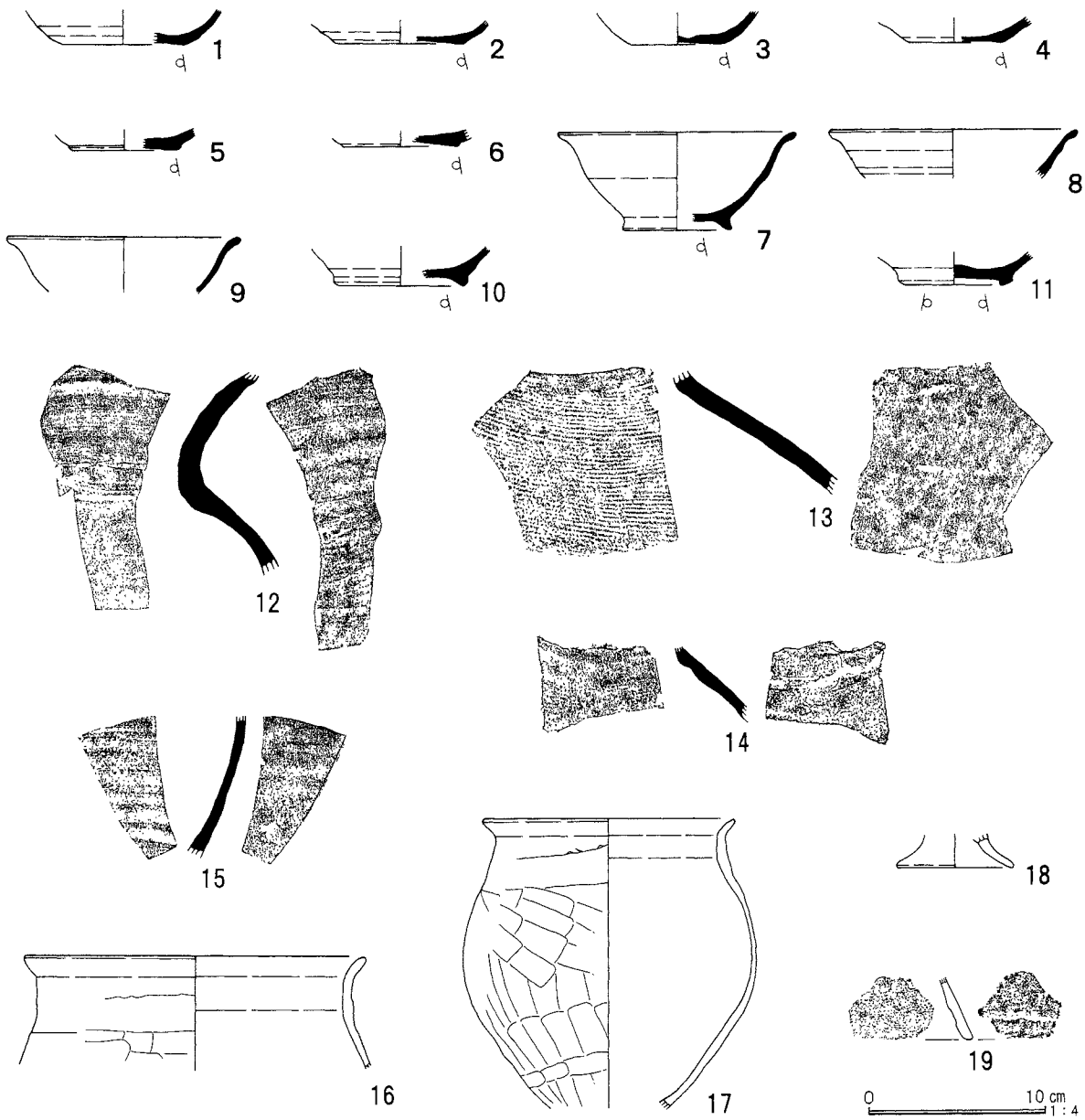
第19図　第10号住居跡

ド北脇及び北壁沿い中央付近を後世のピットに切られている。

規模は長軸3.65m、短軸3.05mを測る。平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はN―93°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.18mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、カマドを除くと四層（1～4層）からなる。自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.67mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、煙道部は土坑状の立ち上がりから先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土粒や炭化物などを含む層（5～7層）が確認されたにとどまる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第20図）は、須恵器坏（1～6）、高台付椀（7～11）、甕（12～15）、土師器甕（16・17）、台付甕（18）があり、流れ込み遺物として古墳時代前期の土師器S字甕の台部片（19）も検出された。



第20図　第10号住居跡出土遺物

第11表　第10号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(2.1)	(6.8)	ABLN	灰色	B	底部30%	末野産。
2	須恵器　坏	—	(1.35)	(7.4)	ABHL	黄灰色	B	底部25%	末野産。
3	須恵器　坏	—	(1.9)	(5.5)	ABGHL	灰黄色	C	底部25%	末野産。
4	須恵器　坏	—	(1.45)	(5.4)	ABGH	にぶい橙色	C	底部30%	
5	須恵器　坏	—	(1.25)	(6.0)	ABN	灰白色	A	底部25%	
6	須恵器　坏	—	(0.9)	(6.6)	ABCGL	灰色	B	底部25%	末野産。
7	須恵器高台椀	(13.8)	5.65	(6.4)	ABEL	灰褐色	B	15%	末野産。
8	須恵器高台椀	(14.3)	(2.8)	—	ABLN	灰色	A	口縁部20%	末野産。
9	須恵器高台椀	(13.6)	(3.2)	—	ADHLN	黄灰色	C	口～体20%	末野産。
10	須恵器高台椀	—	(2.3)	(7.8)	ABDEL	灰白色	B	高台部25%	末野産。
11	須恵器高台椀	—	(1.9)	6.6	ABHL	黄灰色	B	高台部70%	末野産。
12	須恵器　甕	—	—	—	ACFN	灰色	A	頸～胴片	南比企産。頸部外面自然釉付着。
13	須恵器　甕	—	—	—	ABHLN	灰色	A	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
14	須恵器　甕	—	—	—	ABD	灰白色	A	肩部片	外面自然釉付着。
15	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰色	A	胴下部片	
16	土師器　甕	(19.8)	(6.6)	—	ABCEHKM	橙色	B	口～胴25%	
17	土師器台付甕	14.6	(16.8)	—	ABEGIKM	橙色	B	口～胴50%	
18	土師器台付甕	—	(1.9)	6.8	ABCIKM	明赤褐色	B	台部70%	
19	土師器台付甕	—	—	—	ABHMN	にぶい黄橙色	B	台部片	古墳前期。

すべて覆土からの検出である。

須恵器は末野産がほとんどを占め、12のみ南比企産である。坏は底部のみの検出である。底径にバラツキがあるが、6cm前後のものが主体となる。すべて回転糸切り痕を残す。高台付椀は口径14cm前後を測り、口縁部が外反し、体部は内湾する。高台部はハの字に開く。甕はすべて破片である。13のみ外面に叩き目がみられた。16・17は口縁部がコの字状を呈するが、やや崩れ気味である。器壁が厚い。外面には輪積痕がみられた。17は小型であり、台付甕の可能性がある。18は台部である。

本住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

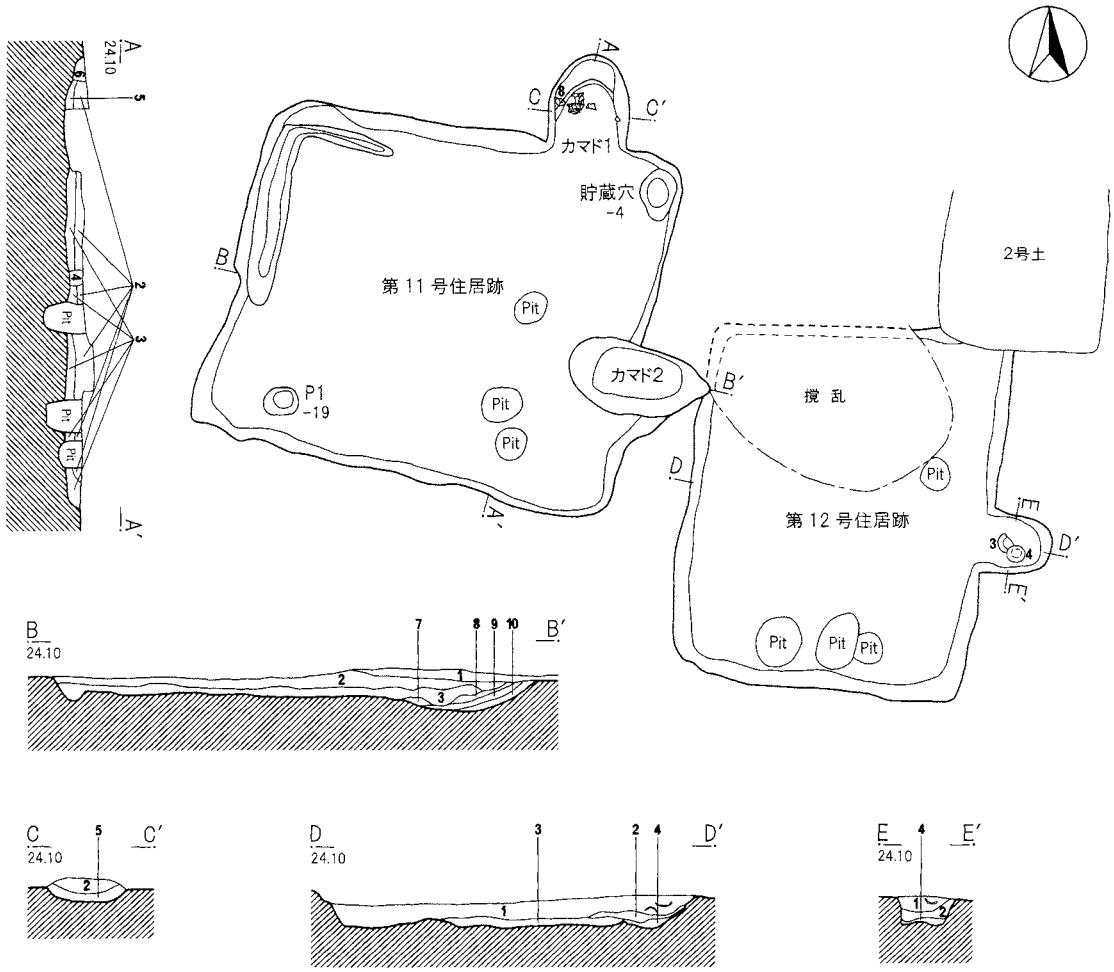
第11号住居跡（第21図）

平成13年度調査III区の28・29—43・44グリッドに位置する。本住居跡のカマド2先端を東側に隣接する12号住居跡に切られ、本住居跡中央から南東隅にかけては、後世のピットに所々切られている。

規模は長軸3.4m、短軸2.96mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はN—12°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.22mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、カマドを除くと四層（1～4層）からなる。ややランダムな層位であるが、自然堆積と思われる。

カマドは2つ確認された。カマド1は北壁でも北東隅に近い所に位置する。壁外への張り出しは0.73mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、燃焼部と煙道部の境には高低差0.05mの緩い段が設けられている。煙道部はその段から先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（5・6層）が確認されたにとどまる。カマド2は東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.55mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、先端で緩やかに立ち上がる。カマド1同様、覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（7～10層）が確認されたにとどまる。カマド1と2の新旧関係は、遺物の出土状況等からカマド1が新しい。

貯蔵穴は北東隅で確認された。床面からの深さは0.04mと浅い。壁溝は北西隅付近で確認された。幅0.09～0.25m前後、床面からの深さは0.07mを測る。ピットは1つ検出された。主柱穴とは考えづらい。



第11号住居跡
土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′ ＣＣ′）
1 灰褐色土：酸化鉄少量含む。
2 灰褐色土：焼土微量、酸化鉄多量含む。
3 灰褐色土：黄褐色土ブロック・焼土・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
4 灰褐色土
5 灰褐色土：焼土・炭化物多量含む。
6 灰褐色土：焼土・炭化物多量含む。５層より明るい。
7 灰褐色土：黄褐色粒・炭化物微量含む。
8 褐 色 土：焼土少量含む。
9 黒褐色土：焼土・炭化物多量含む。
10 灰褐色土：焼土微量含む。

第12号住居跡
土層説明（ＤＤ′ ＥＥ′）
1 灰褐色土：酸化鉄微量、灰白色粘土ブロック少量含む。
2 暗褐色土：焼土・炭化物多量含む。
3 灰褐色土：灰白色粘土ブロック多量含む。
4 暗褐色土：炭化物・灰白色粘土ブロック少量含む。

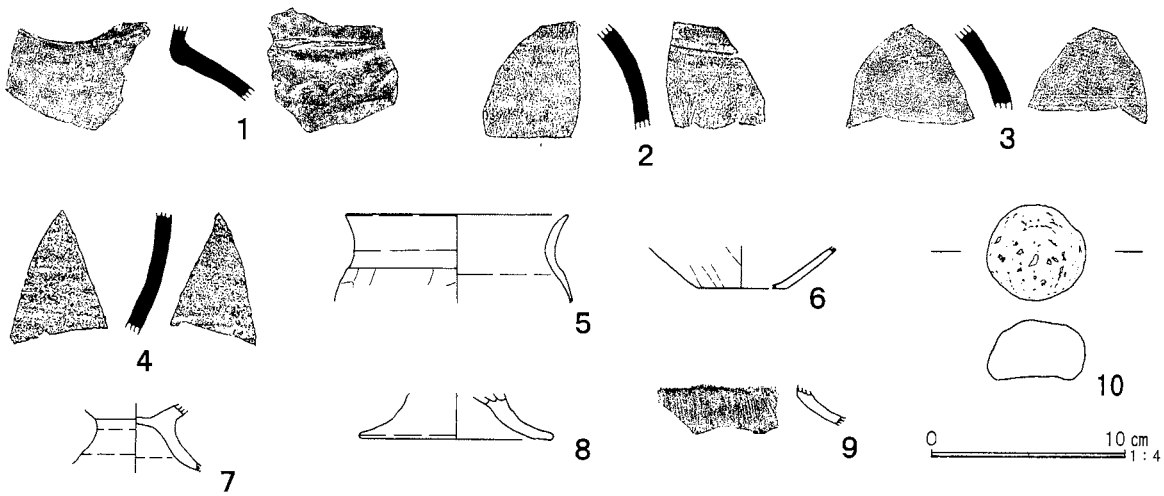
0　2m
1：60

第21図　第11・12号住居跡

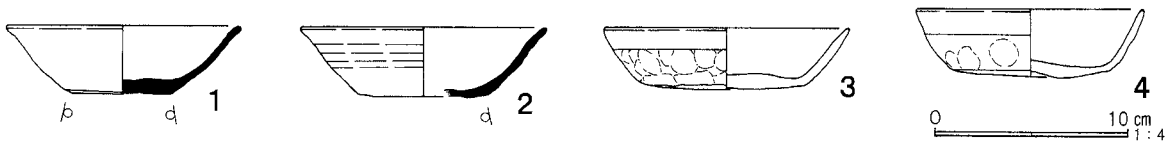
出土遺物（第22図）は、須恵器甕（１～４）、土師器甕（５・６）、台付甕（７・８）、軽石（10）があり、流れ込み遺物として古墳時代前期の土師器Ｓ字甕の肩部片（９）も検出された。８がカマド１、その他は覆土からの検出である。軽石以外すべて破片であり、全形を知りうるものは少ない。

須恵器甕はほとんど末野産である。２・３の外面には自然釉が付着していた。５は小型であり、台付甕の可能性がある。口縁部はくの字状を呈する。６は器壁が薄い。７は接合部、８は台部である。10は片面が抉れているが、完形品である。

出土遺物が破片であるため時期の判断が難しいが、９世紀中頃を中心とした段階と思われる。



第22図　第11号住居跡出土遺物



第23図　第12号住居跡出土遺物

第12表　第11号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　甕	—	—	—	ALN	灰色	A	肩部片	末野産。
2	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰白色	B	胴上部片	外面自然釉付着。
3	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	A	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
4	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
5	土師器　甕	(11.8)	(4.7)	—	ABCDHKM	明赤褐色	B	口～胴60%	
6	土師器　甕	—	(2.25)	(4.9)	ABEGM	橙色	B	底部25%	
7	土師器台付甕	—	(3.6)	—	ABDHKM	明赤褐色	B	接合部90%	
8	土師器台付甕	—	(2.4)	(10.2)	ABCHN	にぶい橙色	B	台部25%	
9	土師器台付甕	—	—	—	ABCIJ	浅黄橙色	B	肩部片	古墳前期。
10	軽　石	最大径5.1cm、最大厚3.0cm。重量36.1g。完形。							

第13表　第12号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.4	3.7	5.7	ABL	灰色	B	ほぼ完形	末野産。
2	須恵器　坏	(13.0)	3.65	(6.8)	ABEL	灰色　灰褐色	B	20%	末野産。
3	土師器　坏	13.0	3.25	8.7	BCEHM	橙色	B	60%	
4	土師器　坏	12.0	3.6	8.0	CM	橙色	B	完形	

第12号住居跡（第21図）

平成13年度調査III区の27・28—44グリッドに位置する。北西隅付近で西側に隣接する11号住居跡を切り、北東隅を２号土坑、南壁沿い中央付近を後世のピットに切られ、北西隅を攪乱により欠く。

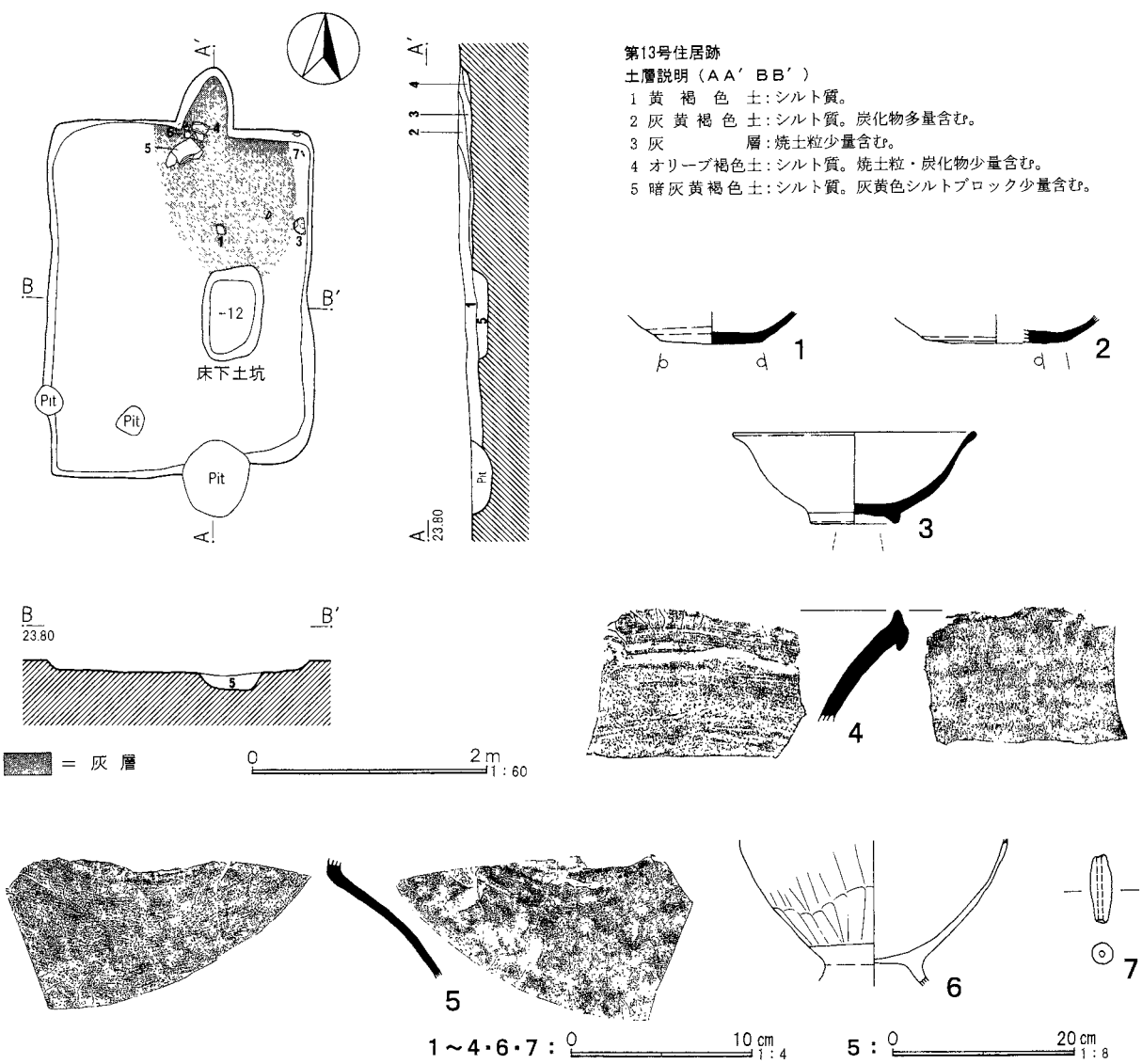
規模は長軸2.98m、短軸2.43mを測る。平面プランは横長の長方形を呈する。主軸方向はN—92°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.23mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、カマドを除くと灰褐色土（１層）のみである。１層下で確認された３層は、カマド覆土の下にあり、粘土を多量含むことから掘り方と思われる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.5mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、先端で緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や炭化物を含む層（２層）、掘り方（４層）が確認されたにとどまる。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第23図）は、須恵器坏（１・２）、土師器坏（３・４）がある。１・２は覆土、３・４はカマドから検出された。

１・２はともに末野産である。口径12.5cm、器高3.6cm、底径６cm前後を測る。口縁部が僅かに外反し、体部は内湾する。底部は回転糸切り痕を残す。３・４は口径12.5cm、器高3.5cm、底径8.5cm前後を測る。口縁部横ナデ、体部に指オサエ、底部にはヘラ削りが施されている。口縁部から体部にかけてほぼ直線的であり、平底に近い。

本住居跡の時期は、９世紀中頃から後半にかけての段階と思われる。



第24図　第13号住居跡・出土遺物

第14表　第13号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(1.8)	5.7	ABDFN	青灰色	A	底部100%	南比企産。
2	須恵器　坏	—	(1.7)	(7.8)	ABCFHN	灰黄色	B	底部40%	南比企産。
3	須恵器高台椀	13.6	5.2	5.0	ABDGK	にぶい黄橙色	C	60%	
4	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	口縁部片	末野産。
5	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	肩部片	末野産。
6	土師器台付甕	—	(8.3)	—	ABCHIK	にぶい黄橙色	C	胴～接80%	
7	土　錘	最大長3.8cm、最大径1.2cm、孔径0.3cm。重量3.8g。完形。							

第13号住居跡（第24図）

平成13年度調査III区の24―43・44グリッドに位置する。南壁中央付近及び南西隅付近を後世のピットに切られている。

規模は長軸3.03m、短軸2.28mを測る。平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はN―2°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.12mを測る。床面はやや南に傾斜するが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと黄褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

カマドは北壁ほぼ中央に位置する。壁外への張り出しは0.49mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、先端でやや鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、炭化物を含む層（2層）、灰層（3層）、焼土粒や炭化物を含む層（4層）などが確認された。このうち、3層はカマド前に広範囲にわたって確認された。

貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかったが、床面中央からやや南寄りの所で床下土坑が検出された。長軸0.77m、短軸0.52mの隅丸長方形を呈し、床面からの深さは0.12mを測る。

出土遺物は、須恵器坏（1・2）、高台付椀（3）、甕（4・5）、土師器台付甕（6）、土錘（7）がある。1・3・7は北東部床面直上、4・5はカマド及びその手前、2・6は覆土から検出された。

1・2は南比企産である。底部のみ検出された。1は回転糸切り痕を残す。2は回転糸切り後外周をヘラで削っている。8世紀後半段階のものであり、流れ込みである。3は口縁部が外反し、体部は内湾、高台部はほぼ直立する。底径が5cmと小さく、調整はヘラナデである。4は口縁部、5は肩部の破片である。6は胴下部から接合部にかけての部位である。7は中段に最大径を持つタイプである。完形。

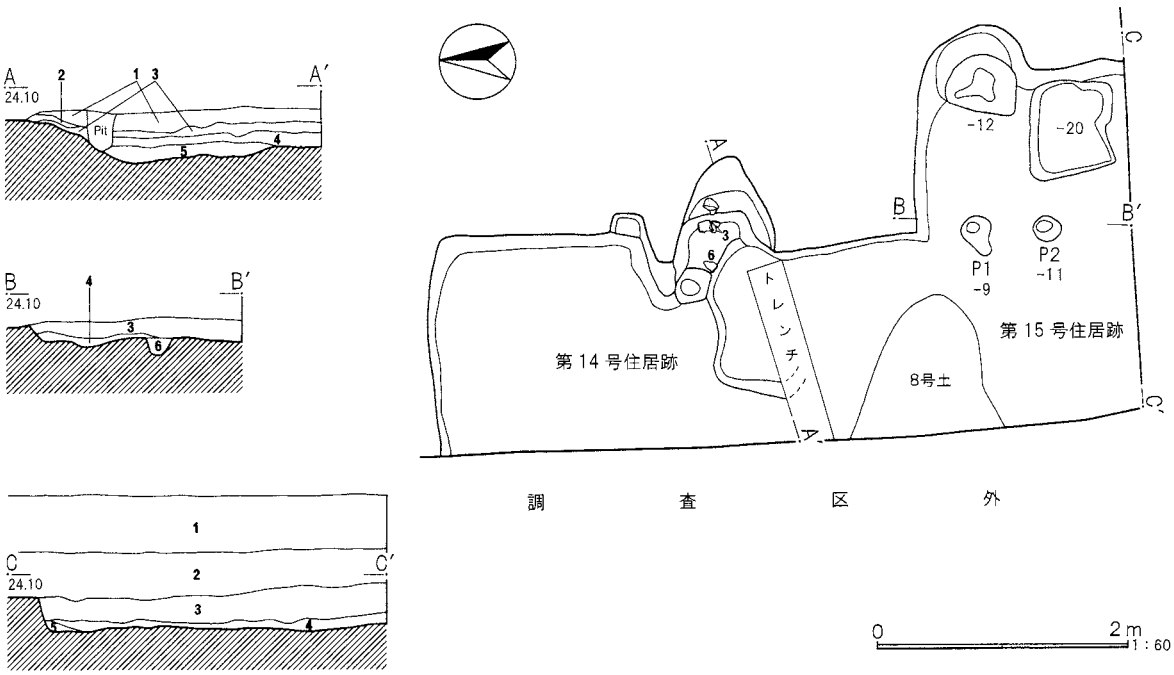
本住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第14号住居跡（第25図）

平成13年度調査III区の31・32―44グリッドに位置する。西側大半が調査区外にあり、南側では15号住居跡や8号土坑と重複関係にある。8号土坑が両住居跡を切っていることは確実であるが、14・15号住居跡の新旧関係は不明である。

規模及び平面プランは不明であるが、南北は4m程になると思われる。主軸方向はN―89°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.3mを測る。床面はやや凹凸がみられたものの、ほぼ平坦であった。覆土はカマドも含めて五層（1～5層）からなる。カマドの影響から焼土を含む層が多い。このうち、5層は掘り方と思われる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央付近に位置すると思われる。壁外への張り出しは0.78mと短い。袖部は北側のみ確認された。焚口部では北袖に接してピット状の掘り込みがみられた。灰溜めのピットであろうか。焚口部から燃焼部はやや窪み、燃焼部と煙道部の境には高低差0.13mの緩い段が設けられている。煙道部は



第14号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 褐 色 土：酸化鉄・焼土微量含む。
2 褐　色　土：焼土多量含む。
3 灰 褐 色 土：焼土少量、炭化物多量含む。
4 灰黄褐色土：酸化鉄多量含む。
5 褐 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、淡黄色粘土ブロック多量含む。

第15号住居跡
土層説明（ＢＢ′ ＣＣ′）
1 盛　　土
2 黒褐色土：酸化鉄少量含む。
3 褐灰色土：酸化鉄・焼土・炭化物少量含む。
4 灰褐色土：粘土質。酸化鉄・炭化物少量、灰白色粘土ブロック多量含む。
5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。
6 褐灰色土：粘土質。酸化鉄・焼土・炭化物・灰白色粒少量含む。

第25図　第14・15号住居跡

その段から先端に向かって緩やかに立ち上がる。覆土に天井部崩落土や灰層などはみられなかった。

貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第26図）は、須恵器坏（1・2）、高台付椀（3）、甕（4～8）、土師器甕（9・10）がある。3・6がカマド、それ以外は覆土からの検出である。

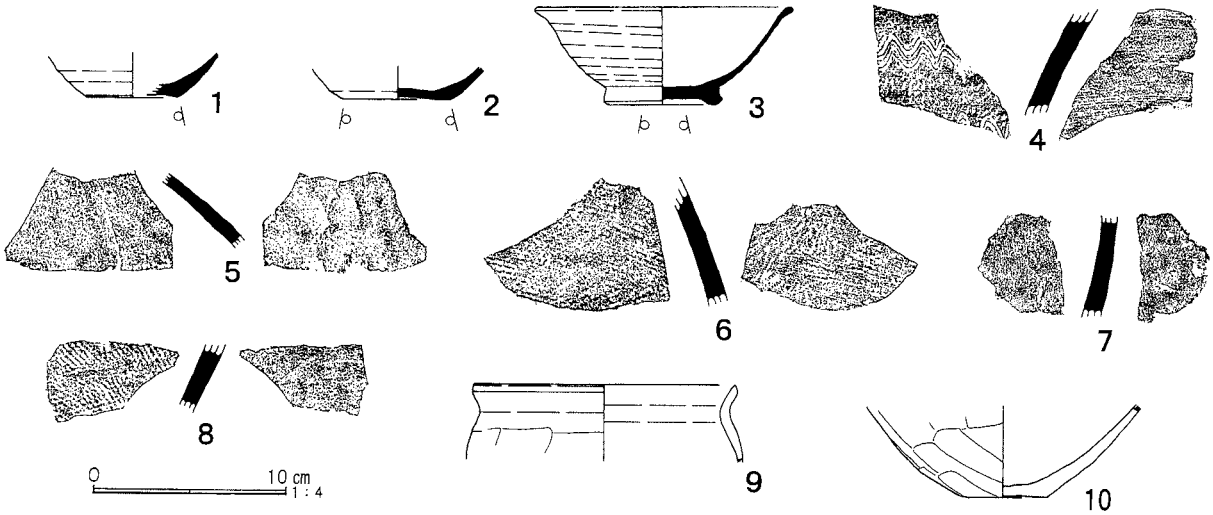
須恵器は末野産がほとんどを占め、4のみ南比企産である。供膳具の底部は、すべて回転糸切り痕を残す。1・2は底径5.5cm前後を測り、小さい。3は薄手で、肥厚した口縁部が外反し、体部は内湾、ハの字に開く高台が付く。甕はすべて破片である。9は口縁部のコの字が崩れ、くの字状を呈する。9・10ともに厚手である。

本住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

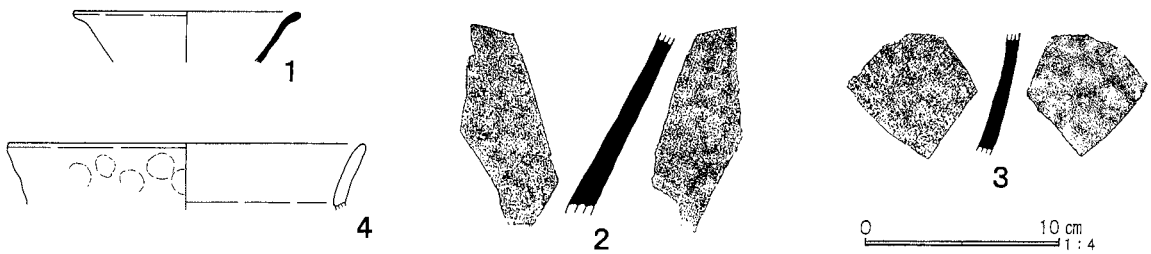
第15号住居跡（第25図）

平成13年度調査Ⅲ区の31・32―44・45グリッドに位置する。カマドを含む大半が調査区外にあり、検出できたのは北東部のみである。北側で14号住居跡、8号土坑と重複し、8号土坑には切られているが、14号住居跡との新旧関係は不明である。

規模及び平面プランは不明である。主軸方向はN―88°―Eを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.27mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は、三層（3～5層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。



第26図　第14号住居跡出土遺物



第27図　第15号住居跡出土遺物

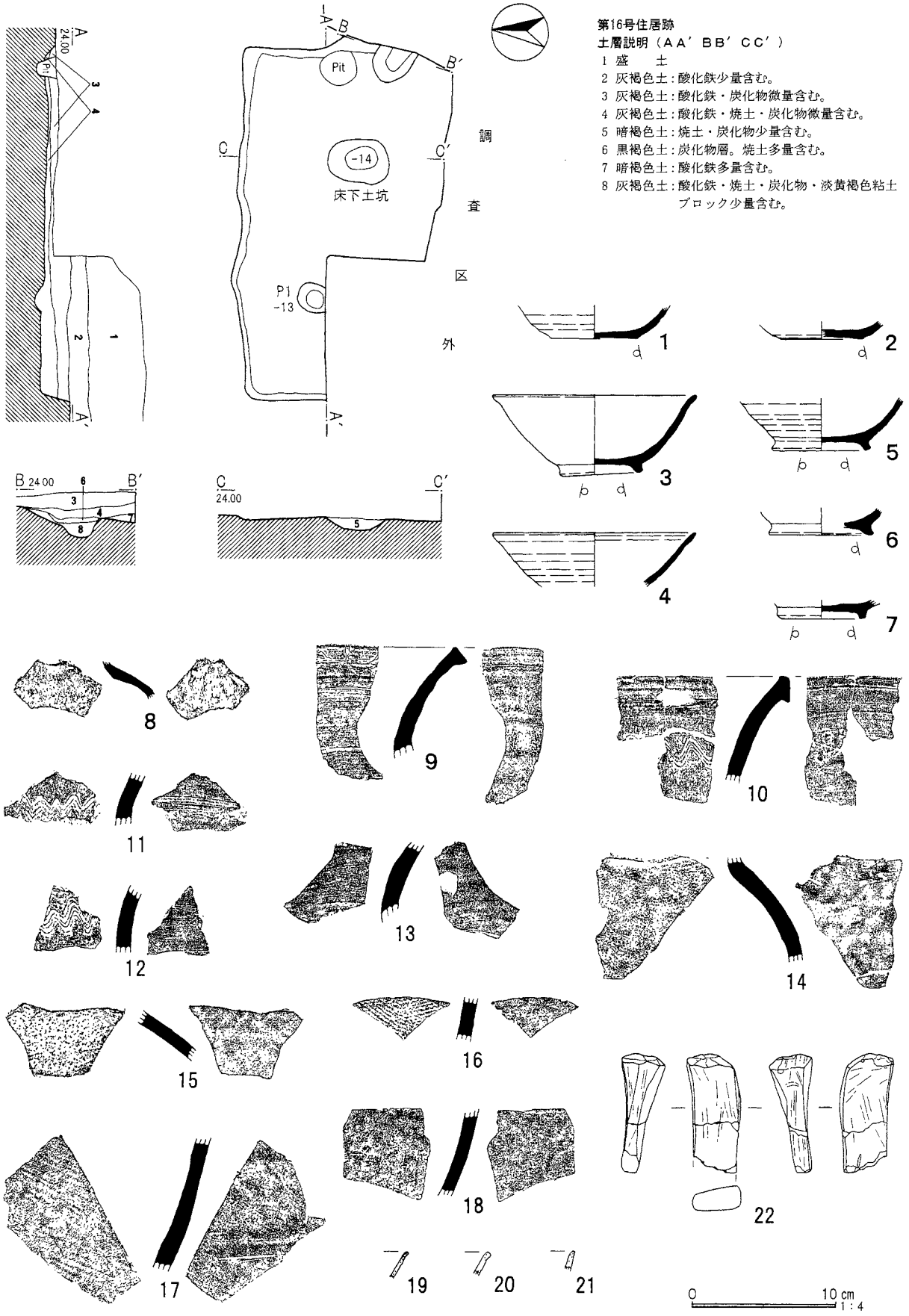
第15表　第14号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(2.4)	(5.1)	ABDHJL	にぶい橙色	B	底部30%	末野産。
2	須恵器　坏	—	(1.8)	5.8	ABDL	灰白色	B	底部80%	末野産。
3	須恵器高台椀	(13.8)	5.2	6.2	BDLMN	浅黄橙色	B	50%	末野産。
4	須恵器　甕	—	—	—	ADF	灰色	B	頸部片	南比企産。
5	須恵器　甕	—	—	—	ABGL	灰色	B	肩部片	末野産。
6	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
7	須恵器　甕	—	—	—	AEHLN	黒褐色	B	胴下部片	末野産。
8	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	A	胴下部片	末野産。
9	土師器　甕	(14.0)	(4.1)	—	ABCGHK	淡橙色	B	口～胴20%	
10	土師器　甕	—	(4.9)	4.6	ABCGMN	浅黄橙色	B	胴～底50%	

第16表　第15号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	(12.0)	(2.7)	—	ABDL	黄灰色	B	口～体15%	末野産。
2	須恵器　甕	—	—	—	ABF	黄灰色	A	胴下部片	南比企産。
3	須恵器　甕	—	—	—	AEHL	灰色	A	胴下部片	末野産。
4	土師器　甕	(18.9)	(3.5)	—	ACGHMN	褐灰色	B	口縁部10%	

北東隅には半円状の張り出し部が設けられている。壁外へは0.36m張り出し、土坑状の掘り込みとなっている。床面からの深さは0.12mと浅い。張り出し部の南脇からは、土坑状の掘り込みが検出された。長軸0.76m、短軸0.66m、床面からの深さ0.20mを測り、いびつな方形状を呈する。床下土坑であろうか。ピットは２つ検出された。張り出し部前に並んでいるが、主柱穴とは考えづらい。カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝は、確認されなかった。



第28図　第16号住居跡・出土遺物

第17表　第16号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(2.3)	(6.2)	ABDL	黄灰色	B	底部25%	末野産。
2	須恵器　坏	—	(1.3)	(6.0)	ABEGKLM	橙色	C	底部25%	末野産。酸化焔焼成。
3	須恵器高台椀	(14.4)	5.8	5.9	ABEHLMN	橙色	C	60%	末野産。
4	須恵器高台椀	(14.4)	(3.85)	—	ABIJL	灰黄色	B	口～体10%	末野産。
5	須恵器高台椀	—	(3.75)	7.0	ABDHL	灰色	B	体～高100	末野産。
6	須恵器高台椀	—	(1.4)	(7.4)	ADHJN	にぶい橙色	B	高台部25%	
7	須恵器高台椀	—	(1.3)	6.2	AEHL	灰色	B	高台部95%	末野産。
8	須恵器　壺	—	—	—	ABD	明青灰色	B	肩部片	外面自然釉付着。
9	須恵器　甕	—	—	—	AEHL	灰色	A	口縁部片	末野産。
10	須恵器　甕	—	—	—	ADFN	青灰色	B	口縁部片	南比企産。№11・12と同一個体。
11	須恵器　甕	—	—	—	ABCF	青灰色	B	頸部片	南比企産。№10・12と同一個体。
12	須恵器　甕	—	—	—	AF	灰色	A	頸部片	南比企産。№10・11と同一個体。
13	須恵器　甕	—	—	—	ACHL	赤灰色	A	頸部片	末野産。外面自然釉付着。
14	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	肩部片	末野産。
15	須恵器　甕	—	—	—	ABDFN	灰色	B	肩部片	南比企産。外面自然釉付着。
16	須恵器　甕	—	—	—	ABEL	灰色	A	胴下部片	末野産。
17	須恵器　甕	—	—	—	ABCHL	黄灰色	B	胴下部片	末野産。
18	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
19	灰釉陶器　椀	—	—	—	AB	灰黄色	A	口縁部片	灰釉漬け掛け。
20	灰釉陶器　椀	—	—	—	BC	灰白色	A	口縁部片	内外面無釉。
21	緑釉陶器　椀	—	—	—	B	灰白色	B	口縁部片	猿投産？緑釉内外面極一部のみ残存。
22	砥　石	最大長(8.4)cm、最大幅3.5cm、最大厚2.95cm。重量(80.9)g。砂岩。下端欠。四面及び上面半分使用。							

出土遺物（第27図）は、須恵器坏（1）、甕（2・3）、土師器甕（4）がある。いずれも破片であり、覆土から検出された。

1は肥厚した口縁部が外反する。末野産。2・3は胴下部片である。2が南比企産、3が末野産である。4は厚手で、口縁部がくの字状を呈する。外面には指頭圧痕がみられた。

本住居跡の時期は、10世紀初頭を中心とした段階と思われる。

第16号住居跡（第28図）

平成13年度調査III区の30・31—45グリッドに位置する。南側大半が調査区外にある。また、カマド北脇を後世のピットに切られている。

規模は不明であるが、検出できた東西は3.74mを測る。平面プランは、東壁でカマドの焚口部と思われる落ち込みが検出されたことから、縦長の長方形を呈すると思われる。主軸方向はN—87°—Eを指すと思われる。確認面からの深さは最大0.29mを測る。床面は、ほぼ平坦であった。覆土は二層（3・4層）からなる。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と考えられる。

カマドは東壁中央付近に位置すると思われる。検出できたのは焚口部のみである。袖部は確認されなかった。調査区境での土層断面で炭化物層（6層）、焼土や炭化物などを含む層（8層）が確認されたが、その他については不明である。

ピットは1つ検出された。床面からの深さは0.13mと浅いが、その位置から主柱穴であろうか。床面中央付近からは、楕円形を呈する床下土坑が検出された。長軸0.64m、短軸0.47m、床面からの深さは0.14mを測る。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（1・2）、高台付椀（3～7）、壺（8）、甕（9～18）、灰釉陶器椀（19～20）、緑釉陶器椀（21）、砥石（22）がある。すべて覆土からの検出である。

須恵器は供膳具がほとんど末野産であり、甕には南比企産がみられた。供膳具の底部は、すべて回転

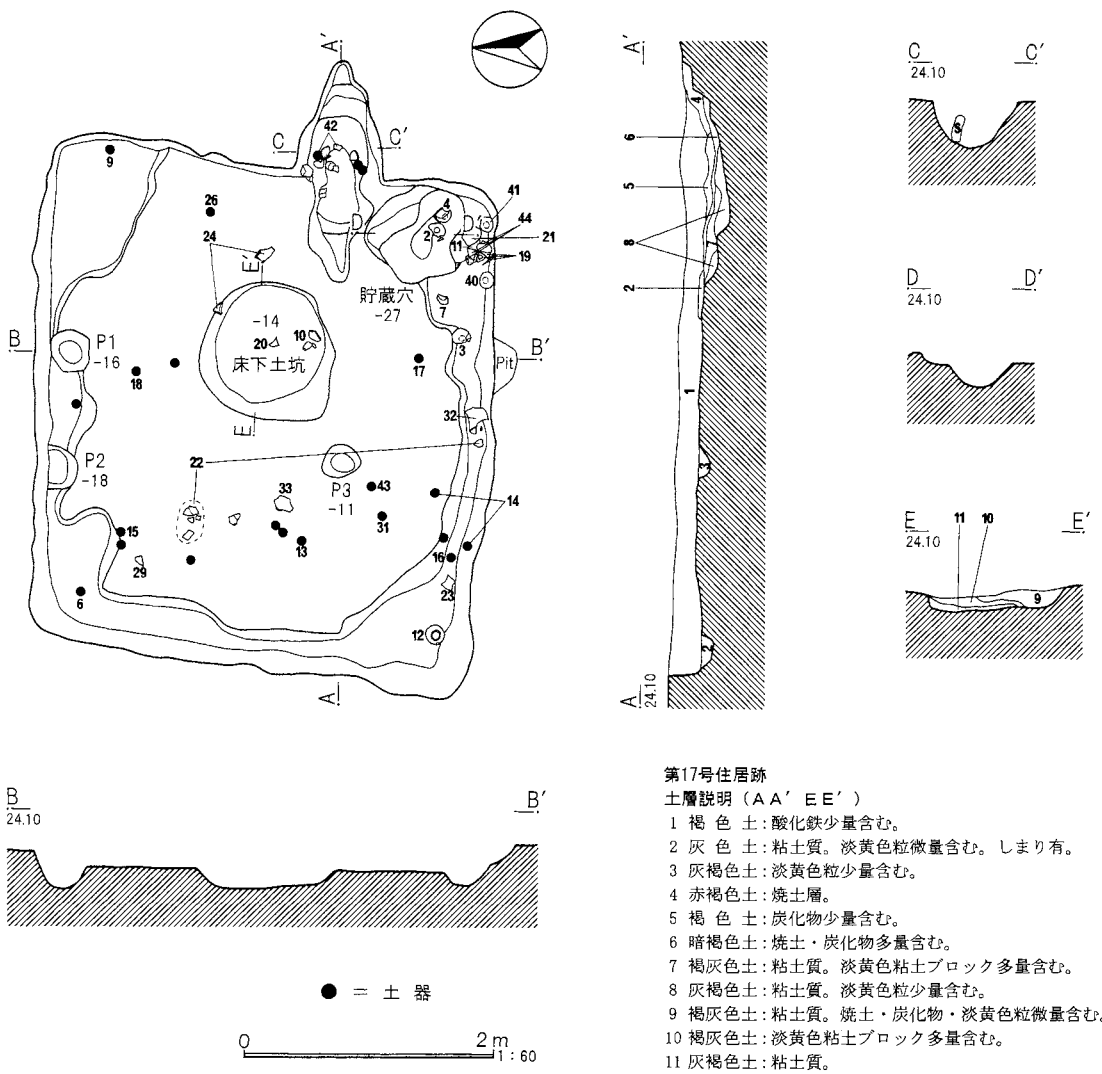
糸切り痕を残す。1・2は底径6cm程を測る。高台付椀は口縁部形態にバラエティがみられた。3は口縁部が外反するが、4は口縁部から体部にかけて直線的である。壺・甕はすべて破片である。10〜12・15・18が南比企産であり、その他は末野産である。19・20は口縁部の小片である。19は灰釉漬け掛け、20は内外面とも無釉である。胎土は19が暗灰色、20は19に比べてやや明るい灰色を呈し、ともに粗い。21も口縁部の小片である。胎土は白っぽく、緻密である。釉薬はやや明るめの緑色を呈するが、ほとんど剝落している。猿投産か。22は下端を欠く。側面四面と上面半分に使用痕が認められた。

本住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第17号住居跡（第29図）

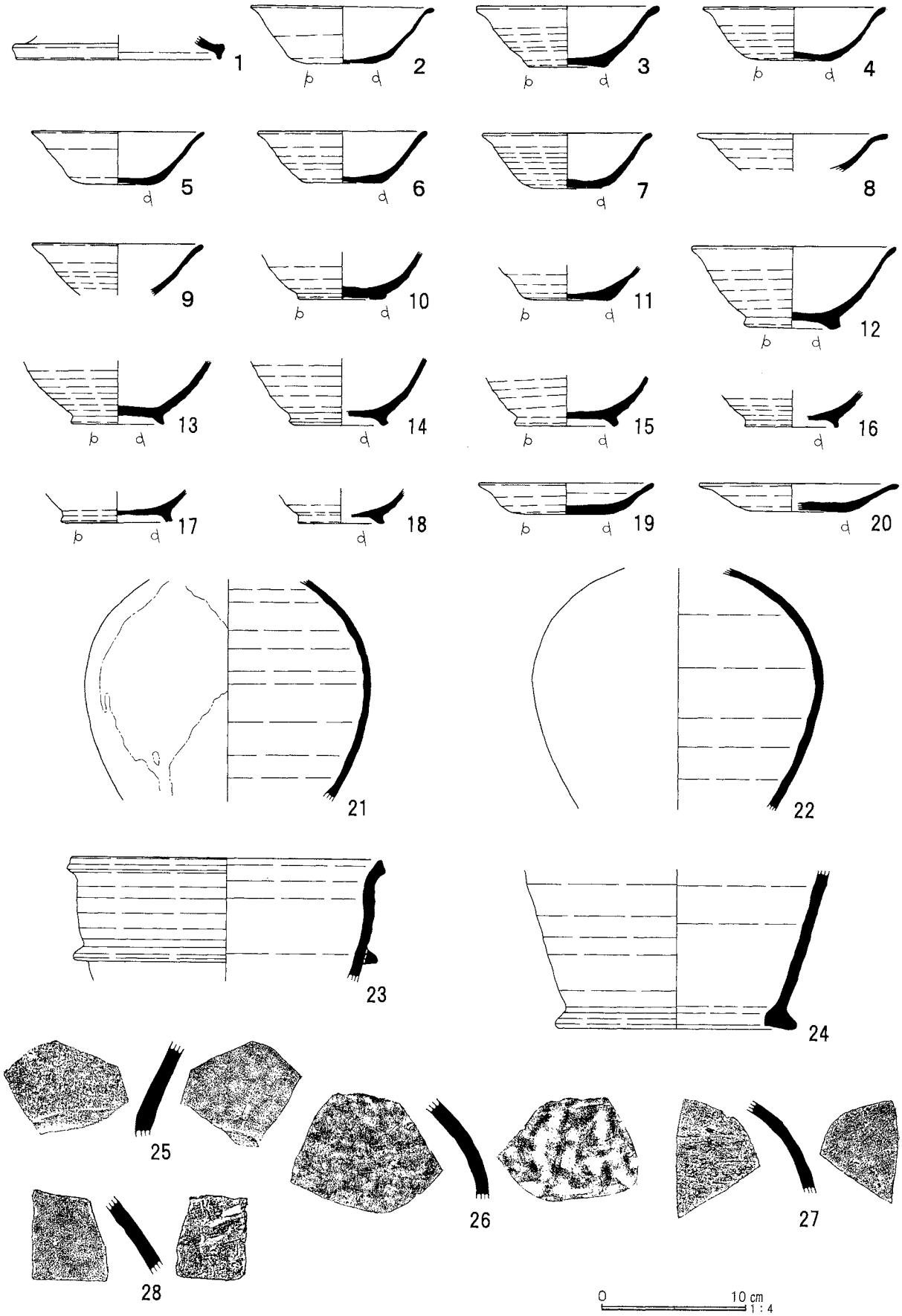
平成13年度調査III区の28・29—44・45グリッドに位置する。南壁中央付近を後世のピットに切られている。その他に遺構との重複関係はみられない。

規模は長軸4.1m、短軸3.68mを測る。平面プランはほぼ正方形に近い。主軸方向はN—92°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.23mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（1・2層）からなるが、1層が厚く堆積していた。自然堆積と思われる。

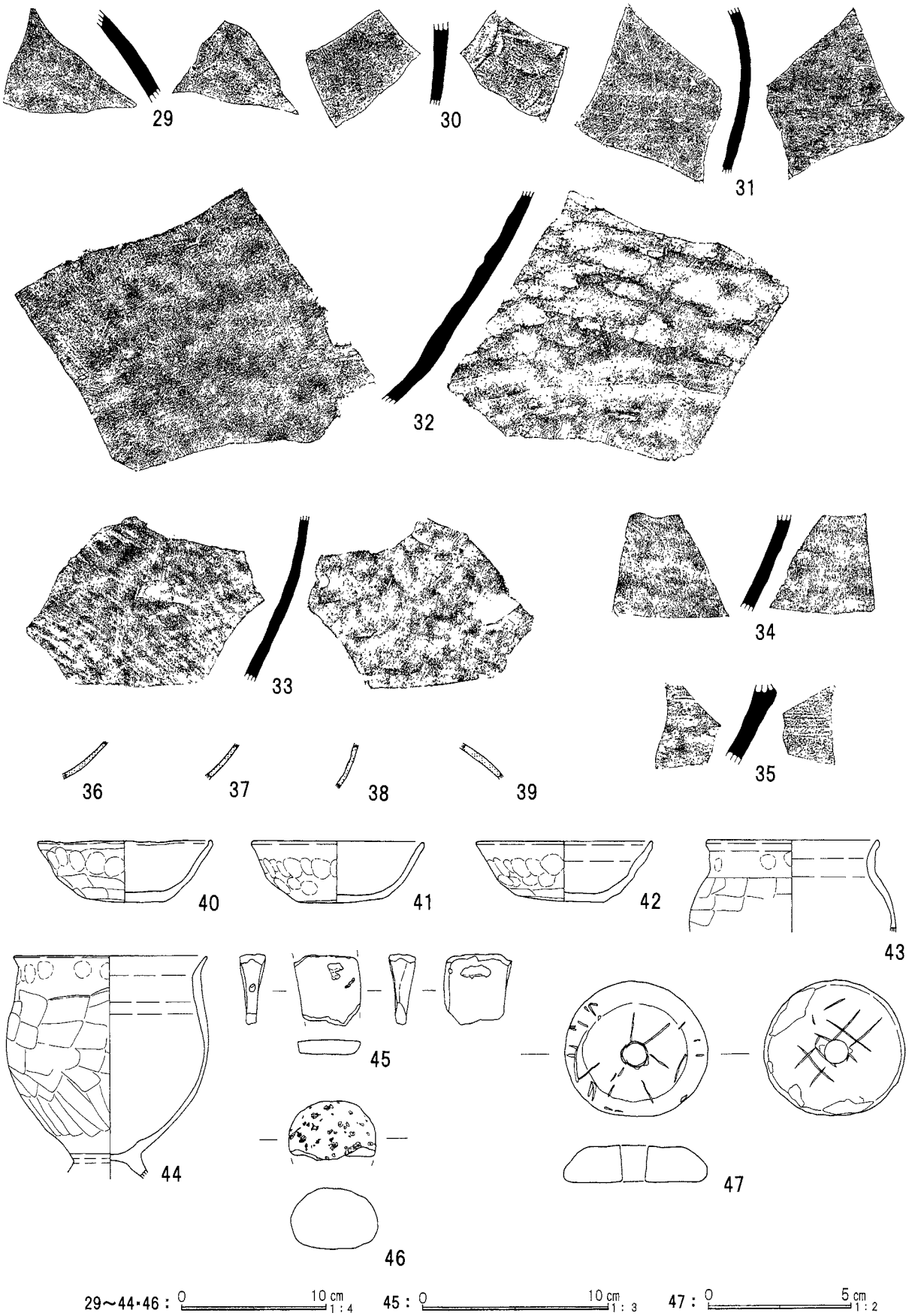


第17号住居跡
土層説明（AA′ EE′）
1 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。淡黄色粒微量含む。しまり有。
3 灰褐色土：淡黄色粒少量含む。
4 赤褐色土：焼土層。
5 褐 色 土：炭化物少量含む。
6 暗褐色土：焼土・炭化物多量含む。
7 褐灰色土：粘土質。淡黄色粘土ブロック多量含む。
8 灰褐色土：粘土質。淡黄色粒少量含む。
9 褐灰色土：粘土質。焼土・炭化物・淡黄色粒微量含む。
10 褐灰色土：淡黄色粘土ブロック多量含む。
11 灰褐色土：粘土質。

第29図　第17号住居跡



第30図　第17号住居跡出土遺物(1)



第31図　第17号住居跡出土遺物(2)

第18表　第17号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	(15.1)	(1.65)	—	AB	灰色	A	口縁部20%	
2	須恵器　坏	13.1	4.2	5.0	ABDGHLN	灰白色	B	85%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.0)	4.4	5.6	ABDL	灰色	B	70%	末野産。
4	須恵器　坏	13.0	3.9	5.3	ABDGHKLN	灰白色	C	80%	末野産。
5	須恵器　坏	(12.4)	3.75	(4.5)	ABGHL	灰白色	C	35%	末野産。酸化焔焼成。
6	須恵器　坏	(12.2)	3.65	(5.8)	ABL	灰色	B	30%	末野産。
7	須恵器　坏	(12.0)	3.9	(5.0)	ABDL	灰白色	B	30%	末野産。
8	須恵器　坏	(13.5)	(2.7)	—	AL	灰色	B	口～体20%	末野産。
9	須恵器　坏	(12.2)	(3.7)	—	ABDGJLN	灰黄 にぶい橙	C	口～体20%	末野産。酸化焔焼成。
10	須恵器　坏	—	(3.3)	6.3	ABL	黄灰色	B	体～底60%	末野産。
11	須恵器　坏	—	(2.5)	6.2	ABHL	にぶい橙色	C	底部100%	末野産。酸化焔焼成。
12	須恵器高台椀	14.5	6.0	6.8	ABD	灰白色	B	ほぼ完形	
13	須恵器高台椀	—	(4.5)	6.6	ACEHKL	灰黄色	C	体～高70%	末野産。
14	須恵器高台椀	—	(4.8)	(7.0)	ABEGHL	褐灰色	C	体～高35%	末野産。
15	須恵器高台椀	—	(3.6)	7.5	AEHL	にぶい黄褐色	C	体～高100	末野産。
16	須恵器高台椀	—	(2.6)	(6.6)	ABL	灰色	B	高台部25%	末野産。
17	須恵器高台椀	—	(2.2)	8.0	ACHLN	にぶい黄橙色	B	高台部45%	末野産。
18	須恵器高台椀	—	(2.5)	(6.2)	ABGL	灰白色	B	高台部25%	末野産。
19	須恵器　皿	12.4	2.2	6.0	AGHL	褐灰色	B	90%	末野産。
20	須恵器　皿	(15.2)	2.0	(7.8)	ABGHL	にぶい黄橙色	C	20%	末野産。
21	須恵器　壺	—	(15.8)	—	ADLN	灰色	A	胴部30%	末野産。外面自然釉付着。
22	須恵器　壺	—	(17.3)	—	ABLN	灰色	A	胴部30%	末野産。
23	須恵器　甑	(22.2)	(8.8)	—	ABGL	にぶい黄橙色	C	口縁部15%	末野産。
24	須恵器　甑	—	(11.4)	(17.2)	AL	灰色	B	胴～底25%	末野産。
25	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰オリーブ色	A	頸部片	外面自然釉付着。
26	須恵器　甕	—	—	—	ABL	黄灰色	A	肩部片	末野産。
27	須恵器　甕	—	—	—	AC	灰色	A	肩部片	外面自然釉付着。
28	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰オリーブ色	A	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
29	須恵器　甕	—	—	—	ABEH	黄灰色	B	肩部片	
30	須恵器　甕	—	—	—	AF	オリーブ黒色	B	胴部片	南比企産。外面自然釉付着。
31	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	A	胴部片	末野産。
32	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
33	須恵器　甕	—	—	—	ABLN	灰白色	A	胴下部片	末野産。
34	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	B	胴下部片	末野産。
35	須恵器　甕	—	—	—	AB	灰色	B	胴下部片	
36	灰釉陶器　椀	—	—	—	ABD	灰白色	B	体部片	灰釉外面上部刷毛塗。内面無釉。
37	灰釉陶器　椀	—	—	—	AB	灰白色	B	体部片	灰釉内面刷毛塗。外面無釉。
38	灰釉陶器　椀	—	—	—	B	灰白色	B	体部片	灰釉内面刷毛塗。外面無釉。
39	灰釉陶器　瓶	—	—	—	ABD	灰白色	B	肩部片	外面灰オリーブ色釉。
40	土師器　坏	12.4	4.4	5.5	ABCGHN	浅黄橙色	B	ほぼ完形	内面タール付着。
41	土師器　坏	12.3	4.4	5.8	BCDHM	にぶい黄橙色	B	80%	
42	土師器　坏	12.4	4.3	6.1	BCGHJ	にぶい黄橙色	B	90%	内面タール付着。
43	土師器　甕	(12.2)	(6.5)	—	ABDJKN	橙色	B	口～胴20%	
44	土師器台付甕	13.6	(15.7)	—	ABCHJ	橙色	B	口～接80%	
45	砥　石	最大長(5.0)cm、最大幅(4.6)cm、最大厚(1.9)cm。重量(49.0)g。砂岩。上下端欠。四面使用。							
46	軽　石	最大径4.6cm、最大厚3.2cm。重量(35.9)g。半分欠。							
47	石製紡錘車	最大径5.0cm、最大厚1.3cm。重量49.3g。ほぼ完形。上下側面に線刻有。							

カマドは東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは0.9mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は土坑状を呈し、支脚として使用された川原石が立った状態で検出された。煙道部は土坑状の立ち上がりから先端に向かってほぼ平坦に進み、鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土層（4層）、炭化物を含む層（5層）、焼土と炭化物を含む層（6層）、掘り方（7・8層）などが確認された。

貯蔵穴は南東隅から検出された。床面からの深さは0.27mを測り、不整円形を呈する。北側は床面から0.07m下でテラス状となっていた。壁溝は東壁以外に全周する。幅が一定しておらず、特に隅付近が

幅広になっていた。床面からの深さは0.09mを測る。ピットは3つ検出された。P1・2は北壁沿い中央付近、P3は床面中央付近から検出された。いずれも主柱穴とは考えづらい。床面ほぼ中央では、ややいびつな円形を呈する床下土坑が検出された。径1.1m前後、床面からの深さは0.14mを測る。

出土遺物（第30・31図）は、須恵器蓋（1）、坏（2～11）、高台付椀（12～18）、皿（19・20）、壺（21・22）、甑（23・24）、甕（25～35）、灰釉陶器椀（36～38）、瓶（39）、土師器坏（40～42）、甕（43）、台付甕（44）、砥石（45）、軽石（46）、石製紡錘車（47）がある。遺物はほぼ全面から検出されたが、特に貯蔵穴周辺からの検出が多い。

須恵器は末野産がほとんどを占め、30のみ南比企産である。須恵器供膳具の底部は、すべて回転糸切り痕を残す。1は径からみて坏蓋と思われる。坏は口径13cm、器高4cm、底径5.5cm前後のものが主体となる。口縁部が外反し、体部は内湾する。5・9・11は酸化焔焼成による。高台付椀は全形を知りうるものは12のみであるが、口縁部が外反し、体部は内湾、ハの字に開く高台が付く。19・20は体部が内湾するが、口縁部は19がほぼ直線的なのに対し、20は大きく外反する。また、口縁部の開きが19は小さいのに対し、20は大きく開く。21・22は壺の胴部である。21には広範囲に自然釉が付着している。23は甑の口縁部、24は底部である。胎土が異なるため、同一個体ではない。甕はすべて破片である。36～38は体部の小片である。36は外面上部を刷毛塗り、内面は無釉、37・38は内面刷毛塗り、外面は無釉である。胎土は36が灰色、37は白色、38はやや暗い灰色を呈し、いずれも粗い。39は肩部片である。外面に灰オリーブ色の釉がかかる。胎土は、やや白っぽく、粗い。土師器坏は口径12.3～12.4cm、器高4.3～4.4cm、底径5.5cm前後を測る。口縁部横ナデ、体部上位に指オサエ、体部下位及び底部にはヘラ削りが施されているが、口縁部形態にバラエティがみられた。40は端部が内傾、41は直線的、42は口縁部から体部にかけてS字状を呈する。40・42は内面にタールが付着しており、灯明皿として使用されたと思われる。43は小型であり、台付甕の可能性がある。口縁部はコの字状を呈するが、やや崩れており、退化的な様相が伺える。外面には指頭圧痕がみられた。44は台部を欠く。口縁部のコの字が完全に崩れており、くの字状を呈する。43同様、外面には指頭圧痕がみられた。45は上下端を欠く。四面が使用されている。46は半分を欠く。47は上下側面に線刻がみられた。上面には放射状、側面には縦・横位、下面には格子状に文様が刻まれていた。

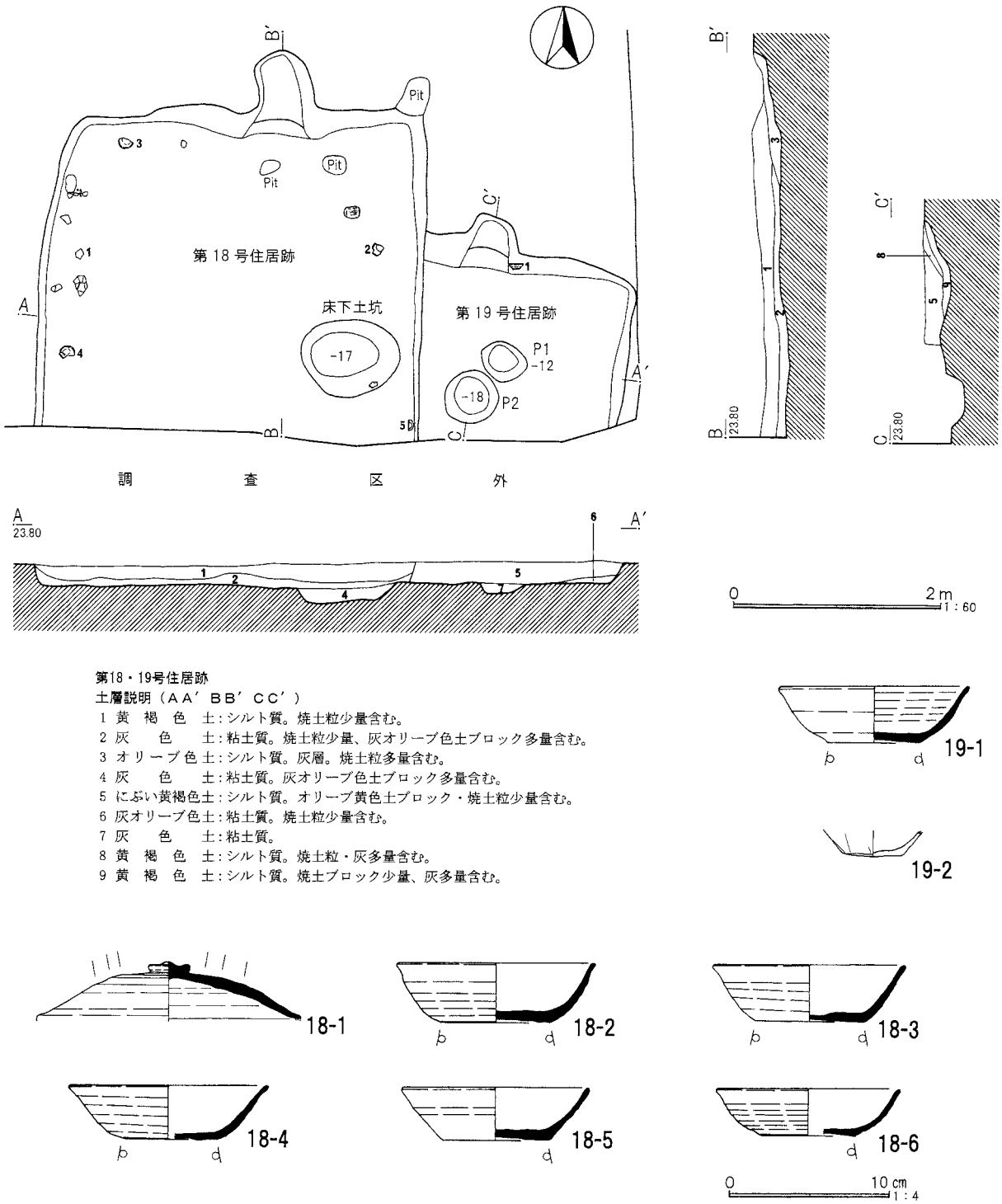
本住居跡の時期は、10世紀初頭を中心とした段階と思われる。

第18号住居跡（第32図）

平成13年度調査III区の23・24―44・45グリッドに位置する。南側が調査区外にある。東側で19号住居跡を切っており、北東隅及びカマド前を後世のピットに切られている。

規模は不明であるが、検出できた南北は3.22m、東西は3.68mを測る。南側に隣接する平成15年度調査区では未確認であり、調査区外で収まることから、平面プランは正方形になろうか。主軸方向はN―1°―Eを指す。確認面からの深さは最大0.23mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと二層（1・2層）からなる。自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.57mを測る。袖部は確認されなかったが、北壁との境に床面と0.05mの段差を持って壁外に延びていることから、本来は袖を持ち、焚口部から燃焼部は壁内にあったと思われる。従って、焚口部から燃焼部は床面同様、ほぼ平坦であり、



第32図　第18・19号住居跡・出土遺物

壁外にある煙道部は先端に向かって緩やかに上がり、鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、灰層（3層）が確認されたにとどまる。

東壁沿いの調査区との境付近では、床下土坑と思われる掘り込みが検出された。長軸0.95m、短軸0.74m、床面からの深さ0.17mを測り、楕円形状を呈する。貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

図示可能な出土遺物は、須恵器供膳具のみである。須恵器蓋（1）、坏（2～6）がある。6が覆土、

第19表　第18号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　蓋	—	(3.8)	—	ABLN	褐灰色	B	天～体40%	末野産。
2	須恵器　坏	(12.7)	3.8	7.1	ABDLN	灰オリーブ色	B	60%	末野産。
3	須恵器　坏	12.2	3.65	7.0	ABL	橙色	B	70%	末野産。酸化焔焼成。
4	須恵器　坏	12.8	3.5	6.2	ABGL	灰色	B	90%	末野産。
5	須恵器　坏	(12.0)	3.4	(6.8)	ABL	灰色	B	45%	末野産。
6	須恵器　坏	(11.6)	3.0	(5.8)	ABF	灰色	B	30%	南比企産。

第20表　第19号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	12.2	3.7	5.9	ABFN	灰色	A	70%	南比企産。
2	土師器　甕	—	(1.7)	(3.6)	ABDKIJM	にぶい橙色	C	底部30%	

それ以外は、東西壁沿いの床面直上から検出された。

須恵器はほとんど末野産であり、6のみ南比企産である。1は口縁部を欠くが、その径から椀蓋と思われる。坏は口径12cm、器高3.5cm、底径6cm前後のものが主体となる。口縁部の外反が弱く、体部が内湾するもの（2・4・6）と口縁部から体部がほぼ直線的なもの（3・5）の二者がある。底部はすべて回転糸切り痕を残す。3のみ酸化焔焼成による。

本住居跡の時期は、9世紀中頃を中心とした段階と思われる。

第19号住居跡（第32図）

平成13年度調査III区の23—44・45グリッドに位置する。カマドを含む北東隅付近のみの検出である。西側は18号住居跡に切られており、南側大半は調査区外にある。

規模は不明であるが、検出できた南北は1.97m、東西は2.05mを測る。18号住居跡同様、南側に隣接する平成15年度調査区では未確認であることから、調査区外で収まると思われ、平面プランは正方形になろうか。主軸方向はN—9°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.21mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は二層（5・6層）からなるが、5層が厚く堆積している。レンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。

カマドは北壁中央付近に位置すると思われる。壁外への張り出しは0.25mと短い。18号住居跡同様、北壁との境に床面と0.12mの段差を持って壁外に延びていることから、本来は袖を持ち、焚口部から燃焼部は壁内にあったと思われる。従って、焚口部から燃焼部は床面と同じくほぼ平坦であり、壁外にある煙道部は、先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土や灰を含む層（8・9層）が確認されたにとどまる。

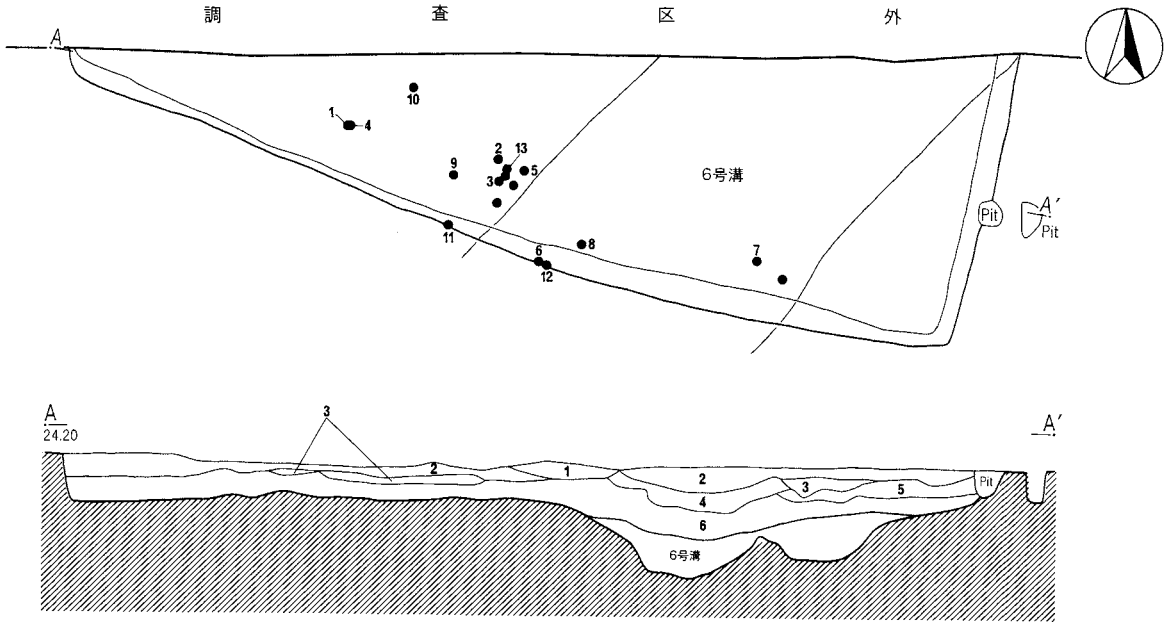
ピットは2つ検出された。ともにカマド前に位置しており、主柱穴とは考えづらい。床下土坑と見た方が良いかもしれない。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

図示可能な出土遺物は、須恵器坏（1）、土師器甕（2）のみである。1はカマド東脇、2は覆土から検出された。1は南比企産である。浅身で、口縁部が僅かに外反し、体部は内湾する。底部は回転糸切り痕を残す。2は底部。器壁が薄い。

本住居跡の時期は、9世紀前半から中頃にかけての段階と思われる。

第20号住居跡（第33図）

平成13年度調査I区の41～43—53グリッドに位置する。南東隅から南壁のみ検出された。カマドを含



第20号住居跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 褐 色 土：酸化鉄・焼土・炭化物多量含む。
2 灰 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
3 暗黄褐色土：黄褐色土ブロック・酸化鉄少量含む。
4 黒 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
5 灰 褐 色 土：砂質。酸化鉄少量含む。
6 灰 褐 色 土：酸化鉄多量含む。

● ＝ 土 器

0 2m 1：60

第33図　第20号住居跡

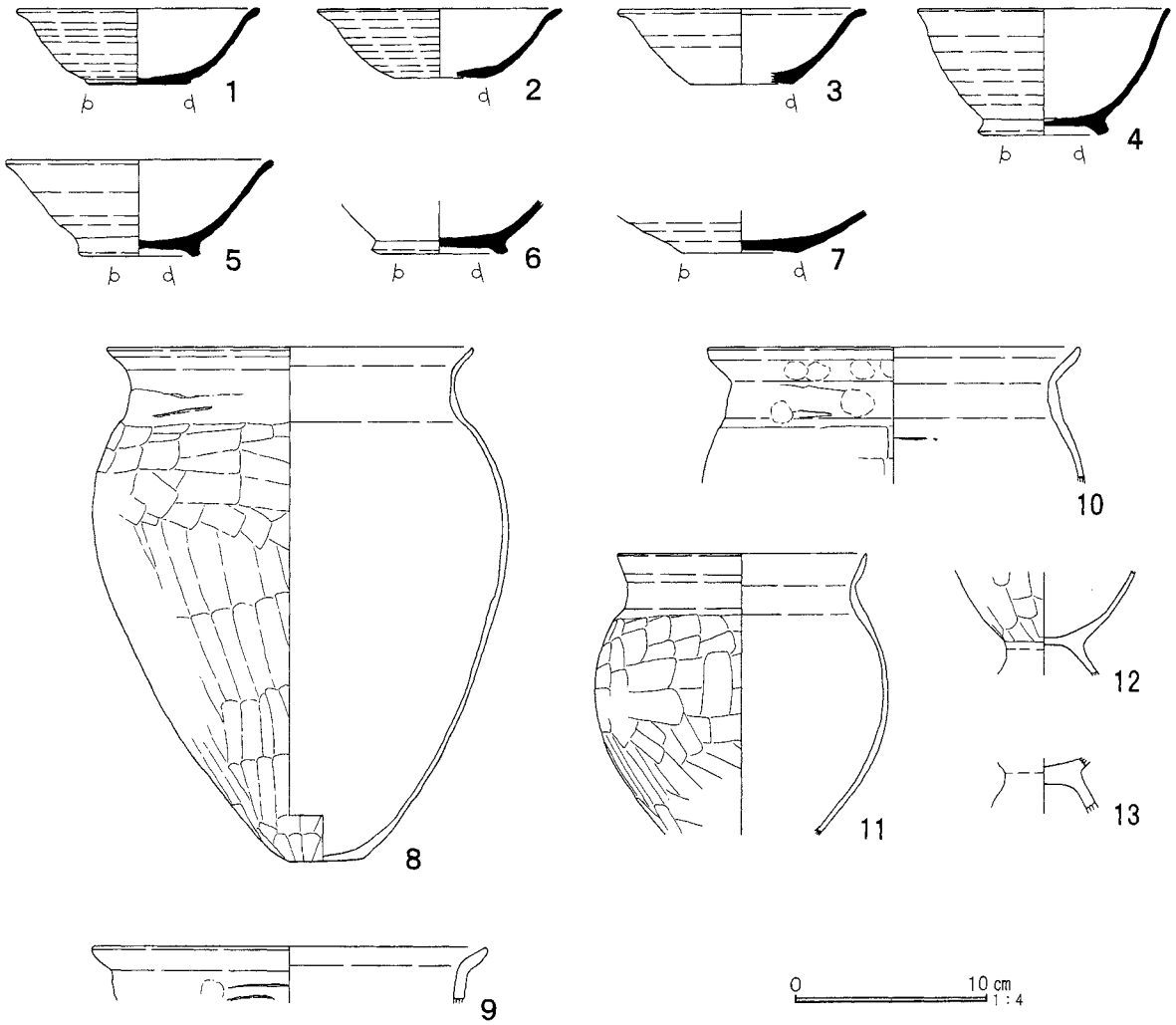
む北側大半は調査区外にある。南東隅に近い東壁を後世のピットに切られており、北東方向から南西方向に走る６号溝を切って構築されている。

規模及び平面プランは不明であるが、検出できた南壁は7.32mを測り、他の住居跡と比べて大きい。主軸方向はN－106°－Eを指す。確認面からの深さは、６号溝跡との重複箇所で床面が落ち込んでおり、0.57mを測るが、その他は0.3m前後である。覆土は六層（１～６層）からなる。ややランダムな層位であるが、自然堆積と思われる。カマドをはじめ、貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物（第34図）は、須恵器坏（１～３）、高台付椀（４～６）、皿（７）、土師器甕（８～11）、台付甕（12・13）がある、南壁沿い中央付近からの検出が多い。

須恵器は供膳具のみ検出された。底部はすべて回転糸切り痕を残す。半分が末野産である。坏は口径13～13.2cm、器高3.65～４cm、底径５cm前後を測り、やや深身を呈する。口縁部が大きく外反し、体部は内湾する。高台付椀は器形にバラエティがみられた。ともに口縁部の外反が弱く、ハの字に開く高台が付くが、４は深身で体部が内湾するのに対し、５は浅身でやや直線的に大きく開く。７は口縁部を欠く。体部はほぼ直線的である。土師器甕のうち、８～10は口縁部がコの字で、端部がやや受口状を呈するが、11はコの字がやや崩れている。11以外の外面には、輪積痕や指頭圧痕、ヘラによる刻みがみられた。12・13は接合部である。

本住居跡の時期は、９世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。



第34図　第20号住居跡出土遺物

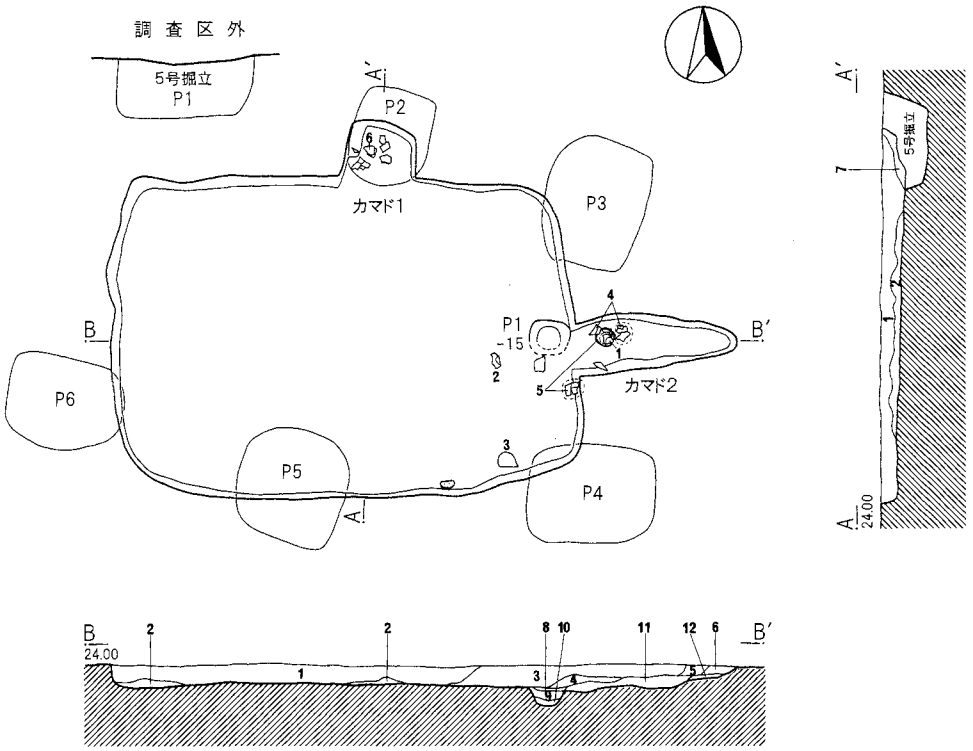
第21表　第20号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	13.0	4.0	5.6	AL	灰色	A	ほぼ完形	末野産。
2	須恵器　坏	(13.0)	3.65	(4.8)	AGL	灰色	B	25%	末野産。
3	須恵器　坏	(13.2)	4.0	(5.5)	ABDN	灰白色	B	30%	
4	須恵器高台椀	(13.4)	6.65	6.9	ABHK	灰白色	B	50%	
5	須恵器高台椀	(14.2)	5.15	6.4	ABDHL	灰白色	B	50%	末野産。
6	須恵器高台椀	—	(2.8)	7.4	ABHMN	灰白色	C	高台部100	
7	須恵器　皿	—	(2.2)	6.4	ACDHL	橙色	B	体～底100	末野産。
8	土師器　甕	(19.4)	27.5	3.9	ABCHM	にぶい橙色	B	50%	
9	土師器　甕	(21.0)	(3.0)	—	ABCHKM	橙色	B	口縁部20%	
10	土師器　甕	(19.8)	(7.3)	—	ABDHIJKM	灰白色	B	口～胴25%	
11	土師器　甕	(13.2)	(15.05)	—	ABHIKM	にぶい褐色	B	口～胴70%	
12	土師器台付甕	—	(5.55)	—	ABCEHIKN	橙色	B	接合部100	
13	土師器台付甕	—	(3.0)	—	ABDHKMN	明赤褐色	B	接合部70%	

第21号住居跡（第35図）

平成14年度調査Ⅰ区の34・35—53グリッドに位置する。本住居跡とほぼ同位置に5号掘立柱建物跡があるが、新旧関係は本住居跡の方が新しい。

規模は長軸3.66m、短軸2.56mを測る。平面プランは長方形を呈する。主軸方向はN—90°—Eを指す。

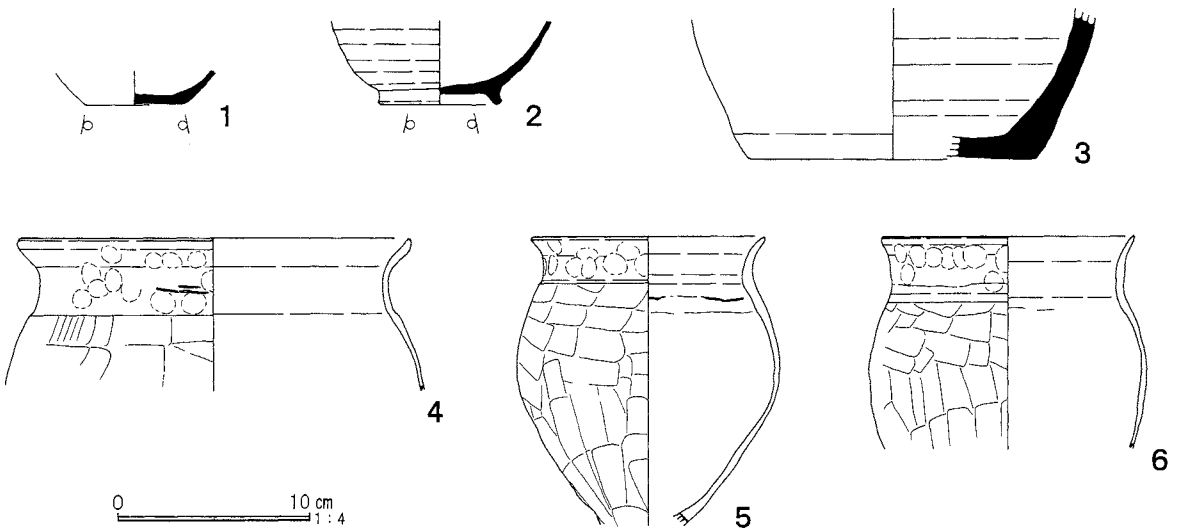


0 2m
1：60

第21号住居跡

土層説明（ＡＡ′ ＢＢ′）

1 褐 色 土：シルト質。焼土粒・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
2 褐 色 土：シルト質。黄褐色シルトブロック・焼土粒・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
3 褐 色 土：シルト質。焼土・にぶい黄色シルトブロック少量、酸化鉄多量含む。
4 暗灰色土：粘土質。酸化鉄・焼土多量含む。
5 暗灰色土：シルト質。酸化鉄・焼土多量含む。
6 暗灰色土：シルト質。焼土少量、にぶい黄色シルトブロック多量含む。
7 褐 色 土：シルト質。炭化物少量、酸化鉄・焼土多量含む。
8 褐 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
9 灰　　層：焼土少量、炭化物多量含む。
10 褐 色 土：焼土少量、酸化鉄・炭化物多量含む。
11 灰　　層：黄褐色シルトブロック・炭化物少量、焼土多量含む。
12 暗灰色土：シルト質。炭化物少量、焼土多量含む。



第35図　第21号住居跡・出土遺物

第22表　第21号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(1.8)	5.3	ABDHL	浅黄橙色	C	底部60%	末野産。
2	須恵器高台椀	—	(4.4)	6.5	ABGN	褐灰色	C	体～高70%	
3	須恵器　甕	—	(8.0)	(15.2)	ABGL	灰色	B	胴～底25%	末野産。
4	土師器　甕	(20.8)	(8.0)	—	ABEGJKM	橙色	B	口～胴25%	
5	土師器　甕	12.4	(15.3)	—	ABDKMN	橙色	B	口～胴80%	
6	土師器　甕	(13.2)	(11.2)	—	ABDEHIKMN	にぶい橙色	B	口～胴30%	

確認面からの深さは最大0.17mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと三層（1～3層）からなる。いずれも混入物を多く含んでいた。自然堆積と思われる。

カマドは2つ確認された。カマド1は北壁中央からやや東寄りに位置する。壁外への張り出しは0.43mと短い。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はほぼ平坦であり、先端でやや鋭角に立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、炭化物や焼土を含む層（7層）が確認されたにとどまる。カマド2は東壁中央からやや南寄りに位置する。壁外への張り出しは1.26mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部は壁外にあり、やや凹凸を持ちながら煙道部先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド覆土に天井部崩落土はみられず、焼土を含む層（4～6層）、灰層（11層）、焼土や炭化物を含む層（12層）などが確認された。また、カマド2の前ではピットが1つ検出されたが、覆土に灰層が認められたことから、灰溜めのピットと思われる。カマド1と2の新旧関係は、土層堆積や遺物の出土状況等からカマド2が新しい。貯蔵穴や壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（1）、高台付椀（2）、甕（3）、土師器甕（4～6）がある。1・4・5はカマド2、2・3はカマド2周辺、6はカマド1から検出された。

須恵器はほとんど末野産である。1は底部に回転糸切り痕を残す。2は口縁部を欠く。体部は内湾し、ハの字に開く高台が付く。底部は回転糸切り痕を残す。3は胴下部から底部にかけての部位である。回転ナデ調整による。土師器甕はいずれも口縁部がコの字状を呈し、外面には輪積痕や指頭圧痕がみられたが、4は肥厚した端部が受口状を呈し、5・6はコの字がやや崩れ気味である。5はくの字に近く、6はコの字が浅い。5・6は小型で台付甕の可能性がある。

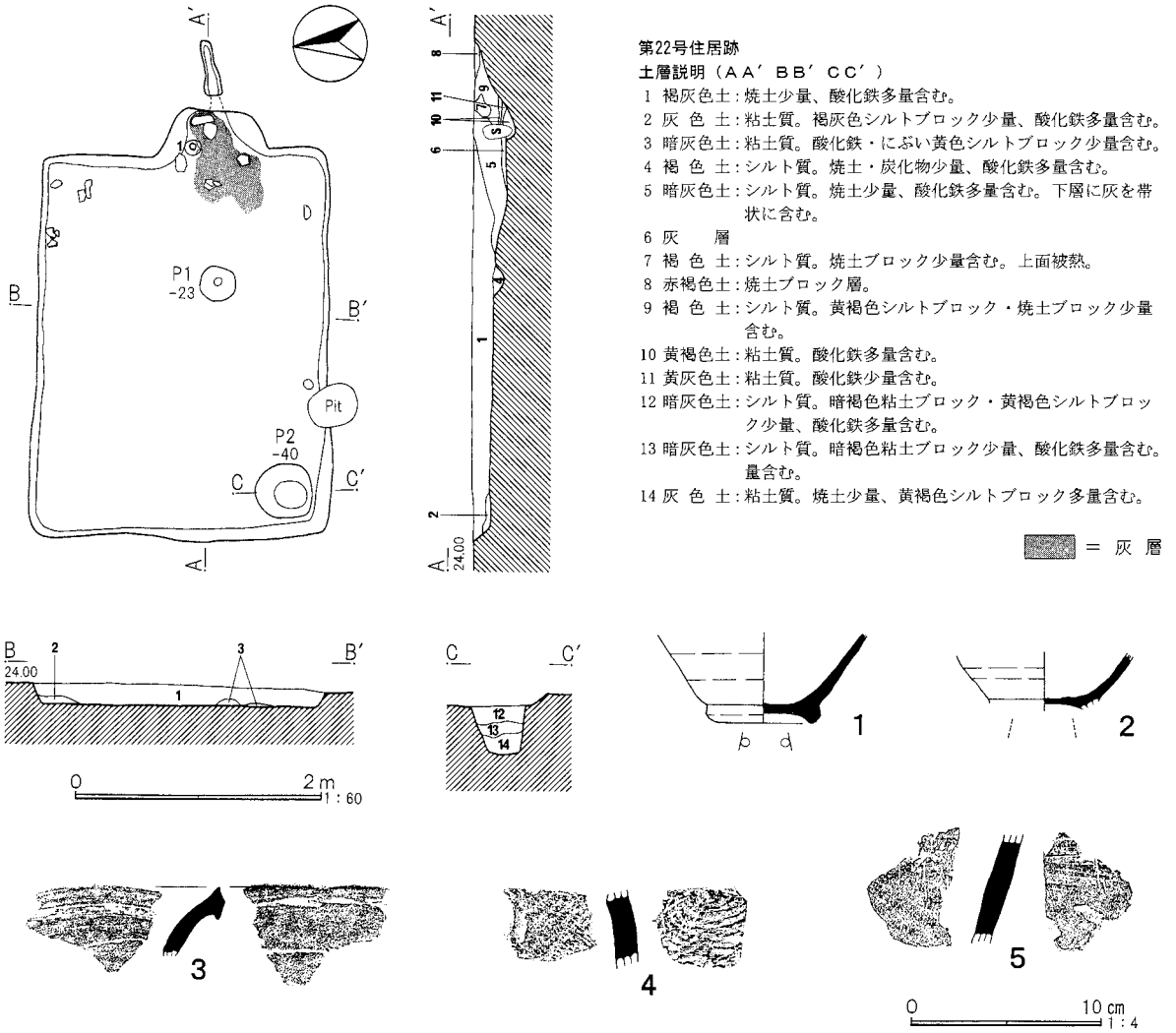
本住居跡の時期は、9世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第22号住居跡（第36図）

平成14年度調査Ⅰ区の32・33—53グリッドに位置する。南壁中央からやや西寄りを後世のピットに切られている。その他に遺構との重複関係はみられない。

規模は長軸3.07m、短軸2.42mを測る。平面プランは縦長の長方形を呈する。主軸方向はN—98°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.27mを測る。床面はほぼ平坦であった。覆土はカマドを除くと三層（1～3層）からなるが、1層が厚く堆積していた。自然堆積と思われる。

カマドは東壁中央からやや東寄りに位置する。遺存状態が良く、天井部が一部残っていた。壁外への張り出しは0.9mを測る。袖部は確認されなかった。焚口部から燃焼部はやや凹凸があるものの、ほぼ平坦であり、支脚として使用された川原石が立った状態で検出された。煙道部は先端に向かって緩やかに立ち上がる。カマド覆土は、7層が天井部、10・11層は天井部崩落土、8層が焼土層、6層が灰層である。6層は、焚口部から燃焼部にかけて広がっていた。



第36図　第22号住居跡・出土遺物

第23表　第22号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器高台椀	—	(4.85)	6.1	ABHMN	橙色	B	体～高100	酸化焔焼成。
2	須恵器高台椀	—	(3.1)	—	ABL	灰色	B	体部40%	末野産。
3	須恵器　甕	—	—	—	ABDHL	にぶい橙色	C	口縁部片	末野産。
4	須恵器　甕	—	—	—	ABEHL	青灰色	B	胴上部片	末野産。外面自然釉付着。
5	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	B	胴下部片	末野産。

ピットは２つ検出された。Ｐ１は床面中央からややカマド寄り、Ｐ２は南西隅から検出された。性格は不明であるが、いずれも伴うものと思われる。貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

図示可能な出土遺物は須恵器のみであり、高台付椀（1・2）、甕（3～5）がある。1はカマド、その他は覆土から検出された。

須恵器はほとんど末野産である。1は酸化焔焼成による。底部調整は、1が回転糸切り痕を残し、2はヘラナデ調整である。1の体部は直線的であり、短い高台が付く。甕はすべて破片である。4のみ外面に自然釉が付着していた。

本住居跡の時期は、10世紀前半段階と思われる。

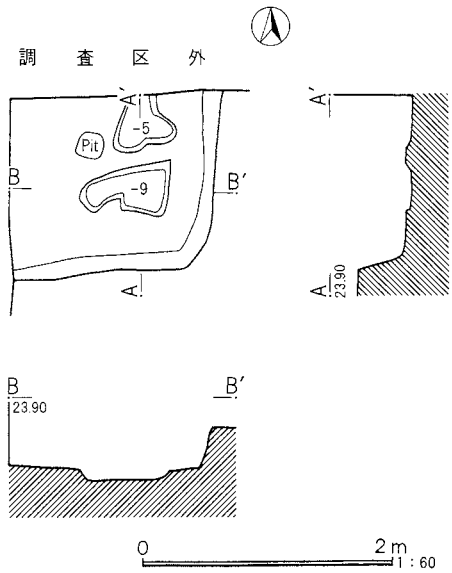
第23号住居跡（第37図）

平成12年度調査Ⅰ区の30—52・53グリッドに位置する。南東隅付近のみの検出であり、大半が調査区外にある。後世のピットに切られている以外に、他の遺構との重複関係はみられない。

規模及び平面プランは不明であるが、検出できた南北は1.45m、東西は1.67mを測る。主軸方向はN—90°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.37mを測る。床面は、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系を呈していた。自然堆積と思われる。床面からは、いびつな掘り込みが2つ確認されたが、掘り方と思われる。

カマドをはじめ、貯蔵穴や壁溝は確認されなかった。

遺物は須恵器・土師器の小片が出土したが、図示不可能であった。



第37図　第23号住居跡

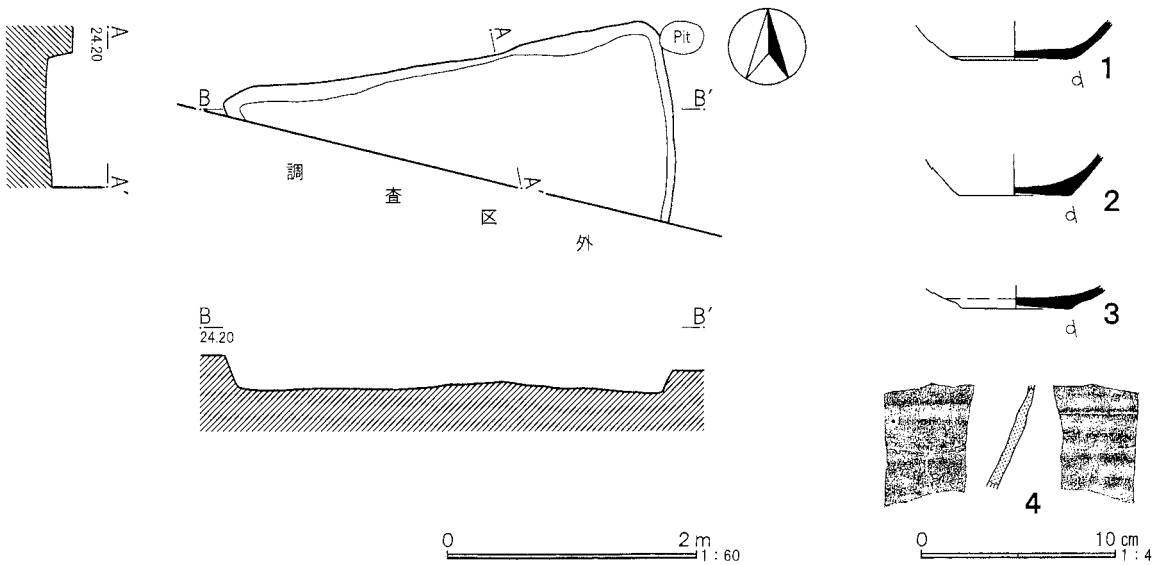
時期を判断するのは困難であるが、他の住居跡と同じく9世紀後半を前後する段階と思われる。

第24号住居跡（第38図）

平成13年度調査Ⅱ区の41・42—61グリッドに位置する。今回報告する住居跡では最も南端に位置する。検出できたのは、北東隅から北壁にかけての範囲のみであり、カマドを含む大半が調査区外にある。北東隅を後世のピットに切られている。

規模及び平面プランは不明であるが、検出できた東西は3.48mを測る。主軸方向はN—80°—Eを指す。確認面からの深さは最大0.26mを測る。床面はやや凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系を呈していた。自然堆積と思われる。カマドをはじめ、貯蔵穴やピット、壁溝は確認されなかった。

出土遺物は、須恵器坏（1～3）、灰釉陶器瓶（4）がある。すべて覆土からの検出である。



第38図　第24号住居跡・出土遺物

第24表　第24号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器　坏	—	(2.1)	(6.8)	ABDHL	灰白色	B	底部30%	末野産。
2	須恵器　坏	—	(2.15)	(6.0)	ABHLN	灰白色	C	底部45%	末野産。
3	須恵器　坏	—	(1.25)	(5.9)	ABHN	灰白色	B	底部40%	
4	灰釉陶器　瓶	—	—	—	ABD	灰白色	B	胴下部片	外面上部灰オリーブ色釉。

1～3はほとんど末野産である。底部のみの検出であり、回転糸切り痕を残す。4は胴下部片である。外面上部には、灰オリーブ色の釉薬がかかっている。胎土は白っぽく、粗い。

出土遺物が破片であるため時期の判断が難しいが、9世紀後半を中心とした段階と思われる。

2　掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第39図）

平成15年度調査区の23—49・50グリッドに位置する。ピットが集中する箇所にあり、他のピットも含めて建物跡になる可能性もあるが、ここでは等間隔に並ぶものだけを建物跡ととらえて報告する。

規模は北東部が調査区外にあるため不明である。検出した状況は1×1間であるが、それ以上になる可能性が高い。主軸方向はN—20°—Eを指す。柱間は1.2mを測る。柱穴は、一辺0.3m前後の隅丸方形を呈する。深さはP1・2が0.31～0.32m、P3は0.12mで浅い。P1・2では柱痕跡（1層）が認められ、P3では実際に柱材が残存していた。柱材は腐食が激しいため、図示できなかったが、径0.15m程であった。いずれの柱穴も柱の周りには粘土質の土が平らに充填されていた。

遺物は、かわらけの小片が検出されたが、図示不可能であった。

本建物跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係、掘り方の特徴などから中世段階以降と思われる。

第2号掘立柱建物跡（第39図）

平成15年度調査区の24—50・51グリッドに位置する。1号建物跡と同じく、ピットの集中する箇所にある。また、直接的な重複関係にないが、東側には11号土坑が隣接する。

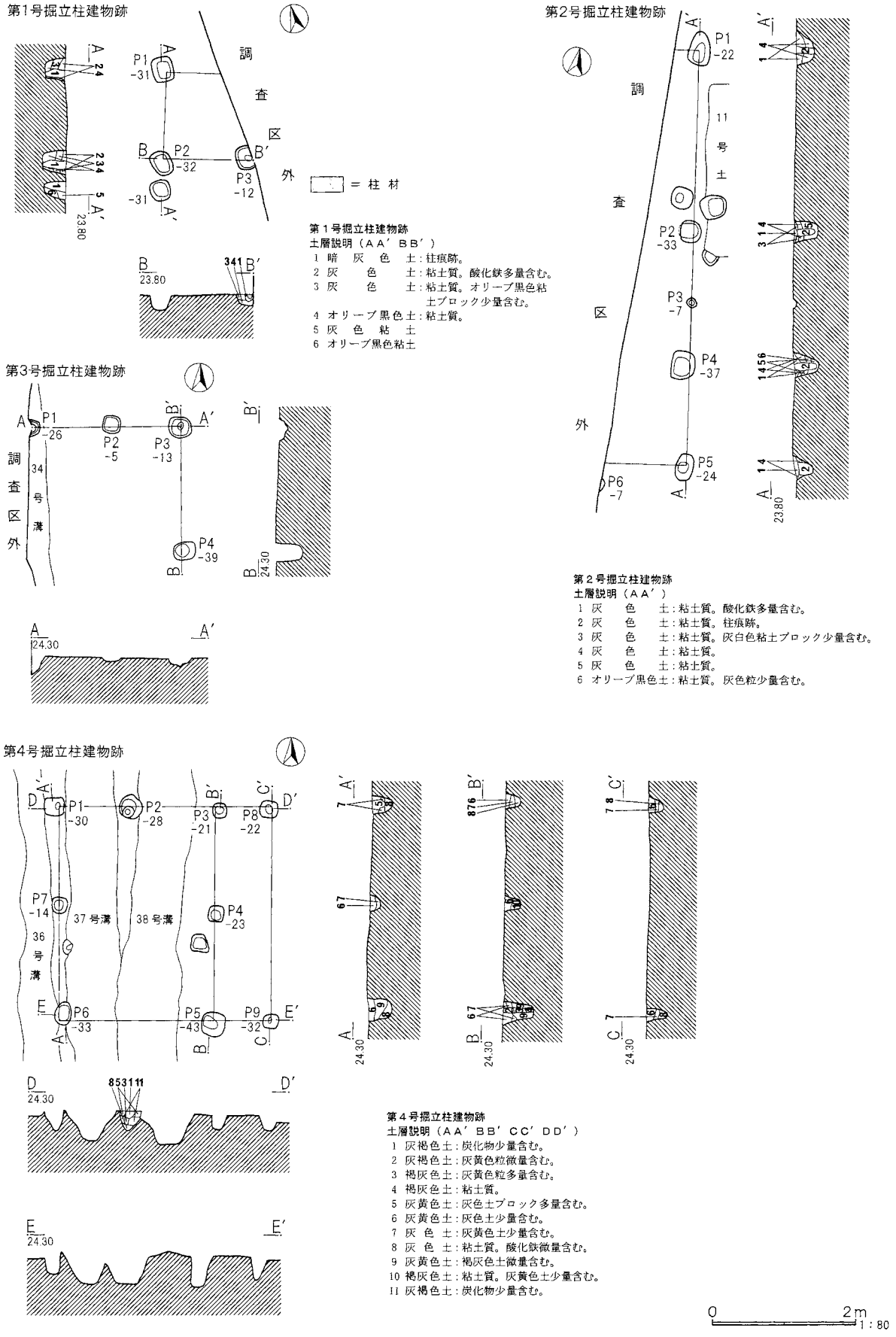
規模は西側が調査区外にあるため不明である。検出した状況は、南北4間、東西1間の側柱建物跡であるが、東西はそれ以上になることは確実である。P3は柱筋にのることから本建物跡に含めたが、他と比べて径が非常に小さく、浅いことから伴わない可能性もある。主軸方向はN—9°—Wを指す。柱間は、P3も含めてP1からP5まで2.5m、1m、0.9m、1.4m、P5とP6は1.2mを測る。P6は柱筋からやや外れており、棟持ち柱状を呈する。柱穴は一辺0.3m前後のものが主体となり、平面プランは隅丸方形のものが多い。深さはP3を除くと0.3m前後である。P1・2・4・5では、柱痕跡（2層）が認められ、柱の周りには粘土質の土が平らに充填されていた。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第3号掘立柱建物跡（第39図）

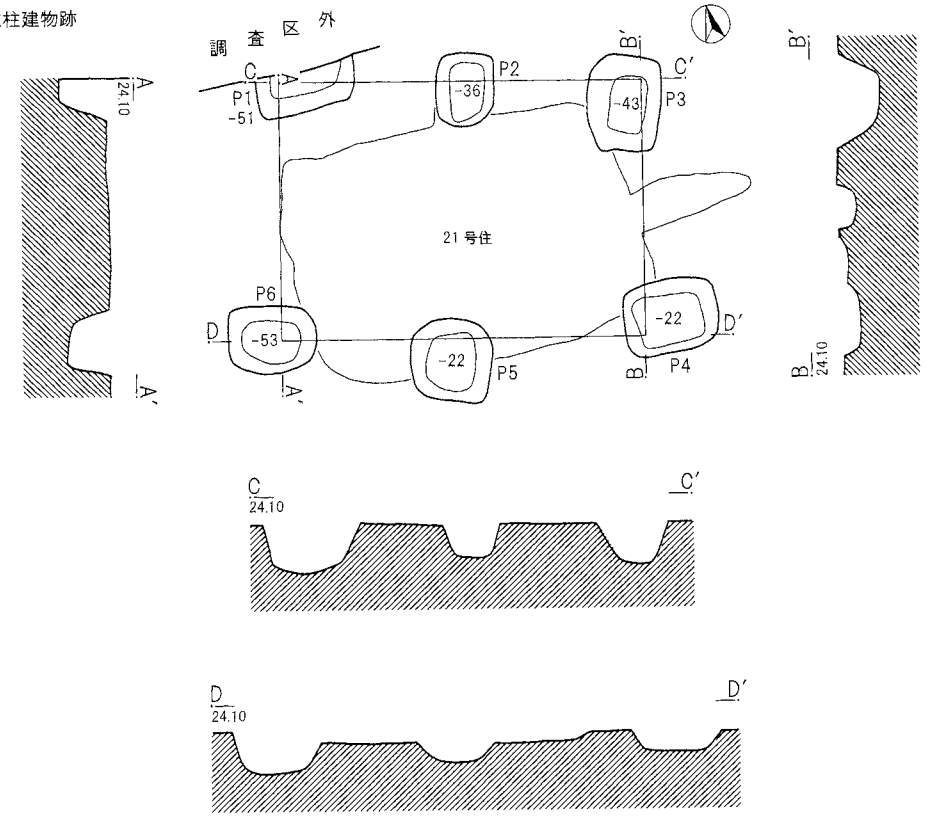
平成17年度調査Ⅰ区の49—53・54グリッドに位置する。34号溝跡を切っている。

規模は西側及び南側が調査区外にあるため不明である。検出した状況は、南北1間、東西2間の側柱建物跡であるが、それ以上の建物跡になることは確実である。主軸方向はN—1°—Eを指し、ほぼ東西南北に軸があっている。柱間はP1からP3までが1.1m、1m、P3とP4が1.8mを測る。柱穴は一辺0.23m前後の隅丸方形を呈する。深さは0.05～0.39mとバラツキがあるが、P2・3は浅い。覆土は

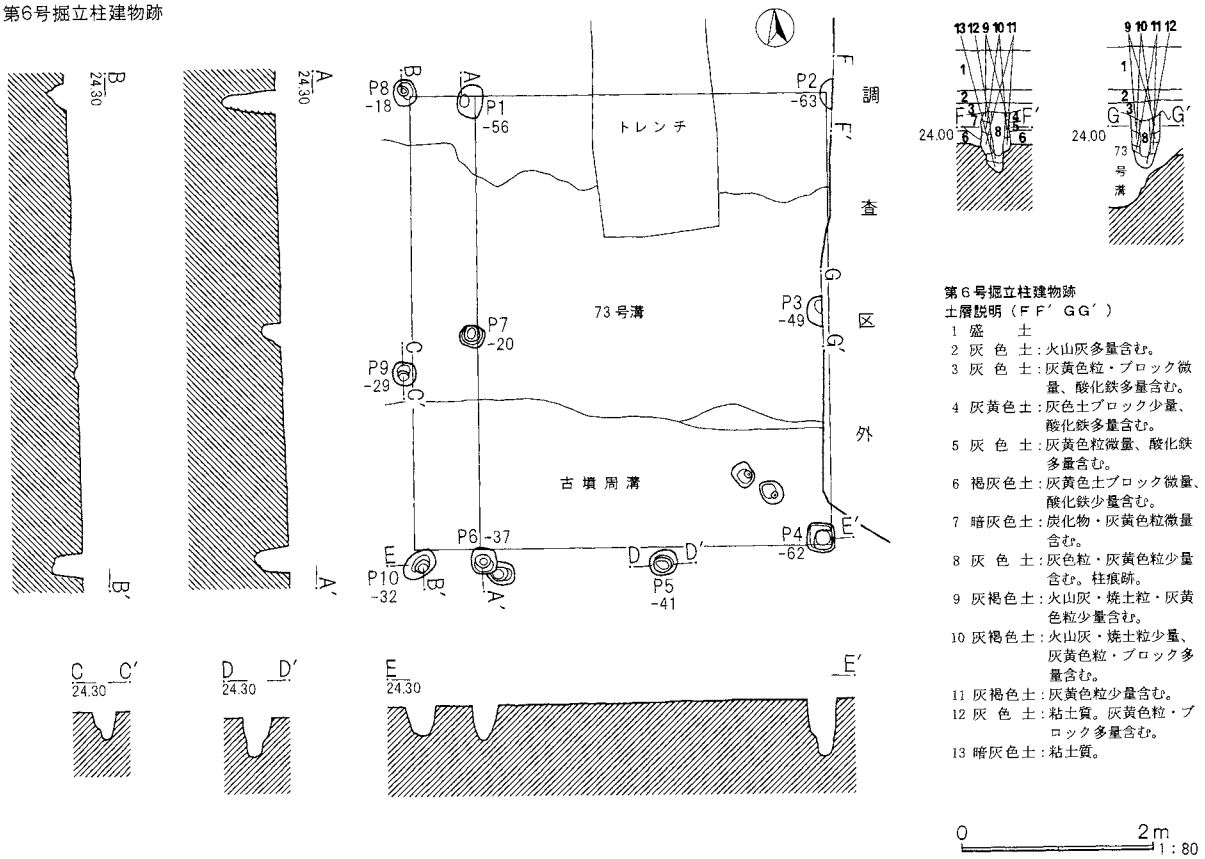


第39図　第１～４号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡



第6号掘立柱建物跡



第6号掘立柱建物跡
土層説明（FF′ GG′）

1 盛　土
2 灰 色 土：火山灰多量含む。
3 灰 色 土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰 色 土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
6 褐灰色土：灰黄色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
7 暗灰色土：炭化物・灰黄色粒微量含む。
8 灰 色 土：灰色粒・灰黄色粒少量含む。柱痕跡。
9 灰褐色土：火山灰・焼土粒・灰黄色粒少量含む。
10 灰褐色土：火山灰・焼土粒少量、灰黄色粒・ブロック多量含む。
11 灰褐色土：灰黄色粒少量含む。
12 灰 色 土：粘土質。灰黄色粒・ブロック多量含む。
13 暗灰色土：粘土質。

第40図　第5・6号掘立柱建物跡

図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第４号掘立柱建物跡（第39図）

平成17年度調査Ⅰ区の47・48―53・54グリッドに位置する。本建物跡とほぼ同位置にある南北に走る36～38号溝跡を切っている。南側梁行のＰ５・６間の柱穴は確認できなかった。

２×２間の身舎に東庇が付く南北棟の側柱建物跡である。規模は桁行、梁行ともに３ｍを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｅを指し、ほぼ東西南北に軸があっている。身舎の柱間は、桁行がほぼ1.5m、梁行が１～1.2mである。庇は身舎とは0.8mの距離にあり、Ｐ８・９間の柱穴は未検出である。柱穴は大きさにバラツキがあるが、主に隅丸方形を呈するものが多い。深さは0.3m前後のものが多い。いずれの柱穴からも柱痕跡は認められず、混入物を含む埋土がほぼ水平に確認されただけである。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第５号掘立柱建物跡（第40図）

平成14年度調査Ⅰ区の34・35―52・53グリッドに位置する。ほぼ同位置にある21号住居跡に切られている。Ｐ１の北側半分は調査区外にある。

調査区外北側に延びる可能性があるが、検出した状況では２×１間の東西棟の側柱建物跡である。規模は桁行3.8m、梁行2.7mを測る。主軸方向はＮ―13°－Ｅを指す。柱間は桁行が1.9m、梁行が2.7mである。いずれの掘り方も大きく、長軸0.9m、短軸0.7m前後の隅丸長方形ないし方形を呈する。深さは0.18～0.54mとややバラツキがある。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。

遺物はＰ５から須恵器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本建物跡の時期は、出土遺物や21号住居跡との関係から９世紀後半以前の古代と思われる。

第６号掘立柱建物跡（第40図）

平成17年度調査Ⅱ区の44・45―57・58グリッドに位置する。73号溝跡や上之古墳群第２号墳の周溝を切っている。北側梁行のＰ１・２間の柱穴は、試掘調査時のトレンチにより、確認できなかった。

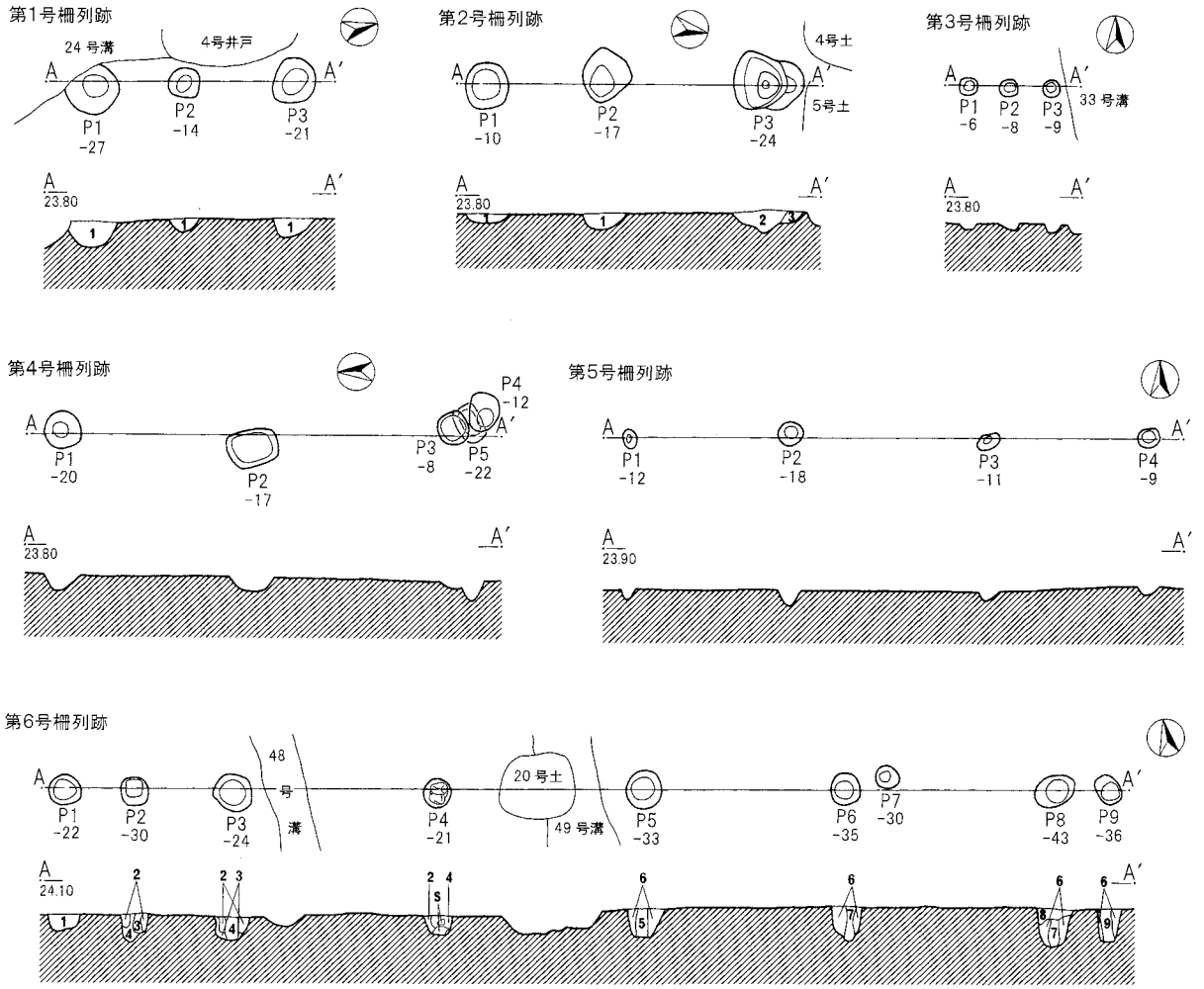
２×２間の身舎に西庇が付く南北棟の側柱建物跡である。規模は桁行4.8m、梁行4.4mを測る。主軸方向はＮ－４°－Ｅを指し、ほぼ東西南北に軸があっている。身舎の柱間は、桁行が2.3～2.5m、梁行が1.9mである。南側梁行は柱筋のとおりが悪い。庇は身舎とは0.7mの距離にあり、Ｐ９のみ柱筋からやや外れる。柱穴は一辺0.24m前後の隅丸方形を呈し、深さ0.30m以上のしっかりした掘り方を持つものが多い。ほとんどの柱穴において覆土を図示できなかったが、Ｐ２・３では柱痕跡（８層）を確認することができた。柱の周りには灰色系の土が平らに重ねられていた。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

３　柵列跡

第１号柵列跡（第41図）

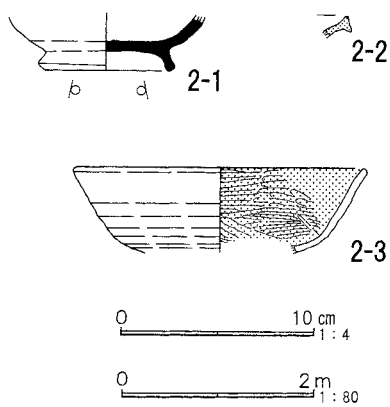
平成13年度調査Ⅲ区の26―43グリッドに位置する。Ｐ１が24号溝跡に切られている。また、直接的な重複関係にないが、西側には４号井戸跡が隣接する。



第1号柵列跡
土層説明（AA′）
1 灰黄褐色土：シルト質。酸化鉄・灰白色土ブロック少量含む。

第2号柵列跡
土層説明（AA′）
1 にぶい黄褐色土：シルト質。焼土粒・炭化物・灰白色粘土ブロック少量含む。
2 にぶい黄褐色土：シルト質。焼土粒・炭化物・灰ブロック少量含む。
3 にぶい黄橙色土：シルト質。浅黄色土ブロック少量含む。下層に焼土ブロック多量含む。

第6号柵列跡
土層説明（AA′）
1 暗灰色土：粘土質。焼土少量、酸化鉄多量含む。
2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 暗灰色土：黄褐色シルトブロック少量、酸化鉄多量含む。
4 暗灰色土：酸化鉄少量、黄灰色粘土ブロック多量含む。柱痕跡？
5 黒褐色土：シルト質。酸化鉄・焼土・炭化物少量、黄褐色シルトブロック多量含む。
6 黒褐色土：シルト質。酸化鉄・黄褐色シルトブロック多量含む。
7 黒褐色土：シルト質。酸化鉄・焼土少量含む。
8 褐 色 土：シルト質。黄褐色シルトブロック・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
9 暗灰色土：粘土質。黄褐色シルトブロック・炭化物少量、酸化鉄多量含む。柱痕跡。



第41図　第1～6号柵列跡・出土遺物

第25表　第2号柵列跡出土遺物観察表

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	須恵器高台椀	—	(2.95)	7.2	ADL	暗灰色	B	高台部100	末野産。
2	灰釉　長頸瓶	—	—	—	ABD	灰白色	A	口縁部片	内外面灰オリーブ色釉。
3	土師器高台椀	(15.4)	(4.5)	—	ABDHIKM	外:褐　内:黒	B	口～体20%	内面ミガキ、黒色処理。

柱穴は３つ確認された。径0.26～0.54mの円形を呈し、深さは0.14～0.27mを測る。柱間はＰ１からＰ３まで１m、1.1mを測り、柱筋は通るが等間隔ではない。柱痕跡は認められなかった。

遺物は須恵器、土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本柵列跡の時期は、出土遺物や周辺の住居跡とほぼ同軸方向を向くことから９世紀代と思われる。

第２号柵列跡（第41図）

平成13年度調査III区の26―43・44グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、北側には３～５号土坑が隣接し、東西には24・25号溝跡が南北に走っている。

柱穴は３つ確認された。径0.44～0.74mの円形を呈し、深さは0.10～0.24mを測る。Ｐ３は北側がテラス状を呈する。柱間はＰ１からＰ３まで1.2m、1.8mを測り、柱筋は通るが等間隔ではない。いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

出土遺物は、須恵器高台付椀（１）、灰釉陶器長頸瓶（２）、ロクロ土師器高台付椀（３）がある。すべてＰ３から検出された。１は底部に回転糸切り痕を残す。末野産。２は口縁部の小片である。胎土は白っぽく、緻密である。内外面に灰オリーブ色の釉がかかる。３は高台部を欠く。内面には横・斜位のミガキ、黒色処理が施されている。

本柵列跡の時期は、９世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第３号柵列跡（第41図）

平成15年度調査区の23―49グリッドに位置する。ピットの集中する箇所にあり、他の遺構との重複関係はみられないが、すぐ北側を32・33号溝跡が東西に走っている。

柱穴は３つ確認された。径0.18m前後の円形を呈し、深さは0.06～0.09mといずれも浅い。柱間はＰ１からＰ３まで0.4mで等間隔に並ぶ。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第４号柵列跡（第41図）

平成15年度調査区の23―51・52グリッドに位置する。本柵列跡もピットの集中する箇所にある。他の遺構との重複関係はみられない。

柱穴は計５つ確認されたが、Ｐ３～５は同一箇所で重なり合っている。径0.34～0.54mを測り、Ｐ２・５が長方形、その他は円形を呈する。深さは0.08～0.22mを測る。柱間はＰ１からＰ３までだと2.1mで等間隔に並ぶが、Ｐ４・５までとなると一定しない。また、Ｐ２は柱筋からやや西側に外れている。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第５号柵列跡（第41図）

平成15年度調査区の22～24―53グリッドに位置する。本柵列跡もピットの集中する箇所にある。他の遺構との重複関係はみられないが、南側には18・19号井戸跡が隣接する。

柱穴は４つ確認された。径0.14～0.28mの円形ないし楕円形を呈し、深さは0.10m前後といずれもやや浅い。柱間はＰ１からＰ４まで1.7m、2.1m、1.7mを測る。覆土は図示できなかったが、いずれの柱穴からも柱痕跡は認められなかった。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第６号柵列跡（第41図）

平成14年度調査Ｉ区の35～37―53グリッドに位置する。48・49号溝跡、20号土坑を横断しているが、これらの遺構との新旧関係は不明である。

柱穴は９つ確認された。径0.3～0.46mの円形ないし楕円形を呈し、深さは0.21～0.43mといずれもややしっかりした掘り方を持つ。柱間はＰ１からＰ９まで0.6～2.2mを測り、一定していない。柱筋もＰ７がやや外れている。Ｐ１・４・７では、柱痕跡ないし柱痕跡と思われる土層は認められなかったが、その他では確認された。また、Ｐ４には覆土に河原石が２つ入っていた。

遺物は検出されなかったが、掘り方の特徴や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

４　溝　跡

第１号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28～32―38・39グリッドに位置する。３・６号溝跡を切っている。

北東方向から南西方向に走り、両端とも調査区外に延びる。検出された長さは14.2m、幅は1.5m前後、深さは0.26m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）は、須恵器高台付椀（１・２）、瓶（３）、甕（４～７）、土師器坏（８・９）、土錘（10）がある。陶器甕（11）は流れ込みである。すべて破片である。

須恵器は末野産が大半を占める。６のみ南比企産である。１は口縁部の外反がやや弱い。４～７は甕の胴下部片。８・９はともに口縁部が外に大きく開く。10は長さが短く、中段の膨らみが大きい。

本溝跡の時期は、９世紀後半から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第２号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28～32―39・40グリッドに位置する。５～７号溝跡、１号井戸跡を切っている。

ほぼ東西方向に走る。西側は調査区外に延びる。検出された長さは20.7m、幅は2.6～3.25m、深さは１m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した所では九層（１～９層）からなる。最上層（１層）には、火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

出土遺物（第53図）は、陶器碗（１）、香炉（２）、鉢（３）、土器焙烙（４）がある。縄文土器深鉢（５）、須恵器高台付椀（６）、甕（７～14）は流れ込み、刀子（15）は伴うものか不明である。

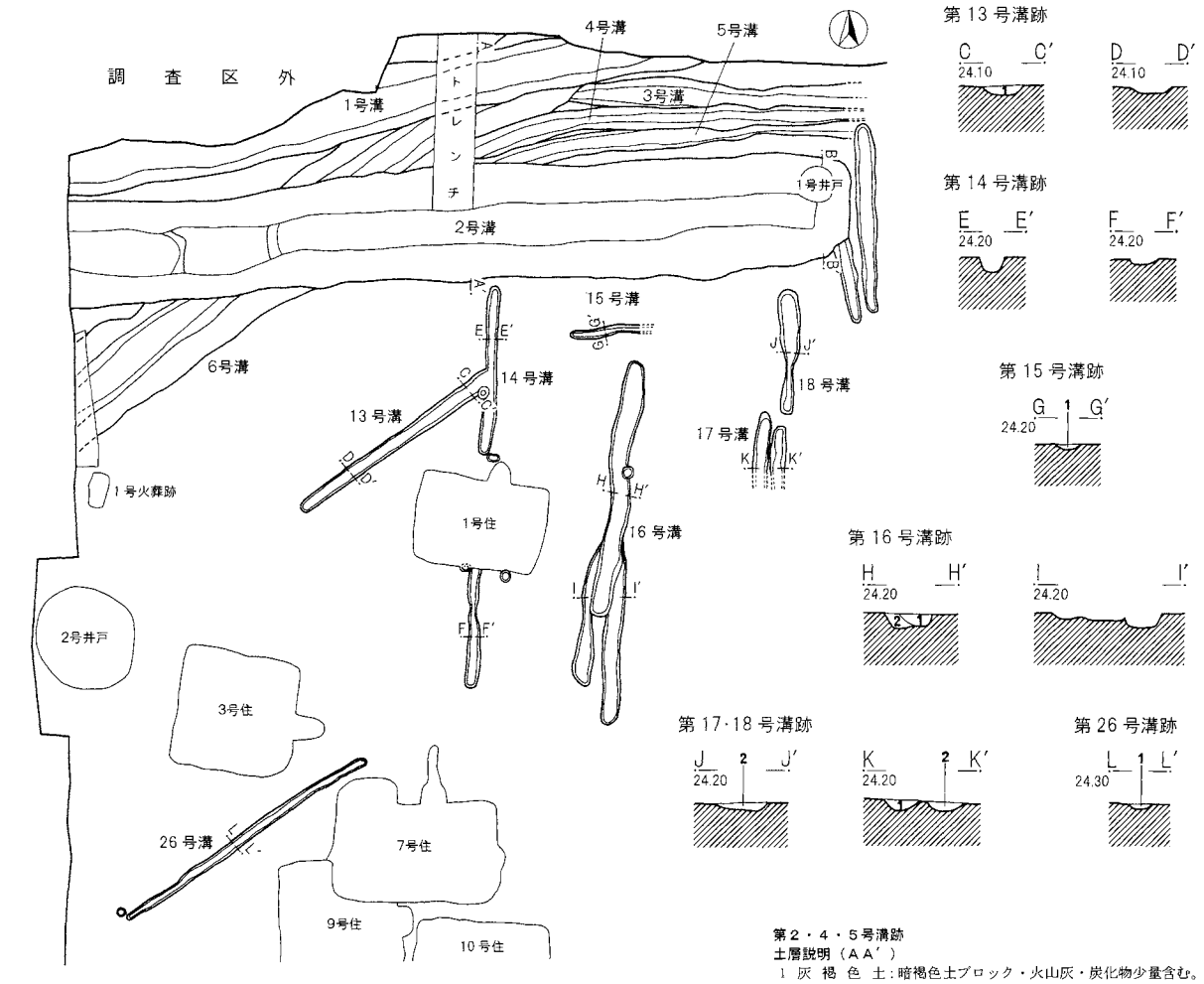
１は天目の底部。鉄釉がかかる。２は小振りで、灰釉がかかる。３は内面に刷毛目文様がある。釉は剝落していた。１・２は瀬戸・美濃系、３は肥前系である。４は在地系焙烙の底部片である。

本溝跡の時期は、17世紀前半以降と思われる。

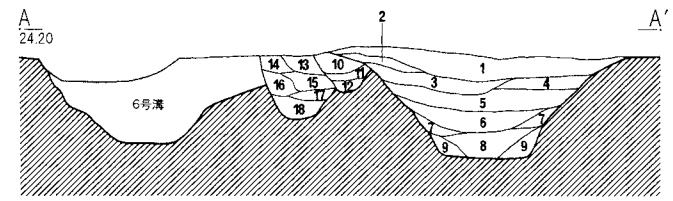
第３号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28・29―39グリッドに位置する。１・４号溝跡に切られており、６号溝跡との新旧関係は不明である。

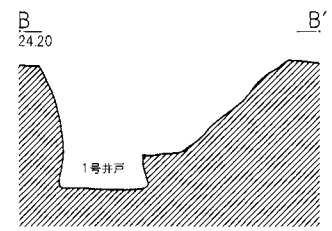
ほぼ東西方向に走る。東側は28―39グリッドで途切れ、西側は６号溝と接続する。検出された長さは7.4m、幅は0.6～0.9m、深さは0.5m前後を測る。断面形及び覆土は図示できなかったが、逆台形を呈



第1・2・4・5号溝跡



第2号溝跡



第2・4・5号溝跡
土層説明（AA′）
1 灰 褐 色 土：暗褐色土ブロック・火山灰・炭化物少量含む。
2 灰 白 色 土：暗褐色土ブロック多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。
4 灰 白 色 土：砂質。暗褐色土ブロック少量含む。
5 灰 色 土：シルト質。
6 灰褐色粘土
7 灰 色 粘 土：砂多量含む。
8 暗青灰色粘土
9 砂 層：酸化鉄多量含む。
10 灰 色 土：砂質。火山灰・灰色粘土ブロック少量含む。
11 灰 褐 色 土：灰白色土少量含む。
12 灰 白 色 土
13 灰 白 色 土：シルト質。
14 灰 色 土：シルト質。
15 灰 色 土：粘土質。焼土粒・砂・炭化物少量含む。
16 灰 色 粘 土：暗褐色粘土ブロック・灰白色粒少量含む。
17 暗灰色粘土：焼土粒・炭化物少量含む。
18 灰白色粘土：暗褐色粘土ブロック少量含む。

第13号溝跡
土層説明（CC′）
1 黒褐色土：酸化鉄微量含む。

第15号溝跡
土層説明（GG′）
1 黄褐色土：酸化鉄微量含む。

第16号溝跡
土層説明（HH′）
1 灰褐色土：酸化鉄微量、炭化物少量含む。
2 灰褐色土：酸化鉄微量含む。

第17・18号溝跡
土層説明（JJ′ KK′）
1 黄褐色土：酸化鉄微量含む。
2 黄褐色土：酸化鉄微量含む。

第26号溝跡
土層説明（LL′）
1 暗褐色土：酸化鉄微量含む。

平面図：0 5m 1：200　断面図：0 2m 1：80

第42図　第1～5・13～18・26号溝跡

し、灰色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第４号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28～30―39グリッドに位置する。３・６号溝跡を切り、５号溝跡に切られている。

ほぼ東西方向に走るが、西側は南西方向にやや傾く。３号溝跡同様、東側は28―39グリッドで途切れる。西側はトレンチ以西、未確認である。検出された長さは10.1m、幅は0.35～0.7m、深さは0.66m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した所では六層（13～18層）からなる。ややランダムな層位ではあるが、自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第５号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28～30―39グリッドに位置する。４号溝跡を切り、２号溝跡に切られる。

ほぼ東西方向に走るが、４号溝跡同様、西側は南西方向にやや傾く。東側も28―39グリッドで途切れる。検出された長さは９m、幅は0.55m、深さは0.46m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した所では三層（10～12層）からなる。２号溝跡同様、最上層（10層）には火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

出土遺物はないが、本溝跡の時期は２号溝跡以前の近世段階と思われる。

第６号溝跡（第43図）

平成13年度調査III区の29～32―38～41グリッド(①)、平成13年度調査IV区の35･36―44グリッド(②)、平成13年度調査Ｉ区の41～43―53･54グリッド(③)、平成17年度調査II区の44･45―54～56グリッド(④)で検出された。新旧関係が不明な３号溝跡以外、重複する遺構にすべて切られている。

北東方向から南西方向に調査区を跨いで走る。検出された長さは、①が16.2m、②が4.5m、③･④が7.9mである。両端はさらに調査区外に延びる。幅は1.6～３m、深さは0.46～0.9mを測る。断面形は、①・②ではほぼ逆台形を呈するが、③・④では南側にテラス状の溝を持つ二段掘りになっていた。覆土は各調査区で異なるが、レンズ状堆積から自然堆積と思われる。

出土遺物（第53･54図）は、古墳時代前期の土師器壺（１～３）、台付甕（４～８）がある。須恵器坏（９）、甕（11・12）灰釉陶器高台付椀（10）、土器焙烙（13）は、流れ込みである。

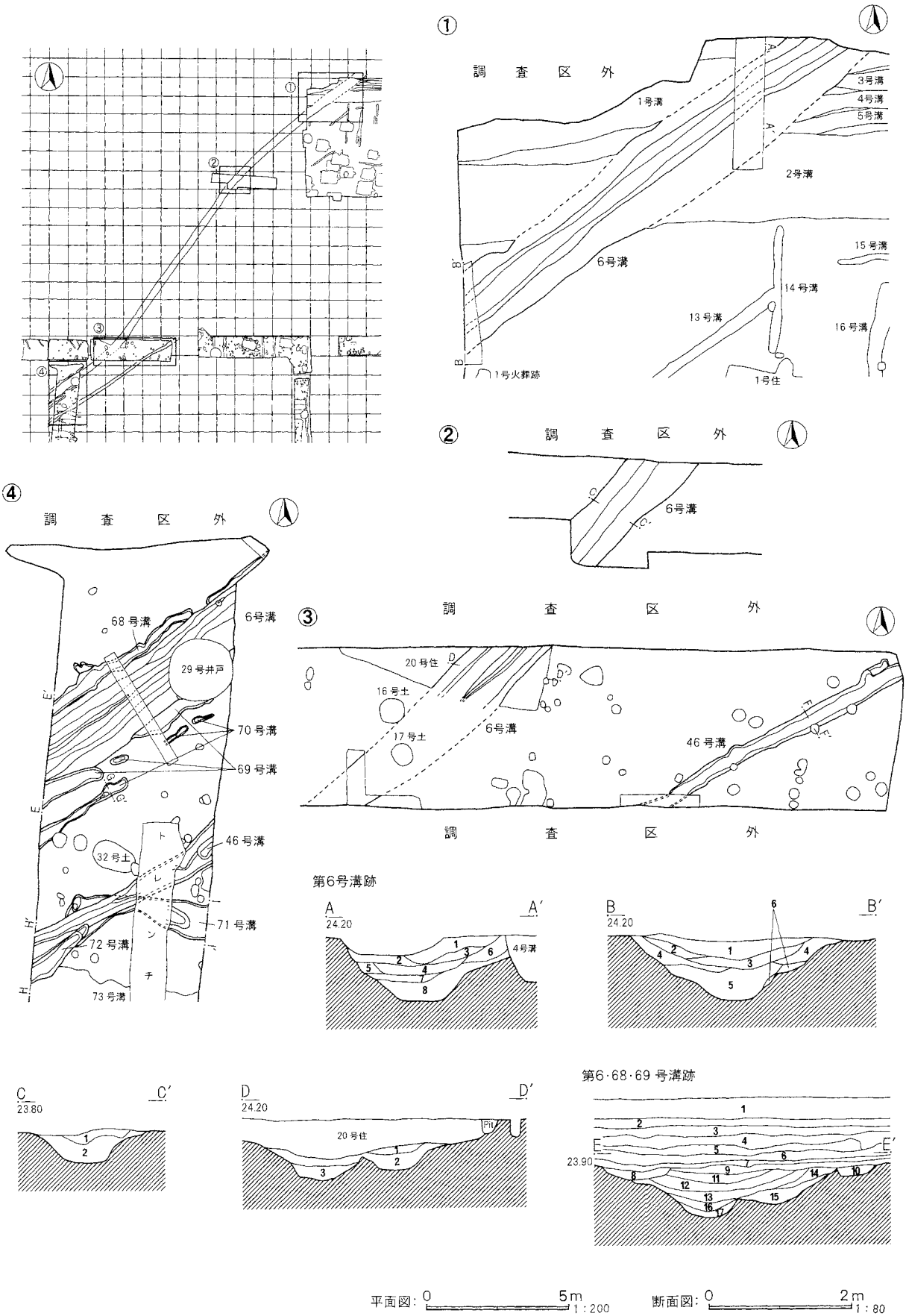
土師器壺は、１・２がミガキ調整、３は刷毛目の後、横位のヘラナデが施されている。１はミガキ箇所に赤彩が施されている。台付甕は４～７がＳ字甕である。５の台部外面は刷毛目の後、縦位のヘラナデを施している。内面には指頭圧痕がみられた。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

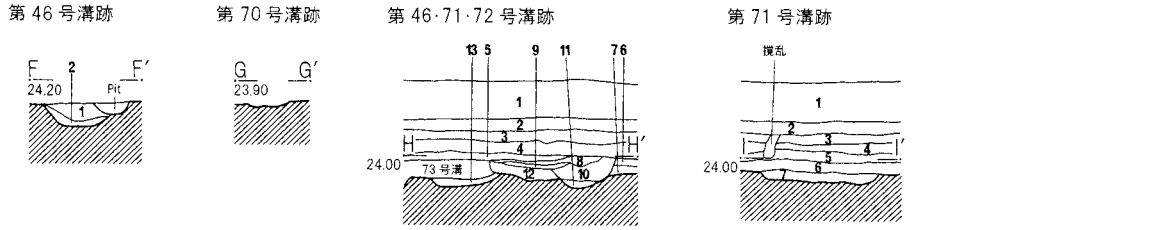
第７号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の28―40グリッドに位置する。北側を２号溝跡に切られている。東側には、８～10号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは2.2mと短い。幅0.25～0.45m、深さは0.03mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰白色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。



第43図　第6・46・68～72号溝跡(1)



第６号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：砂質。灰白色土ブロック少量含む。
2 暗灰色土：粘土質。炭化物・淡黄色粒少量含む。
3 褐灰色土：粘土質。炭化物微量含む。
4 黒灰色土：粘土質。
5 暗灰色土：粘土質。淡黄色粒少量含む。
6 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
7 暗灰色土：粘土質。
8 暗灰色粘土：炭化物・灰白色粒少量含む。

土層説明（ＢＢ′）
1 暗褐色土：酸化鉄少量含む。
2 灰褐色土：灰白色粒少量、酸化鉄多量含む。
3 灰褐色土：砂質。酸化鉄多量含む。
4 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
5 暗褐色土：粘土質。酸化鉄微量含む。
6 灰褐色土：灰白色粒少量含む。

土層説明（ＣＣ′）
1 暗褐色土：酸化鉄微量、炭化物・灰白色粒少量含む。
2 暗褐色土：酸化鉄多量含む。

土層説明（ＤＤ′）
1 暗褐色土：砂質。酸化鉄少量含む。
2 暗褐色土：酸化鉄多量含む。
3 黒褐色土：炭化物少量、酸化鉄多量含む。

第６・68・69号溝跡
土層説明（ＥＥ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土
3 灰　色　土：火山灰・酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：酸化鉄多量含む。
5 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
6 灰　色　土：シルト質。火山灰微量、灰色土ブロック多量含む。
7 暗灰色土：シルト質。灰黄色土ブロック微量、火山灰・灰色土ブロック多量含む。
8 黒褐色土：粘土質。下層に灰黄色粒・ブロック多量含む。
9 灰　色　土：シルト質。酸化鉄多量含む。
10 暗灰色土：シルト質。下層に灰白色土ブロック多量含む。
11 灰　色　土：粘土質。灰白色粒微量、酸化鉄少量含む。
12 灰白色土：粘土質。灰黄色粒微量含む。
13 暗灰色粘土：灰白色粘土ブロック微量含む。
14 灰　色　土：シルト質。灰白色粒微量含む。
15 灰色粘土：炭化物少量、灰白色粘土ブロック多量含む。
16 黒灰色粘土：灰白色粒微量含む。
17 灰褐色粘土：灰白色粒微量含む。

第46号溝跡
土層説明（ＦＦ′）
1 黒褐色土：しまり有。
2 灰褐色土：酸化鉄多量含む。

第46・71・72号溝跡
土層説明（ＨＨ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：火山灰多量含む。
3 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰　色　土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
6 褐灰色土：灰黄色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
7 暗灰色土：酸化鉄多量含む。
8 灰褐色土：灰黄色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
9 灰褐色土：暗褐色土ブロック少量、灰黄色土ブロック多量含む。
10 暗褐色土：灰色シルト少量、酸化鉄多量含む。
11 暗灰色土：シルト質。灰白色粒微量含む。
12 褐灰色土：炭化物微量、灰白色土ブロック少量含む。
13 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。しまり有。

第71号溝跡
土層説明（ＩＩ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：火山灰多量含む。
3 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 灰黄色土：灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰　色　土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
6 褐灰色土：灰黄色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
7 褐灰色土：灰白色粒・ブロック少量、酸化鉄多量含む。

0　2m
1：80

第44図　第６・46・68～72号溝跡(2)

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第８号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の27・28―39・40グリッドに位置する。北端で５号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。西側には７号溝跡、東側には９・10号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは5.2m、幅0.35～0.5mを測り、深さは0.08mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰白色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第９号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の27―39・40グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、東側

には７・８号溝跡、西側には10号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走る。南端はトレンチにより欠く。検出された長さは4.6m、幅0.25～0.5m、深さは0.06mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰白色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第10号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の27―39～45グリッドに位置する。23・27号溝跡を切り、12号溝跡、３号井戸跡に切られている。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは29.7mを測る。23号溝跡との重複箇所付近で一旦立ち上がり、北側と南側で幅が異なる。北側が0.8～1.35m、南側が0.5～0.7mを測る。深さは0.34～0.6mである。断面形は逆台形を呈する。覆土は三～四層からなり、自然堆積と思われる。

出土遺物（第54図）は、土器かわらけ（１）、焙烙（２）、古銭（３～５）がある。形象埴輪（６）、灰釉陶器高台付椀（７・８）、須恵器甕（９～11）、平瓦（12）は、流れ込みである。砥石（13）は伴うものか不明である。１は底部片。調整はヘラナデである。２は内耳部片である。古銭は３枚検出された。３が天聖元寶、４が熙寧元寶、５が紹聖元寶である。

本溝跡の時期は、中世段階と思われる。

第11号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の23～25―38・39グリッドに位置する。北東部で南側を併走する12号溝跡に切られている。また、中央付近ではピットと重複するが、新旧関係は不明である。

北東方向から南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは12.1m、幅0.65～0.9m、深さ0.32～0.62mを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した所では四層（６～９層）からなる。最上層（６層）には、火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第12号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の23～27―38～45グリッドに位置する。10・11・23号溝跡、５号井戸跡を切り、３号井戸跡に切られている。22・24号溝跡との新旧関係は不明である。

23～26―38・39グリッドでは北東方向から南西方向に走るが、26―39グリッド以南は、ほぼ南北方向に走る。両端とも調査区外に延びる。検出された長さは45.3m、幅0.5～1.3m、深さ0.18～0.6mを測る。断面形はおおむね逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した所で異なるが、おおむね三～五層からなる。自然堆積と思われる。

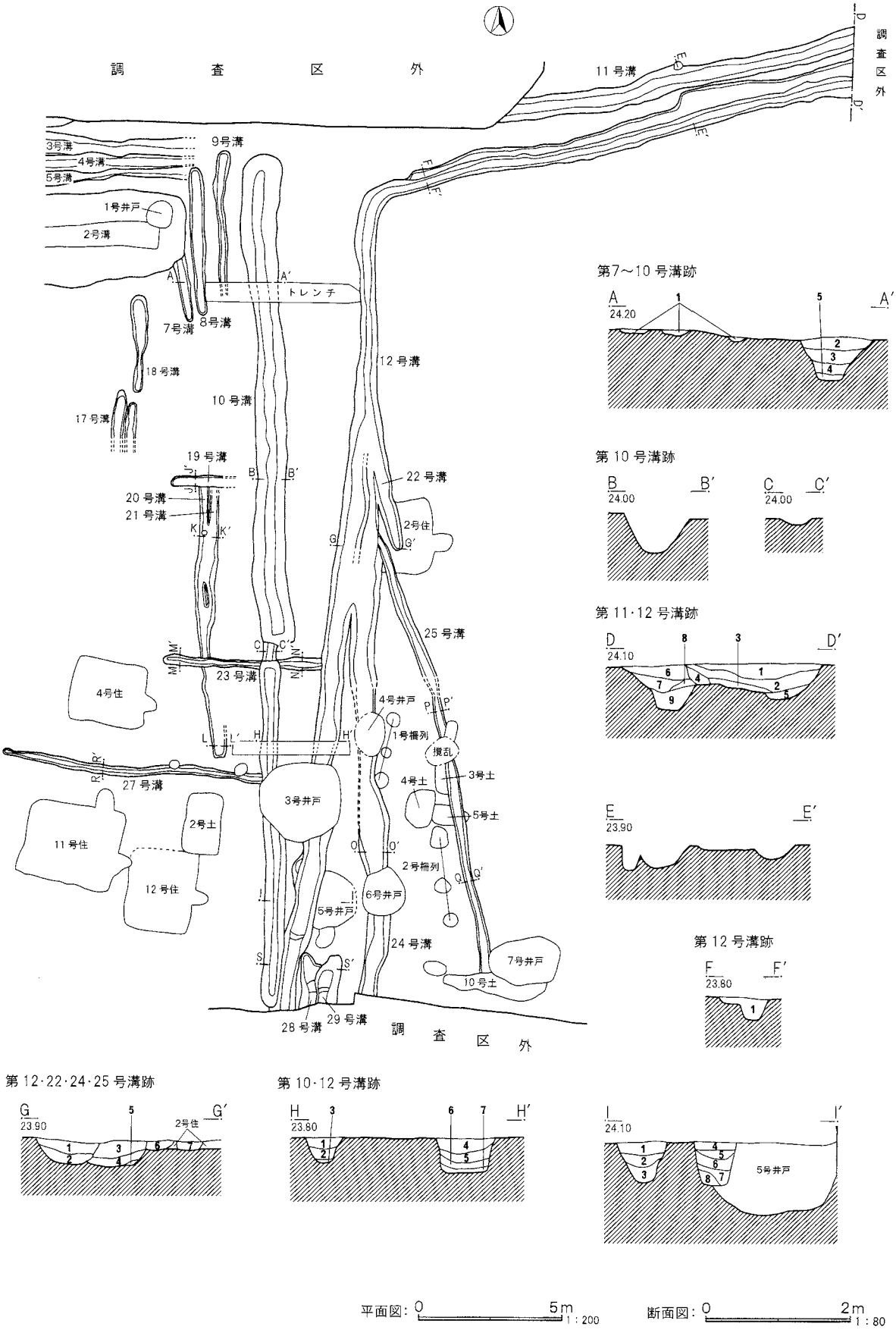
出土遺物（第55図）は、陶器碗（１）、土器かわらけ（２～４）、焙烙（５）、羽口（６）がある。土師器台付甕（７）、須恵器甕（８～11）、平瓦（12・13）は、流れ込みである。

１は天目である。鉄釉がかかる。瀬戸・美濃系。２～５は破片であり、全形を知り得ない。中世段階の可能性もある。３は網代痕。６は図示しなかったが、先端に珪化物が付着し、周囲が還元化している。

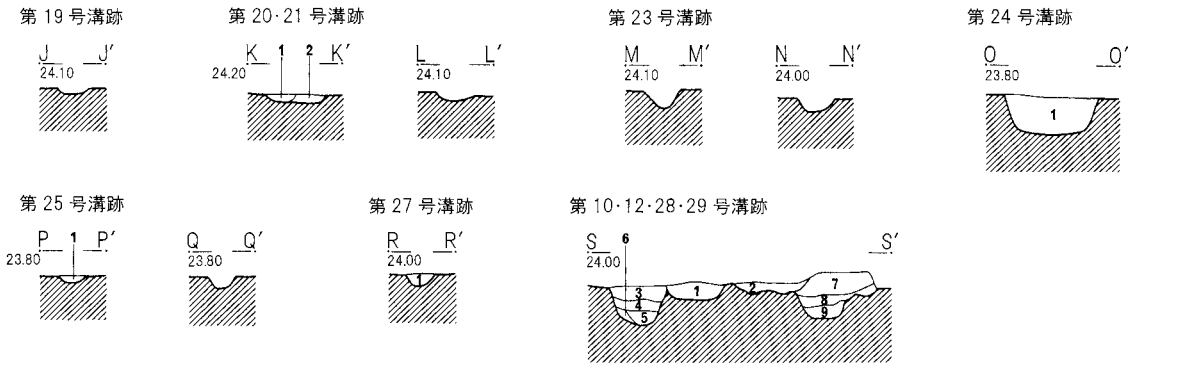
本溝跡の時期は、17世紀前半以降と思われる。

第13号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の29・30―40・41グリッドに位置する。北東部で14号溝跡と接続し、接続部南側



第45図　第7～12・19～25・27～29号溝跡(1)



第７～10号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰白色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
4 灰褐色粘土：酸化鉄微量含む。
5 灰白色粘土：暗灰色粘土ブロック多量含む。

第11・12号溝跡
土層説明（ＤＤ′）
1 灰褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり有。
2 灰色粘土：砂・炭化物少量含む。
3 暗灰色粘土
4 灰色粘土：砂多量含む。
5 暗灰色粘土：３層より粘性強。
6 灰褐色土：粘土質。火山灰・炭化物微量含む。しまり有。
7 灰　色　土：粘土質。炭化物微量含む。
8 灰色粘土：砂微量含む。
9 暗灰色粘土：粘性極強。

第12号溝跡
土層説明（ＦＦ′）
1 灰　色　土：シルト質。灰白色粒少量含む。

第12・22・24・25号溝跡
土層説明（ＧＧ′）
1 灰褐色土：砂質。灰白色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
2 灰褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
3 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
4 灰褐色土：酸化鉄多量含む。３層より暗い。
5 灰褐色土：酸化鉄微量、灰白色粒少量含む。
6 灰褐色土：酸化鉄・淡黄色粒微量含む。
7 灰褐色土：酸化鉄微量含む。

第10・12号溝跡
土層説明（ＨＨ′）
1 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
2 灰褐色土：酸化鉄多量含む。１層より暗い。
3 灰褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
4 灰褐色土：砂質。灰白色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰褐色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
6 灰褐色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
7 灰褐色粘土：酸化鉄多量含む。

第10・12号溝跡
土層説明（Ｉ Ｉ′）
1 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
2 灰褐色土：酸化鉄少量含む。１層より暗い。
3 灰褐色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
4 灰黄褐色土：酸化鉄微量含む。
5 灰褐色土：酸化鉄少量含む。
6 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
7 灰褐色土：酸化鉄少量含む。
8 灰褐色土：酸化鉄少量含む。７層より明るい。

第20・21号溝跡
土層説明（ＫＫ′）
1 灰褐色土：砂質。酸化鉄多量含む。
2 灰褐色土：粘土質。酸化鉄多量含む。

第24号溝跡
土層説明（ＯＯ′）
1 暗灰色土：粘土質。灰オリーブ色土ブロック少量含む。

第25号溝跡
土層説明（ＰＰ′）
1 黒褐色土：シルト質。焼土粒少量含む。

第27号溝跡
土層説明（ＲＲ′）
1 灰褐色土：酸化鉄少量含む。

第10・12・28・29号溝跡
土層説明（ＳＳ′）
1 灰　色　土：粘土質。酸化鉄・砂少量含む。
2 灰褐色土：粘土質。灰白色粒少量含む。
3 灰褐色土：粘土質。酸化鉄・砂少量含む。
4 褐灰色粘土
5 暗褐色粘土
6 灰色シルト：暗褐色粘土ブロック少量含む。
7 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
8 暗灰色粘土
9 暗灰色粘土：焼土粒少量含む。

0　2m
1：80

第46図　第７～12・19～25・27～29号溝跡(2)

ではピットが検出されたが、これらとの新旧関係は不明である。

北東方向から南西方向に走る。検出された長さは６ｍ、幅は0.4m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は黒褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第14号溝跡（第42図）

平成13年度調査Ⅲ区の29・30―40～42グリッドに位置する。中央付近を１号住居跡に切られている。北側で13号溝跡、ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走るが、１号住居跡北側で一旦途切れる。検出された長さは全体で10.75m、幅は0.3m前後を測る。深さは北側が0.16mで断面形が逆台形、南側が0.08m程で船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、13号溝跡同様、黒褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、須恵器甕の胴下部片（第55図１）のみである。南比企産。

本溝跡の時期は、出土遺物や１号住居跡との関係から９世紀前半ないし中頃と思われる。

第15号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の29―40グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは1.9mと短く、東側は途切れている。幅0.3m前後、深さは0.06mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は黄褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第16号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の29―40～42グリッドに位置する。中央付近北側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向にやや蛇行して走り、南側では二条に分かれている。検出された長さは9.7m、幅は0.5～1.2m、深さは0.16mを測る。断面形は北側が逆台形、南側がW状を呈する。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、須恵器高台付椀（１）、長頸瓶（２）、甕（３～５）がある。末野産と南比企産がみられた。１は口縁部の外反が弱い。２は口縁部から頸部、３は底部、４・５は胴下部片である。

本溝跡の時期は、９世紀末を中心とした段階と思われる。

第17号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28―41グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、すぐ東側に18号溝跡が隣接して併走する。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは1.7mと短く、南側は途切れている。幅は0.4m、深さは0.12mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は黄褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第18号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の28―40・41グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、西側には17号溝跡が併走している。

ほぼ南北方向に走るが、中央付近で一旦途切れる。17号溝跡同様、南側は途切れている。検出された長さは4.9m、幅は0.2～0.55m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は黄褐色土（２層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第19号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27・28―41グリッドに位置する。20・21号溝跡と重複するが、新旧関係は不明

である。

ほぼ東西方向に走るが、東側は途切れている。検出された長さは1.8mと短く、幅は0.4m前後、深さは0.06mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、黄褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第20号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27―41～43グリッドに位置する。東側を併走する21号溝跡を切っている。19・23号溝跡、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走る。23号溝跡以南では東側の立ち上がりが確認できなかった。検出された長さは9.4m、幅0.3～0.5mを測り、深さは0.08mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は古墳時代前期の土師器小片が検出されたが、図示不可能であり、伴うものではない。

本溝跡の時期は不明である。

第21号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27―41～43グリッドに位置する。西側を併走する20号溝跡に切られている。19号溝跡との新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走るが、23号溝跡との重複箇所手前で20号溝跡と接続する。検出された長さは4.7m程、幅は0.3mを測り、深さは0.08mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（2層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は古墳時代前期の土師器小片が検出されたが、図示不可能であり、伴うものではない。

本溝跡の時期は不明である。

第22号溝跡（第45図）

平成13年度調査III区の26―41・42グリッドに位置する。2号住居跡を切っている。12・24号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

北西方向から南東方向に走る。検出された長さは、12号溝跡との接続箇所から3.5mと短い。幅は0.5m前後、深さは0.12m程を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（7層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。伴うものか定かではない。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係などから9世紀末以降と思われる。

第23号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27・28―42グリッドに位置する。10・12号溝跡に切られている。20号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは5.5m、幅は0.25～0.45m、深さは0.18m前後を測る。断面形は、ほぼ逆台形を呈する。覆土は図示できなかったが、灰褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

出土遺物（第55図）は、須恵器高台付椀（1）、皿（2）がある。古墳時代前期の土師器台付甕（3・4）は流れ込みである。1・2は末野産。ともに底部は回転糸切り痕を残す。

本溝跡の時期は、９世紀後半段階と思われる。

第24号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の26―41～45グリッドに位置する。２号住居跡、１号柵列跡を切り、４・６号井戸跡、12号溝跡に切られている。22・25号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向にやや蛇行して走る。南端は調査区外に延びる。検出された長さは、12・22号溝跡との接続箇所から19.5mを測る。幅は0.5～0.9m、深さは0.37m前後である。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した北側では三層（３～５層）、南側では一層（１層）のみであった。灰色系の土を基調とする。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、陶器甕の底部片（第55図１）のみである。常滑産。鉄釉がかかる。

本溝跡の時期は、近世段階と思われる。

第25号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の25・26―41～44グリッドに位置する。２号住居跡、３・５・10号土坑を切っている。24号溝跡、７号井戸跡、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

北西方向から南東方向にやや蛇行して走る。南端で10号土坑と接続する。検出された長さは15.6m、幅は0.4m前後、深さは0.06～0.12mを測る。断面形は北側が船底状、南側が逆台形を呈する。覆土は黒褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第26号溝跡（第42図）

平成13年度調査III区の30・31―42・43グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

３・７・９号住居跡の間を縫うように北東方向から南西方向に走る。検出された長さは7.7m、幅は0.2～0.3mを測り、深さは0.04mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は暗褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第27号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27～29―43グリッドに位置する。東端で10号溝跡、３号井戸跡に切られ、その手前付近ではピット二つと重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ東西方向にやや蛇行して走る。検出された長さは9.1m、幅は0.2～0.35m、深さは0.14m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、９世紀代と思われる。

第28号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の27―44・45グリッドに位置する。東側を併走する29号溝跡を切っている。また、直接的な重複関係はないが、東側には10・12号溝跡が併走している。

ほぼ南北方向に走り、南側は調査区外に延びる。検出された長さは1.8mと短く、幅0.8m前後、深さ0.12mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（２層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第29号溝跡（第45・46図）

平成13年度調査III区の26・27―44・45グリッドに位置する。西側の28号溝跡に切られている。

ほぼ南北方向に走り、南側は調査区外に延びる。検出された長さは1.7mと短く、幅0.8m前後、深さ0.38mを測る。断面形はほぼ逆台形を呈する。覆土は三層（7～9層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器小片が検出されたが、図示不可能であり、伴うものではない。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第30号溝跡（第47・49図）

平成15年度調査区の23・24―47グリッドに位置する。南側を併走する31号溝跡に切られている。

北東方向から南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.6m、幅は1～1.4mを測る。南側にテラス状の段を持つ。深さは最大0.78mを測る。覆土は、層位を確認した所では七層（5～11層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物は、土器かわらけ（第55図1）のみである。ほぼ完形。厚手で、口縁部が直線的に開く。

本溝跡の時期は、中世段階と思われる。

第31号溝跡（第47・49図）

平成15年度調査区の23・24―47グリッドに位置する。北側を併走する30号溝跡を切っている。

確認面の都合から東側は検出されなかったが、調査区境での土層断面にその痕跡が認められたことから、30号溝跡同様、北東方向から南西方向に走る。両端はともに調査区外に延びる。検出された長さは2.7m、幅は0.35～0.6m、深さは0.18m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は、層位を確認した所では二層（12・13層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物は、磁器猪口（第55図1）のみである。ほぼ完形。端反形を呈し、透明釉がかかる。肥前系。

本溝跡の時期は、17世紀代と思われる。

第32号溝跡（第47・49図）

平成15年度調査区の24―48・49グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、ピットが集中する箇所にある。南側には33号溝跡が併走している。

北東方向から南西方向に走り、西側は調査区外に延びる。検出された長さは1.7mと短い。幅は0.6～0.7m、深さは0.16m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は灰色土（2層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

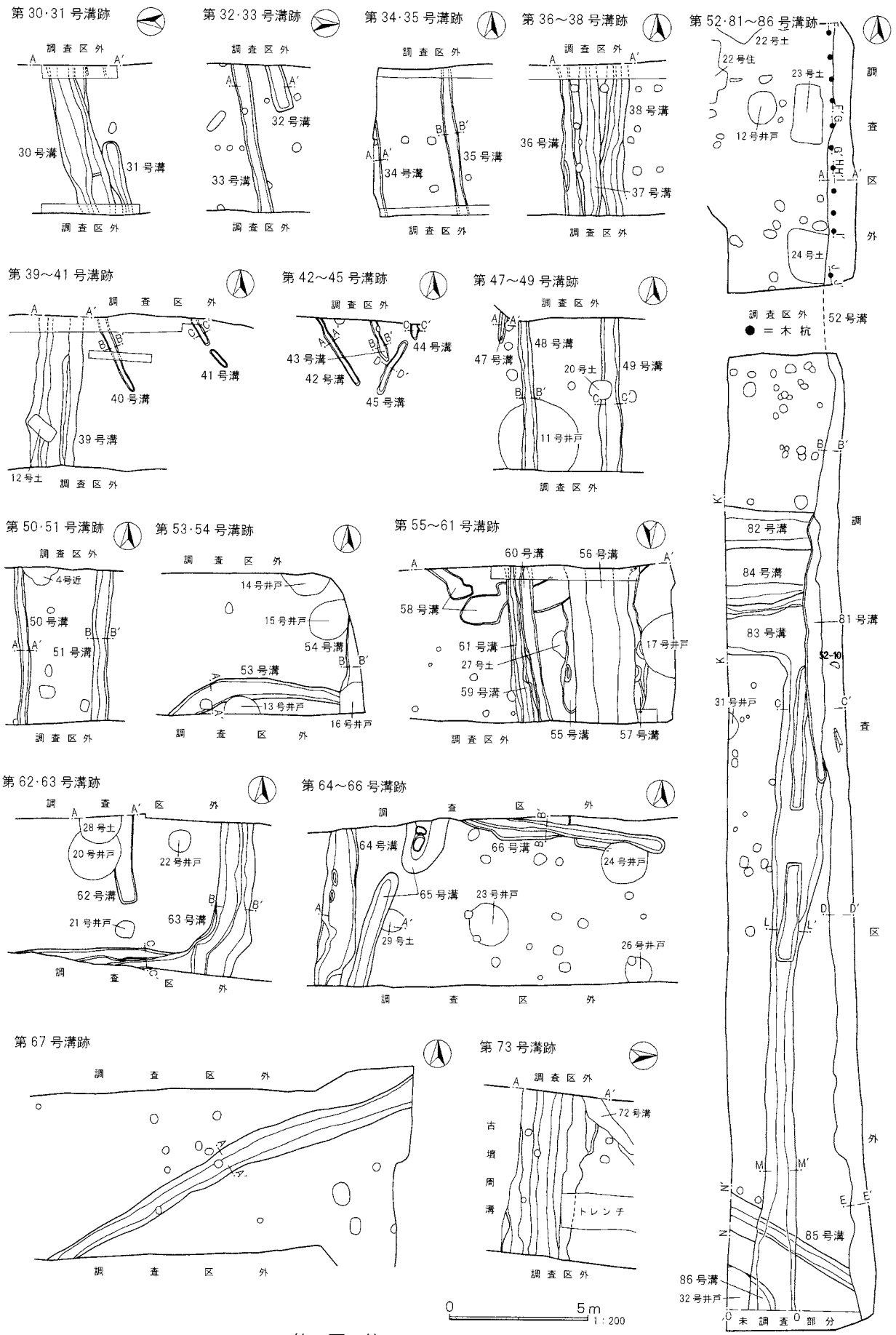
第33号溝跡（第47・49図）

平成15年度調査区の23・24―48・49グリッドに位置する。ピットが密集する箇所にあり、所々で重複しているが、新旧関係は不明である。北側には32号溝跡が併走している。

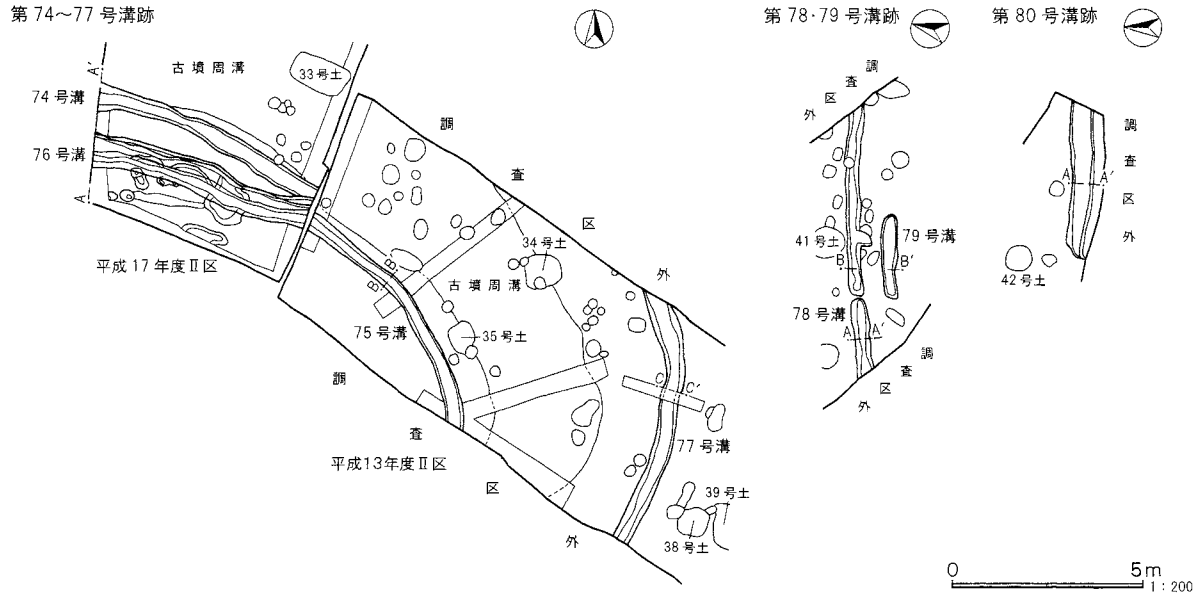
北東方向から南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.5m、幅は0.4～0.6m、深さは0.12m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土はオリーブ色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は在地系土器の小片が1点検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。



第47図　第30～67・73・81～86号溝跡



第48図　第74～80号溝跡

第34号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の49―53・54グリッドに位置する。３号掘立柱建物跡のＰ１に切られている。

ほぼ南北方向に走るが、やや北西に傾く。検出できたのは東側のみであり、西・南・北側は調査区外にある。検出できた長さは3.5m、深さは0.1m前後を測る。幅は不明である。断面形は逆台形を呈すると思われる。覆土は灰色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第35号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の48・49―53・54グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ南北方向に走るが、34号溝跡同様、やや北西に傾く。検出された長さは5.4m、幅は0.4m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰色土(１層)のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第36号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の48―53・54グリッドに位置する。４号掘立柱建物跡に切られている。東側には隣接して37・38号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.5m、幅は0.35～0.6m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土(10層)のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第37号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の48―53・54グリッドに位置する。36号溝跡同様、４号掘立柱建物跡に切られて

いる。両側を併走する36・38号溝跡は、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.5m、幅は0.55～0.8m、深さは0.54m前後を測る。断面形はU字状を呈する。覆土は、層位を確認した所では六層（11～16層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第38号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の48―53・54グリッドに位置する。36・37号溝跡同様、4号掘立柱建物跡に切られている。西側を併走する36・37号溝跡は、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。南東部の立ち上がりは不明瞭であった。検出された長さは5.5m、幅は0.6～0.9m、深さは0.5m前後を測る。断面形はほぼ逆台形を呈するが、中段に稜を持つ箇所もみられた。覆土は、層位を確認した所では九層（17～25層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第39号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の47―53・54グリッドに位置する。溝内南西部を12号土坑に切られている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.5m、幅は1.7m前後、深さは0.56m前後を測る。断面形は、ほぼ逆台形を呈するが、底面東側にはさらに溝状の掘り込みがみられた。覆土は、層位を確認した所では11層（9～19層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器・土師器小片や木片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第40号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の46・47―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はないが、西側には類似した溝跡（41～45号溝跡）がほぼ同方向に走っており、関連遺構と思われる。

北西方向から南東方向に走り、北西部は調査区外に延びる。検出された長さは2.9m、幅は0.2～0.3mを測り、深さは0.04mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

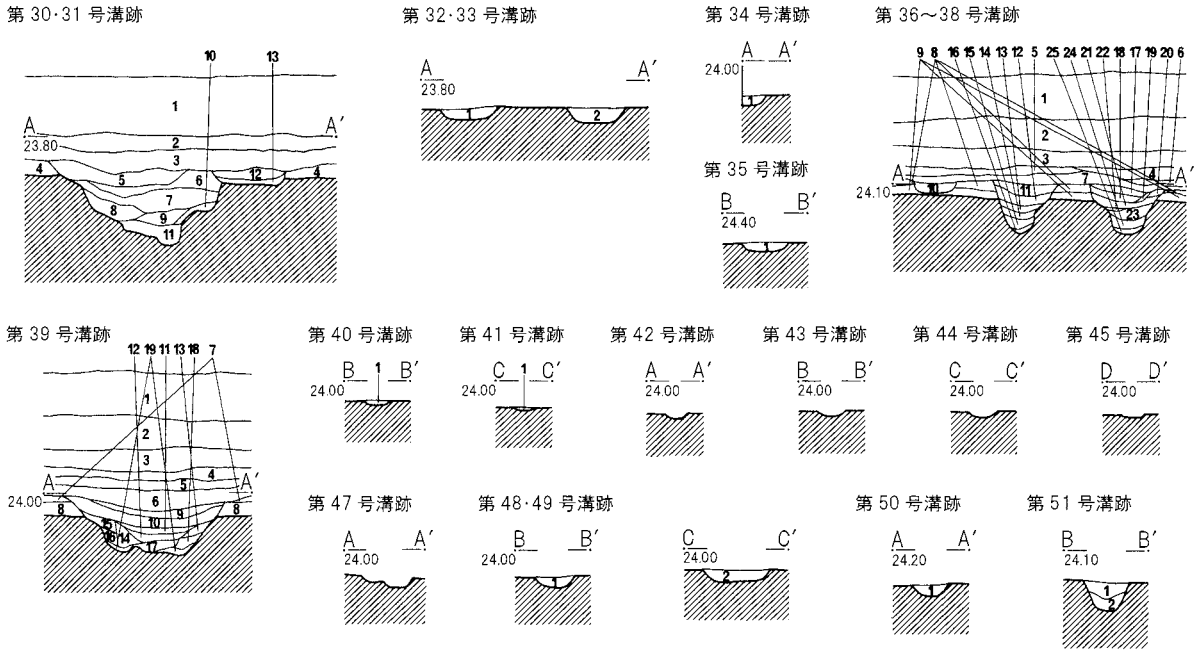
遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第41号溝跡（第47・49図）

平成17年度調査Ⅰ区の46―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。周辺にある溝跡（40・42～45号溝跡）と類似しており、関連遺構と思われる。

北西方向から南東方向に走り、中央付近で一旦途切れる。北西部は調査区外に延びる。検出された長さは2.2m、幅は0.2mを測り、深さは0.02mと非常に浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は灰褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。



第30・31号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 褐 灰 色　土：火山灰多量含む。
3 灰　　色　土：粘土質。炭化物少量含む。
4 灰 黄 色　土：粘土質。
5 灰　　色　土：粘土質。炭化物微量、灰オリーブ色土ブロック多量含む。
6 灰　　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
7 灰　　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
8 暗 灰 色 粘 土
9 灰 色 粘　土：灰オリーブ色粘土ブロック少量含む。
10 灰 白 色 粘　土：灰色粘土ブロック少量含む。
11 灰 色 粘　土：下層に酸化鉄多量含む。
12 灰オリーブ色土：粘土質。
13 灰　　色　土：粘土質。

第32・33号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 オリーブ色土：粘土質。炭化物少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。灰オリーブ色粘土ブロック少量含む。

第34号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：シルト質。灰白色粒微量、褐色粒多量含む。

第35号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰 色 土：粘土質。褐色粒・灰黄色粒微量含む。

第40号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰褐色土：粘土質。酸化鉄・灰白色粒微量含む。

第41号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
1 灰褐色土：粘土質。灰白色粒微量含む。

第48・49号溝跡
土層説明（ＢＢ′ ＣＣ′）
1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
2 暗灰色土：粘土質。焼土微量、酸化鉄多量含む。

第50号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：シルト質。暗褐色粘土ブロック少量、黄褐色土ブロック
・酸化鉄多量含む。

第51号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 褐灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
2 灰 色 土：シルト質。黄褐色土ブロック・酸化鉄多量含む。

第36～38号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰 色 土：酸化鉄少量、火山灰多量含む。
3 青 灰 色 土：礫少量、火山灰多量含む。しまり有。
4 灰 色 土：火山灰微量、酸化鉄多量含む。
5 暗 灰 色 土：火山灰・酸化鉄微量含む。
6 灰 色 土：火山灰微量、酸化鉄少量含む。
7 暗 灰 色 土：火山灰・酸化鉄微量、灰黄色粒少量含む。
8 灰 色 土：火山灰微量、灰黄色粒多量含む。
9 灰 褐 色 土：灰黄色粒少量含む。
10 灰 褐 色 土：酸化鉄微量、灰黄色粒多量含む。
11 灰 色 土：シルト質。灰黄色粒微量、酸化鉄少量含む。
12 暗 灰 色 土：シルト質。火山灰微量、酸化鉄少量含む。
13 褐 灰 色 土：粘土質。火山灰微量、酸化鉄・灰黄色粒少量含む。
14 褐 灰 色 土：粘土質。灰白色粒少量、酸化鉄多量含む。
15 褐 色 土：粘土質。灰白色土ブロック少量含む。
16 褐 色 粘 土：灰白色土ブロック少量含む。
17 灰 色 土：シルト質。灰黄色粒微量、酸化鉄少量含む。
18 灰 褐 色 土：火山灰微量、焼土粒少量、灰黄色粒多量含む。
19 灰 黄 色 土：酸化鉄多量含む。
20 灰 色 土：シルト質。灰黄色粒微量含む。
21 灰 色 土：粘土質。灰黄色粒多量含む。
22 灰 色 土：シルト質。
23 灰 色 粘 土：灰白色粘土ブロック微量含む。
24 暗灰色粘土：褐色粘土ブロック・灰白色粒少量含む。
25 暗灰色粘土

第39号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰 色 土：酸化鉄少量、火山灰多量含む。
3 青 灰 色 土：礫少量、火山灰多量含む。しまり有。
4 灰 色 土：火山灰微量、酸化鉄多量含む。
5 暗 灰 色 土：火山灰・酸化鉄微量含む。
6 灰 色 土：火山灰微量、灰黄色粒多量含む。
7 灰 褐 色 土：灰黄色粒少量含む。
8 褐 色 土：灰白色粒微量、酸化鉄少量含む。
9 灰 色 土：粘土質。火山灰微量、酸化鉄少量含む。
10 暗 灰 色 土：粘土質。火山灰・酸化鉄・灰色粒微量含む。
11 灰褐色粘土：酸化鉄微量、炭化物少量含む。
12 褐灰色粘土：酸化鉄微量含む。
13 灰褐色粘土：灰白色粒微量含む。
14 灰 色 土：シルト質。酸化鉄・灰白色粒微量、炭化物少量含む。
15 暗灰色粘土：灰白色粒多量含む。
16 暗灰色粘土：炭化物・灰白色粒少量含む。
17 褐灰色粘土：灰白色粒微量、炭化物少量含む。
18 灰褐色粘土：灰白色粒多量含む。
19 褐 色 粘 土：灰白色粘土ブロック少量含む。

0　2m
1：80

第49図　第30～45・47～51号溝跡土層断面図

第42号溝跡（第47・49図）

平成16年度調査区の44―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。周辺にある溝跡（40・41・43～45号溝跡）と類似しており、関連遺構と思われる。

北西方向から南東方向に走り、北西部は調査区外に延びる。検出された長さは2.9m、幅は0.2m程であり、深さは0.04mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第43号溝跡（第47・49図）

平成16年度調査区の44―53グリッドに位置する。調査区境付近でピットと重複するが、新旧関係は不明である。周辺にある溝跡（40～42・44・45号溝跡）と類似しており、関連遺構と思われる。

北西方向から南東方向に走り、北西部は調査区外に延びる。検出された長さは1.6m、幅は0.15～0.3mを測り、深さは0.06mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第44号溝跡（第47・49図）

平成16年度調査区の44―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。周辺にある溝跡（40～43・45号溝跡）と類似しており、関連遺構と思われる。

ほぼ南北方向に走り、北側は調査区外に延びる。検出された長さは0.6mと短い。幅は0.25～0.3mであり、深さは0.06mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第45号溝跡（第47・49図）

平成16年度調査区の44―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。周辺にある溝跡（40～43・45号溝跡）と類似しており、関連遺構と思われる。

北東方向から南西方向に走り、本溝跡のみ類似する他の溝跡とは方向が異なる。検出された長さは2.2m、幅は0.2～0.25mを測り、深さは0.04mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第46号溝跡（第43・44図）

平成13年度調査Ⅰ区の39～41―53・54グリッド（③）、平成17年度調査Ⅱ区の44・45―56・57グリッド（④）で検出された。③ではピットと重複しており、層位を確認した所では切られているが、その他については、新旧関係は不明である。④では71・72号溝跡を切っている。

北東方向から南西方向に走り、6号溝跡とほぼ同方向に走る。検出された長さは、③が9.8m、④が7.1mを測る。両端はさらに調査区外に延びる。幅は0.5～1.1m、深さは0.24～0.34mを測る。断面形は、ほぼ逆台形を呈する。覆土は二層（1・2層、10・11層）からなり、自然堆積と思われる。

出土遺物は、古墳時代前期の土師器壺（第55図1）、甕（2）の破片のみである。④から出土した。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第47号溝跡（第47・49図）

平成14年度調査Ⅰ区の37―52・53グリッドに位置する。調査区境付近でピットと重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走り、北側は調査区外に延びる。検出された長さは1.1mと短い。幅は0.3m前後を測り、深さは0.06mと浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第48号溝跡（第47・49図）

平成14年度調査Ⅰ区の37―53・54グリッドに位置する。南側で11号井戸跡を切っている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.4m、幅0.35～0.55m、深さ0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は暗灰色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であり、伴うものではない。

本遺跡の時期は、周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第49号溝跡（第47・49図）

平成14年度調査Ⅰ区の36―53・54グリッドに位置する。中央付近を20号土坑に切られている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.6m、幅0.6～0.9m、深さ0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は暗灰色土（2層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第50号溝跡（第47・49図）

平成14年度調査Ⅰ区の34―52～54グリッドに位置する。北端を4号近世墓に切られている。南端ではピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.7m、幅0.3～0.35m、深さ0.12m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は暗灰色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第51号溝跡（第47・49図）

平成14年度調査Ⅰ区の33―52～54グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.45m、幅は0.5～0.6m、深さは0.3m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（1・2層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物が検出されなかったため、本溝跡の時期は不明である。

第52号溝跡（第47・50図）

平成14年度調査Ⅰ・Ⅱ区の31・32―52～61グリッドに位置する。Ⅰ区南端で24号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。Ⅱ区は多くの溝跡（81～85号溝跡）があるが、本溝跡がすべてを切っている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは、Ⅰ区が9.6m、Ⅱ区が35mを測る。全長47.2m程となる。検出できたのは西側の立ち上がりのみであるため、幅は不明である。底面は検出できなかったが、深さは現況で0.36～0.62mを測る。覆土は、層位を確認した所で異なるが、おおむね

三～五層からなる。自然堆積と思われる。なお、Ⅰ区では立ち上がりに沿って木杭が11本確認された。木杭はおおよそ0.8mの間隔で地山に直接打ち込まれていた。

出土遺物（第56図）は、磁器小坏（1）、碗（2）、陶器灯明皿（3）、鉢（4）、土器かわらけ（5・6）、焙烙（7）、軒丸瓦（8）、桶（9）、石臼（10）、五輪塔（11）がある。

1・2は丸形を呈する肥前系の染付である。1は二重網目文、2は草花文である。3・4は瀬戸・美濃系。3は鉄釉、4は灰釉がかかる。5・6は小皿状を呈する。6は口縁部が肥厚している。7は内耳部片である。8は軒丸瓦。やや歪んでおり、正円形ではない。9は片端が弧状に加工されており、底板の一部と思われる。10は半分を欠く。11は五輪塔の地輪である。種子が残存する。

本溝跡の時期は、18世紀代と思われる。

第53号溝跡（第47・50図）

平成12年度調査Ⅰ区の27・28―53グリッドに位置する。13号井戸跡を切っている。54号溝跡、16号井戸跡、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ東西方向に走るが、西側は南西方向に屈曲し、調査区外に延びる。東側は54号溝跡、16号井戸跡に接続する。検出された長さは5.8m、幅は0.4～0.8m、深さは0.14m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は黒褐色土（1層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第54号溝跡（第47・50図）

平成12年度調査Ⅰ区の27―53グリッドに位置する。53号溝跡、15・16号井戸跡と重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ南北方向に走る。検出できたのは西側半分のみである。東・北側は調査区外にあり、南側は16号井戸跡に接続する。検出できた長さは2.3m、深さは0.36mを測る。幅は不明である。断面形は船底状を呈すると思われる。覆土は図示できなかったが、黒褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第55号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の25・26―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にあり、56・58号溝跡、27号土坑を切っている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは4.1m、幅は1m程、深さは0.3m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では四層（25～28層）からなる。上層（25・26層）には、火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

遺物は、近世の陶磁器及び在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

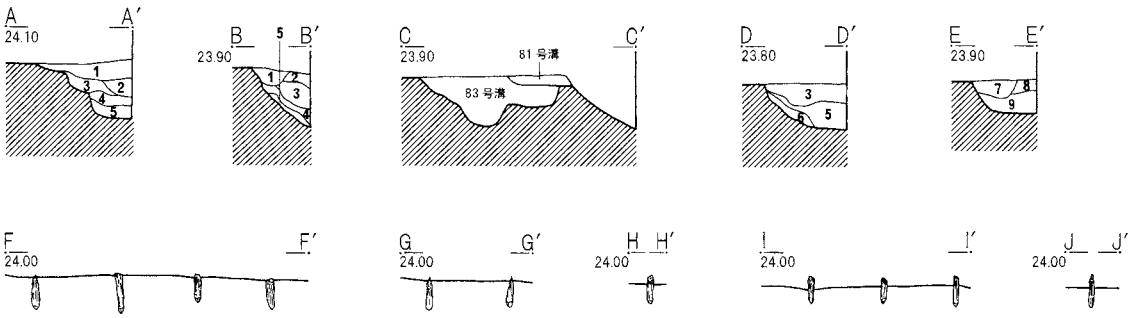
本溝跡の時期は、出土遺物と周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第56号溝跡（第47・50図）

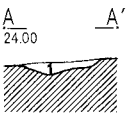
平成15年度調査区の25・26―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。57・58号溝跡を切り、55号溝跡に切られている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.6m、幅は2～2.2m程、深さは1.22m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では19層(29～47

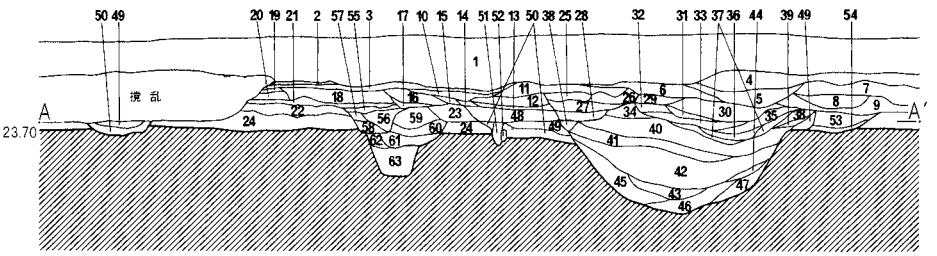
第 52 号溝跡



第 53 号溝跡



第 55～61 号溝跡



第 54 号溝跡

第52号溝跡

土層説明（ＡＡ′）

1 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 褐 灰 色 土：粘土質。炭化物少量、酸化鉄多量含む。
3 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
4 緑灰色粘土：酸化鉄少量含む。
5 暗灰色粘土：酸化鉄少量、灰色粘土多量含む。下層に灰白色粘土層状に含む。
6 灰　色　土：粘土質。

土層説明（ＢＢ′ ＤＤ′ ＥＥ′）

1 灰　色　土：粘土質。暗灰色シルト・酸化鉄少量含む。
2 灰　色　土：粘土質。
3 暗 灰 色 土：粘土質。酸化鉄・砂多量含む。
4 灰 色 粘 土：緑灰色粘土少量含む。
5 緑灰色粘土：酸化鉄少量含む。
6 灰 色 粘 土：酸化鉄・緑灰色粘土少量含む。
7 灰　色　土：黄灰色粘土少量、酸化鉄多量含む。
8 暗 灰 色 土：酸化鉄・炭化物多量含む。
9 青灰色粘土：酸化鉄多量含む。

第53号溝跡

土層説明（ＡＡ′）

1 黒褐色土：黒褐色土ブロック少量含む。

第55～61号溝跡

土層説明（ＡＡ′）

1 盛　　土
2 黄 灰 色 土：酸化鉄微量含む。
3 灰　色　土：粘土質。火山灰・酸化鉄微量含む。
4 灰　色　土：酸化鉄・礫少量含む。
5 黄 灰 色 土：粘土質。火山灰微量、酸化鉄少量含む。
6 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量、火山灰多量含む。しまり有。
7 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。しまり有。
8 灰　色　土：粘土質。黒褐色土ブロック多量含む。
9 灰　色　土：粘土質。火山灰・黒褐色土ブロック微量含む。
10 青 灰 色 土：粘土質。酸化鉄・炭化物微量含む。
11 黄 灰 色 土：粘土質。炭化物少量含む。
12 灰 白 色 土：粘土質。火山灰・灰色土ブロック微量、酸化鉄多量含む。
13 灰　色　土：粘土質。火山灰多量含む。
14 灰 白 色 土：粘土質。黄灰色土ブロック多量含む。
15 青 灰 色 土：粘土質。火山灰・酸化鉄微量含む。
16 灰 白 色 土：粘土質。火山灰・酸化鉄微量、黄灰色土ブロック多量含む。
17 灰　色　土：粘土質。火山灰少量含む。
18 灰 白 色 土：粘土質。火山灰微量、黄灰色土ブロック・酸化鉄多量含む。
19 灰 白 色 土：酸化鉄少量含む。
20 緑 灰 色 土：粘土質。灰色土ブロック多量含む。
21 灰　色　土：粘土質。火山灰少量含む。
22 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
23 青 灰 色 土：粘土質。酸化鉄微量、火山灰少量含む。
24 黒 褐 色 土：粘土質。
25 灰　色　土：粘土質。火山灰少量含む。
26 暗青灰色土：粘土質。火山灰微量含む。
27 灰　色　土：粘土質。下層に火山灰多量含む。
28 灰 色 粘 土
29 灰 白 色 土：粘土質。灰色土ブロック少量、火山灰多量含む。
30 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量、火山灰多量含む。
31 灰 色 粘 土：火山灰層状に含む。
32 灰 白 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
33 黄灰色粘土：酸化鉄微量含む。
34 灰 色 粘 土
35 青 灰 色 土：シルト質。
36 黄灰色粘土：木片層状に含む。
37 青灰色粘土：灰色粘土ブロック微量含む。
38 青灰色粘土：しまり有。
39 灰　色　土：粘土質。しまり有。
40 青灰色粘土：砂少量含む。
41 灰 色 粘 土
42 灰色シルト
43 灰 色 粘 土
44 灰色シルト：緑灰色粒微量、暗灰色粘土ブロック多量含む。
45 灰 色 粘 土：青灰色シルト少量含む。
46 緑灰色粘土：灰色粘土ブロック微量含む。
47 暗灰色粘土
48 青 灰 色 土：粘土質。火山灰多量含む。しまり有。
49 暗灰色粘土：緑灰色粘土少量含む。
50 青 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
51 青灰色粘土：ややシルト質。
52 青灰色粘土
53 灰　色　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
54 灰 白 色 土：粘土質。灰色土ブロック微量、酸化鉄・緑灰色粘土少量含む。
55 青灰色粘土：火山灰・酸化鉄微量含む。
56 灰 色 粘 土：火山灰微量、酸化鉄多量含む。
57 灰 色 粘 土：黒褐色土ブロック多量含む。
58 青灰色粘土
59 青灰色粘土
60 灰 色 粘 土：炭化物層状に含む。しまり有。
61 灰 色 粘 土：青灰色粒少量含む。
62 青灰色粘土：灰色粘土ブロック多量含む。
63 灰 色 粘 土：暗灰色粒・青灰色粒少量含む。

0　2m
1：80

第50図　第52～61号溝跡土層断面図

層）からなる。上層（29～31層）には、火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

遺物に土器類はなく、桃の種子が検出されただけである。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第57号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の26―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。56・58号溝跡、17号井戸跡に切られており、東側立ち上がりを欠く。

ほぼ南北方向に走るが、やや蛇行している。北側はトレンチ内で終息し、南側は調査区外に延びる。検出された長さは4.7m、幅は現況で0.66m、深さは0.22m前後を測る。底面に浅いピット状の掘り込みがある箇所もみられたが、断面形は、おおむね船底状を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では二層（53・54層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第58号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の24～26―53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。57号溝跡を切り、55・56・59～61号溝跡に切られている。

ほぼ半円状に走り、北東部で一旦途切れている。両端は調査区外に延びる。検出された長さは9.1m、幅は0.4～１m、深さは0.18m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では五層（48～52層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は常滑産陶器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物と周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第59号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の25―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。58号溝跡及び同方向に走る60・61号溝跡を切っている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.7m、幅は0.3～0.65m、深さは0.28m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では四層(55～58層）からなる。上層（55・56層）には、火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。この他に桃の種子も検出された。

本溝跡の時期は、出土遺物と周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第60号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の25―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。58・61号溝跡を切り、59号溝跡に切られている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.7m、幅は0.3～0.4m、深さは0.4m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では三層(59～61層)からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第61号溝跡（第47・50図）

平成15年度調査区の25―52・53グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。58号溝跡を切り、

59・60号溝跡に切られている。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.7m、幅は0.35～0.8m、深さは0.42m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は、層位を確認した南側の調査区境では二層（62・63層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、砥石（第56図１）のみである。在地産土器の小片も検出されたが、図示不可能であった。この他に覆土から貝の小片も検出された。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第62号溝跡（第47・51図）

平成15年度調査区の21―52・53グリッドに位置する。28号土坑、20号井戸跡に切られている。

ほぼ南北方向に走り、北側は調査区外に延びる。検出された長さは3.2m、幅は0.65m、深さは0.46m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（５・６層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第63号溝跡（第47・51図）

平成12年度調査II区及び平成15年度調査区の20～22―52・53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

南側はほぼ東西方向に走るが、20・21―53グリッド境から南北方向に走る。両端は調査区外に延びる。検出された長さは12.5m、幅は1.15～1.7m、深さは0.46m前後を測る。南北方向に走る箇所では東側に、東西方向に走る箇所では北側にテラス状の段を持つ。覆土は三層（１～３層、４～６層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第64号溝跡（第47・51図）

平成12年度調査II区の19・20―52・53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ南北方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.7m、幅0.9～1.3m、深さ0.22m前後を測る。溝内左右にテラス状の段を持つ箇所や底面に浅いピット状の掘り込みがある箇所もみられたが、断面形はおおむね船底状を呈する。覆土は褐灰色土（１層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

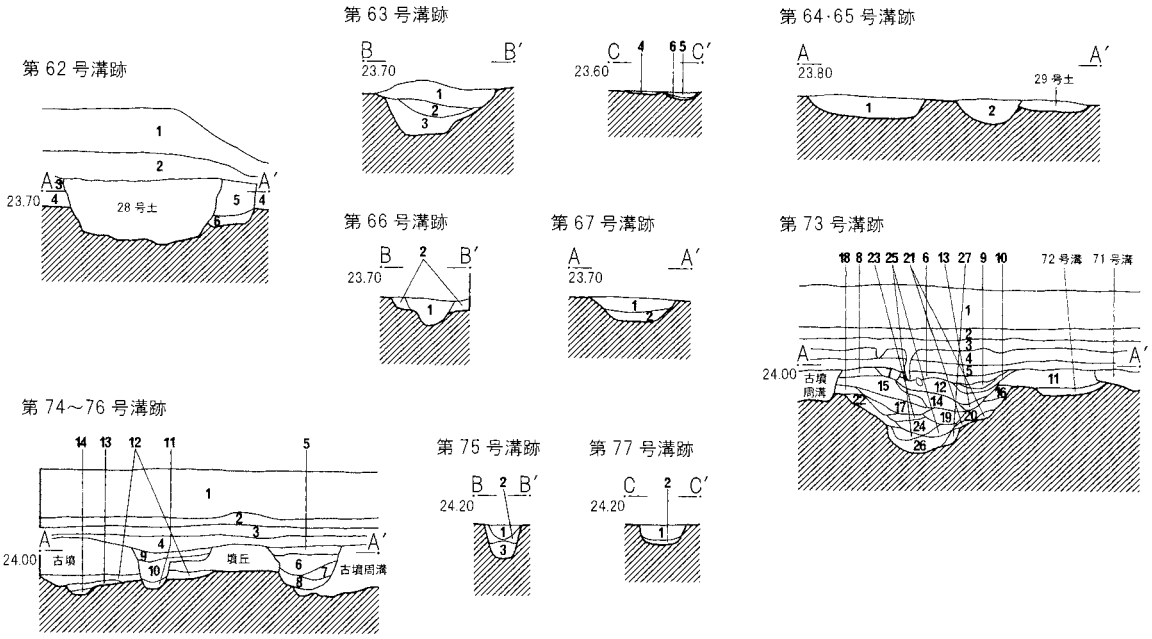
第65号溝跡（第47・51図）

平成12年度調査II区の19・20―52・53グリッドに位置する。29号土坑を切っている。

北東方向から南西方向に走り、北側で一旦途切れている。検出された長さは6.5m、幅は幅広の北側が1.4m前後、南側が0.6～0.7mを測る。深さは0.26m前後を測るが、北側底面にはピット状の浅い掘り込みがみられた。断面形は船底状を呈する。覆土は褐灰色土（２層）のみである。自然堆積と思われる。

出土遺物（第56図）は、陶器碗（１）、土器かわらけ（２）がある。常滑産陶器小片も検出されたが、図示不可能であった。１は天目である。鉄釉がかかる。瀬戸・美濃系。２は厚手で、小皿状を呈する。

本溝跡の時期は、17世紀前半以降と思われる。



第62号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
3 灰 色 土：酸化鉄多量含む。
4 黒褐色土：酸化鉄少量含む。
5 灰 色 土：粘土質。黒褐色土ブロック・酸化鉄少量含む。
6 黒褐色土：灰白色粘土ブロック微量含む。

第63号溝跡
土層説明（ＢＢ′ ＣＣ′）
1 褐灰色土：酸化鉄・灰オリーブ色粒少量含む。
2 黄灰色土：酸化鉄・炭化物・灰オリーブ色粒少量含む。
3 黄灰色土
4 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量含む。
5 灰色粘土：灰白色粒微量含む。
6 灰色粘土：灰白色粒微量含む。５層より暗い。

第64・65号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：酸化鉄・灰黄色粒少量含む。
2 褐灰色土：酸化鉄少量含む。

第66号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 暗灰黄色土：酸化鉄・炭化物少量含む。
2 暗灰黄色土：オリーブ黒色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。

第67号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：酸化鉄少量含む。
2 褐灰色土：灰白色粒・ブロック少量含む。

第75号溝跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰褐色土
2 灰褐色土：酸化鉄多量含む。
3 灰褐色土

第77号溝跡
土層説明（ＣＣ′）
1 黒褐色土：酸化鉄少量含む。
2 黒褐色土：酸化鉄多量含む。

第73号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：火山灰多量含む。
3 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 灰 黄 色 土：灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰　色　土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
6 暗 灰 色 土：粘土質。灰白色粒微量、酸化鉄多量含む。
7 灰　色　土：シルト質。酸化鉄多量含む。
8 褐 灰 色 土：灰黄色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
9 灰 白 色 土：粘土質。
10 暗 灰 色 土：粘土質。炭化物少量含む。
11 灰色シルト：酸化鉄多量含む。
12 暗灰色シルト：酸化鉄多量含む。
13 暗 灰 色 土：粘土質。
14 暗 褐 色 土：粘土質。
15 灰色シルト：酸化鉄少量含む。
16 青灰色シルト：酸化鉄少量含む。
17 灰　色　土：粘土質。しまり有。
18 灰　色　土：粘土質。
19 暗 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
20 暗 灰 色 土：粘土質。灰白色粘土ブロック微量含む。
21 灰 色 粘 土：灰白色粒少量含む。
22 暗 灰 色 土：粘土質。
23 灰　色　土：粘土質。
24 暗 灰 色 土：粘土質。
25 暗灰色粘土：灰白色粒微量含む。
26 黒灰色粘土：灰白色土ブロック微量含む。
27 灰 色 粘 土：灰白色土ブロック微量含む。

第74～76号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：火山灰多量含む。
3 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 暗灰色土：酸化鉄多量含む。
5 灰　色　土：灰白色粒・ブロック少量、酸化鉄多量含む。
6 灰　色　土：酸化鉄少量、灰白色粒・ブロック多量含む。
7 灰褐色土：粘土質。灰色土ブロック・灰白色粒少量含む。
8 灰　色　土：粘土質。灰白色粒少量含む。
9 褐灰色土：火山灰・酸化鉄少量含む。
10 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
11 暗灰色粘土：酸化鉄多量含む。
12 灰褐色土：粘土質。灰白色土ブロック微量、酸化鉄少量含む。
13 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
14 暗灰色土：粘土質。灰白色土微量含む。

0　2m
1：80

第51図　第62～67・73～77号溝跡土層断面図

第66号溝跡（第47・51図）

平成12年度調査II区の17～19―52グリッドに位置する。24号井戸跡を切っている。調査区外北西部で65号溝跡と重複すると思われるが、新旧関係については不明である。

ほぼ東西方向に走るが、やや北西及び南東方向に傾く。北西部は調査区外に延びる。検出された長さは5.85m、幅は0.4～0.9m、深さは0.26m前後を測る。北西部では両側、南東部では南側にテラス状の段を持つ。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第67号溝跡（第47・51図）

平成12年度調査II区の14～16―52・53グリッドに位置する。ピットと重複するが、新旧は不明である。

北東方向から南西方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは14m、幅0.5～1.2m、深さ0.24m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（１・２層）である。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第68号溝跡（第43図）

平成17年度調査II区の44・45―54・55グリッドに位置する。南側を併走する６号溝跡を切っている。

６号溝跡同様、北東方向から南西方向に走るが、北東部では一旦途切れている。南西部は調査区外に延びるが、北東部は平成13年度調査Ｉ区では確認されていない。検出された長さは9.5m、幅は0.2～0.8m、深さは0.12m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は暗灰色土（10層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第69号溝跡（第43図）

平成17年度調査II区の44・45―55・56グリッドに位置する。北側を併走する６号溝跡を切り、29号井戸跡に切られている。本溝跡の南側には、70号溝跡が併走している。

68号溝跡同様、北東方向から南西方向に走り、南西部は調査区外に延びるが、北東部は平成13年度調査Ｉ区では未確認である。検出された長さは７ｍを測るが、所々途切れる。幅は0.7m程、深さは0.14m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は黒褐色土（８層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は古墳時代前期の土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第70号溝跡（第43・44図）

平成17年度調査II区の44・45―55・56グリッドに位置する。南西部でピットと重複するが、新旧関係は不明である。本溝跡の北側には、69号溝跡が併走している。

68・69号溝跡同様、北東方向から南西方向に走り、南西部は調査区外に延びるが、北東部は平成13年度調査Ｉ区では未確認である。検出された長さは7.6mを測るが、所々途切れている。幅は0.15～0.5m、深さは0.04mと非常に浅い。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色土のみであった。自然堆積と思われる。

出土遺物は、弥生時代中期の壺の口縁部片（第56図１）のみであるが、伴うものではない。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第71号溝跡（第43・44図）

平成17年度調査II区の44・45―56・57グリッドに位置する。72・73号溝跡を切り、46号溝跡に切られている。

試掘調査時に入れたトレンチを境に東側はほぼ東西方向に走り、以西は南西方向に屈曲する。検出された長さは6.6m、幅は0.5～1.4m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は褐灰色土（7・12層）のみである。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、古墳時代前期の台付甕の胴下部片（第56図1）のみである。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第72号溝跡（第43・44図）

平成17年度調査II区の45―57グリッドに位置する。71・73号溝跡に切られている。

北東方向から南西方向に走り、南西部は調査区外に延びる。検出された長さは2.6m、幅は0.35～0.75m、深さは0.1m前後を測る。断面形は船底状を呈する。覆土は灰色土（13層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第73号溝跡（第47・51図）

平成17年度調査II区の44・45―57・58グリッドに位置する。72号溝跡を切り、6号掘立柱建物跡、71号溝跡、上之古墳群第2号墳の周溝に切られている。北東部の一部をトレンチにより欠く。

ほぼ東西方向に走り、両端は調査区外に延びる。検出された長さは5.9m、幅は2.2～2.8m、深さは最大0.86mを測る。溝内両側にテラス状の段を持つ。覆土は、層位を確認した西側の調査区境では22層（6～27層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物（第57図）は、古墳時代前期の土師器壺（1～3）、台付甕（4～17）、器台（18～20）がある。壺は1がミガキ、2は折返口縁部にRL単節縄文、頸部は斜位の刷毛目、3は縦・斜位の刷毛目の後、横位のヘラナデ調整を施している。甕は5・6・16がヘラナデ、その他は刷毛目調整である。6・8～11・13はS字甕であり、11と13は同一個体である。器台はすべてミガキ調整による。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第74号溝跡（第48・51図）

平成17年度調査II区の44・45―58・59グリッドに位置する。上之古墳群第2号墳を切っている。

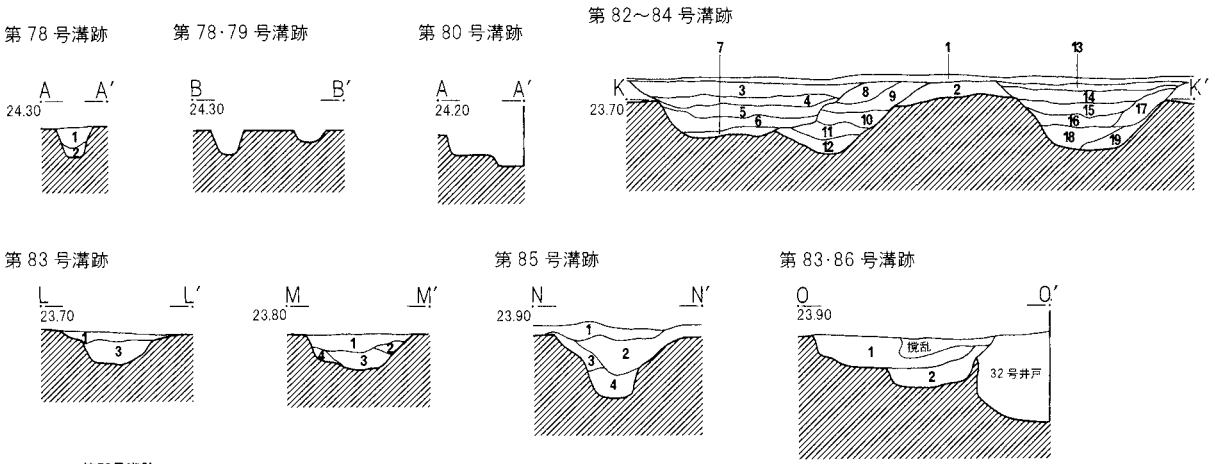
北西方向から南東方向へやや弧状に走る。西側は調査区外に延びるが、東側は隣接する平成13年度調査II区では確認されていない。検出された長さは6.3m、幅は0.3～0.8m、深さは0.46m前後を測る。断面形はほぼ逆台形を呈する。覆土は四層（5～8層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は古墳時代前期の土師器の小片が検出されたが、伴うものではない。

本溝跡の時期は、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第75号溝跡（第48・51図）

平成13年度調査II区及び平成17年度調査II区の44・45―58～60グリッドに位置する。上之古墳群第2号墳及び古墳下にある76号溝跡を切っている。



第78号溝跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：酸化鉄少量含む。
2 黒褐色土：酸化鉄多量含む。

第82～84号溝跡
土層説明（ＫＫ′）
1 灰　色　土：シルト質。
2 暗 灰 色 土：シルト質。
3 灰　色　土：シルト質。焼土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
4 灰　色　土：シルト質。下層に酸化鉄多量含む。
5 灰黄色粘土：酸化鉄少量含む。
6 暗灰色粘土：酸化鉄・炭化物・灰色粘土・礫少量含む。
7 灰 色 粘 土：にぶい黄色粘土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
8 灰 褐 色 土：シルト質。酸化鉄少量含む。
9 灰　色　土：シルト質。酸化鉄多量含む。
10 灰 色 粘 土：黄灰色粘土少量、暗灰色粘土ブロック多量含む。
11 暗灰色粘土：黄褐色粘土少量、酸化鉄多量含む。
12 暗灰色粘土：黄褐色粘土・酸化鉄多量含む。
13 灰　色　土：シルト質。上層に酸化鉄少量含む。
14 灰　色　土：シルト質。下層に酸化鉄多量含む。
15 灰 色 粘 土：黄灰色粘土少量、酸化鉄多量含む。
16 灰 色 粘 土：暗灰色粘土・黄灰色粘土・酸化鉄多量含む。
17 灰 色 粘 土：暗灰色粘土微量、緑灰色粘土少量、酸化鉄多量含む。
18 灰 色 粘 土：炭化物微量、黄褐色粘土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
19 暗灰色粘土：酸化鉄少量含む。

第83号溝跡
土層説明（ＬＬ′ ＭＭ′）
1 暗灰色粘土：酸化鉄多量含む。
2 暗灰色粘土：灰色粘土少量、酸化鉄多量含む。
3 黄灰色粘土：酸化鉄少量含む。
4 緑灰色粘土：酸化鉄・礫少量含む。

第85号溝跡
土層説明（ＮＮ′）
1 灰 褐 色 土：シルト質。酸化鉄少量含む。
2 褐 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
3 灰　色　土：シルト質。酸化鉄少量含む。
4 暗灰色粘土：砂・緑灰色粘土少量、酸化鉄多量含む。

第83・86号溝跡
土層説明（ＯＯ′）
1 灰褐色粘土：酸化鉄多量含む。
2 暗灰色粘土：砂少量、酸化鉄・炭化物多量含む。

0　2m
1：80

第52図　第78～80・82～86号溝跡土層断面図

古墳の径に沿って北西方向から南東方向へ弧状に走る。両端は調査区外に延びる。検出された長さは12.9m、幅は0.35～0.9m、深さは0.40m前後を測る。確認面の都合から平成17年度調査II区では、北側にテラス状の段を持つのが確認された。平成13年度調査II区では断面形が逆台形を呈する。覆土は三層（９～11層、１～３層）からなる。上層（９層）には火山灰が含まれていた。自然堆積と思われる。

出土遺物（第57図）は、陶器甕（１）が唯一伴うものである。外面のみ鉄釉がかかる。常滑産。古墳時代前期の土師器壺（２）、ミニチュア土器（３）、円筒埴輪（４～７）は、流れ込みである。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第76号溝跡（第48・51図）

平成17年度調査II区の44・45―59グリッドに位置する。本溝跡上に上之古墳群第２号墳の墳丘が築造され、さらにその上から75号溝跡に切られている。

北西方向から南東方向に走る。西側は調査区外に延びるが、東側は隣接する平成13年度調査II区では確認されていない。検出された長さは5.8m、幅は南側立ち上がりが検出されていないため不明であるが、現況で２～2.2m、深さは0.20m前後を測る。底面に浅いピット状ないし土坑状の掘り込みがみられたが、断面形はおおむね船底状を呈する。覆土は三層（12～13層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物（第57図）は、古墳時代前期の土師器台付甕（１～４）のみである。すべて破片である。

本溝跡の時期は、古墳時代前期と思われる。

第77号溝跡（第48・51図）

平成13年度調査II区の42・43―59～61グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

古墳の径に沿って北西方向から南東方向へ弧状に走る。両端は調査区外に延びる。検出された長さは6.9m、幅は0.4～0.7m、深さは0.20m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物（第58図）は、土器かわらけ（１）が唯一伴うものである。底部のみ検出された。底径が小さく、回転糸切り痕を残す。須恵器坏（２・３）、甕（４・５）、土師器甕（６）は、流れ込みである。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第78号溝跡（第48・52図）

平成13年度調査II区の41・42―60・61グリッドに位置する。ピットが集中する箇所にあり、所々で重複しているが、新旧関係は不明である。南東側には79号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

北東方向から南西方向に走り、中央よりやや南西側で一旦途切れる。両端は調査区外に延びる。検出された長さは７m、幅は0.35～0.6m、深さは0.25m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積と思われる。

出土遺物（第58図）は、コの字口縁の土師器甕（１）のみである。胴下部から底部を欠く。

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀後半以降と思われる。

第79号溝跡（第48・52図）

平成13年度調査II区の41・42―61グリッドに位置する。ピットが集中する箇所にあるが、重複関係はみられない。北西側には78号溝跡が併走しており、関連遺構と思われる。

ほぼ東西方向に走る。検出された長さは2.2mと短い。幅は0.3～0.4m、深さは0.12mを測る。断面形は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、黒褐色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、78号溝跡と同じく９世紀後半以降と思われる。

第80号溝跡（第48・52図）

平成13年度調査II区の40・41―61グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

ほぼ東西方向に走る。検出できたのは西側のみであり、大半は調査区外にある。検出できた長さは4.1m、深さは0.36mを測る。幅は現況で0.9mである。西側にテラス状の段を持つ。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積と思われる。

出土遺物で図示可能なものは、古墳時代前期の壺の口縁部片（第59図１）のみである。口縁部が大きく外反する。口縁部はミガキ、肩部は縦・斜位の刷毛目調整である。

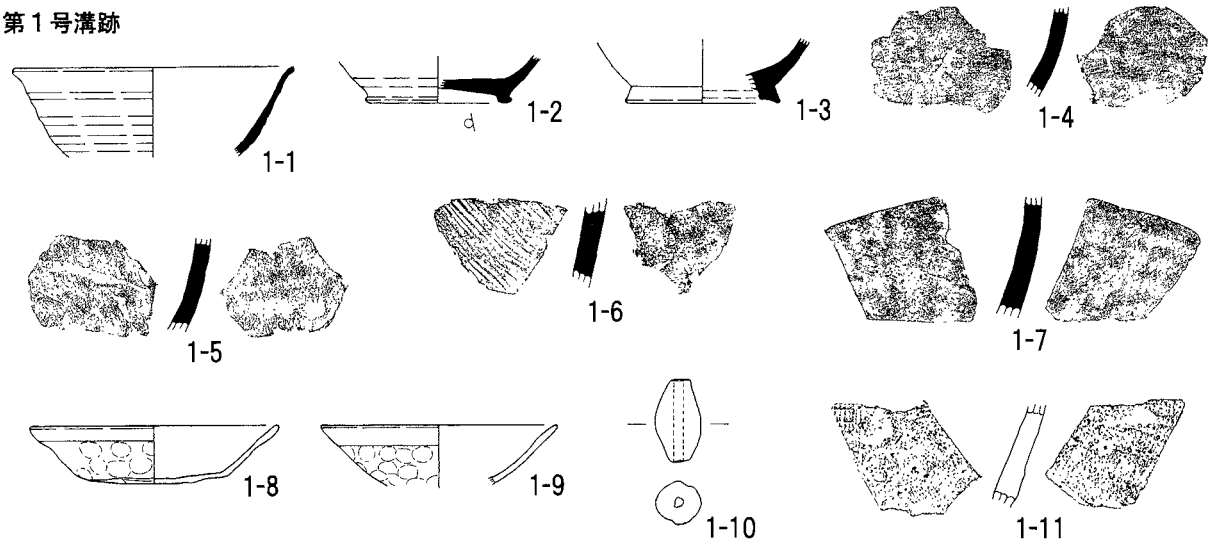
本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期と思われる。

第81号溝跡（第47図）

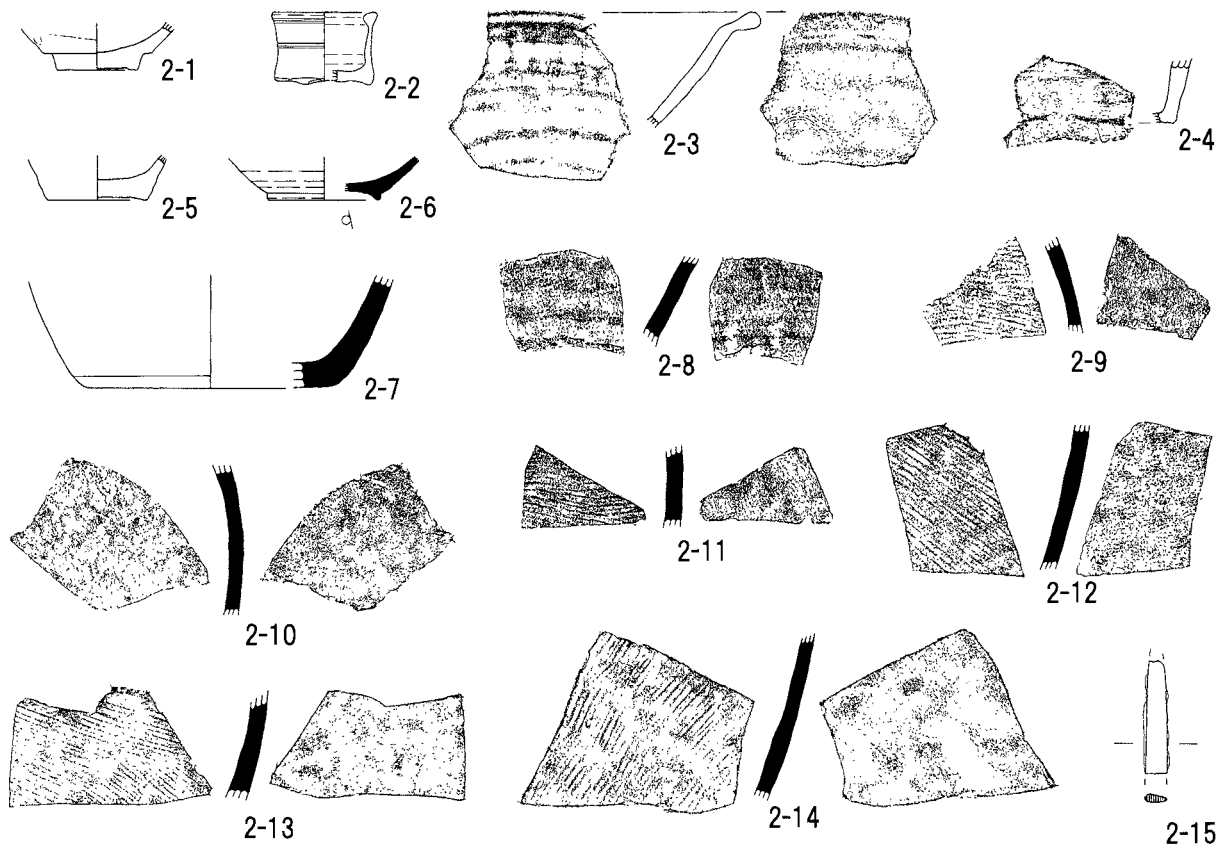
平成14年度調査II区の32―56～58グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にあり、82～84号溝跡を切り、52号溝跡に切られている。

ほぼ南北方向に走る。検出された長さは9.7m、幅は現況で0.3～0.6m、深さは0.12mを測る。断面形

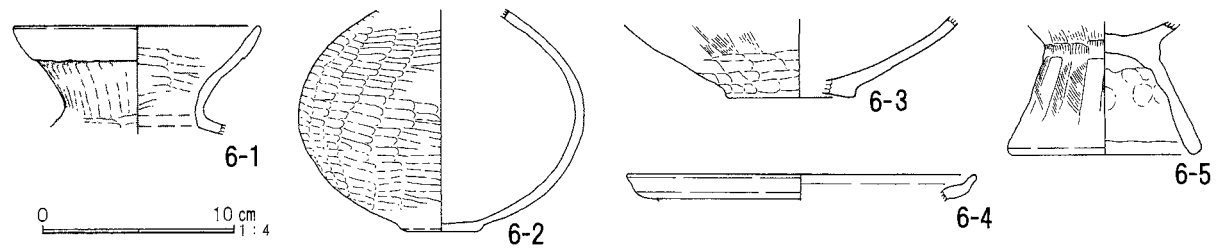
第１号溝跡



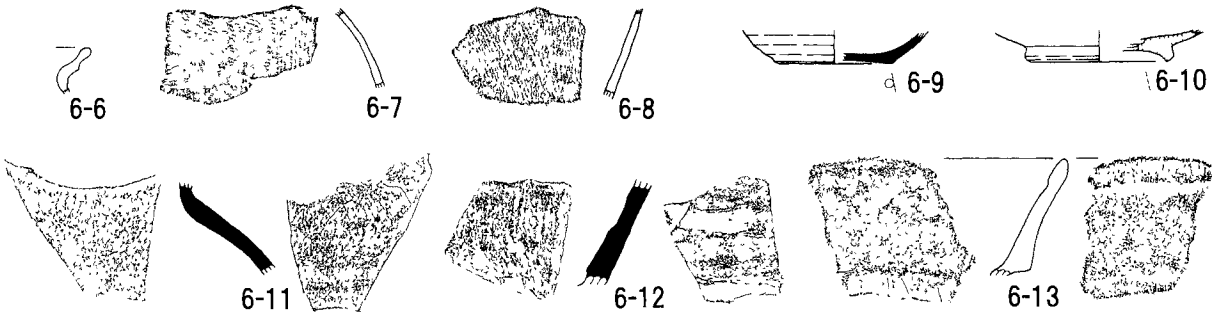
第２号溝跡



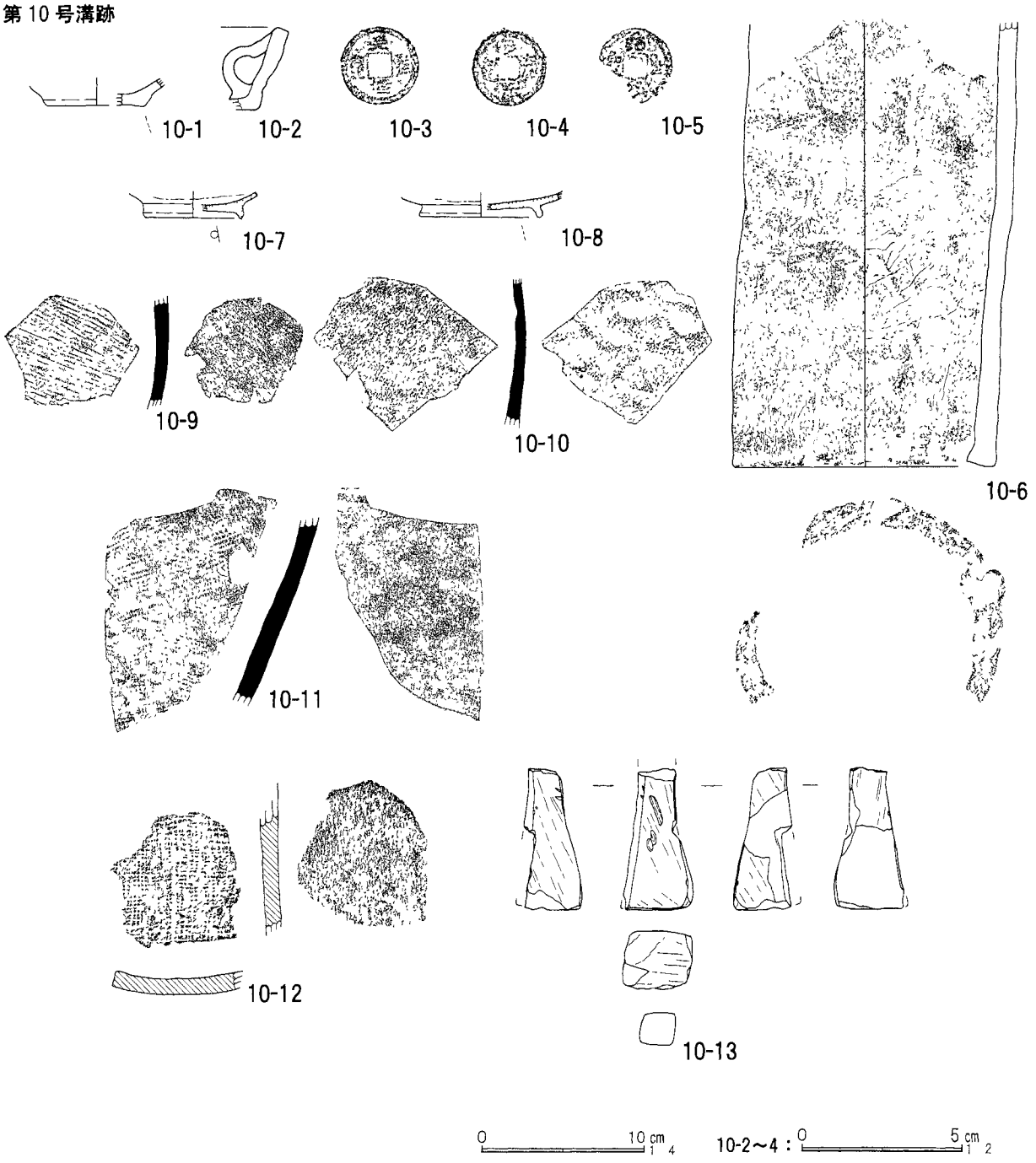
第６号溝跡



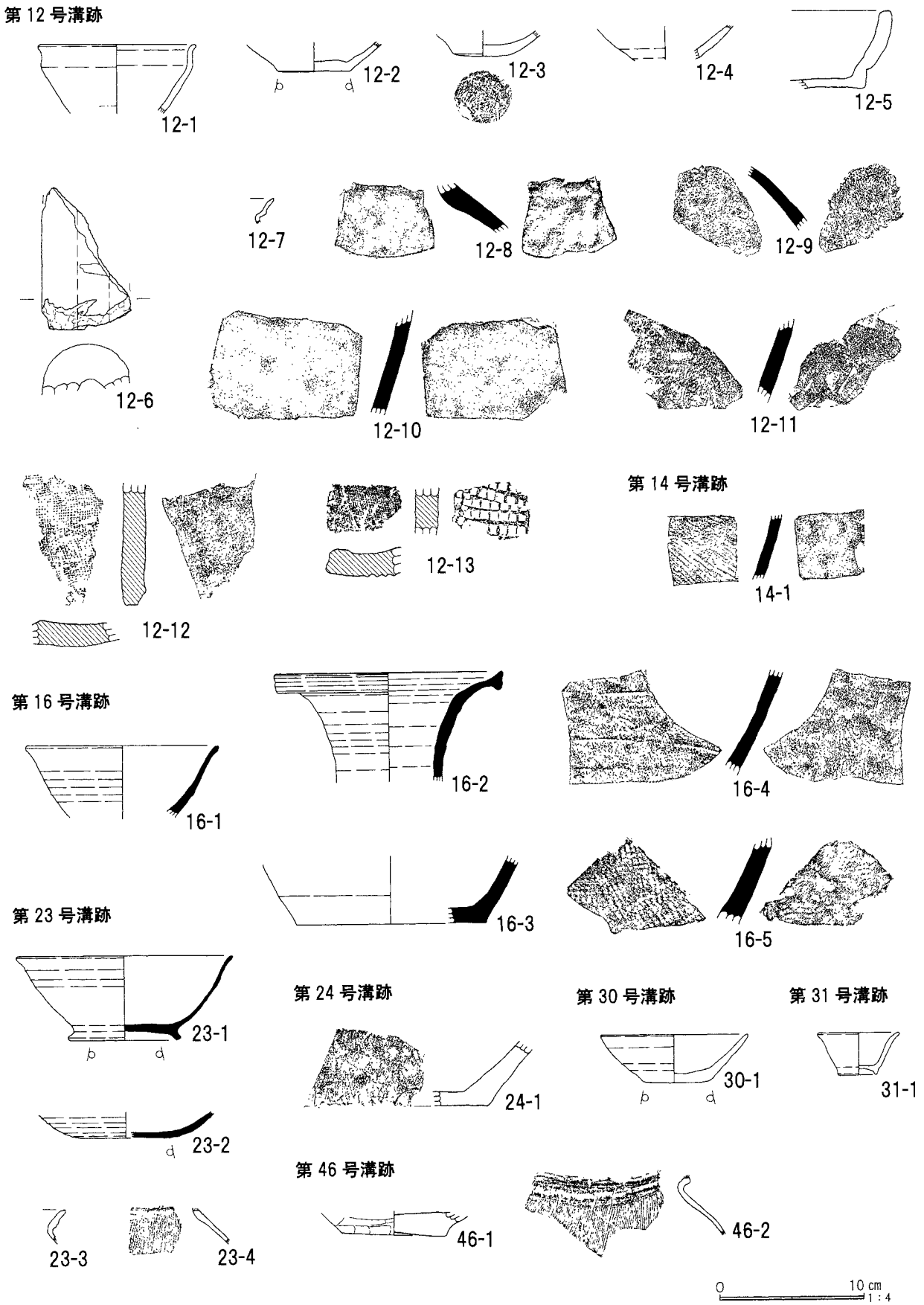
第53図　溝跡出土遺物(1)



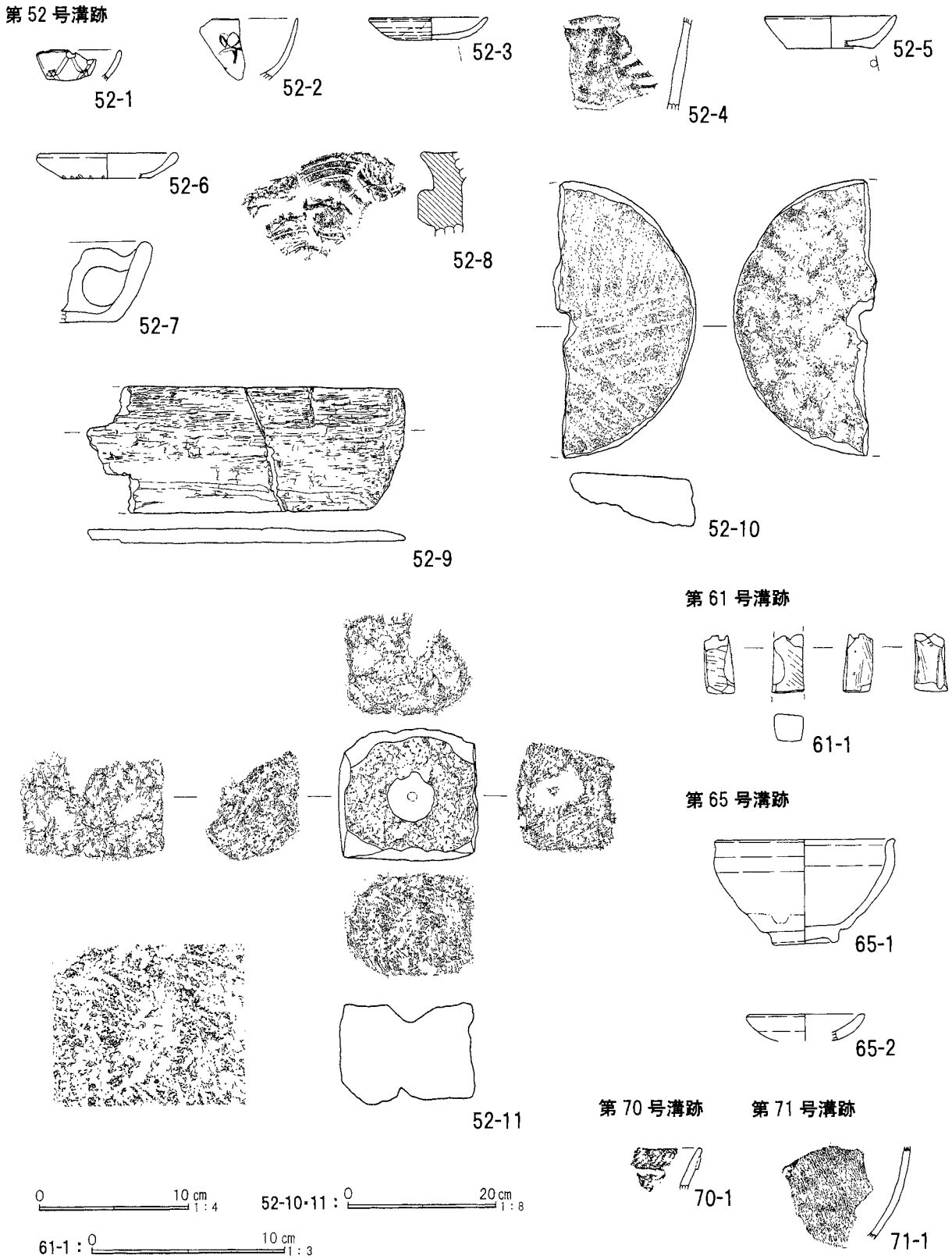
第 10 号溝跡



第54図　溝跡出土遺物(2)



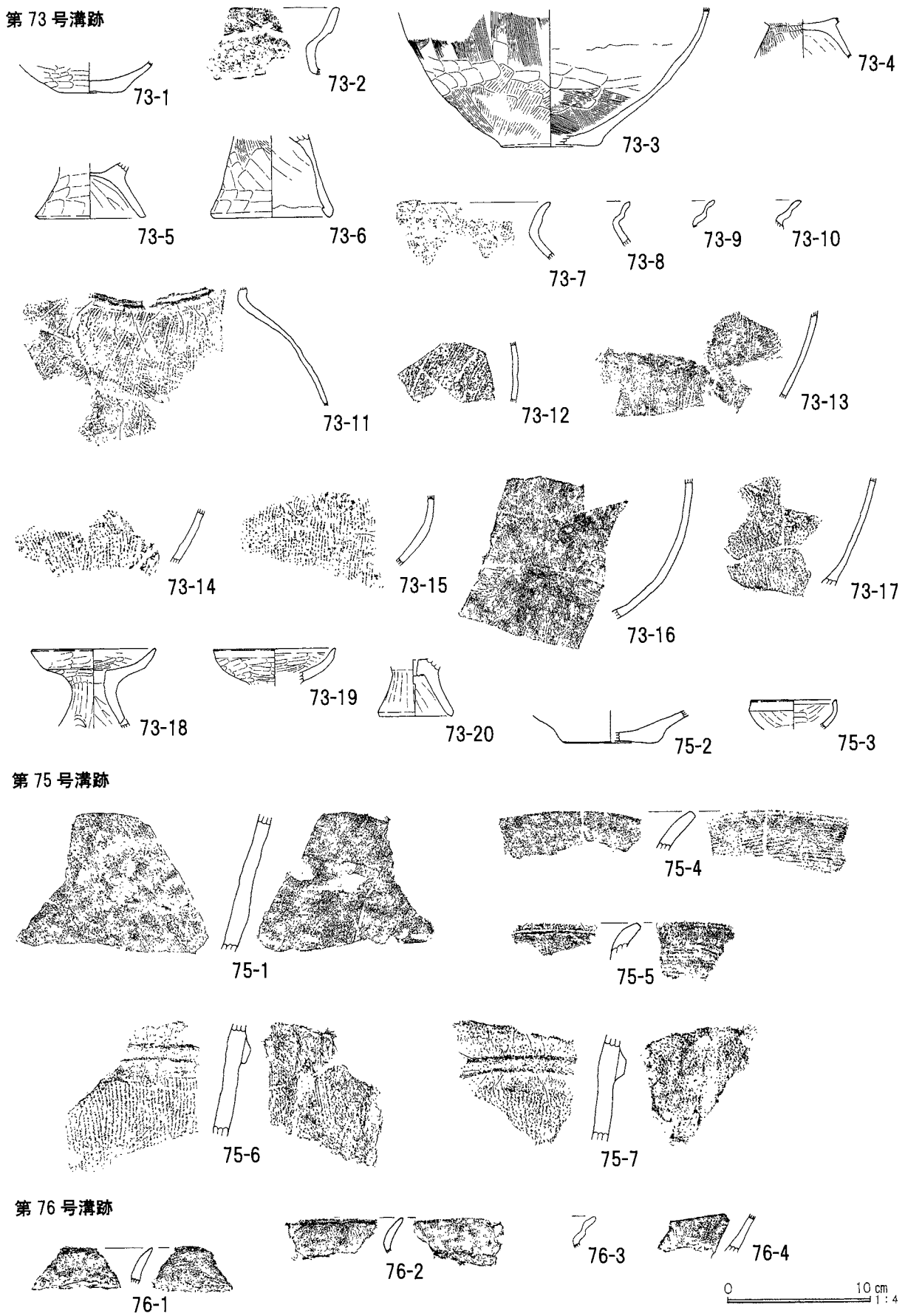
第55図　溝跡出土遺物(3)



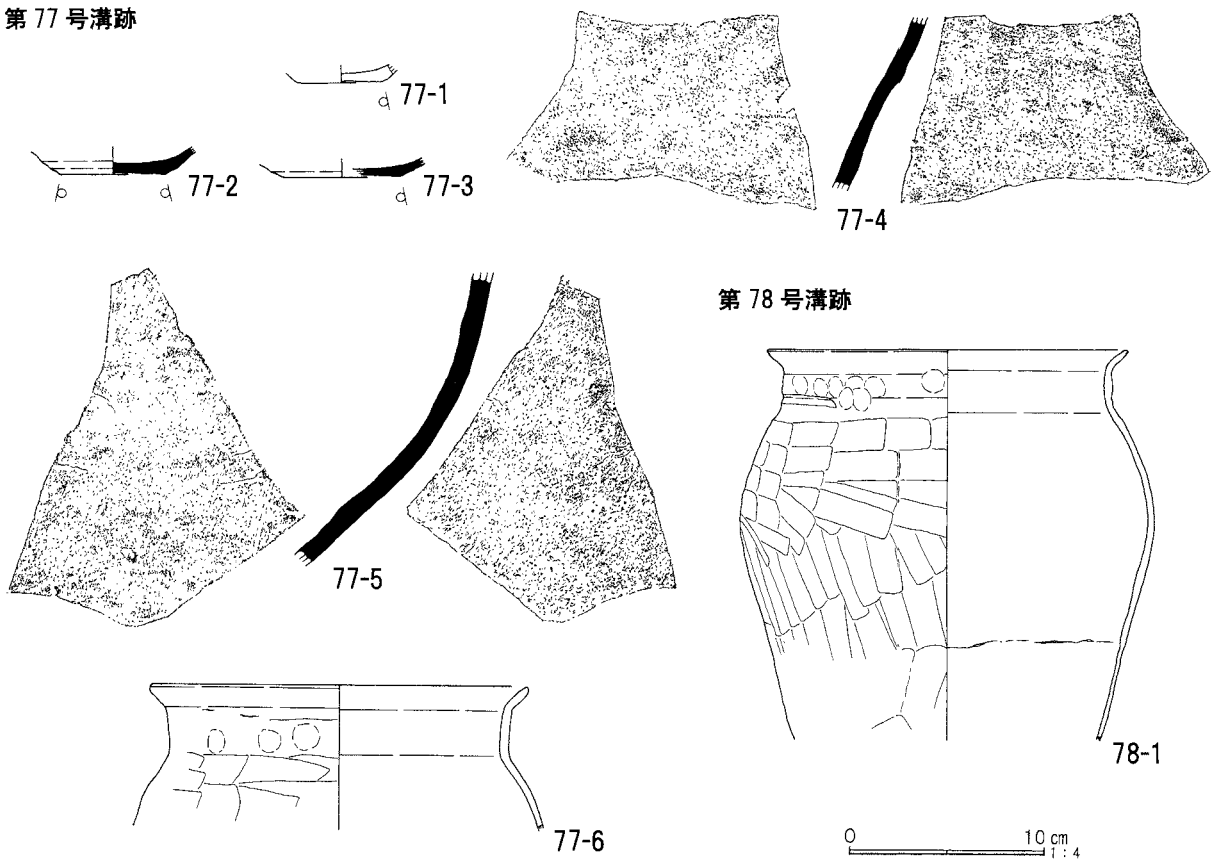
第56図　溝跡出土遺物(4)

は船底状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色土のみであった。自然堆積と思われる。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。



第57図　溝跡出土遺物(5)



第58図　溝跡出土遺物(6)

本溝跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第82号溝跡（第47・52図）

平成14年度調査II区の32—56グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にあり、52・81号溝跡に切られている。

ほぼ東西方向に走り、西側は調査区外に延びる。検出された長さは3m、幅は1.35～1.6m、深さは0.68mを測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は七層（13～19層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

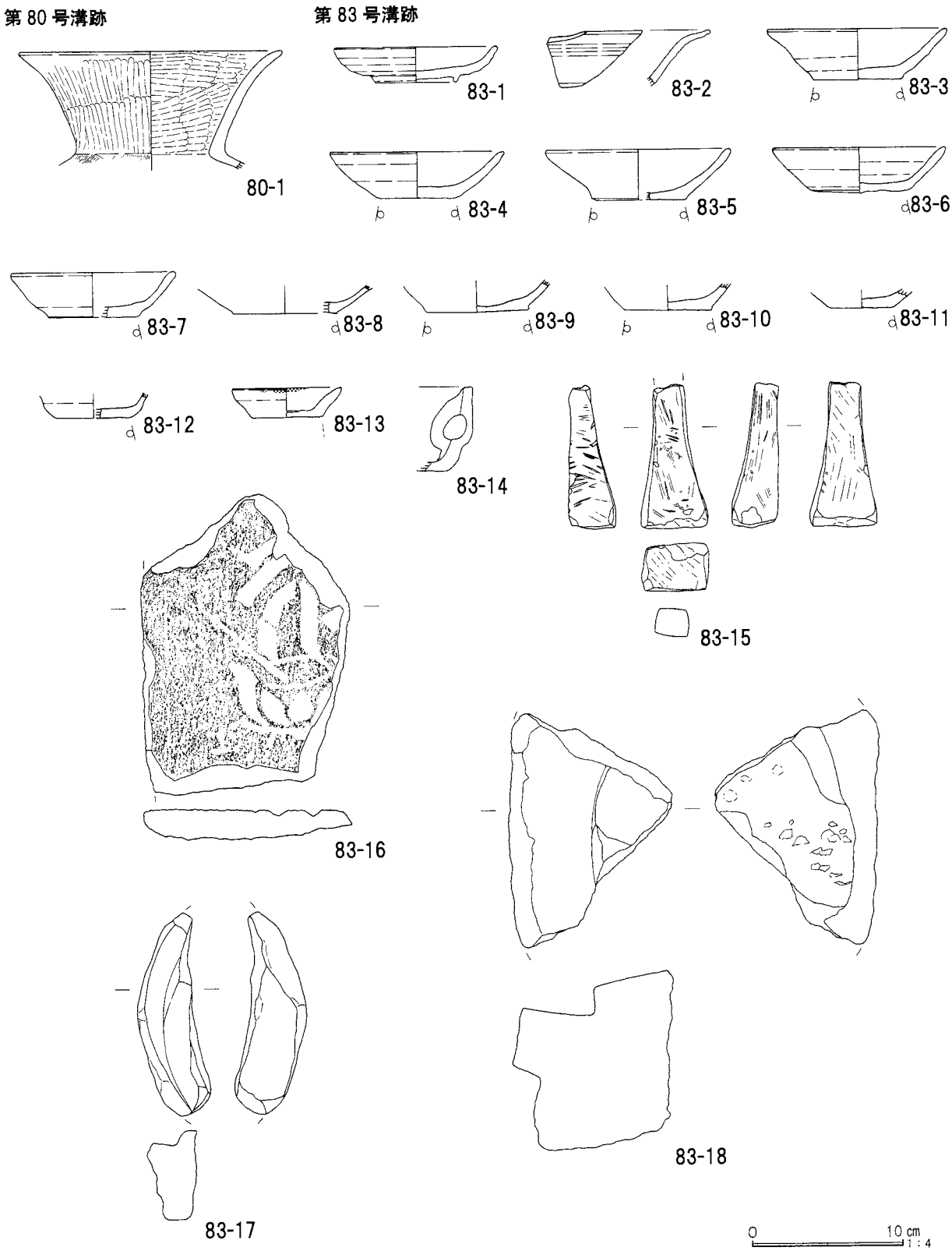
第83号溝跡（第47・52図）

平成14年度調査II区の32—57～61グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にある。84・86号溝跡を切り、52・81号溝跡に切られている。85号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

北側はほぼ東西方向に走るが、32—57グリッドで南にほぼ直角に曲がり、調査区外に延びる。検出された長さは27.3m、幅は0.8～1.9m、深さは0.34～0.6mを測る。断面形はおおむね逆台形を呈する。覆土は層位を確認した所で異なるが、自然堆積によるものと思われる。

出土遺物（第59図）は、土器かわらけ（3～13）、焙烙（14）、砥石（15）、板碑（16）、石臼（17・18）がある。かわらけが多く検出された。陶器皿（1）、鉢（2）は、流れ込みと思われる。

かわらけは、坏状のもの（3～10）と小皿状のもの（11～13）がある。前者は、おおむね口径12cm、器高3.5cm、底径6cm前後を測るが、器形にバラエティがみられた。後者は全形を知り得るものが13しか



第59図　溝跡出土遺物(7)

ないが、口径は7.5cm、器高は2cm、底径は4.5cm前後を測ると思われる。13は口縁部にタールが付着しており、灯明皿である。14は内耳部片である。15は欠損する上端以外に使用痕が認められた。16は主尊

第26表　溝跡出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1-1	1号溝跡	須恵器高台椀	(15.0)	(4.7)	—	ACHLN	にぶい橙色	B	口～体20%	末野産。
1-2	1号溝跡	須恵器高台椀	—	(2.5)	(7.8)	ABL	黄灰色	B	高台部25%	末野産。
1-3	1号溝跡	須恵器　瓶	—	(3.4)	(8.2)	ABGN	灰白色	A	高台部25%	内面中央部自然釉付着。
1-4	1号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
1-5	1号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AH	灰色	B	胴下部片	
1-6	1号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABDFHN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
1-7	1号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	胴下部片	末野産。
1-8	1号溝跡	土師器　坏	(13.2)	3.15	7.4	CDM	橙色	B	30%	
1-9	1号溝跡	土師器　坏	(12.5)	(3.2)	—	ABEMN	にぶい橙色	B	口～体20%	
1-10	1号溝跡	土　錘	最大長4.4cm、最大径2.45cm、孔径0.5cm。重量(22.5)g。ほぼ完形。							
1-11	1号溝跡	陶器　甕	—	—	—	—	—	—	胴下部片	常滑産。
2-1	2号溝跡	陶器　碗	—	(2.5)	4.3	—	—	—	底部50%	17c前。瀬戸・美濃系。鉄釉。
2-2	2号溝跡	陶器　香炉	(5.6)	3.85	(5.2)	—	—	—	25%	瀬戸・美濃系。灰釉。
2-3	2号溝跡	陶器　鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部片	17c。肥前系。透明釉。
2-4	2号溝跡	土器　焙烙	—	(3.4)	—	BDGHIK	黒褐色	B	底部片	在地系。
2-5	2号溝跡	縄文土器深鉢	—	(2.4)	(5.4)	ADHN	にぶい黄橙色	C	底部45%	後期。
2-6	2号溝跡	須恵器高台椀	—	(2.35)	(6.0)	ADL	灰色	B	高台部20%	末野産。
2-7	2号溝跡	須恵器　甕	—	(6.0)	(13.2)	ABHLN	灰白色	B	底部40%	末野産。
2-8	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	暗青灰色	B	頸部片	末野産。
2-9	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	黄灰色	B	胴上部片	南比企産。No.11・12・14と同一個体。
2-10	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	明青灰色	B	胴部片	末野産。
2-11	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	B	胴部片	南比企産。No.9・12・14と同一個体。
2-12	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。No.9・11・14と同一個体。
2-13	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	A	胴下部片	末野産。
2-14	2号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰色	A	胴下部片	南比企産。No.9・11・12と同一個体。
2-15	2号溝跡	刀　子	最大長(6.0)cm、最大幅(1.2)cm、最大厚(0.4)cm。重量(6.8)g。刃先及び柄部欠。							
6-1	6号溝跡	土師器　壺	(13.2)	(5.8)	—	ABCGN	橙色	B	口～頸50%	古墳前期。赤彩。摩耗顕著。出土位置①
6-2	6号溝跡	土師器　壺	—	(11.8)	(4.0)	ABDHIKN	赤褐色	B	胴～底90%	古墳前期。外面所々摩耗。出土位置③
6-3	6号溝跡	土師器　壺	—	(4.2)	(5.8)	ABEMN	橙色	B	胴～底30%	古墳前期。内外面摩耗顕著。出土位置②
6-4	6号溝跡	土師器台付甕	(18.4)	(1.25)	—	ABEIJM	にぶい黄橙色	B	口縁部15%	古墳前期。出土位置①
6-5	6号溝跡	土師器台付甕	—	(7.05)	10.2	ABDHIKMN	灰白色	B	台部60%	古墳前期。出土位置③
6-6	6号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDHIKM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。出土位置①
6-7	6号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABCHIJN	にぶい黄橙色	B	胴上部片	古墳前期。出土位置①
6-8	6号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABEGIJKM	にぶい黄橙色	B	胴下部片	古墳前期。出土位置④
6-9	6号溝跡	須恵器　坏	—	(1.75)	(6.0)	ABDHL	灰色	B	底部30%	末野産。出土位置①
6-10	6号溝跡	灰釉　高台椀	—	(1.65)	(7.8)	AB	灰白色	A	高台部25%	灰釉内刷毛塗。外無釉。出土位置①
6-11	6号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。出土位置①
6-12	6号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AHL	灰色	B	胴下部片	末野産。出土位置①
6-13	6号溝跡	土器　焙烙	—	—	—	ABDHIKM	橙色	B	口縁部片	口縁部折返。出土位置①
10-1	10号溝跡	土器かわらけ	—	(1.7)	(6.2)	ABDHK	浅黄橙色	B	底部30%	在地系。
10-2	10号溝跡	土器　焙烙	—	—	—	ABCGHK	黒褐色	B	内耳部片	在地系。
10-3	10号溝跡	古　銭	最大径2.4cm、孔径0.8cm、最大厚0.15cm。重量3.6g。完形。「天聖元寶」。北宋1023年。							
10-4	10号溝跡	古　銭	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.1g。完形。「熙寧元寶」。北宋1068年。							
10-5	10号溝跡	古　銭	最大径2.3cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量(1.6)g。1/4欠。「紹聖元寶」。北宋1094年。							
10-6	10号溝跡	形象埴輪	—	(28.1)	16.4	ABIN	明赤褐色	B	基部60%	
10-7	10号溝跡	灰釉　高台椀	—	(1.7)	(6.4)	AB	灰白色	A	高台部45%	灰釉漬け掛け。
10-8	10号溝跡	灰釉　高台椀	—	(1.6)	(7.8)	AB	灰白色	A	高台部15%	灰釉漬け掛け。
10-9	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	黄灰色	B	胴部片	南比企産。
10-10	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABDL	灰白色	B	胴部片	末野産。外面自然釉付着。
10-11	10号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	褐灰色	B	胴下部片	末野産。外面自然釉付着。
10-12	10号溝跡	平　瓦	最大長(9.6)cm、最大幅(8.2)cm、最大厚(1.1)cm。胎土:ABEHLN。色調:橙色。焼成:B。側面一部のみ残存。							
10-13	10号溝跡	砥　石	最大長(6.6)cm、最大幅3.25cm、最大厚2.8cm。重量(60.2)g。砂岩。上端及び下端1/3欠。五面使用。							
12-1	12号溝跡	陶器　碗	(11.4)	(4.9)	—	—	—	—	口～体25%	17c前。瀬戸・美濃系。鉄釉。
12-2	12号溝跡	土器かわらけ	—	(2.1)	5.2	ABEJKM	灰白色	A	底部100%	在地系。
12-3	12号溝跡	土器かわらけ	—	(1.85)	4.1	ABEGJM	浅黄橙色	C	底部100%	在地系。底部網代痕。
12-4	12号溝跡	土器かわらけ	—	(2.4)	—	ABEKM	淡橙色	C	体部25%	在地系。
12-5	12号溝跡	土器　焙烙	—	—	—	ABDHKM	外:黄灰　内:赤黒	B	口～底片	在地系。
12-6	12号溝跡	羽　口	最大長(10.2)cm、最大径(6.5)cm、孔径(2.3)cm。重量(162)g。大半欠。先端珪化物付着。周囲還元化。							
12-7	12号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABMN	にぶい橙色	B	口縁部片	古墳時代前期。
12-8	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	A	肩部片	末野産。
12-9	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	A	肩部片	外面自然釉付着。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
12-10	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	黄灰色	B	胴下部片	南比企産。
12-11	12号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFN	灰色	B	胴下部片	南比企産。
12-12	12号溝跡	平　瓦	最大長(8.5)cm、最大幅(6.2)cm、最大厚(1.7)cm。胎土：ABLN。色調：灰色。焼成：A。先端一部のみ残存。							
12-13	12号溝跡	平　瓦	最大長(3.2)cm、最大幅(5.8)cm、最大厚(1.8)cm。胎土：ABKN。色調：にぶい赤褐色。焼成：B。側面一部のみ残存。							
14-1	14号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	AFGN	灰色	A	胴下部片	南比企産。
16-1	16号溝跡	須恵器高台椀	(13.8)	(5.1)	—	ABGMN	黄橙色	B	口～体20%	
16-2	16号溝跡	須恵器長頸瓶	(16.4)	(7.8)	—	ABDGL	灰色	B	口～頸30%	末野産。
16-3	16号溝跡	須恵器　甕	—	(4.8)	(13.6)	AFN	灰色	B	底部20%	南比企産。
16-4	16号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
16-5	16号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	BD	灰白色	B	胴下部片	
23-1	23号溝跡	須恵器高台椀	(15.5)	5.9	8.1	ABCL	灰黄色	C	45%	末野産。
23-2	23号溝跡	須恵器　皿	—	(1.85)	(6.5)	ABL	黄灰色	B	底部25%	末野産。
23-3	23号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABCG	橙色	B	口縁部片	古墳前期。
23-4	23号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABCDEHN	にぶい黄橙色	B	肩部片	古墳前期。
24-1	24号溝跡	陶器　甕	—	—	—	—	—	—	底部片	常滑産。鉄釉。
30-1	30号溝跡	土器かわらけ	10.4	3.45	4.9	BHK	灰白色	B	ほぼ完形	在地系。
31-1	31号溝跡	磁器　猪口	5.9	3.05	2.9	—	—	—	ほぼ完形	17ｃ？。肥前系。内外面透明釉。
46-1	46号溝跡	土師器　壺	—	(1.7)	7.6	ABDGHIN	浅黄橙色	B	底部100%	古墳前期。出土位置④
46-2	46号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDHKM	灰黄褐色	B	頸～胴片	古墳前期。出土位置④
52-1	52号溝跡	磁器　小坏	—	—	—	—	—	—	口縁部片	18ｃ。肥前系。染付・透明釉。
52-2	52号溝跡	磁器　碗	—	—	—	—	—	—	口～体片	18ｃ。肥前系。染付・透明釉。
52-3	52号溝跡	陶器　灯明皿	(7.6)	1.45	(3.6)	—	—	—	25%	18ｃ。瀬戸・美濃系。鉄釉。
52-4	52号溝跡	陶器　鉢	—	—	—	—	—	—	胴部片	18ｃ。瀬戸・美濃系。灰釉。
52-5	52号溝跡	土器かわらけ	(8.9)	2.15	(6.0)	ABCEK	橙色	B	40%	在地系。
52-6	52号溝跡	土器かわらけ	(9.8)	1.7	(5.9)	ABCK	灰白色	B	25%	在地系。
52-7	52号溝跡	土器　焙烙	—	—	—	ABHM	にぶい黄褐色	—	内耳部片	在地系。
52-8	52号溝跡	軒丸瓦	最大長(3.3)cm、最大厚(2.9)cm。1/4残存。							
52-9	52号溝跡	桶	最大長(21.4)cm、最大幅(8.6)cm、最大厚(1.1)cm。重量(42.5)ｇ。大半欠。底板。							
52-10	52号溝跡	石　臼	径(37.6)cm、推定孔径(4.0)cm、最大厚(6.4)cm。重量(6,200)ｇ。凝灰岩。1/2残存。下臼。							
52-11	52号溝跡	五輪塔	長径18.8cm、短径18.0cm、最大厚13.4cm。ほぼ完存。重量4,400ｇ。地輪。種子残存。							
61-1	61号溝跡	砥　石	最大長(3.0)cm、最大幅(1.7)cm、最大厚(1.4)cm。重量(10.9)ｇ。砂岩。上下端大半欠。四面使用。							
65-1	65号溝跡	陶器　碗	(12.2)	7.15	4.5	—	—	—	50%	17ｃ前。瀬戸・美濃系。鉄釉。
65-2	65号溝跡	土器かわらけ	(8.0	(1.8)	—	ABCDJKM	灰白色	B	口縁部15%	在地系。
70-1	70号溝跡	弥生土器　壺	—	—	—	ABDHIMN	にぶい黄橙色	B	口縁部片	中期後半。
71-1	71号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABHIKM	明赤橙色	B	胴下部片	古墳前期。
73-1	73号溝跡	土師器　壺	—	(2.2)	5.0	ABHIN	にぶい褐色	B	底部100%	古墳前期。
73-2	73号溝跡	土師器　壺	—	—	—	ABCIMN	橙色	B	口縁部片	古墳前期。
73-3	73号溝跡	土師器　壺	—	(9.8)	7.2	ABEGN	浅黄橙色	B	胴～底70%	古墳前期。
73-4	73号溝跡	土師器台付甕	—	(2.8)	—	ABDHIKM	にぶい橙色	B	接合部90%	古墳前期。
73-5	73号溝跡	土師器台付甕	—	(4.0)	8.0	ABDHIMN	にぶい橙色	B	台部60%	古墳前期。
73-6	73号溝跡	土師器台付甕	—	(5.95)	8.4	ABDGIJKM	橙色	B	台部80%	古墳前期。
73-7	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABHIJ	にぶい黄色	B	口縁部片	古墳前期。
73-8	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDIKM	にぶい橙色	B	口縁部片	古墳前期。
73-9	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABIJM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
73-10	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	BCKM	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
73-11	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDEHIKM	浅黄橙色	B	頸～胴片	古墳前期。№73-13と同一個体。
73-12	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDHKM	にぶい赤褐色	B	胴部片	古墳前期。
73-13	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDEHIM	灰黄褐色	B	胴下部片	古墳前期。№73-11と同一個体。
73-14	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABHJ	暗灰黄色	B	胴下部片	古墳前期。
73-15	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABGHK	灰黄褐色	B	胴下部片	古墳前期。
73-16	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	AGIM	外：黄褐　内：黒	B	胴下部片	古墳前期。
73-17	73号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABHJM	にぶい橙色	B	胴下部片	古墳前期。
73-18	73号溝跡	土師器　器台	(9.0)	(5.65)	—	ABDIKMN	橙色	B	40%	古墳前期。
73-19	73号溝跡	土師器　器台	(8.8)	(2.55)	—	BDHJ	浅黄橙色	B	器受部50%	古墳前期。
73-20	73号溝跡	土師器　器台	—	(4.2)	5.4	ABDHMN	浅黄橙色	B	台部60%	古墳前期。
75-1	75号溝跡	陶器　甕	—	—	—	—	—	—	胴下部片	常滑産。鉄釉。
75-2	75号溝跡	土師器　壺	—	(2.3)	(6.8)	ABCDHIKM	明赤褐色	B	底部30%	古墳前期。外面摩耗顕著。
75-3	75号溝跡	ミニチュア土器	(6.2)	(2.1)	—	AEHI	褐色	B	口縁部25%	古墳前期。
75-4	75号溝跡	円筒埴輪	—	—	—	ACGIMN	橙色	B	口縁部片	
75-5	75号溝跡	円筒埴輪	—	—	—	ABDHMN	橙色	B	口縁部片	
75-6	75号溝跡	円筒埴輪	—	—	—	AGHIN	橙色	B	胴部片	
75-7	75号溝跡	円筒埴輪	—	—	—	ABCEHIKN	にぶい橙色	B	胴部片	

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
76-1	76号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDGIMN	灰褐色	B	口縁部片	古墳前期。
76-2	76号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABDHIN	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
76-3	76号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABGIKM	にぶい橙色	B	口縁部片	古墳前期。
76-4	76号溝跡	土師器台付甕	—	—	—	ABCGIKMN	にぶい橙色	B	胴下部片	古墳前期。
77-1	77号溝跡	土器かわらけ		(0.9)	(4.6)	BCDKM	淡橙色	B	底部45%	在地系。
77-2	77号溝跡	須恵器　坏	—	(1.4)	5.8	AHL	にぶい赤褐色	B	底部95%	末野産。
77-3	77号溝跡	須恵器　坏	—	(0.95)	(6.4)	ABDHN	灰褐色	C	底部30%	
77-4	77号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
77-5	77号溝跡	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	青灰色	B	胴下部片	末野産。
77-6	77号溝跡	土師器　甕	(20.1)	(7.65)	—	ABCGIKMN	淡橙色	B	口～胴20%	
78-1	78号溝跡	土師器　甕	(19.0)	(20.8)	—	ABDIKN	橙色	B	口～胴50%	
80-1	80号溝跡	土師器　壺	(17.9)	(8.05)	—	ABCHIKM	にぶい黄橙色	B	口縁部30%	古墳前期。
83-1	83号溝跡	陶器　皿	(11.2)	2.4	(5.8)	—	—	—	20%	18ｃ？。瀬戸・美濃系。灰釉。
83-2	83号溝跡	陶器　鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部片	18ｃ？。瀬戸・美濃系。灰釉。
83-3	83号溝跡	土器かわらけ	(12.2)	3.45	5.9	ABDEH	浅黄橙色	B	65%	在地系。
83-4	83号溝跡	土器かわらけ	(11.8)	3.2	5.3	ABCHI	橙色	B	40%	在地系。
83-5	83号溝跡	土器かわらけ	(12.6)	3.45	6.4	ABHK	にぶい黄褐色	B	40%	在地系。
83-6	83号溝跡	土器かわらけ	(11.7)	3.6	(6.4)	ABDHKM	にぶい褐色	B	30%	在地系。
83-7	83号溝跡	土器かわらけ	(11.4)	3.05	(6.2)	ABCKM	橙色	B	30%	在地系。
83-8	83号溝跡	土器かわらけ	—	(1.9)	(7.1)	BDHI	にぶい黄橙色	A	体～底25%	在地系。
83-9	83号溝跡	土器かわらけ	—	(2.15)	7.1	ABEHI	にぶい橙色	B	底部75%	在地系。
83-10	83号溝跡	土器かわらけ	—	(1.8)	5.9	ABDHI	にぶい黄橙色	B	体～底90%	在地系。
83-11	83号溝跡	土器かわらけ	—	(1.25)	(4.3)	ABEIK	にぶい橙色	B	底部45%	在地系。
83-12	83号溝跡	土器かわらけ	—	(1.7)	(5.2)	ABDEHK	にぶい橙色	B	底部45%	在地系。
83-13	83号溝跡	土器かわらけ	(7.5)	2.0	(4.8)	ABH	にぶい黄橙色	C	45%	在地系。口縁部タール付着。灯明皿。
83-14	83号溝跡	土器　焙烙	—	—	—	ABEGHIM	灰黄褐色	B	内耳部片	在地系。
83-15	83号溝跡	砥　石	最大長(9.85)cm、最大幅(4.6)cm、最大厚(3.3)cm。重量(157)ｇ。砂岩。上端欠。五面使用。							
83-16	83号溝跡	板　碑	最大長(20.4)cm、最大幅(14.2)cm、最大厚(2.1)cm。重量(918)ｇ。緑泥片岩。大半欠。							
83-17	83号溝跡	石　臼	最大長(13.8)cm、最大幅(3.9)cm、最大厚(6.1)cm。重量(348)ｇ。凝灰岩。大半欠。							
83-18	83号溝跡	石　臼	最大長(16.0)cm、最大幅(11.1)cm、最大厚(10.8)cm。重量(1,655)ｇ。凝灰岩。大半欠。							

種子と蓮座半分のみの検出である。17・18は一部のみの検出である。

本溝跡の時期は、中世段階と思われる。

第84号溝跡（第47・52図）

平成14年度調査Ⅱ区の32―56・57グリッドに位置する。溝跡が集中する箇所にあり、52・81・83号溝跡に切られている。

ほぼ東西方向に走り、西側は調査区外に延びる。検出された長さは2.7m、幅0.75～1.1m、深さ0.72m程を測る。断面形は横長のＶ字状を呈する。覆土は五層（８～12層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第85号溝跡（第47・52図）

平成14年度調査Ⅱ区の32―61グリッドに位置する。52号溝跡に切られている。83号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

北西方向から南東方向に走り、北西部は調査区外に延びる。検出された長さは５ｍを測る。幅は、83号溝跡との重複箇所以東が上部を攪乱により欠くため狭くなっているが、本来は北西部で確認された1.2m程である。深さは0.74m前後を測る。断面形は逆台形を呈する。覆土は四層（１～４層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第86号溝跡（第47・52図）

平成14年度調査II区の32―61グリッドに位置する。32号井戸跡を切り、83号溝跡に切られている。

北西方向から南東方向へ弧状に走るが、検出範囲が狭いため定かではない。長さ1.6m、深さは0.52mを測る、幅は不明である。断面形は、ほぼ逆台形を呈する。覆土は暗灰色粘土（２層）のみである。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

5　土　坑

第１号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の29・30―43・44グリッドに位置する。10号住居跡を切っている。

長軸1.16m、短軸0.86mのややいびつな長方形を呈する。深さは0.18mを測る。垂直ないし鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。２層に粘土ブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は須恵器小片が検出されたが、図示不可能であった。流れ込みと思われる。

本土坑の時期は、10号住居跡との関係などから中世段階以降と思われる。

第２号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の27・28―43・44グリッドに位置する。南西隅で12号住居跡を切っている。

長軸1.64m、短軸0.98mの長方形を呈する。深さは0.14mを測る。垂直ないし鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。中層（３層）には炭化物層がみられた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第63図）は、深身の須恵器坏（１・２）のみである。末野産。１は酸化焔焼成による。

本土坑の時期は、９世紀末頃を中心とした段階と思われる。

第３号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の26―43グリッドに位置する。北側を攪乱により欠く。東側は25号溝跡に切られている。南側には４・５号土坑が隣接する。

規模は不明であるが、検出された南北は0.8m、深さは0.06mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は暗褐色土（１層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

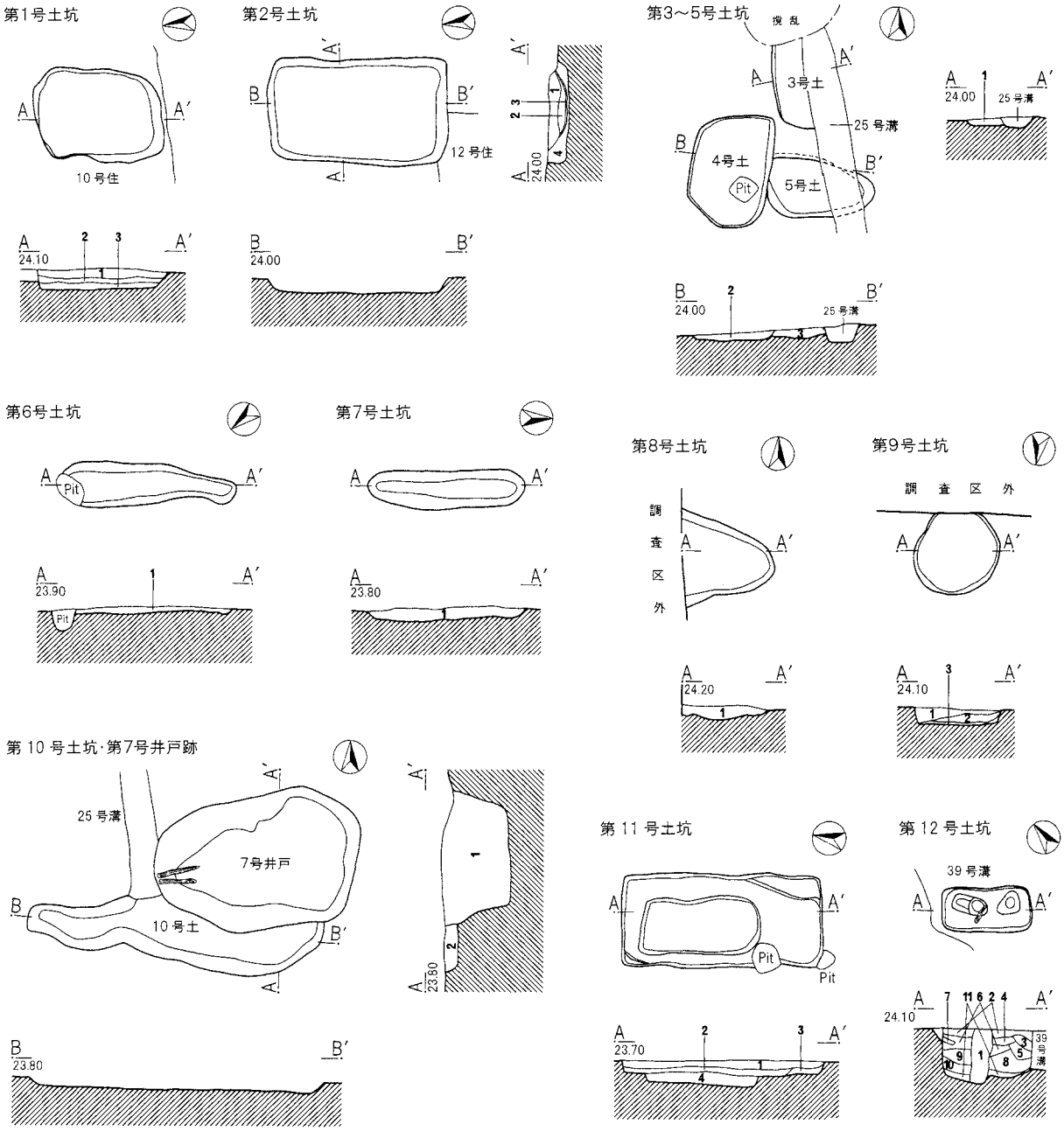
遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第４号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の26―43グリッドに位置する。５号土坑を切っている。ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.02m、短軸0.74mのややいびつな長方形を呈する。深さは0.08mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は暗褐色土（２層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。



第1号土坑
土層説明（AA′）
1 褐灰色土：酸化鉄・焼土・炭化物少量含む。
2 灰褐色土：黄灰色土ブロック・酸化鉄多量含む。
3 灰褐色土：酸化鉄少量含む。

第2号土坑
土層説明（AA′）
1 灰 色 土：粘土質。炭化物・灰白色粒少量含む。
2 灰 色 土：粘土質。焼土・灰白色粒少量含む。1層より粘性強。
3 炭化物層
4 暗灰色土：粘土質。焼土・炭化物・灰白色粒少量含む。

第3号土坑
土層説明（AA′）
1 暗褐色土：シルト質。浅黄色土ブロック少量含む。

第4・5号土坑
土層説明（BB′）
2 暗 褐 色 土：シルト質。焼土粒・炭化物・にぶい黄色土ブロック少量含む。
3 にぶい黄褐色土：焼土粒・にぶい黄色土ブロック少量含む。

第6号土坑
土層説明（AA′）
1 浅黄色土：粘土質。暗灰黄色土ブロック・灰白色土ブロック少量含む。

第7号土坑
土層説明（AA′）
1 浅黄色土：粘土質。暗灰黄色土ブロック・灰白色土ブロック少量含む。

第8号土坑
土層説明（AA′）
1 灰褐色土：粘土質。淡黄色土ブロック微量、焼土・炭化物多量含む。

第9号土坑
土層説明（AA′）
1 灰褐色土：粘土質。火山灰・炭化物・灰白色土ブロック少量含む。
2 灰色粘土：焼土・炭化物・淡黄色粘土ブロック多量含む。
3 灰色粘土：淡黄色粒微量含む。

第10号土坑・第7号井戸跡
土層説明（AA′）
1 黄 褐 色 土：粘土質。黄灰色土ブロック・酸化鉄多量含む。
2 灰黄褐色土：シルト質。

第11号土坑
土層説明（AA′）
1 黄 褐 色 土：暗灰黄色粘土ブロック・灰白色粘土ブロック多量含む。
2 灰 色 粘 土：淡黄色粘土ブロック微量含む。
3 にぶい黄色粘土：灰白色粘土ブロック多量含む。
4 黄 灰 色 粘 土：灰白色粒多量含む。

第12号土坑
土層説明（AA′）
1 灰 褐 色 土：粘土質。しまり無。
2 灰 色 土：粘土質。酸化鉄微量、火山灰少量含む。しまり無。
3 灰 色 土：シルト質。酸化鉄微量含む。
4 褐 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。
5 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
6 褐灰色粘土：灰白色土ブロック少量含む。
7 褐灰色粘土：灰白色土ブロック多量含む。
8 灰褐色粘土：灰白色土ブロック少量含む。
9 褐灰色粘土：灰白色土ブロック多量含む。
10 灰褐色粘土：暗灰色粘土ブロック少量、灰白色土ブロック多量含む。
11 暗灰色粘土：灰白色土ブロック多量含む。

0 2m
1：60

第60図　第1～12号土坑・第7号井戸跡

第５号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の26―43グリッドに位置する。北西隅を４号土坑、中央からやや東側を25号溝跡に切られている。

長軸0.98m程、短軸0.54mのややいびつな楕円形を呈する。深さは0.08mを測る。立ち上がりは北側がオーバーハングしており、その他は緩やかであった。底面はほぼ平坦である。覆土は、にぶい黄褐色土（３層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第６号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の25―44グリッドに位置する。北端でピットと重複するが、新旧は不明である。

長軸1.58m程、短軸0.41mの細長い楕円形を呈する。深さは0.07mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は浅黄色土（１層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第７号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の24―43・44グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸1.42m、短軸0.35mの細長い楕円形を呈する。深さは0.12mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は浅黄色土（１層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本土坑の時期は不明である。

第８号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の32―44・45グリッドに位置する。14・15号住居跡を切っている。西側は調査区外にある。

規模は不明であるが、検出された東西は0.83m、深さは0.12mを測る。平面プランは楕円形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかであり、底面はやや凹凸がみられた。覆土は灰褐色土（１層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は検出されなかったが、14・15号住居跡との関係などから中世段階以降と思われる。

第９号土坑（第60図）

平成13年度調査III区28―45グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。南端は調査区外にある。

径0.75m前後の円形を呈する。深さは0.15mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（１～３層）からなる。上層（１層）に火山灰が含まれていたが、ブロック土や粘土を含むことから人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は平安時代の土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第10号土坑（第60図）

平成13年度調査III区の25・26―44・45グリッドに位置する。７号井戸跡に切られており、25号溝跡と

も重複するが、新旧関係は未確認である。おそらく本土坑が切られていると思われる。

短軸は不明であるが、長軸は2.67m、深さは0.12mを測り、いびつで細長い楕円形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかであり、底面は東側にやや傾く。覆土は灰黄褐色土（２層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第63図）は、須恵器甑の胴上部片（１）、甕の口縁部片（２）のみである。ともに末野産。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀後半を中心とした段階と思われる。

第11号土坑（第60図）

平成15年度調査区の24―50グリッドに位置する。南西隅付近をピットに切られている。

長軸1.81m、短軸0.87mの長方形を呈する。深さは0.24mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は中央から北側にかけて一段下がっていた。また、南東隅にはテラス状の段がみられた。覆土は四層（１～４層）からなる。粘土ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第12号土坑（第60図）

平成17年度調査Ⅰ区の47―53・54グリッドに位置する。39号溝跡を切っている。

長軸0.81m、短軸0.42mの長方形を呈する。深さは0.49mを測る。垂直に掘り込まれ、底面にはピット状の掘り込みがみられた。覆土は11層（１～11層）からなる。１層はしまりが無く、柱痕跡の可能性も考えられたが、周りに同様の掘り方が存在しないことから土坑として報告した。粘土ブロックを多く含み、ランダムな層位を示すことから、人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物は木片が検出されただけであり、図示可能なものはなかった。

本土坑の時期は、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第13号土坑（第61図）

平成16年度調査区の44―54グリッドに位置する。北側は確認面の都合から確認できず、南側は調査区外にある。また、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

規模は不明であるが、検出された南北は0.65m、東西は0.58m、深さは0.2mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

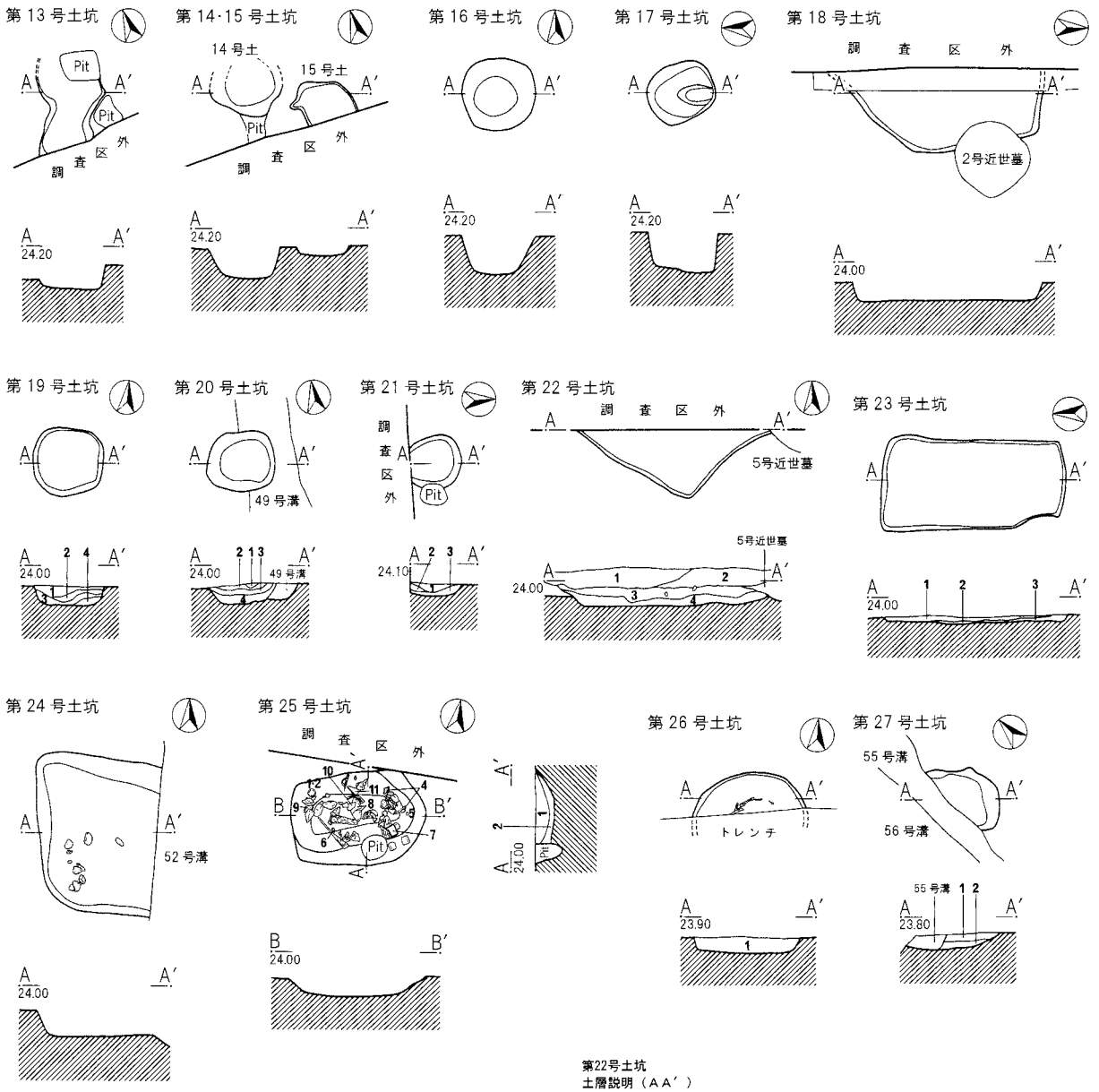
出土遺物（第63図）は、須恵器坏（１・２）、高台付椀（３・４）、甕（５）、土師器甕（６）がある。須恵器の大半は末野産である。１・２は浅身である。３は口縁部の外反が弱い。４は体部が直線的である。５は頸部片。６は口縁部のコの字が浅く、胴上部の張りも弱い。

本土坑の時期は、９世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第14号土坑（第61図）

平成16年度調査区の44―54グリッドに位置する。北側は確認面の都合から確認できず、南側はピットと重複するが、新旧関係は不明である。東側には15号土坑が隣接している。

径0.65m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.26mを測る。ほぼ垂直ないし鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積し、炭化物が含まれていた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。



第19号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 粘 土：酸化鉄多量含む。
2 黄灰色シルト：酸化鉄少量含む。
3 暗 灰 色 粘 土：酸化鉄多量含む。
4 暗 灰 色 粘 土：酸化鉄少量、にぶい黄色シルト多量含む。

第20号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 粘 土：酸化鉄少量、下層に炭化物帯状に含む。
2 灰 色 粘 土：酸化鉄多量、下層に灰白色粒帯状に含む。
3 黄灰色粘土：焼土粒・炭化物少量、酸化鉄多量含む。
4 暗灰色粘土：黄褐色粘土ブロック・酸化鉄多量含む。

第21号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 粘 土：焼土・炭化物少量含む。
2 暗灰色粘土：酸化鉄少量含む。
3 暗灰色粘土：黄褐色シルトブロック少量含む。

0 2 m
1 : 60

第22号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰多量、下層に酸化鉄含む。
2 灰 色 土：粘土質。黄褐色シルトブロック少量含む。
3 暗灰色粘土：上層に酸化鉄多量含む。
4 暗灰色粘土：黄灰色粘土・酸化鉄多量含む。

第23号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色粘土：酸化鉄・砂・炭化物少量含む。
2 灰 色 粘 土：酸化鉄・炭化物少量含む。
3 灰 色 粘 土：灰白色粒少量、上層に炭化物、下層に帯状に含む。

第25号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：火山灰・酸化鉄少量含む。
2 灰褐色土：酸化鉄・灰オリーブ色粒・ブロック少量含む。

第26号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：酸化鉄・灰オリーブ色土ブロック少量含む。

第27号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 粘 土
2 緑灰色粘土：灰色粒少量含む。

第61図　第13～27号土坑

出土遺物（第63図）は、土師器甕（１）のみである。口縁部のコの字が明確である。

本土坑の時期は、９世紀後半を中心とした段階と思われる。

第15号土坑（第61図）

平成16年度調査区の43・44―54グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられず、南側が調査区外にある。西側には14号土坑が隣接している。

規模は不明であるが、検出された南北は0.38m、東西は0.52m、深さは0.08mを測る。平面プランはいびつな長方形ないし方形を呈すると思われる。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第16号土坑（第61図）

平成13年度調査Ⅰ区の42・43―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.64mの円形を呈する。深さは0.34mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が数層堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第17号土坑（第61図）

平成13年度調査Ⅰ区の42―53グリッドに位置する。６号溝跡を切っている。

長軸0.59m、短軸0.52mの楕円形を呈する。深さは0.34mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面南側にはピット状の掘り込みがみられた。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が数層堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第18号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の37・38―52・53グリッドに位置する。東側を２号近世墓に切られている。

規模は不明であるが、検出された南北は1.9m、東西は0.76m、深さは0.16mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、灰色系の粘土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第19号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の37―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.6m前後の円形を呈する。深さは0.17mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は四層（１～４層）からなる。自然堆積と思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第20号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の36―53グリッドに位置する。東側で49号溝跡を切っている。また、直接的な重複関係はないが、６号柵列跡が本土坑を横断している。新旧関係は不明である。

径0.55m前後のややいびつな円形を呈する。深さは0.18mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面は西側に

やや傾く。覆土は四層（1～4層）からなる。レンズ状に堆積することから自然堆積とも思われるが、混入物を見ると人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は平安時代の土師器小片が検出されたが、図示不可能であり、伴うものではないと思われる。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第21号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の36―53・54グリッドに位置する。東側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。南側は調査区外にある。

径0.5m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.1mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（1～3層）からなる。レンズ状に堆積することから自然堆積とも思われるが、混入物を見ると人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第22号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の32・33―52・53グリッドに位置する。北側が調査区外にあり、調査区との境で5号近世墓に切られている。

規模は不明であるが、検出された南北は0.5m、東西は1.72m、深さは0.16mを測る。平面プランは方形ないし長方形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（3・4層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第23号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の32―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸1.62m、短軸0.86mの長方形を呈する。深さは0.06mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（1～3層）からなる。全層に炭化物を含むが、自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第24号土坑（第61図）

平成14年度調査Ⅰ区の32―54グリッドに位置する。東側を52号溝跡に切られている。

規模は不明であるが、検出された南北は1.38m、東西は0.99m、深さは0.24mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。南西隅付近からは川原石がまとまって検出された。覆土は図示できなかったが、灰色系の粘土が数層堆積していた。人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物（第63図）は、磁器皿（1）、土器鍋（2）、火鉢（3）、焙烙（4・5）がある。図示しなかったが、桃の種子も検出された。

1は肥前系の染付である。内面に蔓草文が描かれている。2～5は在地系土器。いずれも破片である。

本土坑の時期は18世紀前半以降であり、廃棄遺構と思われる。

第25号土坑（第61図）

平成12年度調査Ⅰ区の29・30―52・53グリッドに位置する。南側をピットに切られており、北東隅は調査区外にある。

長軸1.18m、短軸0.82mのややいびつな長方形を呈する。深さは0.17mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。遺物の出土状況と合わせて人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物（第63･64図）は、陶器灯明皿（１）、灯明受皿（２）、香炉（３）、徳利（７）、磁器碗（４・５）、小坏（６）、土器火鉢（８）、軒丸瓦（９）、平瓦（10・11）、硯（12）がある。

１・２はほぼ完形である。鉄釉がかかる。瀬戸・美濃系。３は小振りで、外面に灰釉がかかる。４は端反形を呈する瀬戸・美濃系の染付である。図示しなかったが、見込は渦福、銘は一重角渦福である。５・６は丸形を呈する肥前系の染付である。図示しなかったが、５の見込は花である。５は麦藁、６は竹が描かれている。８は在地系。底部のみ検出された。９は１/３のみの検出である。三巴右巻。10･11は一部分、12は半分のみの検出である。

本土坑の時期は18世紀前半以降であり、廃棄遺構と思われる。

第26号土坑（第61図）

平成12年度調査Ⅰ区の29―53グリッドに位置する。南側を試掘調査時のトレンチにより欠く。

規模は不明であるが、検出された東西は１m、深さは0.15mを測る。平面プランは円形ないし楕円形を呈すると思われる。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。中央からは木片が検出された。覆土は褐灰色土（１層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第27号土坑（第61図）

平成15年度調査区の25―53グリッドに位置する。55号溝跡に切られている。

規模は不明であるが、検出された南北は0.56m、東西は0.45m、深さは0.12mを測る。平面プランは長方形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第28号土坑（第62図）

平成15年度調査区の21・22―52グリッドに位置する。62号溝跡、20号井戸跡を切っている。

規模は不明であるが、おそらく径1.15m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.52mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面にはピット状の掘り込みが二重にみられた。覆土は六層（５～10層）からなる。５層下には炭化物層が帯状に確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第64図）は、土器かわらけ（１・２）のみである。口径12cm程で、ほぼ直線的に開く。

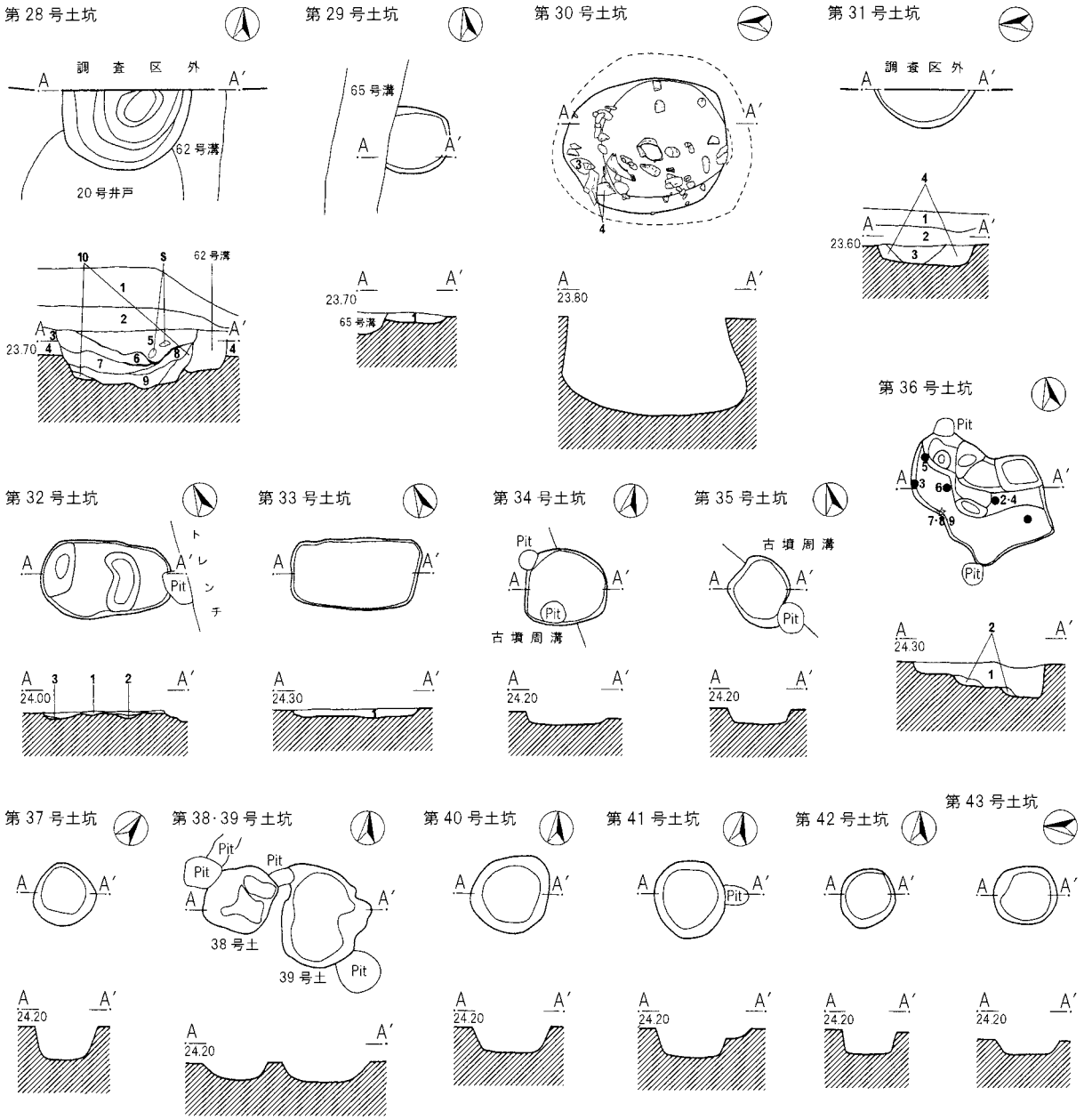
本土坑の時期は、中世段階と思われる。

第29号土坑（第62図）

平成12年度調査Ⅱ区の19―53グリッドに位置する。西側を65号溝跡に切られている。

規模は不明であるが、おそらく径0.6m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.08mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は褐灰色土（１層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。



第28号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：酸化鉄少量含む。
3 灰　色　土：酸化鉄多量含む。
4 黒 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
5 黄 灰 色 土：酸化鉄微量、火山灰・炭化物少量、下層に炭化物帯状に含む。
6 灰　色　土：火山灰・酸化鉄微量、下層中央に炭化物帯状に含む。
7 灰　色　土：シルト質。酸化鉄・炭化物微量含む。
8 灰　色　土：粘土質。酸化鉄微量、炭化物多量含む。
9 灰白色粘土：酸化鉄微量、炭化物多量含む。
10 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量含む。しまり有。

第29号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：黄灰色土ブロック・酸化鉄少量含む。

第31号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：火山灰・酸化鉄少量含む。
2 黄灰色土：灰白色土ブロック少量含む。
3 黄灰色土：火山灰・酸化鉄・灰白色粒少量含む。
4 黄灰色土：酸化鉄・褐灰色土ブロック少量、灰白色土ブロック多量含む。

第32号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：シルト質。灰白色粒少量含む。
2 灰 色 土
3 灰 色 土：灰白色粒・ブロック多量含む。

第33号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：焼土粒少量、黄褐色土ブロック多量含む。しまり強。

第36号土坑
土層説明（ＡＡ′）
1 黒褐色土：黄褐色粒・酸化鉄少量含む。
2 黄褐色土：酸化鉄少量含む。

● ＝ 土　器　☆ ＝ 鉄製品

0　　2m
1：60

第62図　第28～43号土坑

第30号土坑（第62図）

平成12年度調査II区の14―54グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸1.44m、短軸1.2mの楕円形を呈する。深さは0.87mを測る。立ち上がりは全面オーバーハングしており、断面形は袋状を呈する。覆土は図示できなかったが、灰色や褐色系の土が堆積しており、遺物や礫、馬頭骨、歯などが検出された。遺物の出土状況と合わせて人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物（第64図）は、土器かわらけ（1）、焙烙（2）、板碑（3・4）がある。

1・2はともに底部片である。在地系。1は回転糸切り痕が残る。3・4は、土坑北側の立ち上がり付近から検出された。3は表面がやや磨耗しており、明確に確認できるのは主尊種子、蓮座、脇待種子のみである。下半部を欠く。4は残りが良好である。検出時は3つに割れていたが、復元可能であった。長さは1.04m、最大幅は27.4cm、最大厚は2.6cmを測る。紀年銘は文保元年（1317年）である。

本土坑の時期は14世紀前半以降であり、馬の骨類が出土したことから馬埋葬遺構と思われる。

第31号土坑（第62図）

平成12年度調査II区の13・14―54グリッドに位置する。東側が調査区外にある。

規模は不明であるが、おそらく径0.9m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.18mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面は南側にやや傾く。覆土は二層（3・4層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第64図）は、土器かわらけの底部片（1）のみである。回転糸切り痕を残す。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階と思われる。

第32号土坑（第62図）

平成17年度調査II区の45―56グリッドに位置する。東側をピットに切られている。

長軸1.16m、短軸0.72mの楕円形を呈する。深さは0.06mと浅い。立ち上がりは緩やかであり、底面中央及び西端にはピット状の掘り込みがみられた。覆土は三層（1～3層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第33号土坑（第62図）

平成17年度調査II区の44―58グリッドに位置する。上之古墳群第2号墳の周溝を切っている。

長軸1.14m、短軸0.65mの長方形を呈する。深さは0.08mを測る。立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦であった。覆土は褐灰色土（1層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第34号土坑（第62図）

平成13年度調査II区の43―59グリッドに位置する。上之古墳群第2号墳の周溝を切っており、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

径0.7m前後の円形を呈する。深さは0.11mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は平安時代の須恵器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第35号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の43･44―59グリッドに位置する。上之古墳群第２号墳の周溝を切っており、ピットとも重複するが、新旧関係は不明である。

長軸0.66m、短軸0.56mのいびつな楕円形を呈する。深さは0.13mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本土坑の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第36号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の42―60グリッドに位置する。南北端でピットと重複するが、新旧関係は不明である。溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。

長軸1.42m、短軸1.05m、深さ0.27mを測る。平面プランはいびつな楕円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は中央から北側にかけてピット状の掘り込みがいくつもみられ、段差が生じている。覆土は二層（１・２層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第64図）は、須恵器坏（１･２）、高台付椀（３･４）、甕（５）、土師器甕（６）、刀子（８）、不明鉄製品（７・９）がある。いずれも遺存状態が良い。須恵器は末野産が大半を占める。１・２はともに深身である。４は高台が短く、ほぼ直立する。５は厚手で、口縁部のコの字がやや崩れている。

本土坑の時期は、９世紀末から10世紀初頭にかけての段階と思われる。

第37号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の41・42―60グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。

径0.55m前後の円形を呈する。深さは0.3mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第38号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の42―60グリッドに位置する。北東部及び北西部でピットと重複するが、新旧関係は不明である。溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。東側には39号土坑が隣接している。

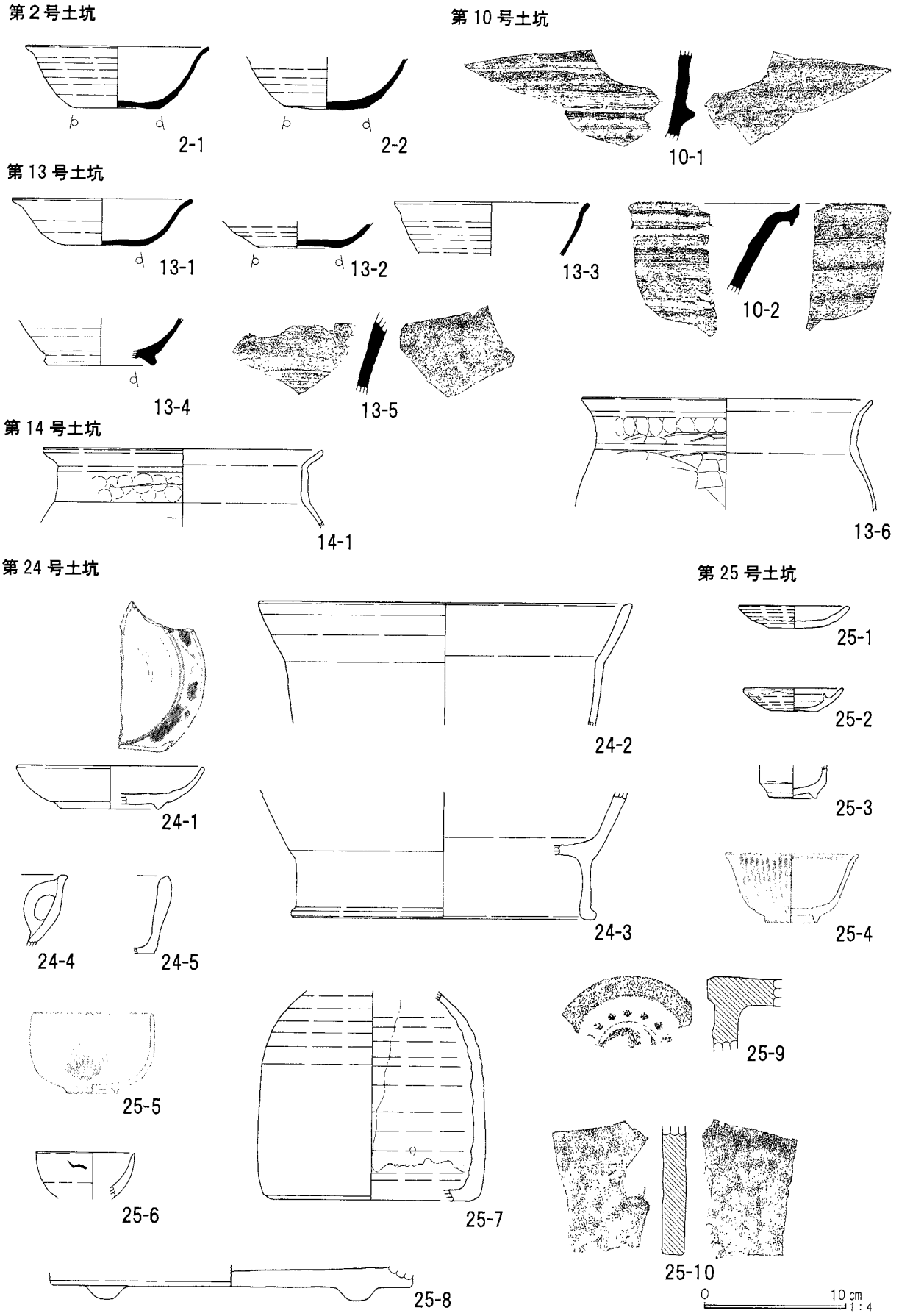
径0.65m前後の円形を呈する。深さは0.15mを測る。立ち上がりは西側が緩やか、東側はやや鋭角に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

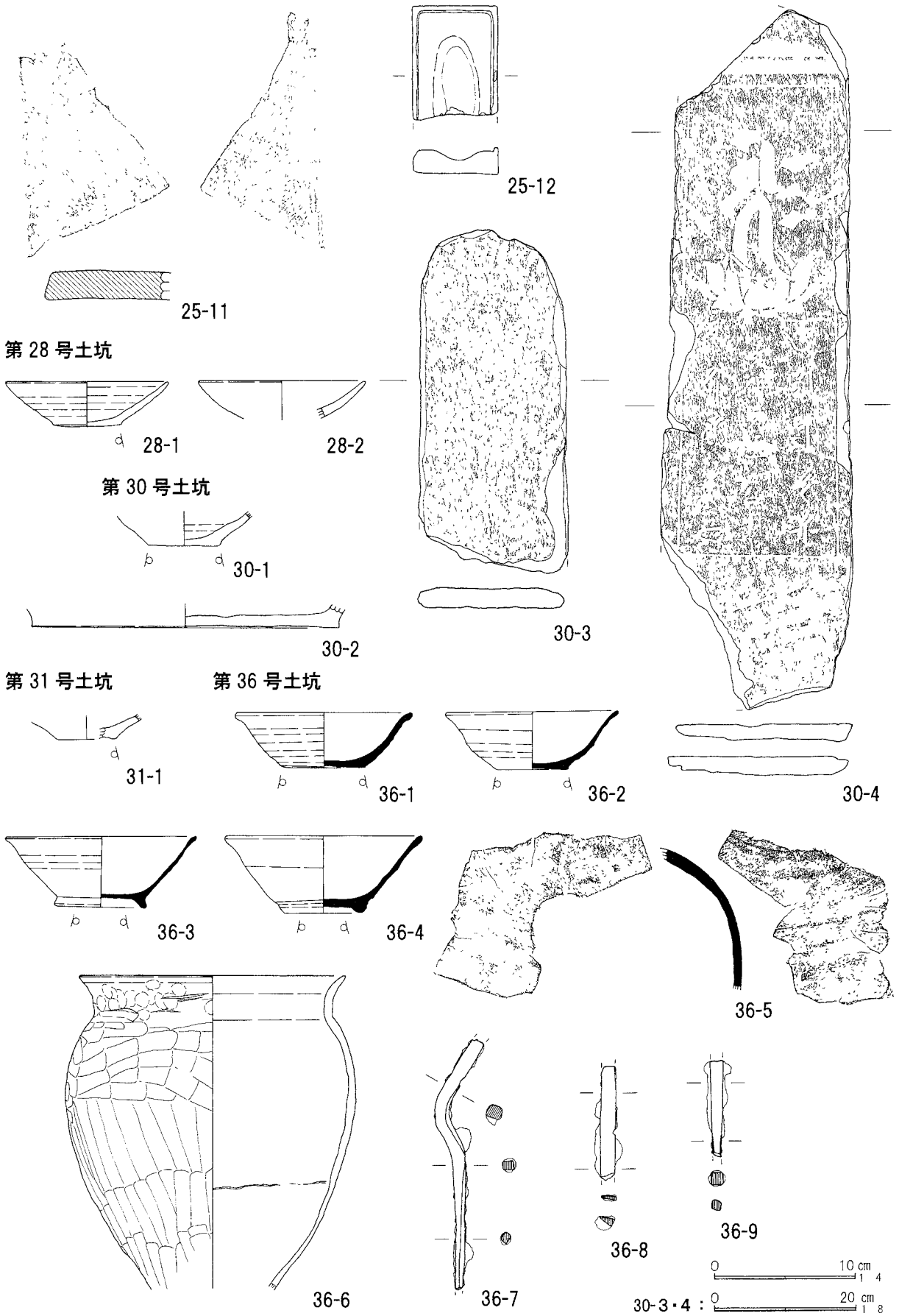
第39号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の42―60・61グリッドに位置する。北西部及び南東部でピットと重複するが、新旧関係は不明である。溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。西側には38号土坑が隣接している。

長軸0.93m、短軸0.8mのややいびつな楕円形を呈する。深さは0.17mを測る。立ち上がりは緩やかで



第63図　土坑出土遺物(1)



第64図　土坑出土遺物(2)

第27表　土坑出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
2-1	2号土坑	須恵器　坏	(13.2)	4.5	6.4	ABDHJL	にぶい橙色	B	20%	末野産。酸化焔焼成。
2-2	2号土坑	須恵器　坏	—	(3.8)	6.0	ABDL	にぶい褐色	C	体～底80%	末野産。
10-1	10号土坑	須恵器　甑	—	—	—	ABGL	灰色	A	胴上部片	末野産。
10-2	10号土坑	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	暗青灰色	B	口縁部片	末野産。
13-1	13号土坑	須恵器　坏	(13.0)	3.4	(5.6)	BHGK	黄灰色	B	20%	
13-2	13号土坑	須恵器　坏	—	(1.9)	6.3	BHL	灰色	B	底部50%	末野産。
13-3	13号土坑	須恵器高台椀	(14.0)	(3.9)	—	ABDHN	黄灰色	B	口～体15%	
13-4	13号土坑	須恵器高台椀	—	(3.4)	(8.1)	AL	灰色	B	体～高30%	末野産。
13-5	13号土坑	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	頸部片	末野産。内面自然釉付着。
13-6	13号土坑	土師器　甕	(21.0)	(8.1)	—	ABEHKN	明赤褐色	B	口～胴30%	
14-1	14号土坑	土師器　甕	(20.2)	(5.6)	—	ABDIK	にぶい橙色	B	口～胴20%	
24-1	24号土坑	磁器　皿	(13.6)	3.1	(7.2)	—	—	—	40%	18ｃ前。肥前系。染付・透明釉。
24-2	24号土坑	土器　鍋	(27.1)	(8.75)	—	ABIKM	黄灰色	B	口～胴10%	在地系。
24-3	24号土坑	土器　火鉢	—	(9.2)	(22.0)	ABCHJK	にぶい黄橙色	B	底部20%	在地系。
24-4	24号土坑	土器　焙烙	—	—	—	AH	黄灰色	B	内耳部片	在地系。
24-5	24号土坑	土器　焙烙	—	—	—	ABGHK	黒褐色	B	口縁部片	在地系。
25-1	25号土坑	陶器　灯明皿	8.0	1.6	4.0	—	—	—	ほぼ完形	18ｃ。瀬戸・美濃系。鉄釉。
25-2	25号土坑	陶器灯明受皿	7.2	1.7	3.3	—	—	—	ほぼ完形	18ｃ。瀬戸・美濃系。鉄釉。
25-3	25号土坑	陶器　香炉	—	(2.4)	3.4	—	—	—	底部80%	瀬戸・美濃系。灰釉。
25-4	25号土坑	磁器　碗	(9.6)	5.0	(3.9)	—	—	—	40%	18ｃ前。瀬戸・美濃系。染付・透明釉。
25-5	25号土坑	磁器　碗	(8.8)	5.8	(3.6)	—	—	—	40%	18ｃ。肥前系。染付・透明釉。
25-6	25号土坑	磁器　小坏	(7.2)	(3.4)	—	—	—	—	口～体20%	18ｃ。肥前系。染付・透明釉。
25-7	25号土坑	陶器　徳利	—	(15.1)	(14.5)	—	—	—	胴～底25%	18ｃ。瀬戸・美濃系。鉄釉。
25-8	25号土坑	土器　火鉢	—	(1.45)	(25.9)	ABEHK	橙色	B	底部25%	在地系。
25-9	25号土坑	軒丸瓦	推定径(11.0)cm、最大長(5.3)cm、最大厚(1.9)cm。1/3残存。三巴右巻。							
25-10	25号土坑	平　瓦	最大長(9.1)cm、最大幅(6.9)cm、最大厚(1.65)cm。先端一部のみ残存。							
25-11	25号土坑	平　瓦	最大長(15.8)cm、最大幅(10.2)cm、最大厚(2.0)cm。側面一部のみ残存。							
25-12	25号土坑	硯	最大長(8.1)cm、最大幅(6.15)cm、最大厚(1.95)cm。重量(142)ｇ。砂岩。2/3残存。							
28-1	28号土坑	土器かわらけ	(11.8)	3.25	(4.9)	ABCDHK	にぶい黄橙色	B	30%	在地系。
28-2	28号土坑	土器かわらけ	(12.0)	(2.75)	—	ABDGK	浅黄橙色	B	口～体20%	在地系。
30-1	30号土坑	土器かわらけ	—	(2.5)	5.3	BH	浅黄橙色	B	体～底100	在地系。
30-2	30号土坑	土器　焙烙	—	(1.7)	(22.2)	ABEGHKN	灰黄褐色	B	底部15%	在地系。
30-3	30号土坑	板　碑	最大長(1.04)cm、最大幅(27.4)cm、最大厚(2.6)cm。重量(6,400)ｇ。緑泥片岩。上半部のみ残存。							
30-4	30号土坑	板　碑	最大長(49.6)cm、最大幅(21.4)cm、最大厚(2.8)cm。重量(20,400)ｇ。緑泥片岩。山形及び基部一部欠。							
31-1	31号土坑	土器かわらけ	—	(1.7)	(4.2)	ABGH	灰白色	B	底部25%	在地系。
36-1	36号土坑	須恵器　坏	12.8	3.95	6.0	ABL	灰色	B	完形	末野産。
36-2	36号土坑	須恵器　坏	12.6	4.3	5.3	AL	灰色	B	80%	末野産。
36-3	36号土坑	須恵器高台椀	13.9	5.3	6.7	ABCEHMN	橙色	B	70%	
36-4	36号土坑	須恵器高台椀	14.2	5.6	6.5	ABL	灰色	B	90%	末野産。
36-5	36号土坑	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	黄灰色	B	肩～胴片	末野産。
36-6	36号土坑	土師器　甕	(19.2)	(22.8)	—	ABEHKMN	橙色	B	口～胴90%	
36-7	36号土坑	不明鉄製品	最大長(18.0)cm、最大幅(1.0)cm、最大厚(0.9)cm。重量(38.9)ｇ。両端欠。角錐状呈し、屈曲している。							
36-8	36号土坑	刀　子	最大長(8.25)cm、最大幅(1.1)cm、最大厚(0.55)cm。重量(20.1)ｇ。刃先及び柄部欠。							
36-9	36号土坑	不明鉄製品	最大長(7.05)cm、最大幅(0.95)cm、最大厚(0.95)cm。重量(17.7)ｇ。両端欠。角錐状呈する。							

あり、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第40号土坑（第62図）

平成13年度調査Ⅱ区の42―60グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。

径0.7m前後の円形を呈する。深さは0.23mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第41号土坑（第62図）

平成13年度調査II区の41・42―60・61グリッドに位置する。東側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。

径0.65m前後の円形を呈する。深さは0.27mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第42号土坑（第62図）

平成13年度調査II区の41・42―61グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。南側には24号住居跡が隣接している。

径0.5m前後、深さ0.22mの円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第43号土坑（第62図）

平成13年度調査II区の41―61グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられないが、溝跡や土坑、ピットが集中する箇所にある。

径0.55m前後の円形を呈する。深さは0.14mを測る。立ち上がりは緩やかで底面はほぼ平坦であった。覆土は図示できなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

6　井戸跡

第1号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の28―39グリッドに位置する。2号溝跡に上部大半を切られている。

検出できたのは底面付近のみである。長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形を呈する。深さは1m程になると思われる。ややオーバーハングしており、断面形は袋状を呈していたと思われる。覆土は図示できなかったが、灰色系の粘土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第2号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の31・32―41・42グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

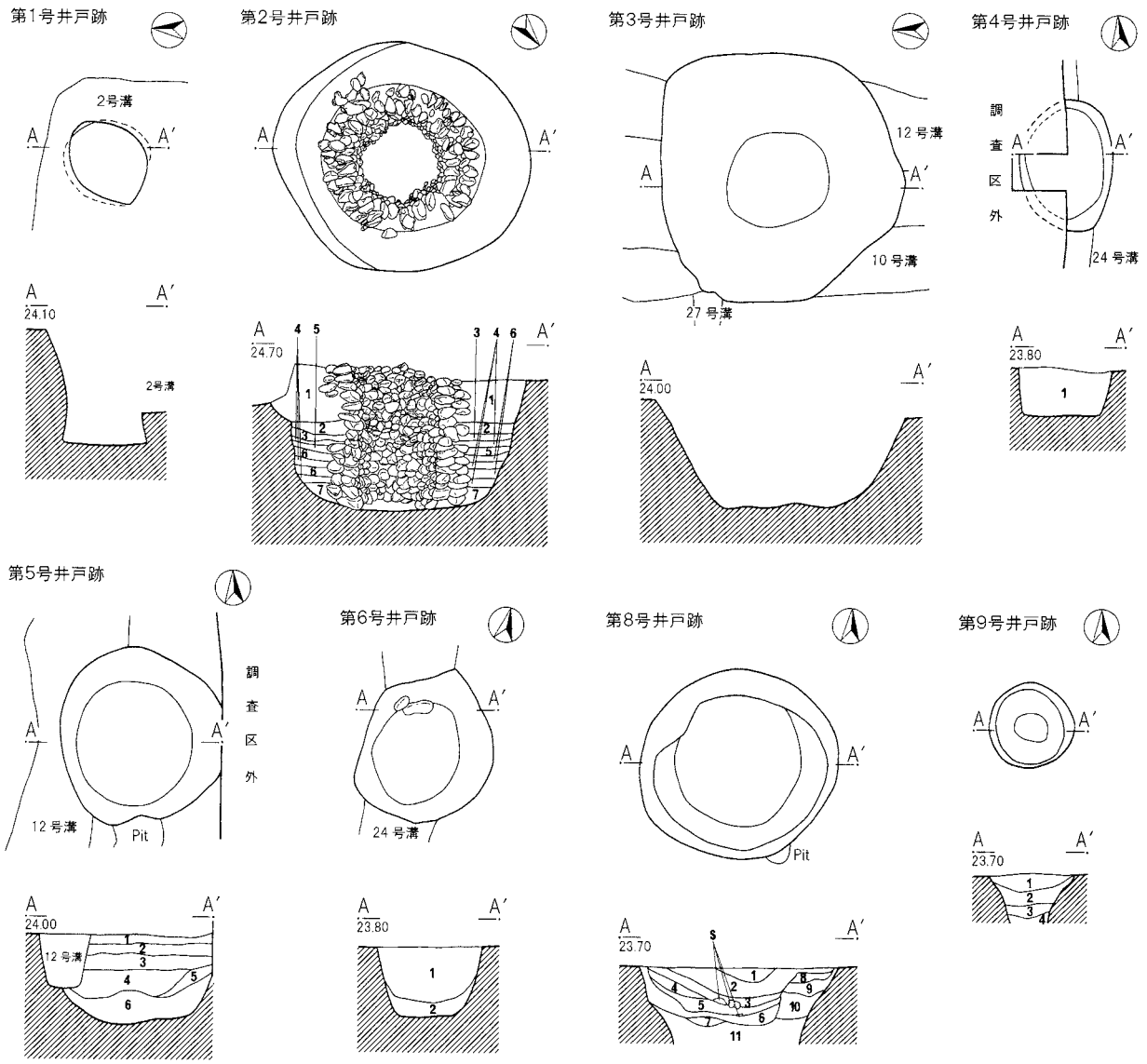
長軸2.17m、短軸1.95mの円形を呈する。深さは1.24mを測る。ほぼ中央に川原石を円形に積み上げて井筒を形成していた。掘り方は鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。井筒の周囲には、シルト質の土を交互に重ねていた。井筒内の覆土は図示しなかったが、褐色系の土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は、中世段階の在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階と思われる。

第3号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の27―43・44グリッドに位置する。10・12・27号溝跡を切っている。



第２号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰褐色土：酸化鉄微量含む。
2 暗褐色土：酸化鉄微量含む。
3 灰褐色土：シルト質。酸化鉄・灰白色シルトブロック微量含む。
4 灰褐色土：シルト質。３層より暗い。
5 灰褐色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
6 青灰色土：シルト質。酸化鉄少量含む。
7 灰白色土：シルト質。酸化鉄少量含む。

第４号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。褐灰色土ブロック・酸化鉄少量含む。

第５号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 暗 褐 色 土：酸化鉄少量含む。
2 灰黄褐色土：酸化鉄多量含む。
3 灰 褐 色 土：炭化物微量、酸化鉄多量含む。
4 灰 褐 色 土：酸化鉄多量含む。３層より暗い。
5 灰 褐 色 土：粘土質。淡黄色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
6 灰 褐 色 土：酸化鉄多量含む。４層より暗い。

0　　2m
1：60

第６号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰黄褐色土：粘土質。酸化鉄・灰白色土ブロック少量含む。
2 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄少量、灰色土ブロック多量含む。

第８号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　　色　　土：粘土質。
2 灰　　色　　土：粘土質。酸化鉄・砂多量含む。
3 灰　　色　　土：粘土質。オリーブ黄色粘土ブロック・酸化鉄・砂多量含む。
4 灰　白　色　土：粘土質。
5 灰　　色　　土：粘土質。炭化物少量含む。
6 灰　　色　　土：粘土質。層状に砂含む。
7 青 灰 色 粘 土
8 灰オリーブ色土：粘土質。灰色土少量含む。
9 灰　　色　　土：粘土質。酸化鉄多量含む。
10 オリーブ灰色土：粘土質。
11 灰オリーブ色土：粘土質。酸化鉄・灰色粘土ブロック多量含む。

第９号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰　色　土：粘土質。酸化鉄・青灰色粘土ブロック多量含む。
2 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
3 青灰色粘土
4 緑灰色粘土：炭化物少量含む。

第65図　第１～６・８・９号井戸跡

長軸2.12m、短軸2.05mのいびつな方形を呈する。深さは0.89mを測る。擂鉢状を呈し、底面はやや凹凸がみられた。覆土は図示できなかったが、上層には褐色系の土、下層には灰色系の粘土が堆積していた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）は、土器かわらけ（1）、焙烙（2・3）、羽口（4）がある。1は器形から中世段階のものか。2・3は在地系。4は全面黒褐色を呈する。還元部などはみられない。

本井戸跡の時期は、中世段階と思われる。

第4号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の26—43グリッドに位置する。24号溝跡を切っている。西側は調査区外にある。

長軸1.12m、短軸0.8mの楕円形を呈する。深さは0.42mを測り、井戸としては浅いことから土坑とした方が良いかもしれない。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は灰色土（1層）のみである。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）は、陶器碗の底部（1）のみである。内面のみ灰釉がかかる。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第5号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の26・27—44グリッドに位置する。西側を12号溝跡に切られている。南側立ち上がりではピットと重複するが、新旧関係は不明である。東側立ち上がりは調査区外にある。

径1.5m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.76mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はやや凹凸がみられた。覆土は六層（1～6層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）で図示可能なものは、瓦質土器鍋（1）と土器鍋（2）のみである。1・2ともに口縁部片。

本井戸跡の時期は、中世段階と思われる。

第6号井戸跡（第65図）

平成13年度調査III区の26—44グリッドに位置する。24号溝跡を切っている。

長軸1.35m、短軸1.12mのややいびつな楕円形を呈する。深さは0.6mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（1・2層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第69図）は、灰釉陶器高台付椀（1）の高台部片のみである。流れ込みと思われる。

本井戸跡の時期は、周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第7号井戸跡（第60図）

平成13年度調査III区の25—44・45グリッドに位置する。10号土坑を切っている。25号溝跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

長軸1.8m、短軸1.35mの楕円形を呈する。深さは0.62mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は黄褐色土（1層）のみである。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第８号井戸跡（第65図）

平成15年度調査区の23・24―46グリッドに位置する。ピットと重複するが、新旧関係は不明である。

径1.65m前後の円形を呈する。未完掘であるため、深さは不明である。鋭角に掘り込まれ、深さ0.2～0.3m下には北側以外にテラス状の段が設けられていた。覆土は11層（１～11層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）は、陶器甕（１）と砥石（２）のみである。１は常滑産。外面にのみ鉄釉がかかる。２は上下端を欠く。四面に使用痕が認められた。

本井戸跡の時期は、出土遺物から近世段階と思われる。

第９号井戸跡（第65図）

平成15年度調査区の24―47・48グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.72mの円形を呈する。未完掘であるため、深さは不明である。鋭角に掘り込まれ、深さ0.15m下付近には段が設けられていた。覆土は四層（１～４層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は平安時代の土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、周辺遺構との関係などから９世紀代と思われる。

第10号井戸跡（第66図）

平成15年度調査区の23・24―48グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径1.45m前後の円形を呈する。未完掘であるため、深さは不明である。鋭角に掘り込まれ、深さ0.25m下付近にはテラス状の段が設けられていた。覆土は八層（１～８層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）は、板碑（１）のみである。大半を欠くが、遺存状態は良好であり、銘文に金泥が残存していた。供養者に「法善」の文字がみられた。

本井戸跡の時期は、出土遺物から中世段階と思われる。

第11号井戸跡（第66図）

平成14年度調査Ｉ区の36・37―53・54グリッドに位置する。48号溝跡に切られている。南側立ち上がりは調査区外にある。

径2.2m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.92mを測る。鋭角に掘り込まれ、深さ0.5～0.6m下にはテラス状の段が設けられていた。中央からやや南東部底面には、井筒となる径0.67mのピット状の掘り込みがみられ、底面には曲物が据えられていた。覆土は九層（１～９層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

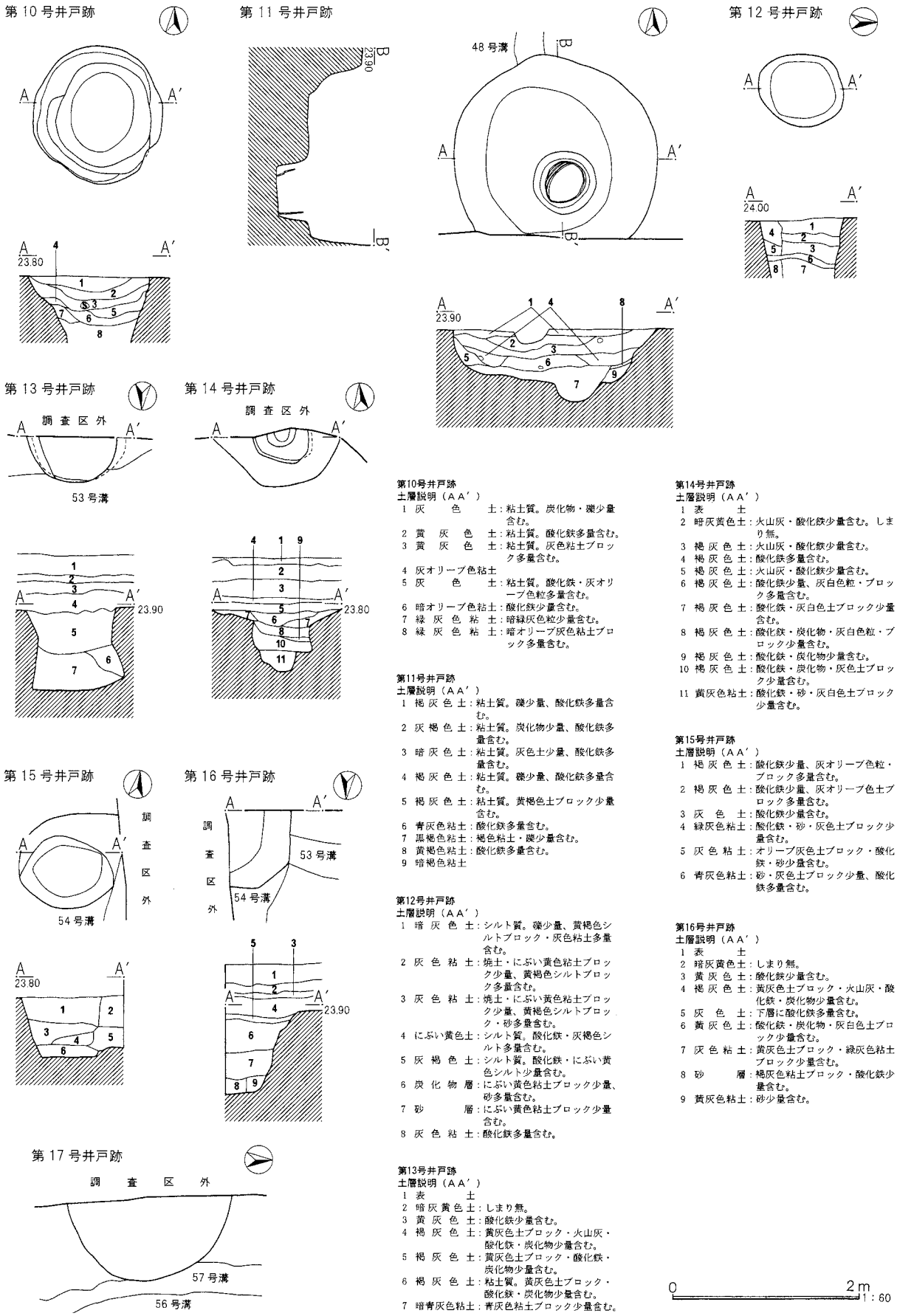
出土遺物（第69図）は、土器かわらけ（１）のみである。口縁部にタールが付着している。灯明皿。

本井戸跡の時期は、出土遺物から48号溝跡以前の近世段階と思われる。

第12号井戸跡（第66図）

平成14年度調査Ｉ区の32―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.9m、短軸0.78mの楕円形を呈する。未完掘であるため、深さは不明である。ほぼ垂直に掘り込まれており、筒状を呈すると思われる。覆土は八層（１～８層）確認された。粘土及びシルトブロック



第10号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 灰　色　土：粘土質。炭化物・礫少量含む。
2 黄 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 黄 灰 色 土：粘土質。灰色粘土ブロック多量含む。
4 灰オリーブ色粘土
5 灰　色　土：粘土質。酸化鉄・灰オリーブ色粒多量含む。
6 暗オリーブ色粘土：酸化鉄少量含む。
7 緑 灰 色 粘 土：暗緑灰色粒少量含む。
8 緑 灰 色 粘 土：暗オリーブ灰色粘土ブロック多量含む。

第11号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 褐 灰 色 土：粘土質。礫少量、酸化鉄多量含む。
2 灰 褐 色 土：粘土質。炭化物少量、酸化鉄多量含む。
3 暗 灰 色 土：粘土質。灰色土少量、酸化鉄多量含む。
4 褐 灰 色 土：粘土質。礫少量、酸化鉄多量含む。
5 褐 灰 色 土：粘土質。黄褐色土ブロック少量含む。
6 青灰色粘土：酸化鉄多量含む。
7 黒褐色粘土：褐色粘土・礫少量含む。
8 黄褐色粘土：酸化鉄多量含む。
9 暗褐色粘土

第12号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 暗 灰 色 土：シルト質。礫少量、黄褐色シルトブロック・灰色粘土多量含む。
2 灰 色 粘 土：焼土・にぶい黄色粘土ブロック少量、黄褐色シルトブロック多量含む。
3 灰 色 粘 土：焼土・にぶい黄色粘土ブロック少量、黄褐色シルトブロック・砂多量含む。
4 にぶい黄色土：シルト質。酸化鉄・灰褐色シルト多量含む。
5 灰 褐 色 土：シルト質。酸化鉄・にぶい黄色シルト少量含む。
6 炭 化 物 層：にぶい黄色粘土ブロック少量、砂多量含む。
7 砂　　層：にぶい黄色粘土ブロック少量含む。
8 灰 色 粘 土：酸化鉄多量含む。

第13号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 表　　土
2 暗灰黄色土：しまり無。
3 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
4 褐 灰 色 土：黄灰色土ブロック・火山灰・酸化鉄・炭化物少量含む。
5 褐 灰 色 土：黄灰色土ブロック・酸化鉄・炭化物少量含む。
6 褐 灰 色 土：粘土質。黄灰色土ブロック・酸化鉄・炭化物少量含む。
7 暗青灰色粘土：青灰色粘土ブロック少量含む。

第14号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 表　　土
2 暗灰黄色土：火山灰・酸化鉄少量含む。しまり無。
3 褐 灰 色 土：火山灰・酸化鉄少量含む。
4 褐 灰 色 土：酸化鉄多量含む。
5 褐 灰 色 土：火山灰・酸化鉄少量含む。
6 褐 灰 色 土：酸化鉄少量、灰白色粒・ブロック多量含む。
7 褐 灰 色 土：酸化鉄・灰白色土ブロック少量含む。
8 褐 灰 色 土：酸化鉄・炭化物・灰白色粒・ブロック少量含む。
9 褐 灰 色 土：酸化鉄・炭化物少量含む。
10 褐 灰 色 土：酸化鉄・炭化物・灰色土ブロック少量含む。
11 黄灰色粘土：酸化鉄・砂・灰白色土ブロック少量含む。

第15号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 褐 灰 色 土：酸化鉄少量、灰オリーブ色粒・ブロック多量含む。
2 褐 灰 色 土：酸化鉄少量、灰オリーブ色土ブロック多量含む。
3 灰　色　土：酸化鉄少量含む。
4 緑灰色粘土：酸化鉄・砂・灰色土ブロック少量含む。
5 灰 色 粘 土：オリーブ灰色土ブロック・酸化鉄・砂少量含む。
6 青灰色粘土：砂・灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。

第16号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）

1 表　　土
2 暗灰黄色土：しまり無。
3 黄 灰 色 土：酸化鉄少量含む。
4 褐 灰 色 土：黄灰色土ブロック・火山灰・酸化鉄・炭化物少量含む。
5 灰　色　土：下層に酸化鉄多量含む。
6 黄 灰 色 土：酸化鉄・炭化物・灰白色土ブロック少量含む。
7 灰 色 粘 土：黄灰色土ブロック・緑灰色粘土ブロック少量含む。
8 砂　　層：褐灰色粘土ブロック・酸化鉄少量含む。
9 黄灰色粘土：砂少量含む。

第66図　第11～17号井戸跡

を含むことから、人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第13号井戸跡（第66図）

平成12年度調査Ⅰ区の27・28―53グリッドに位置する。53号溝跡に切られている。南側半分は調査区外にある。

検出された東西は0.97m、深さは0.87mを測る。平面プランは円形を呈すると思われる。鋭角に掘り込まれているが、底面近くではオーバーハングしており、断面形は袋状を呈する。覆土は三層（5～7層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は平安時代の土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第14号井戸跡（第66図）

平成12年度調査Ⅰ区の27―52・53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北側半分が調査区外にある。

検出された東西は1.37m、深さは0.63mを測る。平面プランは円形を呈すると思われる。立ち上がりは緩やかでテラス状を呈し、以下はほぼ垂直に掘り込まれ、底面にはピット状の掘り込みがみられた。覆土は六層（6～11層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

第15号井戸跡（第66図）

平成12年度調査Ⅰ区の27―53グリッドに位置する。東側で54号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。北東部は調査区外にある。

短軸は1m、検出された東西は1.1mを測る。深さは0.64mである。平面プランは楕円形を呈すると思われる。鋭角に掘り込まれ、底面は西側が一段低い。覆土は六層（1～6層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

第16号井戸跡（第66図）

平成12年度調査Ⅰ区の27―53グリッドに位置する。53・54号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。北西部のみの検出であり、大半が調査区外にある。

規模及び平面プランは不明であるが、検出された南北は0.83m、東西は0.7mを測る。深さは0.85mである。鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は五層（5～9層）からなる。上・中層（5～7層）はブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

第17号井戸跡（第66図）

平成15年度調査区の26―53グリッドに位置する。57号溝跡を切っている。西側半分が調査区外にある。調査区境にあることから土砂が崩れる恐れがあったため、調査は平面プラン確認のみにとどまる。

径1.8m程の円形を呈すると思われる。その他の詳細については不明と言わざるを得ない。

遺物が検出されなかったが、周辺遺構との関係から中世段階以降と思われる。

第18号井戸跡（第67図）

平成15年度調査区の23―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。東側には19号井戸跡が隣接している。

径0.98mの円形を呈する。深さは0.62mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土は七層（1～7層）からなる。砂を含む層が多い。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は平安時代の須恵器小片が検出されたが、図示不可能であった。この他に貝片も検出された。

本井戸跡の時期は、出土遺物から9世紀代と思われる。

第19号井戸跡（第67図）

平成15年度調査区の23―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。西側には18号井戸跡が隣接している。

径0.9m前後の円形を呈する。深さは0.56mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面にはピット状の掘り込みがみられた。覆土は八層（1～8層）からなる。粘土ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物（第69図）で図示可能なものは、不明土製品（1）のみである。円形を呈し、縁が厚くなっている。この他に中・近世のかわらけの小片も検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第20号井戸跡（第67図）

平成15年度調査区21・22―52・53グリッドに位置する。62号溝跡を切り、28号土坑に切られている。

径1.4m前後の円形を呈する。深さは0.45mを測り、井戸としては浅いことから土坑とした方が良いかもしれない。鋭角に掘り込まれ、底面にはピット状の掘り込みがいくつかみられた。覆土は六層（1～6層）からなり、片岩や川原石を含んでいた。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は検出されなかったが、周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第21号井戸跡（第67図）

平成15年度調査区の21―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

長軸0.5m、短軸0.45mの楕円形を呈する。深さは0.46mを測る。東側にのみ深さ0.03mにテラス状の段が設けられている。その他は垂直に掘り込まれ、筒状を呈する。覆土は六層（1～6層）からなる。片岩や川原石を含む層が多い。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物は在地系土器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

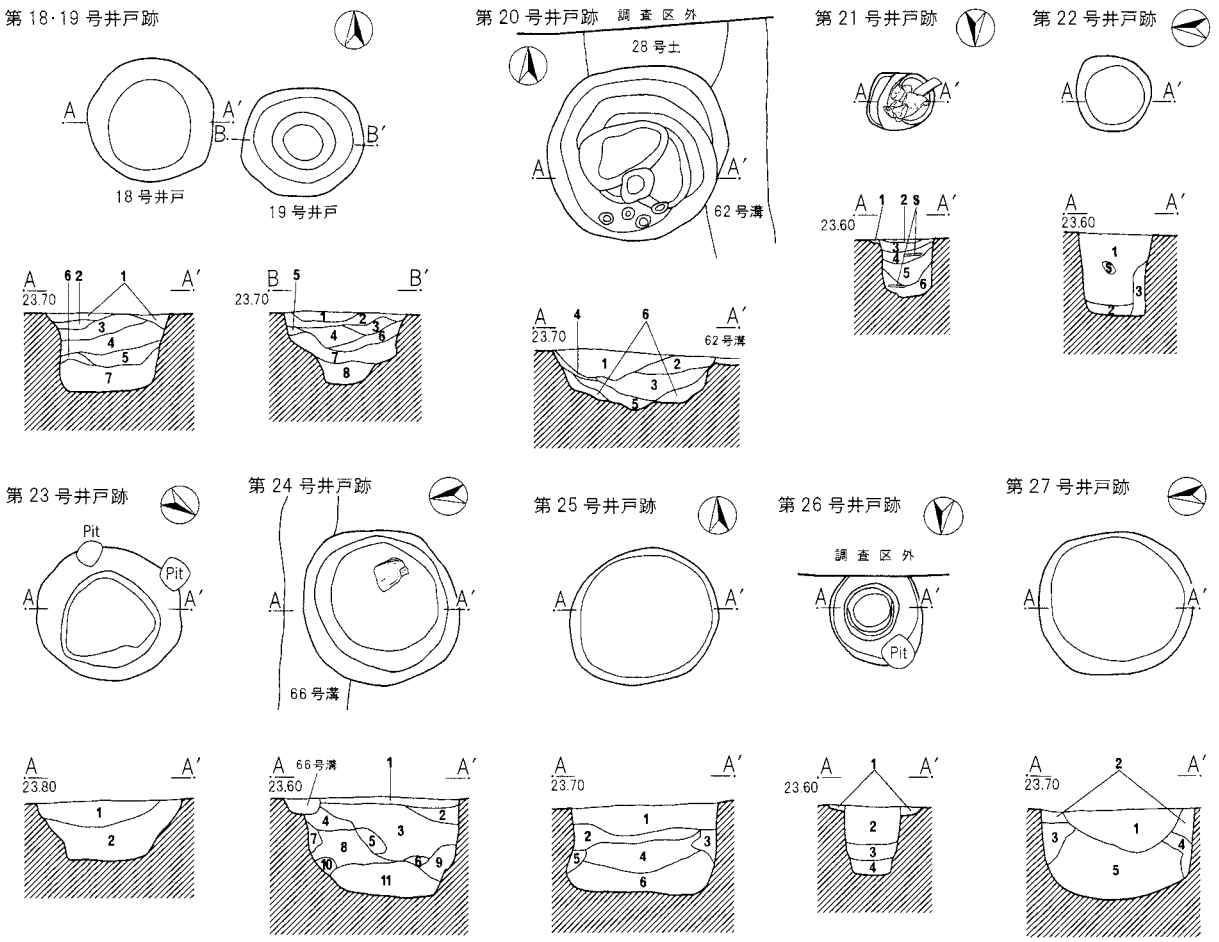
第22号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の21―52グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径0.6m前後の円形を呈する。深さは0.64mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、筒状を呈する。底面はほぼ平坦であった。覆土は三層（1～3層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

出土遺物（第69図）で図示可能なものは、土師器台付甕（1）のみである。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。



第18号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：粘土質。砂微量含む。
2 黄灰色土：粘土質。砂少量含む。
3 青灰色粘土：砂多量含む。
4 暗灰色粘土：砂・青灰色粘土ブロック少量含む。
5 灰色粘土：砂多量含む。
6 緑灰色粘土
7 暗灰色粘土：青灰色粘土ブロック微量含む。

第19号井戸跡
土層説明（ＢＢ′）
1 灰色土：粘土質。酸化鉄・灰白色粘土ブロック少量、砂多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄・砂・灰白色粒少量含む。
3 青灰色粘土：暗灰色粘土少量含む。
4 暗灰色粘土：青灰色粘土ブロック少量含む。
5 灰白色粘土
6 暗灰色粘土
7 灰色粘土：青灰色粘土ブロック多量含む。
8 暗灰色粘土：青灰色粘土ブロック微量含む。

第20号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：粘土質。灰白色粘土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
2 灰色土：粘土質。
3 灰色土：粘土質。灰色粒少量含む。
4 オリーブ黒色土：粘土質。
5 灰色粘土：暗灰色粘土少量含む。
6 灰色粘土

第21号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：粘土質。灰白色粒少量含む。
2 灰色土：粘土質。
3 灰白色土：粘土質。灰色土少量含む。
4 灰色粘土
5 灰色粘土：4層より粘性強。
6 灰色粘土：青灰色粘土少量含む。

第22号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：黒褐色粒・ブロック・酸化鉄・灰色粒・ブロック少量含む。
2 褐灰色粘土：酸化鉄少量含む。
3 黒褐色土：粘土質。酸化鉄少量含む。

第23号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 オリーブ黒色土：暗オリーブ褐色土ブロック・暗灰黄色粒少量、酸化鉄多量含む。
2 暗灰黄色土：黒褐色土ブロック・灰オリーブ色土ブロック少量含む。

第24号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：火山灰・酸化鉄少量、浅黄色土ブロック多量含む。
2 灰オリーブ色土：火山灰・酸化鉄少量、褐灰色土ブロック多量含む。
3 灰色土：火山灰・酸化鉄少量含む。
4 灰色土：褐灰色土ブロック・灰オリーブ色土ブロック少量含む。
5 褐灰色土：火山灰・酸化鉄少量含む。
6 黄灰色土：酸化鉄少量含む。
7 灰色土：褐灰色土ブロック・酸化鉄少量含む。
8 褐灰色土：酸化鉄少量、黄灰色土多量含む。
9 灰オリーブ色土：酸化鉄少量含む。
10 灰色土：酸化鉄・黄灰色土ブロック少量含む。
11 緑灰色粘土：酸化鉄少量、灰色土多量含む。

第25号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 黄灰色土：火山灰・酸化鉄少量、褐灰色土ブロック・灰オリーブ色土ブロック多量含む。
2 灰色土：褐灰色土ブロック・酸化鉄少量含む。
3 灰オリーブ色土：粘土質。
4 灰色土：粘土質。酸化鉄・灰オリーブ色度ブロック・礫少量含む。
5 褐灰色土：粘土質。酸化鉄・灰色土ブロック少量含む。
6 オリーブ灰色粘土：灰色粒・ブロック少量含む。

第26号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 灰色土：酸化鉄少量含む。
2 灰色土：酸化鉄・焼土粒少量含む。
3 褐灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
4 灰色粘土：酸化鉄少量含む。

第27号井戸跡
土層説明（ＡＡ′）
1 褐灰色土：褐灰色土ブロック・黄灰色土ブロック・酸化鉄多量含む。
2 灰オリーブ色土：酸化鉄少量含む。
3 褐灰色土：火山灰・褐灰色土ブロック・酸化鉄・灰白色土ブロック少量含む。
4 黄灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
5 オリーブ灰色土：粘土質。酸化鉄少量、オリーブ黒色土多量含む。

0　2m
1：60

第67図　第18～27号井戸跡

第23号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の18・19―53グリッドに位置する。西側でピットと重なるが、新旧関係は不明である。

径1.1m前後の円形を呈する。深さは0.47mを測り、井戸としては浅いことから土坑とした方が良いかもしれない。鋭角に掘り込まれ、深さ0.3m前後には段が設けられていた。底面はほぼ平坦であった。覆土は二層（1・2層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第24号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の17・18―52・53グリッドに位置する。北側を66号溝跡に切られている。

径1.24mの円形を呈する。深さは0.8mを測る。垂直に掘り込まれ、深さ0.55～0.6m下には段が設けられていた。底面はほぼ平坦であった。覆土は11層（1～11層）からなる。ランダムな層位であり、人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物（第69図）で図示可能なものは、陶器碗（1）のみである。口縁部を欠く。内面及び外面上部に緑釉がかかり、内面は貫入が入る。この他に桃の種子も3点検出された。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから近世段階と思われる。

第25号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の17―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径1.07mの円形を呈する。深さは0.72mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は六層（1～6層）からなる。ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は平安時代の須恵器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第26号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の17・18―53グリッドに位置する。北側でピットと重複するが、新旧関係は不明である。南側立ち上がりは調査区外にある。

径0.75m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.54mを測る。深さ0.05m下にテラス状の段が設けられており、中央の井筒となる径0.45mの掘り込みは、ほぼ垂直に掘り込まれ、筒状を呈する。底面はほぼ平坦であった。覆土は四層（1～4層）からなる。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

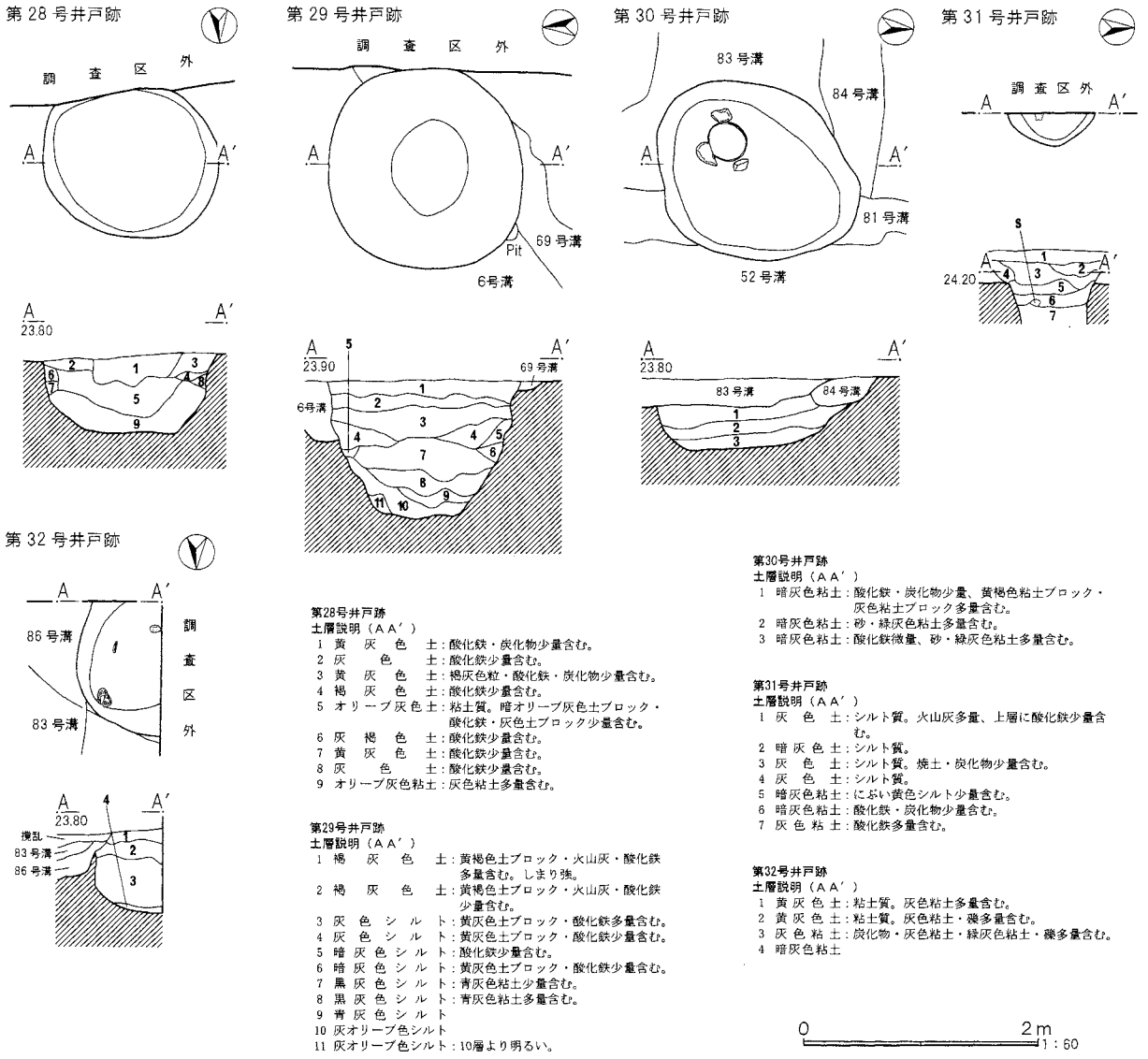
第27号井戸跡（第67図）

平成12年度調査II区の17―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

径1.1m前後の円形を呈する。深さは0.71mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はやや擂鉢状を呈する。覆土は五層（1～5層）からなる。ランダムな層位であり、人為的に埋め戻されたと思われる。

出土遺物（第69図）で図示可能なものは、青磁碗（1）と打製石斧（2）のみである。また、桃の種子も1点検出された。1は口縁部片である。外面に蓮弁文がある。龍泉窯系。2は流れ込み遺物である。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階と思われる。



第68図　第28～32号井戸跡

第28号井戸跡（第68図）

平成12年度調査II区の16・17―53グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。南側立ち上がりが調査区外にある。

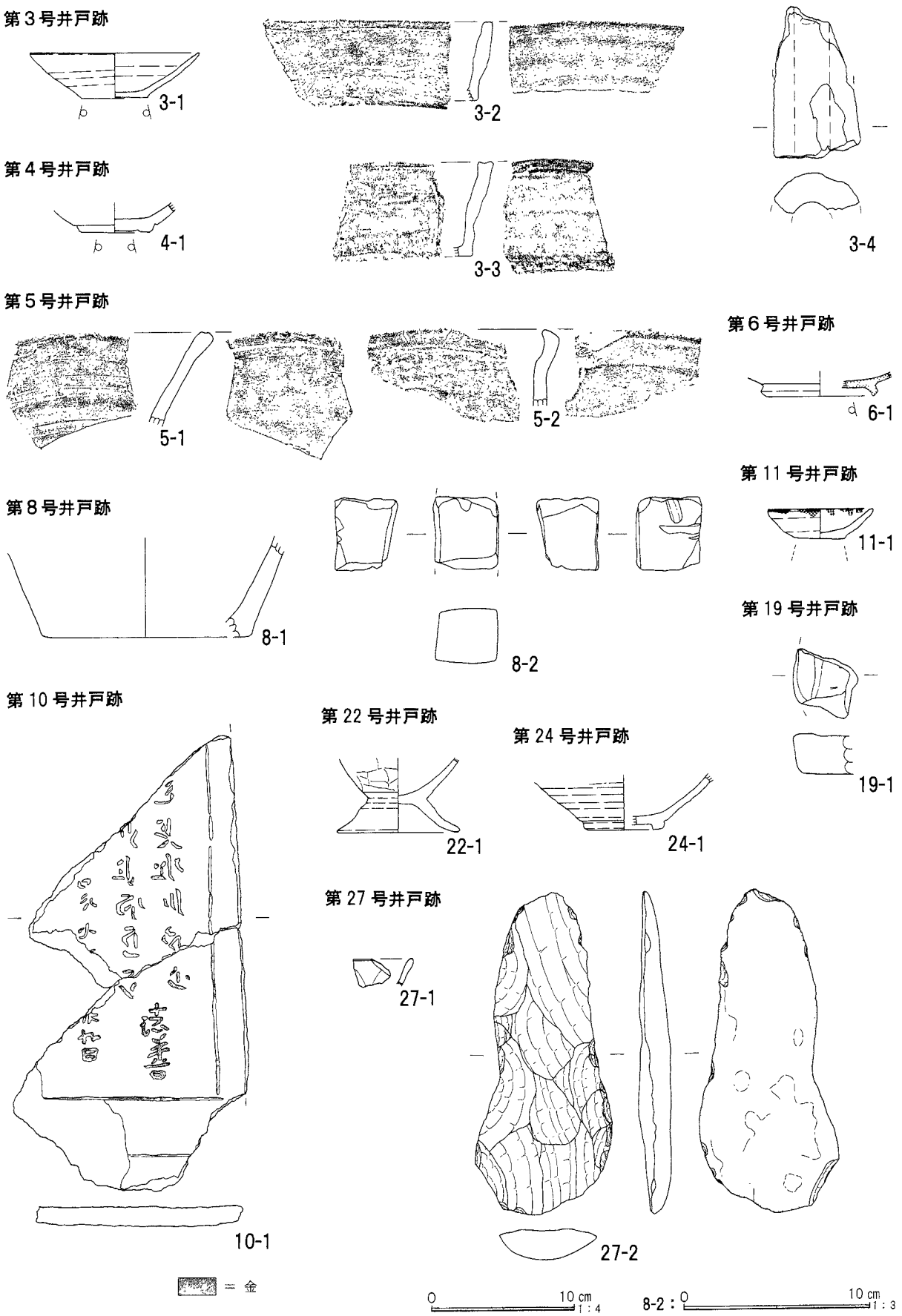
径1.4m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.68mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。覆土は九層（1～9層）からなる。ランダムな層位であり、人為的に埋め戻されたと思われる。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

第29号井戸跡（第68図）

平成17年度調査II区の44―55グリッドに位置する。6・69号溝跡を切っている。

径1.65m前後の円形を呈する。深さは1.19mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はやや凹凸がみられた。覆土は11層（1～11層）からなる。上・中層（1～6層）はブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。



第69図　井戸跡出土遺物

第28表　井戸跡出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
3-1	3号井戸跡	土器かわらけ	(12.2)	3.25	4.7	ABEM	にぶい橙色	B	40%	在地系。
3-2	3号井戸跡	土器　焙烙	—	—	—	ABIK	黒褐色	B	口縁部片	在地系。
3-3	3号井戸跡	土器　焙烙	—	—	—	ABG	黒褐色	B	口縁部片	在地系。
3-4	3号井戸跡	羽　口	最大長(10.9)cm、最大幅(6.2)cm、孔径(2.5)cm。重量(142)g。大半欠。還元部無。							
4-1	4号井戸跡	陶器　碗	—	(2.1)	5.0	—	—	—	底部100%	内面灰釉。
5-1	5号井戸跡	瓦質土器鍋	—	—	—	—	黒褐色	—	口縁部片	在地系。
5-2	5号井戸跡	土器　鍋	—	—	—	ABGIMN	黄灰色	B	口縁部片	在地系。
6-1	6号井戸跡	灰釉　高台皿	—	(1.7)	(8.4)	ABN	灰白色	A	高台部20%	内外面無釉。
8-1	8号井戸跡	陶器　甕	—	(7.2)	(14.9)	—	—	—	底部15%	常滑産。外面鉄釉。
8-2	8号井戸跡	砥　石	最大長(3.95)cm、最大幅(3.35)cm、最大厚(3.3)cm。重量(64.3)g。砂岩。両端欠。四面使用。							
10-1	10号井戸跡	板　碑	最大長(32.2)cm、最大幅(16.7)cm、最大厚(1.4)cm。重量(1,179)g。緑泥片岩。大半欠。金泥残存。							
11-1	11号井戸跡	土器かわらけ	7.5	2.2	3.5	ABEHKM	にぶい黄橙色	B	完形	在地系。口縁部タール付着。灯明皿。
19-1	19号井戸跡	不明土製品	最大長(5.0)cm、最大幅(4.6)cm、最大厚(2.8)cm。重量(46.8)g。大半欠。円形呈する。							
22-1	22号井戸跡	土師器台付甕	—	(5.3)	8.7	BDEHJKM	明褐色	B	接～台100	
24-1	24号井戸跡	陶器　碗	—	(3.9)	(5.8)	—	—	—	体～底40%	緑釉。
27-1	27号井戸跡	青磁　碗	—	—	—	—	—	—	口縁部片	龍泉窯系。
27-2	27号井戸跡	打製石斧	最大長23.05cm、最大幅9.6cm、最大厚2.3cm。重量540g。粘板岩。完形。弥生時代？							

遺物は平安時代の須恵器・土師器の小片が検出されたが、図示不可能であった。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから9世紀代と思われる。

第30号井戸跡（第68図）

平成14年度調査II区の32―56・57グリッドに位置する。重複する溝跡すべてに切られており、検出できたのは下部のみである。

長軸1.84m、短軸1.47mの楕円形を呈する。深さは0.35mを測る。立ち上がりは北側が緩やか、南側は鋭角に掘り込まれている。底面はほぼ平坦であり、北西部では礫に混じって曲物が据えられていた。覆土は三層（1～3層）からなる。粘土ブロックを多量含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は瓦質土器やかわらけの小片が検出されたが、図示不可能であった。桃の種子も検出された。

本井戸跡の時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから中世段階以降と思われる。

第31号井戸跡（第68図）

平成14年度調査II区の32―57グリッドに位置する。他の遺構との重複はみられない。西側は調査区外にある。

規模は不明であるが、検出された南北は0.74mを測り、平面プランは円形を呈すると思われる。未完掘であるため、深さは不明である。鋭角に掘り込まれていた。覆土は七層（1～7層）確認された。自然堆積か人為的な埋め戻しかは不明である。

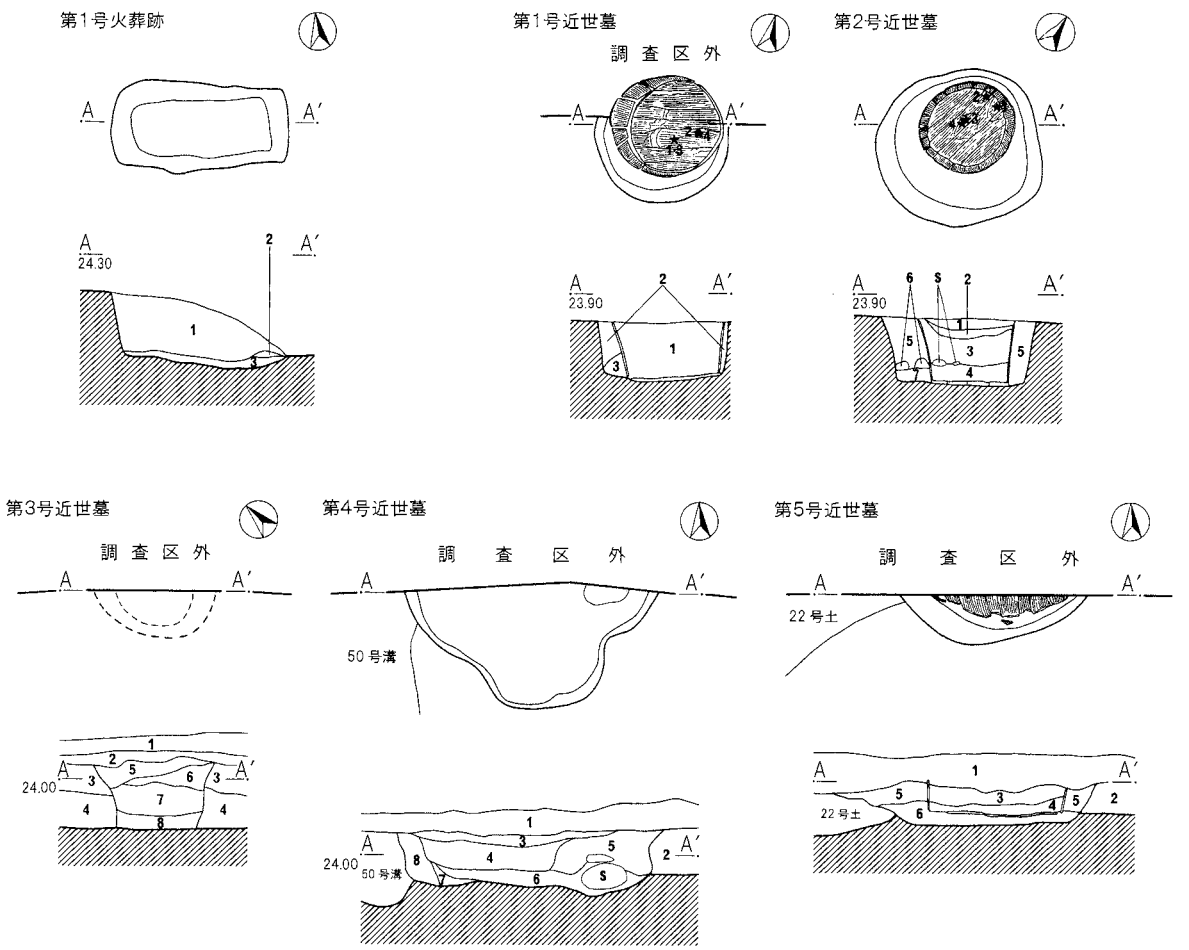
遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。

第32号井戸跡（第68図）

平成14年度調査II区の32―61グリッドに位置する。83・86号溝跡に切られている。北東部のみの検出であり、大半が調査区外にある。

規模及び平面プランは不明であるが、検出された南北は1.12m、東西は0.72mを測る。深さは0.7mである。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はやや擂鉢状を呈する。覆土は四層（1～4層）からなる。粘土を多く含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物が検出されなかったため、本井戸跡の時期は不明である。



第１号火葬跡
土層説明（ＡＡ′）
1 褐 色 土：焼土粒・炭化物少量含む。
2 焼 土 層
3 炭化物層：骨片含む。

第１号近世墓
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。木片少量、酸化鉄多量含む。
2 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 黄灰色土：粘土質。酸化鉄少量含む。

第２号近世墓
土層説明（ＡＡ′）
1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
2 黄灰色土：粘土質。酸化鉄多量含む。
3 灰 色 土：粘土質。酸化鉄・木片多量、下層に礫含む。
4 緑灰色土：粘土質。木片多量含む。
5 灰 色 土：粘土質。酸化鉄多量含む。
6 灰白色土：粘土質。酸化鉄少量含む。
7 黄灰色土：粘土質。暗灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。

第３号近世墓
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：シルト質。
2 灰白色土：シルト質。
3 灰 色 土：シルト質。
4 暗灰色土：シルト質。黄褐色粘土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
5 灰 色 土：シルト質。
6 褐灰色土：シルト質。酸化鉄多量含む。
7 灰 色 土：シルト質。酸化鉄多量含む。
8 暗灰色土：粘土質。酸化鉄少量、黄褐色粘土ブロック多量含む。

第４号近世墓
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。火山灰少量、酸化鉄多量含む。
2 暗灰色土：粘土質。黄褐色シルトブロック、酸化鉄少量含む。
3 灰 色 土：粘土質。火山灰・礫少量、上層に酸化鉄含む。
4 灰 色 土：シルト質。白色砂質土少量、火山灰多量、下層に酸化鉄含む。
5 褐灰色土：シルト質。火山灰少量、上層に砂含む。
6 暗灰色土：粘土質。木片少量含む。
7 暗青灰色土：粘土質。
8 暗灰色土：粘土質。火山灰・酸化鉄少量含む。

第５号近世墓
土層説明（ＡＡ′）
1 灰 色 土：粘土質。黄褐色シルトブロック少量、下層に酸化鉄含む。
2 暗灰色土：粘土質。黄褐色シルトブロック、酸化鉄少量含む。
3 黄灰色土：粘土質。下層に酸化鉄含む。
4 暗灰色土：粘土質。酸化鉄・木片少量含む。
5 黄灰色土：粘土質。
6 暗灰色土：粘土質。

★ ＝ 古 銭

0 1m
1：40

第70図　第１号火葬跡・第１～５号近世墓

7　火葬跡

第１号火葬跡（第70図）

平成13年度調査III区の31・32―41グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。北側中央から東側にかけて上部を攪乱により欠くため、煙道部となる突出部は確認されず、燃焼部のみの検出である。

長軸0.93m、短軸0.49mの長方形を呈する。深さは0.32mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はやや凹凸がみられた。覆土は三層（１～３層）からなる。上層（１層）が厚く堆積しており、その下に焼土層（２層）、骨片を含む炭化物層（３層）が確認された。棺座となる礫などは検出されなかった。

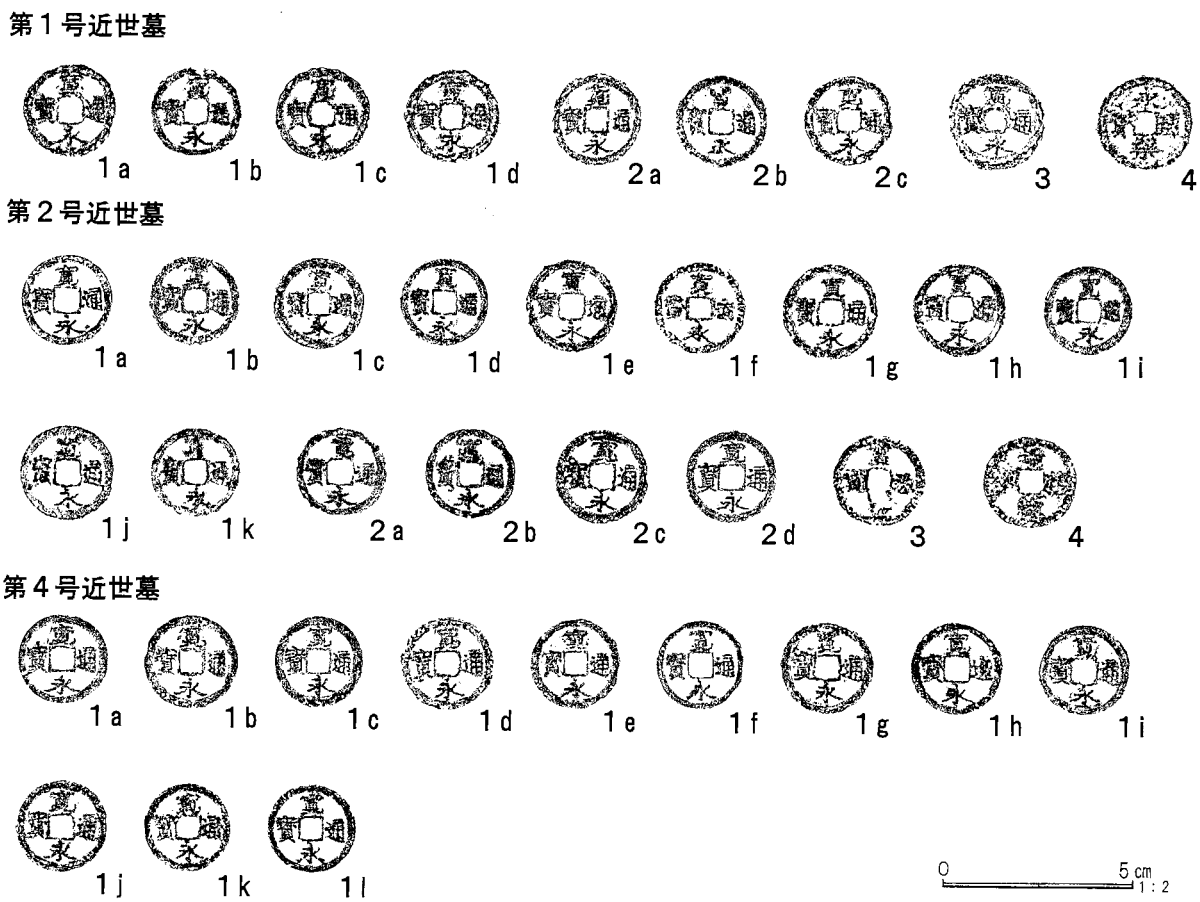
本火葬跡の時期は、中世段階と思われる。

8　近世墓

第１号近世墓（第70図）

平成14年度調査Ｉ区の37―52グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。北側半分が調査区外にあるが、桶のみ全部検出した。掘り方は検出していない。

掘り方は径0.7m前後の円形を呈すると思われる。深さは0.31mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。桶は掘り方ほぼ中央に据えられ、遺存状態は良好であった。桶底面の径は0.47m前後を測る。縦板は西側がやや外に傾くが、ほぼ原位置を保っており、全周していた。縦板は16枚、底板は７枚で構成される。覆土は三層（１～３層）確認された。桶の周囲に灰色系の土（２・３層）が充



第71図　近世墓出土遺物

第29表　近世墓出土古銭観察表

番号	出土遺構	銭名	法量・残存率・備考
1-1a	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.9g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-1b	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.12cm。重量(2.8)g。一部欠。古寛永。1636～1656年。
1-1c	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.6cm、最大厚0.12cm。重量3.8g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-1d	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.5cm、孔径0.55cm、最大厚0.1cm。重量2.9g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-2a	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.55cm、最大厚0.15cm。重量4.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-2b	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.55cm、最大厚0.1cm。重量3.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-2c	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.5g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-3	1号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.5cm、最大厚0.1cm。重量2.8g。完形。古寛永。1636～1656年。
1-4	1号近世墓	永楽通寶	最大径2.4cm、孔径0.5cm、最大厚0.1cm。重量3.8g。完形。明1408年。
2-1a	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1b	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1c	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1d	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.4g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1e	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.3g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1f	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.55cm、最大厚0.1cm。重量3.0g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1g	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.1g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1h	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1＋0.1=0.2cm。重量6.6g。完形。2枚重。古寛永。1636～1656年。
2-1i	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.4g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1j	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.7g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-1k	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.15cm。重量4.4g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-2a	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量3.3g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-2b	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.4g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-2c	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.7g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-2d	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.6g。完形。古寛永。1636～1656年。
2-3	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量(2.2)g。一部欠。古寛永。1636～1656年。
2-4	2号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量3.0g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1a	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.5g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1b	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.45cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.3g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1c	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.5g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1d	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.4cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量7.0g(1d＋1i)。完形。古寛永。1iと裏面同士で接着状態。
4-1e	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.7g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1f	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.2cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.4g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1g	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.1g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1h	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.12cm。重量4.3g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1i	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.65cm、最大厚0.1cm。重量7.0g(1d＋1i)。完形。古寛永。1dと裏面同士で接着状態。
4-1j	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.35cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.2g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1k	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.2cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.1g。完形。古寛永。1636～1656年。
4-1l	4号近世墓	寛永通寶	最大径2.3cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量3.5g。完形。古寛永。1636～1656年。

塡されていた。桶内から骨は検出されず、木片や酸化鉄を含む灰色土（1層）が確認されたにとどまる。

出土遺物（第71図）は、古銭（1a～4）がある。桶南東部の底板上から検出された。1a～3は寛永通寶であり、すべて古寛永である。1は4枚（a～d）、2は3枚（a～c）、3は1枚検出された。4は永楽通寶であるが、2と重なって検出されたことから、流れ込みではない。検出された古銭は計9枚である。

第2号近世墓（第70図）

平成14年度調査Ⅰ区の37―52グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

掘り方は径0.85m前後の円形を呈する。深さは0.35mを測る。西側は鋭角、その他はほぼ垂直に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。桶は掘り方中央からやや北側に据えられ、遺存状態は良好であった。底面の径は0.4m前後を測る。縦板はほぼ原位置を保っており、全周していた。縦板は18枚、底板は6枚で構成される。覆土は七層（1～7層）確認された。桶の周囲に灰色系の土（5～7層）が充塡されていた。桶内から骨は検出されず、木片や酸化鉄、礫を含む層（1～4層）が確認されたにとどまる。

出土遺物（第71図）は、古銭（1a～4）がある。桶の中央及び北側の底板上から検出された。すべ

て寛永通寶であり、古寛永である。１は12枚（ａ～ｋ）、２は４枚（ａ～ｄ）、３・４は１枚ずつ検出された。１ｈは２枚接着していたため、検出された古銭は計18枚である。

第３号近世墓（第70図）

平成14年度調査Ｉ区の37―52グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はみられない。

土層断面のみの確認である。北東部は調査区外にある。覆土は四層（５～８層）からなる。骨をはじめ桶及びその痕跡は確認されなかった。その他の詳細については不明と言わざるを得ない。

遺物は検出されなかった。

第４号近世墓（第70図）

平成14年度調査Ｉ区34―52・53グリッドに位置する。西側で50号溝跡を切り、北側は調査区外にある。

規模は不明であるが、検出された東西は1.33m、南北は0.67mを測る。平面プランもはっきりしないが、いびつな円形になろうか。深さは調査区境の土層断面では0.35mを測る。鋭角に掘り込まれ、底面はやや凹凸がみられた。覆土は六層（３～８層）からなる。骨は検出されなかったが、底面東側から抱石と思われる礫が検出された。

出土遺物（第71図）は、古銭（１ａ～１１）のみである。具体的な出土位置は不明であるが、覆土からまとまって検出された。すべて寛永通寶であり、古寛永である。検出された古銭は計12枚である。

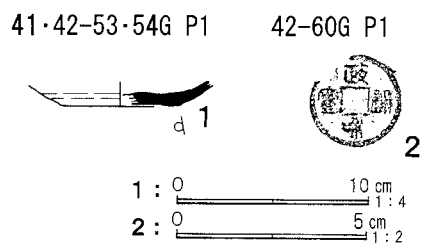
第５号近世墓（第70図）

平成14年度調査Ｉ区の32―52・53グリッドに位置する。西側で22号土坑を切っている。南側一部のみの検出であり、大半は調査区外にある。

検出された掘り方の東西は0.97mを測り、１m程の円形を呈すると思われる。深さは調査区境の土層断面では0.2mを測る。西側は緩やか、その他は鋭角に掘り込まれ、底面はほぼ平坦であった。桶は縦板の遺存状態が悪く、土層断面でのみ確認された。底板は検出できた範囲では遺存状態は良好である。７枚で構成される。覆土は四層（３～６層）確認された。桶は６層上に設置されており、周囲に５層が充塡されていた。桶内から骨は検出されず、木片や酸化鉄を含む層（３・４層）が確認されたにとどまる。

遺物は検出されなかった。

９　ピット



第72図　ピット出土遺物

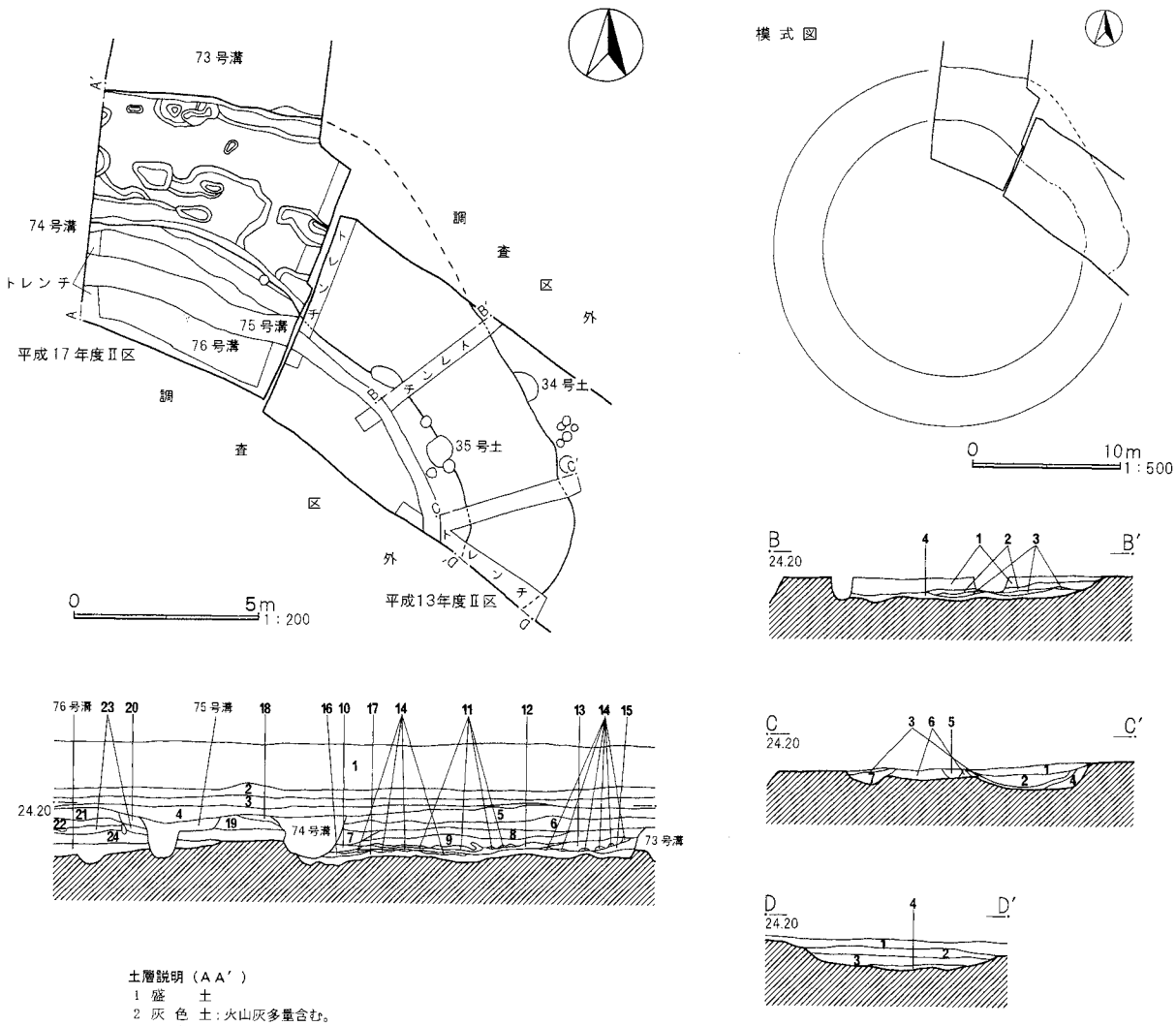
ピットは各調査区から検出された。中でも平成12年度調査Ｉ区、平成13年度調査II区、平成14年度調査Ｉ区、平成15年度調査区などに集中する。規則的に並ばないが、性格としては柱穴と思われ、建物跡や柵列跡を構成していたと推測される。出土遺物が少なく、時期の特定は困難であるが、平面プランは方形のものが多く、周辺遺構との関係を考慮すると、中世以降のものである可能性が高い。

ピット出土遺物（第72図）で図示可能なものは、須恵器坏（１）、古銭（２）のみである。

１は平成13年度調査Ｉ区の41・42―53・54グリッドＰ１から出土した。底部片。流れ込みと思われる。２は平成13年度調査II区の42―60グリッドＰ１から出土した。政和通寶である。一部を欠く。なお、これらの遺物が出土したピットのみ全測図にピット名を記載した。

第30表　ピット出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	41・42-53・54GP1	須恵器　坏	―	(1.3)	(6.4)	ABDLN	灰白色	B	底部25%	末野産。
2	42-60GP1	古　銭	最大径2.4cm、孔径0.65cm、最大厚0.13cm。重量(3.3)ｇ。一部欠。「政和通寶」。北宋1111年。							



土層説明（ＡＡ′）
1 盛　　土
2 灰　色　土：火山灰多量含む。
3 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック微量、酸化鉄多量含む。
4 暗灰色土：酸化鉄多量含む。
5 灰黄色土：灰色土ブロック少量、酸化鉄多量含む。
6 灰　色　土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
7 褐灰色土：灰黄色粒・灰白色シルトブロック少量含む。
8 灰　色　土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。しまり有。
9 暗灰色土：灰黄色粒微量、酸化鉄多量含む。
10 暗灰色土：粘土質。灰白色土少量含む。
11 灰白色土：粘土質。
12 暗灰色土：粘土質。炭化物帯状に含む。
13 灰褐色土
14 黄橙色土：火山灰層。ＦＡ？
15 灰　色　土：粘土質。酸化鉄少量含む。
16 暗灰色土：粘土質。灰白色土ブロック微量含む。
17 暗灰色土ブロックと灰白色土ブロック混合層
18 灰　色　土：灰白色土ブロック多量含む。
19 灰褐色土：酸化鉄・灰白色粒少量含む。
20 灰　色　土：灰黄色粒・ブロック少量、酸化鉄多量含む。
21 灰　色　土：灰黄色粒少量、酸化鉄多量含む。
22 褐灰色土：灰黄色土ブロック微量含む。
23 黒褐色土：粘土質。
24 褐灰色土：灰白色粒微量、酸化鉄多量含む。

土層説明（ＢＢ′）
1 灰褐色土：粘土質。
2 暗灰色土：粘土質。炭化物少量含む。
3 淡橙色土：火山灰層。ＦＡ？
4 灰褐色土：粘土質。灰白色土ブロック少量含む。

土層説明（ＣＣ′）
1 灰褐色土：粘土質。
2 暗褐色土：粘土質。炭化物少量含む。
3 淡橙色土：火山灰層。ＦＡ？
4 暗褐色土：粘土質。
5 暗褐色土：粘土質。灰白色土ブロック少量含む。
6 灰　色　土：粘土質。灰白色土ブロック多量含む。
7 褐灰色土：粘土質。灰白色土ブロック多量含む。

土層説明（ＤＤ′）
1 暗灰色土：粘土質。酸化鉄・灰白色粒・ブロック微量含む。
2 暗灰色土：粘土質。灰白色土ブロック多量含む。
3 褐灰色土：粘土質。灰色土ブロック少量含む。
4 灰　色　土：粘土質。

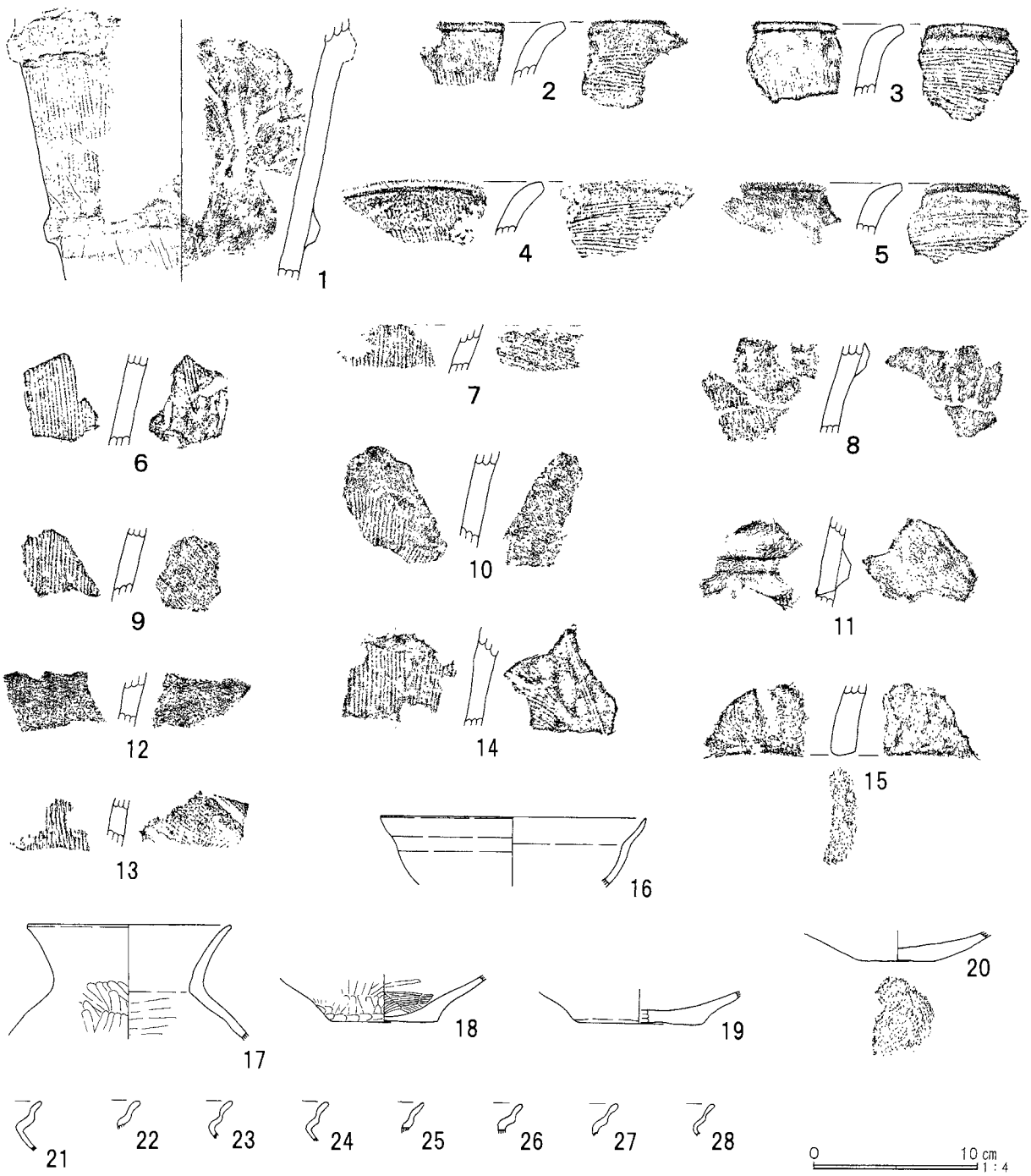
0　2m
1：80

第73図　上之古墳群第２号墳

10　古墳（上之古墳群第２号墳）

平成13年度調査II区及び平成17年度調査II区の43～45―57～60グリッドに位置する。北側の73号溝跡、墳丘下を走る76号溝跡を切って築造されているが、墳丘部は74・75号溝跡、周溝は６号掘立柱建物跡や33～35号土坑、ピット群に切られている。本古墳を切る遺構は、すべて周溝が埋まった段階で掘削されたものであるが、74・75号溝跡は古墳の径に沿って掘られている。このことは、当時、墳丘部が残存しており、墳丘部を避けて溝跡が掘削されたことを物語る。

検出できたのは、墳丘部及び周溝の北東部のみであり、大半は調査区外にある。規模は不明であるが、



第74図　上之古墳群第２号墳出土遺物

第31表　上之古墳群第２号墳出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	45-58G	円筒埴輪	—	(16.4)	—	ABCHIN	浅黄橙色	B	胴部40%	
2	44-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABCDIJMN	橙色	B	口縁部片	
3	45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABEKMN	橙色	B	口縁部片	
4	44-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABEGIJMN	橙色	B	口縁部片	
5	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABEHIKN	橙色	B	口縁部片	
6	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABDEKMN	外:橙 内:明赤褐	B	胴部片	
7	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ACIKMN	橙色	B	胴部片	
8	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABDM	浅黄橙色	B	胴部片	
9	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	BEKMN	橙色	B	胴部片	
10	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ADIN	淡橙色	B	胴部片	
11	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ACGKMN	にぶい橙色	B	胴部片	№13と同一個体。
12	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABDEIMN	橙色	B	胴部片	
13	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABEIKMN	浅黄橙色	B	胴部片	№11と同一個体。
14	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ACIMN	橙色	B	胴部片	
15	44・45-58G	円筒埴輪	—	—	—	ABEMN	浅黄橙色	B	基底部片	
16	44・45-58G	土師器　椀	(16.6)	(4.3)	—	ABDGIMN	浅黄橙色	B	口～体20%	古墳前期。
17	44・45-58G	土師器　壺	(12.8)	(7.2)	—	ABHKN	にぶい赤褐色	B	口～胴20%	古墳前期。
18	44・45-58G	土師器　壺	—	(3.0)	6.6	ADHIN	浅黄橙色	B	底部100%	古墳前期。
19	44・45-58G	土師器　壺	—	(2.15)	(8.3)	ABDMN	浅黄橙色	B	底部45%	古墳前期。内外面摩耗顕著。
20	44・45-58G	土師器　壺	—	(1.9)	4.5	ABEIJKMN	にぶい橙色	B	底部60%	古墳前期。内外面摩耗顕著。
21	44-58G	土師器台付甕	—	—	—	ADIM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
22	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ABGIKM	灰黄褐色	B	口縁部片	古墳前期。
23	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ACDGIKM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
24	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ABGIM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
25	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	BEIJKM	にぶい橙色	B	口縁部片	古墳前期。
26	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ABEHKM	灰黄褐色	B	口縁部片	古墳前期。
27	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ADIKM	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
28	44・45-58G	土師器台付甕	—	—	—	ABDHN	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。

墳丘径約17.5m、周溝径約24.5mを測るややいびつな円墳と思われる。墳丘部は平面的に検出することはできなかったが、平成17年度調査II区での土層断面観察(AA′)では、崩落土も含めて18～24層が墳丘盛土であったことが確認された。周溝は幅2.2～4.4m、深さは0.3m前後を測る。断面形は、平成13年度調査II区では船底状、平成17年度調査II区では逆台形状を呈する。平成17年度調査II区では、底面にピットないし土坑状の掘り込みが多数みられた。平成13年度調査II区は、上面確認及びトレンチ調査のみであるため不明である。覆土はレンズ状に堆積していたことから、自然堆積と思われる。底面近くでは、FA と思われる火山灰層が帯状に確認された。主体部や葺石などは確認されなかった。

出土遺物（第74図）は、円筒埴輪（１～15）がある。すべて周溝覆土から検出された。土師器椀（16）、壺（17～20）、台付甕（21～28）は古墳時代前期の遺物であり、73・76号溝跡からの流れ込みである。

円筒埴輪は、すべて破片での検出である。２～５が口縁部片、１・６～14が胴部片、15のみ基底部片である。このうち、11と13は同一個体である。いずれも刷毛目調整である。

本古墳の築造時期は、出土遺物や FA の存在から６世紀初頭頃と思われる。

11　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、縄文時代から弥生時代、古墳時代前期・後期、平安時代、中・近世まで幅広く検出されている。遺物は、縄文土器、弥生土器、古墳時代前期の土師器、古墳時代後期の土師器、円筒埴輪、平安時代の須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦、土製品、鉄製品、中世の青磁、在地系土器、古銭、近世の陶磁器、在地系土器などがあり、図示したものだけでも116点と多い。遺構出土遺物同様、平安時代の遺物が主体となる。以下、時代及び遺物ごとに述べていく。

第75図１は縄文時代後期前半の堀之内式。今回の調査では縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物は平成17年度調査Ｉ区から唯一検出された。縦位の平行沈線脇にRL単節縄文が施文されている。

第75図２・３は弥生土器。弥生時代も今回の調査では遺構が検出されていないが、遺物は平成13年度調査III区及び平成14年度調査から検出された。２は中期中頃～後半段階の甕の胴部片。刷毛目調整で羽状を呈する。３は後期吉ヶ谷式の壺の口縁部である。口縁部下に廻る突帯に刻みが施されている。

第75図４～10は古墳時代前期の土師器。平成17年度調査II区からの検出が多い。４・５は壺の底部。ともにヘラナデ調整である。６～10は台付甕。６～８はＳ字甕の口縁部片である。９・10は胴下部片。縦位の刷毛目調整が施されている。

第75図11は古墳時代後期の土師器坏。当期唯一の土器である。平成14年度調査で検出された。段が緩く、底部も平底に近いことから、模倣坏でも新相を呈する。上之古墳群に関連する遺物と思われる。

第75図12～28は円筒埴輪。平成13年度調査II区及び平成17年度調査II区からの検出が多く、上之古墳群第２号墳に付随するものであろう。平成13年度調査II区出土のものは、ほぼ同一個体である。

第75～77図29～92は平安時代の遺物である。集落の中心となる平成13年度調査III区からの検出が圧倒的に多い。以下、器種ごとに述べていく。

第75～77図29～74は須恵器。末野産が圧倒的に多いが、南比企産も若干みられた。供膳具の底部は、47がヘラナデである以外、すべて回転糸切り痕を残す。第75図29は蓋。口径から椀蓋と思われる。第75・76図30～44は坏。口径13cm、器高３cm、底径６cm前後を測るものが多い。口縁部は強弱あるが、いずれも外反し、体部は内湾する。36は今回報告する唯一の墨書土器である。底面に文字ではない何かが描かれている。第76図45は椀。推定であるが、口径が21cmと非常に大きい。高台が付くかは不明である。第76図46～52は高台付椀。すべてハの字に開く高台部である。第76図53・54は皿。底部のみである。53は酸化焔焼成による。第76図55は高台付皿。口縁部が大きく外反するが、端部を欠く。第76図56は長頸瓶の頸部。第76～77図57～74は甕。すべて破片での検出である。回転ナデ調整のものが多い。

第77図75は灰釉陶器椀の破片。灰釉は漬け掛けによる。胎土は白っぽく、粗い。黒色粒を多く含む。

第77図76・77は緑釉陶器椀。胎土はともに灰色で緻密である。76はオリーブ灰色、77は緑灰色の釉薬が施釉されている。

第77図78～88は土師器。第77図78は坏。口縁部から体部にかけてＳ字状を呈する。口縁端部は内傾する。ほぼ完形。第77図79～86は甕。口縁部はコの字を呈するが、81～83はやや崩れており、退化的様相を呈する。第77図87・88は台付甕。87は８号住居跡付近から検出された。

第77図89は南比企産須恵器坏の底部を転用した紡錘車。半分を欠くが、中心を穿孔している。

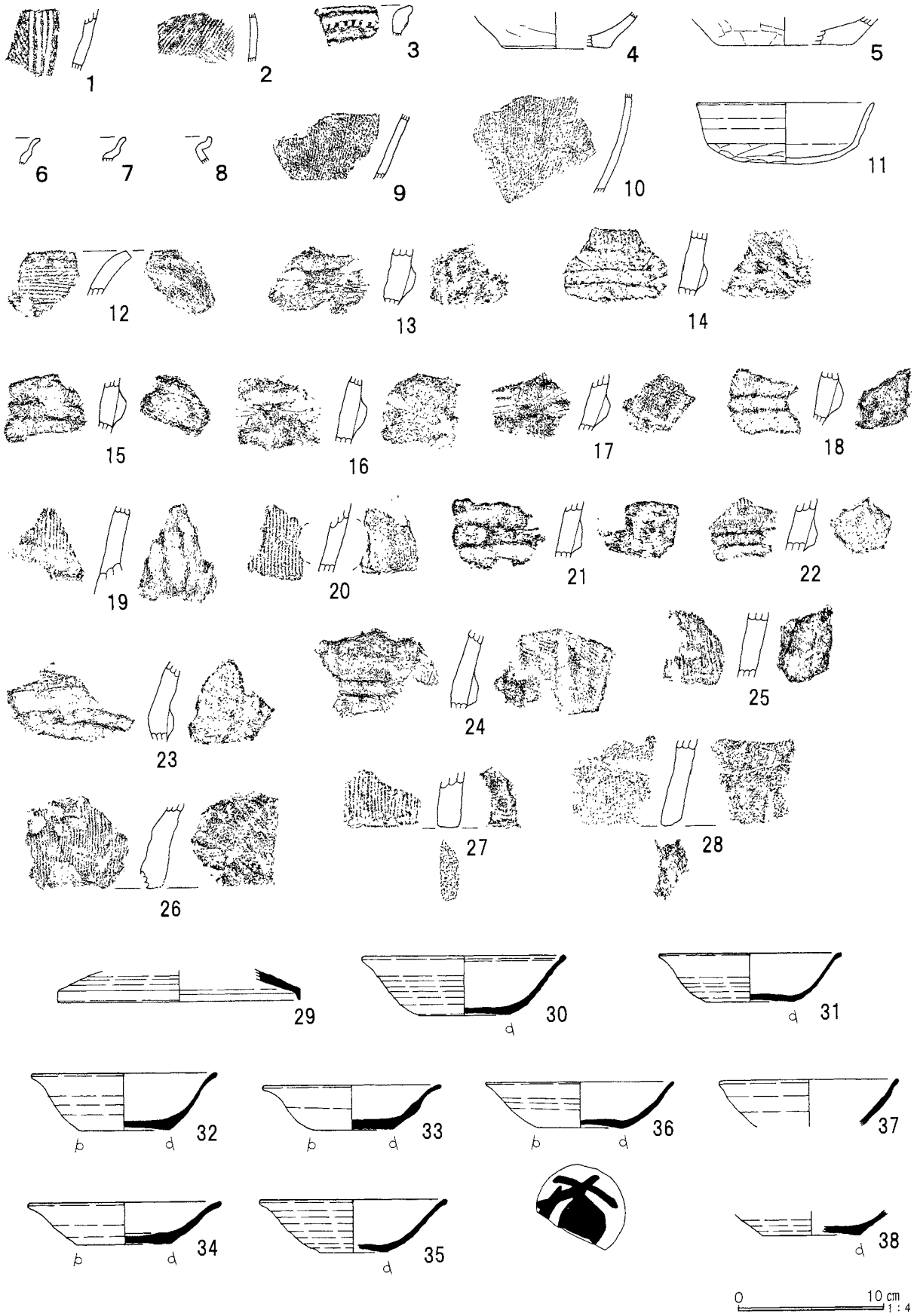
第77図90は平瓦の一部。凸面はナデ調整、凹面は布目が残る。

第77図91は土錘。中段の膨らみがほとんどなく、筒状を呈する。完形。

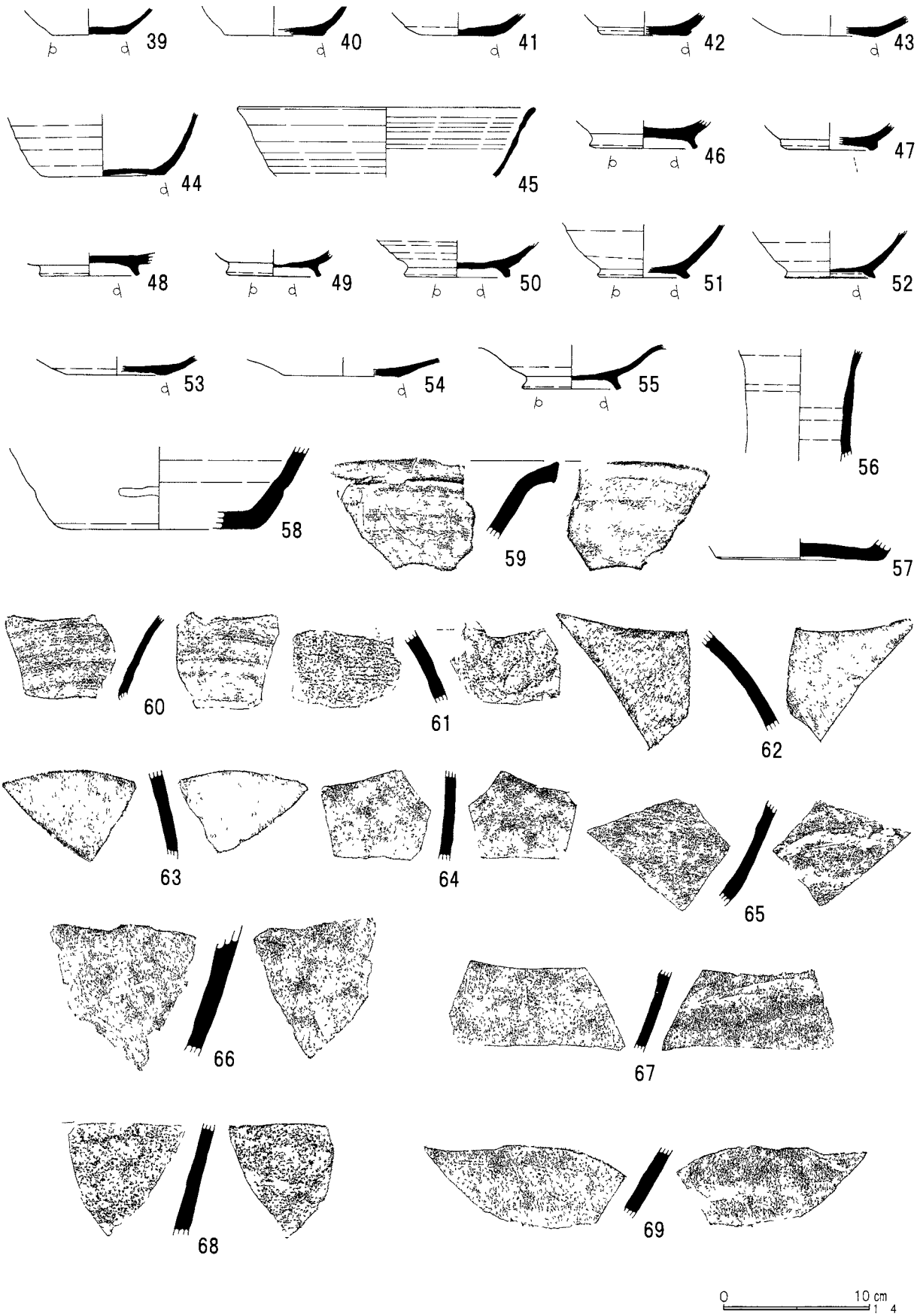
第77図92は刀子。刃先を欠く。柄部が屈曲している。

第78図93～97は中世の遺物である。93は青磁碗。平成15年度調査区から出土した。蓮弁文が明確に描かれている。94はかわらけ。平成13年度調査III区から出土した。器形から中世段階とした。95～97は古銭。95は永楽通寶、96は元祐通寶、97は皇宋通寶である。すべて平成13年度III区から検出された。

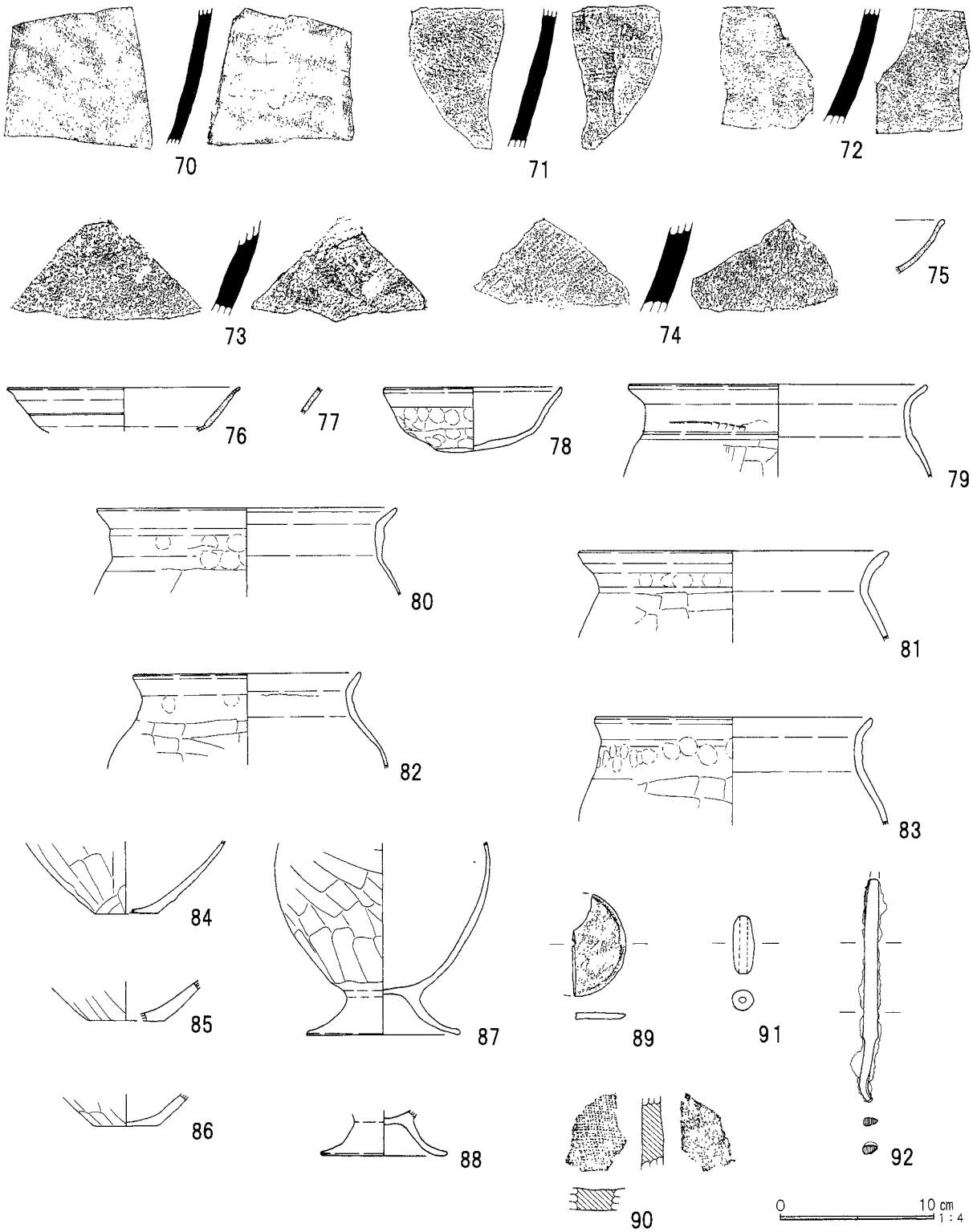
第78図98～116は近世の遺物である。平成14年度調査での検出が多い。第78図98～103は磁器。すべて



第75図　遺構外出土遺物(1)

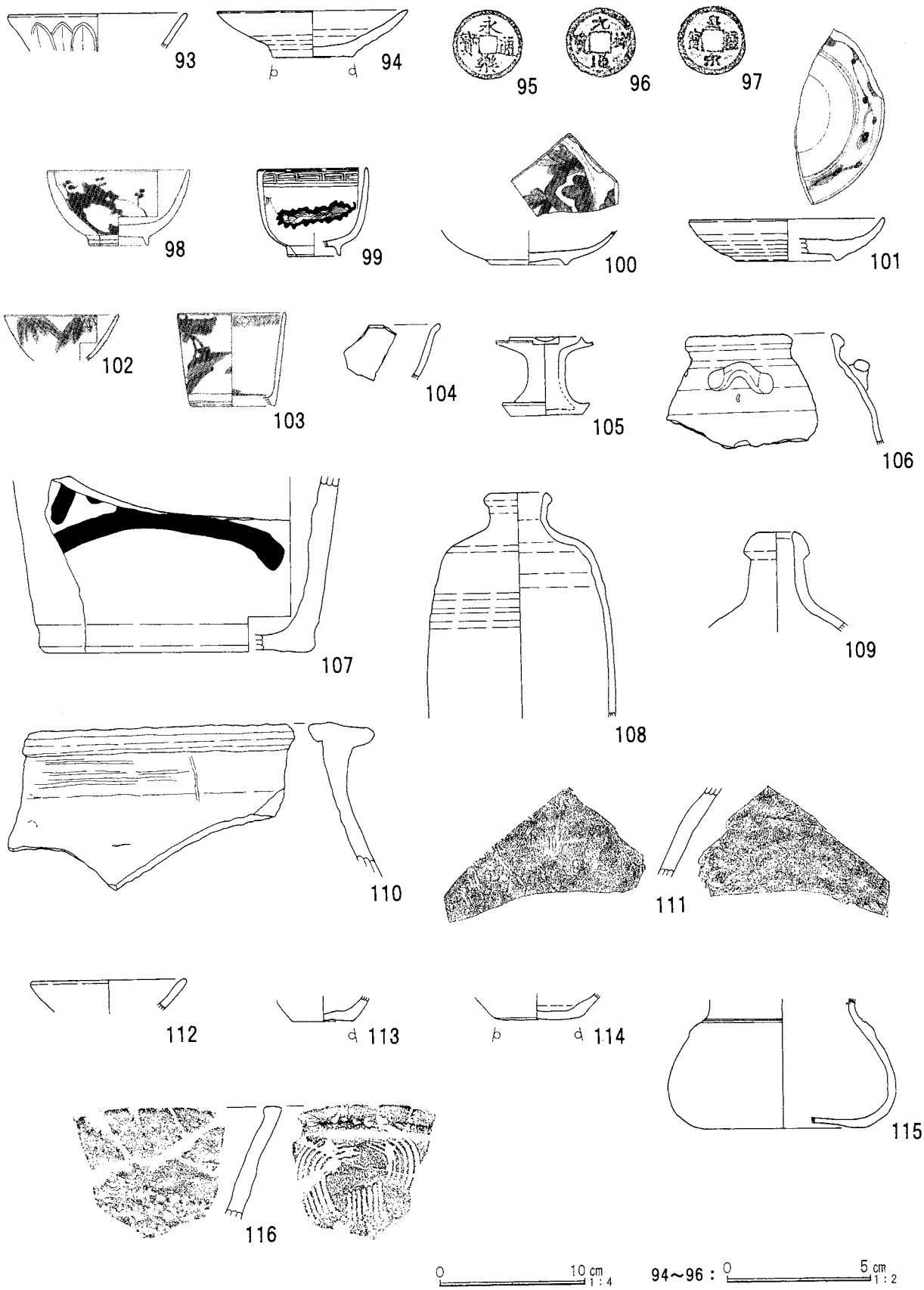


第76図　遺構外出土遺物(2)



第77図　遺構外出土遺物(3)

肥前系の染付である。98・99は碗、100・101は皿、102は小坏、103は蕎麦猪口である。18世紀前半頃のものが多い。104～111は陶器。104は碗、105は台付灯明皿、106は壺、107～109は徳利、110は大甕、111は甕である。112～114はかわらけ。近世遺物としたが、中世に相当するものもあるかもしれない。113が



第78図　遺構外出土遺物(4)

小皿状、その他は坏状を呈する。115は在地系の瓦質土器。破片であるため定かではないが、その形状から急須であろうか。116は在地系土器擂鉢。外面下部にアバタ状剝離がみられた。

第32表　遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
1	H17・Ⅰ区	縄文土器深鉢	—	—	—	ABDHKM	にぶい赤褐色	B	胴部片	後期前半堀之内式。
2	H14年度	弥生土器　甕	—	—	—	ABHK	橙色	B	胴上部片	中期後半。
3	H13・Ⅲ区	弥生土器　壺	—	—	—	ABHK	浅黄橙色	B	口縁部片	後期吉ヶ谷式。
4	H13・Ⅲ区	土師器　壺	—	(2.55)	(7.6)	ABDHM	淡黄色	C	底部25%	古墳前期。
5	H17・Ⅱ区	土師器　壺	—	(2.0)	(9.6)	ABDHMN	明赤褐色	B	底部25%	古墳前期。
6	H13・Ⅲ区	土師器台付甕	—	—	—	ABGM	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
7	H17・Ⅱ区	土師器台付甕	—	—	—	ACDGM	浅黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
8	H17・Ⅱ区	土師器台付甕	—	—	—	ABHIKM	にぶい黄橙色	B	口縁部片	古墳前期。
9	H13・Ⅰ区	土師器台付甕	—	—	—	ABDHIKM	にぶい橙色	B	胴下部片	古墳前期。
10	H14年度	土師器台付甕	—	—	—	ABDHIKN	にぶい黄橙色	B	胴下部片	古墳前期。
11	H14年度	土師器　坏	12.4	4.3	10.6	ABCHIK	明赤褐色	B	ほぼ完形	古墳後期。
12	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDGIKN	橙色	B	口縁部片	№13～18・20と同一個体。
13	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABCDEHIN	橙色	B	胴部片	№12・14～18・20と同一個体。
14	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDHIN	橙色	B	胴部片	№12・13・15～18・20と同一個体。
15	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDHIKN	橙色	B	胴部片	№12～14・16～18・20と同一個体。
16	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABCHIJN	にぶい橙色	B	胴部片	№12～15・17・18・20と同一個体。
17	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDEHIN	橙色	B	胴部片	№12～16・18・20と同一個体。
18	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABEIJN	橙色	B	胴部片	№12～17・20と同一個体。
19	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABCHIK	明赤褐色	B	胴部片	
20	H13・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDHIN	橙色	B	胴部片	№12～18と同一個体。
21	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABDEHIMN	淡橙色	B	胴部片	
22	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABEGIKN	橙色	B	胴部片	
23	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ACGIJMN	橙色	B	胴部片	
24	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ACHIKN	橙色	B	胴部片	
25	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ADGKN	にぶい橙色	B	胴部片	
26	H14年度	円筒埴輪	—	—	—	ABDHGKMN	橙色	B	基底部片	
27	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABCEGIKN	橙色	B	基底部片	
28	H17・Ⅱ区	円筒埴輪	—	—	—	ABCEGIN	橙色	B	基底部片	
29	H13・Ⅲ区	須恵器　蓋	(17.0)	(2.2)	—	ABH	灰色	B	口縁部15%	
30	H12・Ⅰ区	須恵器　坏	(14.4)	4.2	(6.5)	ABGLN	にぶい橙色	C	30%	末野産。
31	H13・Ⅰ区	須恵器　坏	(12.8)	3.4	(6.2)	ADFN	灰色	B	30%	南比企産。
32	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	(13.1)	4.0	6.5	ABDHL	黄灰色	B	50%	末野産。
33	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	(12.5)	3.1	5.9	ADL	灰色	B	50%	末野産。
34	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	(13.6)	3.0	6.8	ABHL	灰色	B	50%	末野産。
35	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	(13.3)	4.15	(4.9)	AHL	灰色	A	30%	末野産。
36	H13・Ⅲ区	須恵器　坏	(13.2)	3.2	6.3	ABDL	灰白色	B	55%	末野産。
37	H17・Ⅱ区	須恵器　坏	(12.6)	(3.25)	—	AFIN	灰白色	B	口～体25%	南比企産。
38	H13・Ⅰ区	須恵器　坏	—	(1.7)	(6.8)	ABL	灰色	B	底部30%	末野産。
39	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	—	(1.8)	5.3	ABHIJL	にぶい黄橙色	C	底部70%	末野産。
40	H13・Ⅱ区	須恵器　坏	—	(2.2)	(6.8)	ABDHL	灰色	B	底部30%	末野産。
41	H13・Ⅲ区	須恵器　坏	—	(1.6)	(5.4)	ABDHLMN	にぶい黄橙色	C	底部45%	末野産。30-45G 出土。
42	H13・Ⅲ区	須恵器　坏	—	(1.6)	(5.9)	ABL	灰白色	A	底部30%	末野産。
43	H13・Ⅲ区	須恵器　坏	—	(1.4)	(6.4)	ABL	灰色	A	底部25%	末野産。
44	H16年度	須恵器　坏	—	(4.35)	(8.7)	ADFN	灰白色	B	体～底25%	南比企産。
45	H13・Ⅱ区	須恵器　椀	(21.0)	(4.9)	—	ABHL	黄灰色	B	口縁部15%	末野産。
46	H13・Ⅰ区	須恵器高台椀	—	(2.0)	7.6	ABCHKN	黄灰色	B	高台部95%	
47	H13・Ⅰ区	須恵器高台椀	—	(1.9)	(6.8)	ADHMN	にぶい橙色	B	高台部30%	
48	H13・Ⅰ区	須恵器高台椀	—	(1.6)	(7.0)	ABHL	灰白色	A	高台部30%	末野産。
49	H13・Ⅰ区	須恵器高台椀	—	(1.9)	6.8	ABEL	灰色	B	高台部40%	末野産。
50	H13・Ⅲ区	須恵器高台椀	—	(2.6)	7.4	ABDHN	浅黄橙色	C	高台部75%	
51	H13・Ⅲ区	須恵器高台椀	—	(3.8)	6.4	ABL	黄灰色	B	体～高45%	末野産。
52	H16年度	須恵器高台椀	—	(3.35)	(6.4)	ABL	灰色	B	体～高40%	末野産。
53	H13・Ⅰ区	須恵器　皿	—	(1.35)	(7.0)	ABEHN	にぶい褐色	B	底部30%	酸化焰焼成。
54	H13・Ⅲ区	須恵器　皿	—	(1.35)	(8.5)	ABGL	黄灰色	C	底部30%	末野産。
55	H13・Ⅰ区	須恵器高台皿	—	(3.1)	7.0	ABGHN	にぶい橙色	B	体～高60%	
56	H13・Ⅱ区	須恵器長頸瓶	—	(7.95)	—	ABDHL	灰色	B	頸部25%	末野産。
57	H13・Ⅲ区	須恵器　甕	—	(1.5)	(11.7)	ABFN	灰色	A	底部25%	南比企産。28-41G 出土。
58	H13・Ⅲ区	須恵器　甕	—	(5.8)	(13.9)	ABGL	黄灰色	B	胴～底20%	末野産。28-41G 出土。
59	H13・Ⅲ区	須恵器　甕	—	—	—	ABDHL	灰色	B	口縁部片	末野産。
60	H13・Ⅲ区	須恵器　甕	—	—	—	AHL	灰色	A	頸部片	末野産。30-45G 出土。

番号	出土位置	器　種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	残存率	備　　考
61	H13・II区	須恵器　甕	—	—	—	ABC	灰色	B	肩部片	外面自然釉付着。
62	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰白色	B	肩部片	末野産。外面自然釉付着。
63	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABN	灰色	B	胴上部片	外面自然釉付着。28-41G 出土。
64	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABEFN	明青灰色	B	胴部片	南比企産。
65	H13・I区	須恵器　甕	—	—	—	ABL	灰色	B	胴下部片	末野産。
66	H13・I区	須恵器　甕	—	—	—	AL	灰色	A	胴下部片	末野産。
67	H13・I区	須恵器　甕	—	—	—	ABDFHN	灰白色	B	胴下部片	南比企産。
68	H13・II区	須恵器　甕	—	—	—	ABHL	灰色	B	胴下部片	末野産。
69	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABL	暗青灰色	B	胴下部片	末野産。30-45G 出土。
70	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABDL	暗青灰色	B	胴下部片	末野産。28-41G 出土。
71	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABDH	外:黄灰 内:灰白	B	胴下部片	
72	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABF	灰色	B	胴下部片	南比企産。
73	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABHLN	灰色	B	胴下部片	末野産。
74	H13・III区	須恵器　甕	—	—	—	ABFN	灰白色	B	胴下部片	南比企産。
75	H13・III区	灰釉陶器　椀	—	—	—	AB	灰白色	B	口～体片	灰釉漬け掛け。
76	H13・III区	緑釉陶器　椀	(15.4)	(2.9)	—	B	オリーブ灰色	A	口～体10%	東濃産。内面釉やや剝落。
77	H13・III区	緑釉陶器　椀	—	—	—	A	緑灰色	A	体部片	東濃産。
78	H13・II区	土師器　坏	11.8	4.3	4.7	ABCM	にぶい橙色	B	ほぼ完形	
79	H13・II区	土師器　甕	(19.6)	(6.1)	—	ABHKM	にぶい橙色	B	口～胴20%	
80	H13・I区	土師器　甕	(19.8)	(5.8)	—	ABGHJKM	にぶい褐色	B	口～胴20%	
81	H13・I区	土師器　甕	(20.4)	(6.0)	—	ABCIJKM	にぶい橙色	B	口縁部25%	
82	H13・I区	土師器　甕	(15.0)	(6.3)	—	BHJKMN	赤橙色	B	口～胴35%	
83	H13・III区	土師器　甕	18.2	(7.1)	—	BDHJKM	橙色	B	口～胴90%	
84	H13・II区	土師器　甕	—	(4.8)	(4.2)	ABDJKM	にぶい黄橙色	B	胴～底30%	
85	H13・III区	土師器　甕	—	(2.7)	(5.1)	ABCEHKM	橙色	B	底部30%	
86	H15年度	土師器　甕	—	(2.1)	(4.4)	ABDGHIKM	にぶい橙色	B	底部50%	
87	H13・III区	土師器台付甕	—	(12.65)	10.2	ABHIKN	赤褐色	B	胴～台80%	31-44G 出土。
88	H13・I区	土師器台付甕	—	(3.0)	(8.4)	ABDGHJM	橙色	B	台部45%	
89	H13・III区	土製紡錘車	推定径(7.4)cm、厚さ(0.45)g。重量(14.6)g。胎土：ABF。色調：灰色。焼成：B。半分以上欠。須恵器坏底部の転用。							
90	H13・III区	平　瓦	最大長(5.0)cm、最大幅(3.6)cm、最大厚(1.4)cm。胎土：ABDH。色調：橙色。焼成：B。一部のみ残存。							
91	H13・II区	土　錘	最大長3.8cm、最大径1.4cm、孔径0.5cm。重量8.2g。完形。							
92	H13・II区	刀　子	最大長(14.75)cm、最大幅(1.05)cm、最大厚(0.55)cm。重量(25.5)g。刃先欠。							
93	H15年度	青磁　碗	(12.6)	(2.5)	—	—	—	—	口縁部20%	龍泉窯系。
94	H13・III区	土器かわらけ	(13.4)	3.25	5.7	ABHKM	灰白色	B	50%	在地系。
95	H13・III区	古　銭	最大径2.4cm、孔径0.6cm、最大厚0.1cm。重量2.6g。完形。「永楽通寶」。明1408年。							
96	H13・III区	古　銭	最大径2.4cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量2.5g。完形。「元祐通寶」。北宋1086年。							
97	H13・III区	古　銭	最大径2.3cm、孔径0.7cm、最大厚0.1cm。重量3.2g。完形。「皇宋通寶」。北宋1039年。							
98	H14年度	磁器　碗	(7.8)	6.15	(3.8)	—	—	—	30%	18c 前。肥前系。染付・透明釉。
99	H14年度	磁器　碗	(10.0)	4.2	(5.3)	—	—	—	40%	18c 前。肥前系。染付・透明釉。
100	H14年度	磁器　皿	—	(2.4)	(5.5)	—	—	—	体～底20%	18c。肥前系。染付・透明釉。
101	H14年度	磁器　皿	(13.6)	(2.95)	(7.4)	—	—	—	40%	18c 前。肥前系。染付・透明釉。
102	H14年度	磁器　小坏	8.0	(3.2)	—	—	—	—	口～体50%	18c。肥前系。染付・透明釉。
103	H15年度	磁器蕎麦猪口	(7.7)	6.6	(6.1)	—	—	—	30%	18c 前。肥前系。染付・透明釉。
104	H14年度	陶器　碗	—	—	—	—	—	—	口縁部片	瀬戸・美濃系。灰釉。
105	H14年度	陶器台付灯明皿	—	(5.55)	5.1	—	—	—	90%	長石釉。
106	H14年度	陶器　壺	—	—	—	—	—	—	口～胴部片	18c。瀬戸・美濃系。鉄釉。
107	H13・III区	陶器　徳利	—	(12.3)	(19.4)	—	—	—	胴～底25%	文字一部残存。
108	H14年度	陶器　徳利	(4.8)	(15.75)	—	—	—	—	口～胴30%	瀬戸・美濃系。灰釉。
109	H15年度	陶器　徳利	4.6	(7.05)	—	—	—	—	口～胴100	長石釉。
110	H13・III区	陶器　大甕	—	—	—	—	—	—	口縁部片	常滑産。鉄釉。
111	H13・III区	陶器　甕	—	—	—	—	—	—	胴下部片	常滑産。鉄釉。
112	H14年度	土器かわらけ	(11.0)	(2.25)	—	ABCHK	橙色	B	口縁部30%	在地系。
113	H13・III区	土器かわらけ	—	(1.8)	(4.3)	ABCGHM	橙色	B	底部45%	在地系。
114	H15年度	土器かわらけ	—	(1.9)	5.9	ABDHIKM	明赤褐色	B	底部60%	在地系。
115	H14年度	瓦質土器急須?	—	(9.1)	(11.0)	—	黒褐色	—	頸～底25%	在地系。
116	H13・II区	土器　擂鉢	—	—	—	ABIJK	灰黄褐色	B	口縁部片	在地系。外面アバタ状剝離。

V　調査のまとめ

今回の調査は、細部にやや違いがあるものの、過去に行われた発掘調査成果をほぼトレースする内容と言える。諏訪木遺跡及び上之古墳群第２号墳ともに良好な資料が得られ、その様相の一端を明らかにすることができた。しかし、調査は区画整理に伴う街路築造部分のみであるため未知な部分が多いことは否めない。よって、ここでは本報告の範囲に限り明らかとなった点について簡潔に述べ、調査のまとめとしたい。

諏訪木遺跡について

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代前期、平安時代、中世、近世の４つに大別される。ただし、中・近世に関しては、出土遺物が皆無であること、小片であることなどからその見分けが難しく、中世以降としか判断できない遺構も多々みられた。これらの遺構が中・近世どちらかに該当することは間違いない。また、時期不明の遺構もいくつかあるが、これらについても上記４つの段階のいずれかに相当することは間違いない。以下、各段階について述べる。

古墳時代前期

検出された遺構は溝跡のみである。該当するのは、６・46・68～73・76・80号溝跡の計10条である。今回の調査では住居跡などは検出されていないが、本遺跡南西に隣接する藤之宮遺跡では８軒の住居跡が確認されている。溝跡は北東方向から南西方向に走り、藤之宮遺跡に向かっている。このことから今回の調査で検出された溝跡は、藤之宮遺跡の集落跡に関連するものと思われる。藤之宮遺跡については来年度に報告書を刊行する予定であり、具体的な時期関係などは後日明らかにしてみたい。

平安時代

今回の報告で主体となる段階である。該当する遺構は、住居跡24軒（１～24号）、掘立柱建物跡１棟（５号）、柵列跡２列（１・２号）、溝跡16条（１・14・16～18・23・27・34～39・62・78・79号）、土坑19基（２～５・９・10・13～15・34～43号）、井戸跡（９・13・18・22・23・25・29号）などである。

今回確認された集落跡は、５・19号住居跡の９世紀前半から中頃にかけての段階を上限として10世紀初頭までの約１世紀の間に収まる。しかし、13号住居跡から検出された流れ込みの須恵器坏に８世紀後半に相当するもの（第24図２）があることから、上限に関しては遡る可能性がある。住居跡は９世紀後半から10世紀初頭にかけてのものが多く、集落跡の最盛期はこの段階になる。住居跡以外で具体的な時期を特定することが困難な遺構もみられたが、これらについても住居跡と同じく９世紀後半から10世紀初頭にかけてのものである可能性が高い。

今回確認された集落跡は、第１次調査（熊谷市遺跡調査会2001）で確認された集落跡とほぼ同時期と言えるが、両者は約500m離れており、同一集落とみるにはやや抵抗がある。その理由として、まず地形的な問題が挙げられる。今回確認された集落跡の中心と思われる平成13年度調査III区から南東方向へは緩やかに下がっており、平成12年度調査II区以南における各種開発に伴う試掘調査では、遺構が確認されず、湿地帯であったことが確認されている。現在は一面ほぼ平坦となっているが、当時は両集落間に谷が存在していたことが想定され、別々の集落であった可能性が高い。そして、それを裏付けるのが両集落跡の内容である。第II・III章でも述べたとおり、第１次調査の集落跡は四面庇の付いた大型掘立柱

建物跡を中心に集落が広がっている。そして、出土遺物も詳細については第III章に譲るが、非常に豊富な内容と言える。一方、今回確認された集落跡は、いわゆる一般的な古代の集落跡であり、出土遺物に目立ったものもみられない。両者の違いが如実に分かるバロメーターとしては、墨書土器の出土量がある。第１次調査では、主に河川祭祀跡を中心に大量の墨書土器が検出されているが、今回の調査では僅か１点のみの検出でしかない。墨書土器が即レベルの違いを示すという訳ではないが、ほぼ同時期の集落としてはあまりにも違いがありすぎる。

今回確認された集落跡と第１次調査の集落跡は、現在同一遺跡内に収まっており、両者が何らかの関係にあったことは想定できるが、地形的・内容的にみると別々の集落跡と捉えた方が妥当と思われる。

中世

中世段階については、本遺跡北側に位置する成田氏館跡の存在を抜きにして語れない。埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって実施された調査では、変形方形の区画溝が確認されており、成田氏に関連する新たな館跡の存在が示唆されている(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2002)。今回の調査地点は、その館跡とされる箇所から約400m、成田氏館跡からは約500mの距離にある。検出された遺構は、溝跡３条(10・30・83号)、土坑３基（28・30・31号)、井戸跡５基（２・３・５・10・27号)、火葬跡１基（１号）と少ないが、中世以降としか特定できない遺構も加わることは間違いない。特に平成15年度調査区では、検出された溝跡を方形に想定するとその区画内に掘立柱建物跡や柵列跡、井戸跡、ピット群などが位置することとなり、館跡的な配置を想定することも可能である。調査が街路部分のみであるため、あくまでも憶測の域を出ないが、いずれにしても今回の調査で検出された遺構は、成田氏関連のものと捉えて良いのではないだろうか。

近世

検出された遺構は、溝跡14条（２・５・12・24・31・48・52・55・56・58～61・65号)、廃棄遺構である土坑２基（24・25号)、井戸跡５基（４・６・８・11・24号)、近世墓５基（１～５号）である。

近世段階については、その具体像を把握することは難しい。ただし、上記の遺構に中世以降とした遺構が加わり、集落跡が形成されていたことは確かである。現時点ではこれ以上のことを言うのは困難であり、実態は不明であると言わざるを得ない。

上之古墳群第２号墳について

上之古墳群で本格的な発掘調査が実施されたのは、今回の２号墳が初めてである。検出できたのは周溝北東部のみであるため、依然として不明な点が多い。しかし、２号墳では埴輪が検出されたことから埴輪を持たない１号墳よりは古いことが想定される。

埋葬施設に関しては、未調査であるため知る由もないが、そのヒントとなり得るのが近隣に位置する肥塚古墳群である。上之古墳群の北西約1.5kmに所在し、現在16基が確認されている。すべて円墳であり、古墳時代後期から末にかけて築造された群集墳である。埋葬施設は、荒川中流域にみられる胴張型の横穴式石室であるが、注目すべきはその石材である。荒川水系の川原石を使用した乱石積のものと利根川水系の角閃石安山岩を使用した切組積のものが混在するという市内でも特異な様相を呈しているのである。上之古墳群の埋葬施設も胴張型横穴式石室であると思われるが、石材に関しては果たして肥塚古墳群同様、両者が混在するのか、あるいはどちらか一方を採用しているのか興味のあるところである。

今後、調査の機会が得られた際には、確認しておきたい事項である。

上之古墳群は現在２基のみの確認であるが、区画整理に伴う試掘調査では大量の埴輪が検出された箇所があり、また今回報告した平成13年度調査Ⅲ区では中世の10号溝跡から形象埴輪の基部が出土し、近隣に位置する前中西遺跡でも古墳に副葬されたと思われる遺物が後世の遺構から検出されていることから、２基以外にも古墳が存在していたことは間違いない。区画整理に伴う発掘調査は、今後も継続されることから、上之古墳群の確認例は増すと思われる。

以上、紙数の都合もあり、駆足で述べた。不足な面があることは否めないが、本書が熊谷市の埋蔵文化財資料として今後活用していただけたら幸いである。

引用・参考文献

熊谷市遺跡調査会　2001　『諏訪木遺跡』

熊谷市教育委員会　1979　『中条条里遺跡調査報告書Ⅰ』

1980　『中条遺跡群・中島遺跡』

1982　『中条遺跡群Ⅲ　権現山古墳・常光院東遺跡』

1982　『中条遺跡群』

1983　『めづか』

1988　『寺東・八反田・東耕地・入川・深町遺跡』

1999　『横間栗遺跡』

2000　『寺東遺跡・別府氏館跡』

2001　『肥塚中島遺跡・出口上遺跡・出口下遺跡・肥塚古墳群14・15・16号墳』

2002　『前中西遺跡Ⅱ』

2003　『前中西遺跡Ⅲ』

2004　『籠原裏遺跡』

埼玉県遺跡調査会　1971　『横塚山古墳』

埼玉県教育委員会　1984　『池守・池上』

1988　『埼玉の中世城館跡』

2004　『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成14年度

2005　『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成15年度

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1989　『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集

1989　『北島遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第88集

1991　『北島遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第103集

1991　『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集

1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第128集

2002　『北島遺跡Ⅴ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第278集

2002　『池上／諏訪木』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第283集

2003　『北島遺跡Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第286集

2004　『北島Ⅷ／田谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第292集

写 真 图 版

平成13年度調査Ⅲ区全景
（真上から）

平成13年度調査Ⅲ区遠景
（東から）

図版2

平成14年度調査Ⅰ・Ⅱ区全景（真上から）

平成14年度調査Ⅰ区全景（真上から）

平成14年度調査Ⅱ区全景（真上から）

平成12年度調査Ⅰ区遠景（東から）

平成12年度調査Ⅰ区遠景（西から）

平成12年度調査Ⅱ区遠景（東から）

平成12年度調査Ⅱ区遠景（西から）

平成13年度調査Ⅰ区遠景（東から）

平成13年度調査Ⅱ区遠景（西から）

平成13年度調査Ⅲ区南東部遠景（南西から）

図版4

平成13年度調査Ⅲ区南東部遠景（西から）

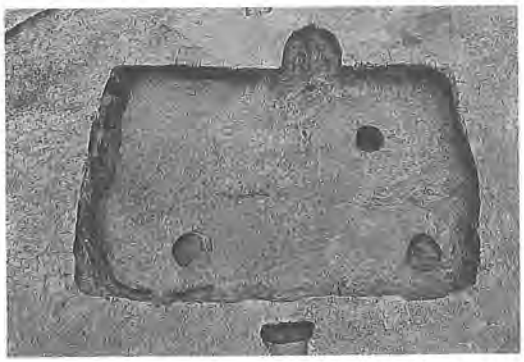
平成15年度調査区遠景（北から）

平成15年度調査区遠景（東から）

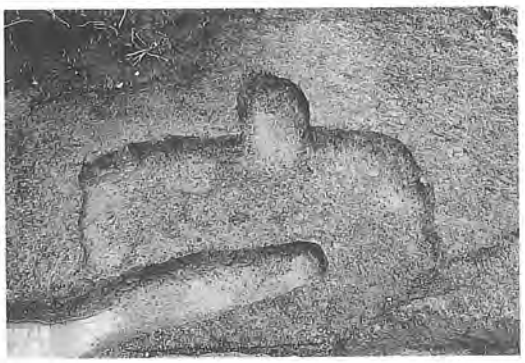
平成17年度調査Ⅰ区遠景（東から）

平成15年度調査区遠景（西から）

平成17年度調査Ⅱ区遠景（北から）



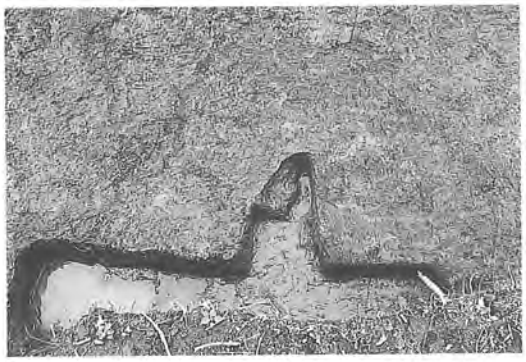
第１号住居跡



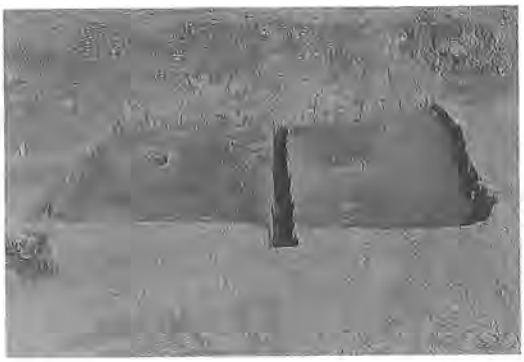
第２号住居跡

第３号住居跡

第４号住居跡



第５号住居跡（北側）



第５号住居跡（南側）

第５号住居跡　土器出土状況（１）

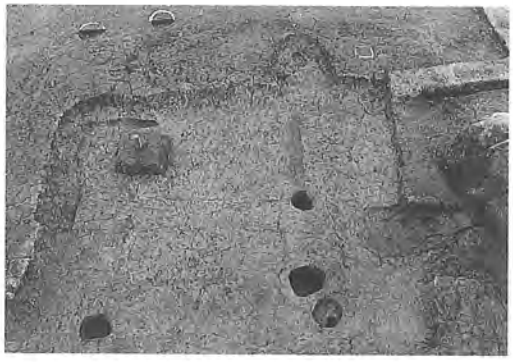
第５号住居跡　土器出土状況（２）

図版6

第6号住居跡

第10号住居跡

第7号住居跡



第11号住居跡

第8号住居跡

第12号住居跡

第9号住居跡

第12号住居跡カマド

第13号住居跡

第14号住居跡カマド

第13号住居跡カマド

第15号住居跡

第13号住居跡　土器出土状況

第16号住居跡

第14号住居跡

第17号住居跡

図版8

第18号住居跡

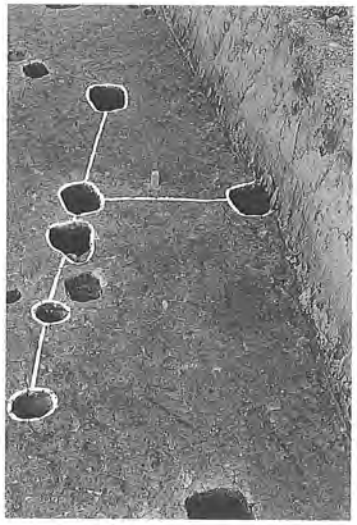
第19号住居跡

第20号住居跡

第21号住居跡

第22号住居跡

第23号住居跡



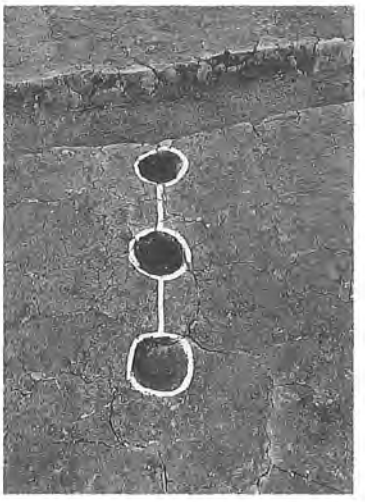
第１号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡

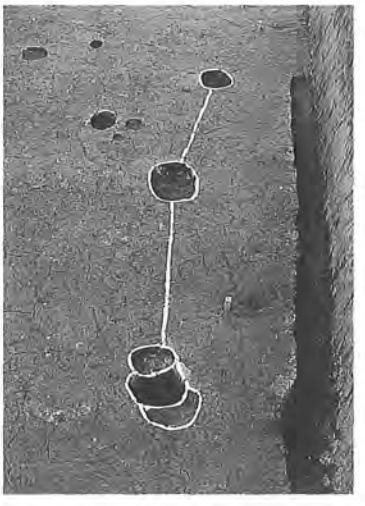
第４号掘立柱建物跡

第１号柵列跡

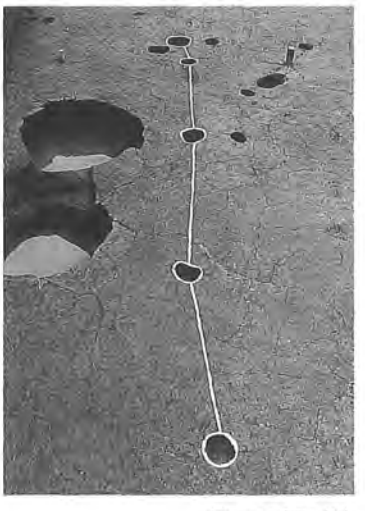
第２号柵列跡



第３号柵列跡



第４号柵列跡



第５号柵列跡

図版10

第1・2・6号溝跡

第10・12・22・24号溝跡

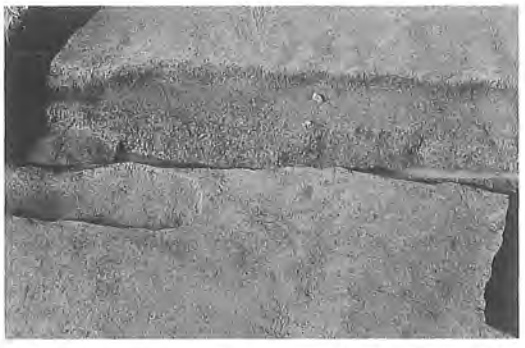
第11・12号溝跡

第10・12・28・29号溝跡

第6・68・69・70号溝跡

第24号溝跡

第25号溝跡

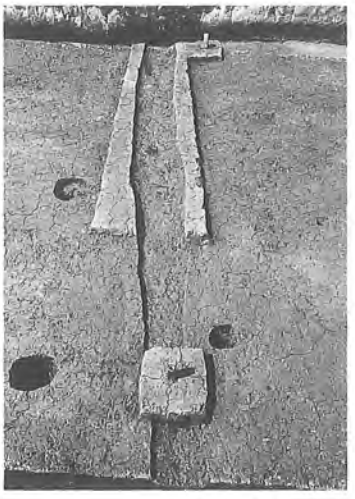


第30・31号溝跡

第31号溝跡　磁器出土状況

第32・33号溝跡

第34号溝跡



第35号溝跡

第36～38号溝跡

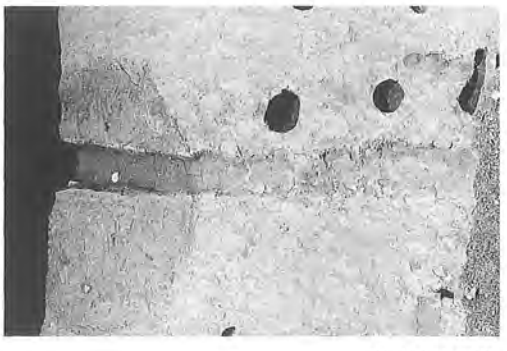
第39号溝跡

図版12

第40・41号溝跡

第46号溝跡（平成13年度調査Ⅰ区）

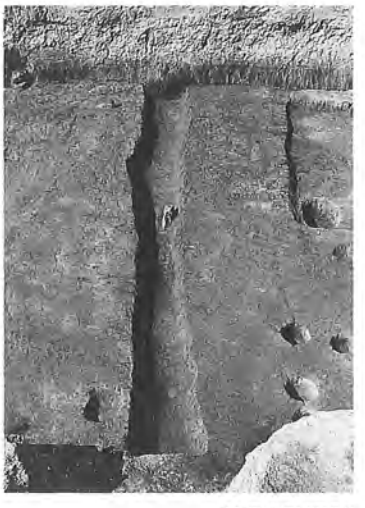
第46号溝跡（平成17年度調査Ⅱ区）



第48号溝跡

第49号溝跡

第50号溝跡



第51号溝跡

第52号溝跡

第52号溝跡　石臼出土状況

第52号溝跡　木材出土状況

第53号溝跡

第54号溝跡

第55～61号溝跡

第62号溝跡

第63号溝跡

図版14

第64・65号溝跡

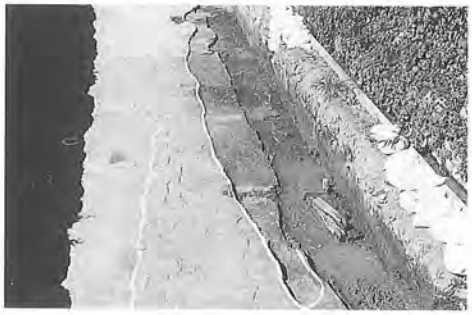
第66号溝跡

第67号溝跡

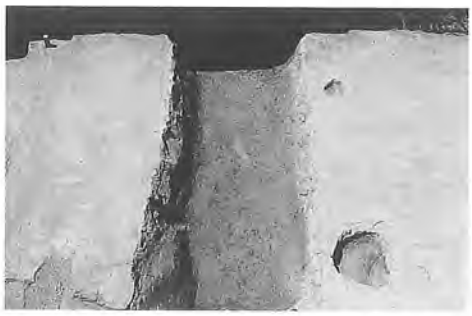
第73号溝跡

第75号溝跡（平成13年度調査Ⅱ区）

第75号溝跡（平成17年度調査Ⅱ区）



第81号溝跡



第82号溝跡

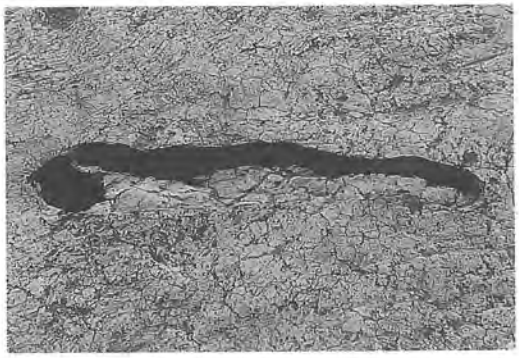
第83号溝跡

第2号土坑

第84号溝跡

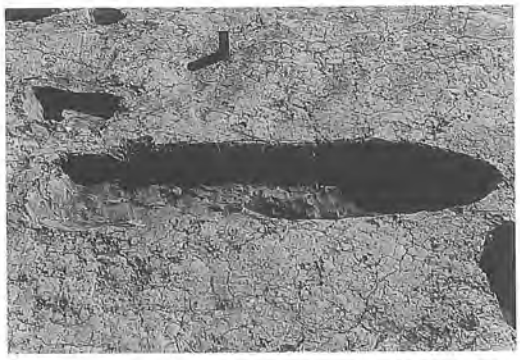
第3～5号土坑

第85号溝跡



第6号土坑

第86号溝跡



第7号土坑

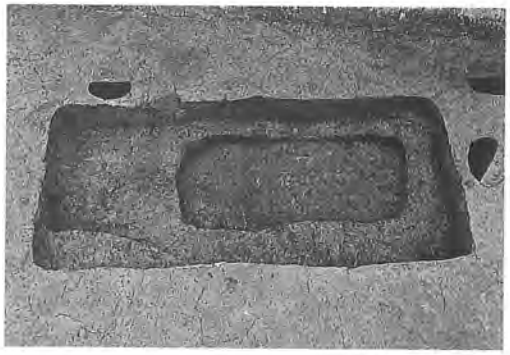
図版16

第9号土坑

第19号土坑

第10号土坑

第20号土坑

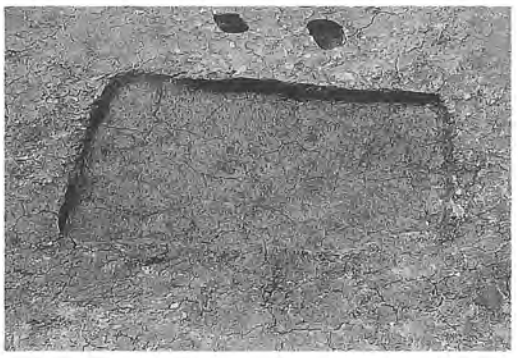


第11号土坑

第21号土坑

第12号土坑

第22号土坑



第23号土坑

第24号土坑

第25号土坑

第26号土坑

第27号土坑

第28号土坑

第30号土坑

第30号土坑　板碑出土状況

図版18

第30号土坑　馬頭骨出土状況

第２号井戸跡

第30号土坑　馬歯出土状況

第２号井戸跡　石積断面

第36号土坑

第６号井戸跡

第36号土坑　土器出土状況

第７号井戸跡

第8号井戸跡

第11号井戸跡　曲物出土状況

第9号井戸跡

第12号井戸跡

第10号井戸跡

第13号井戸跡

第11号井戸跡

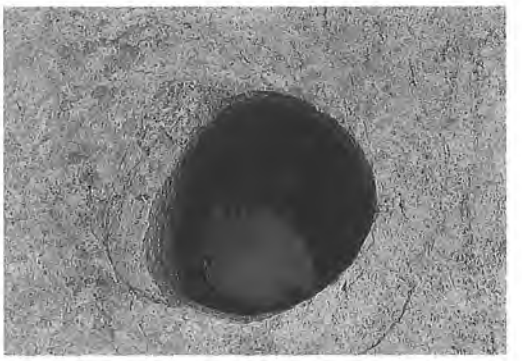
第14号井戸跡

図版20

第15号井戸跡

第21号井戸跡　礫出土状況

第18号井戸跡



第21号井戸跡

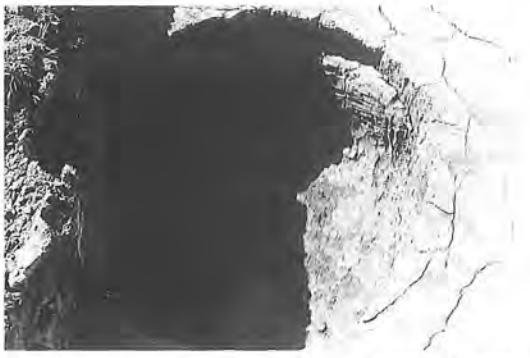
第19号井戸跡

第22号井戸跡

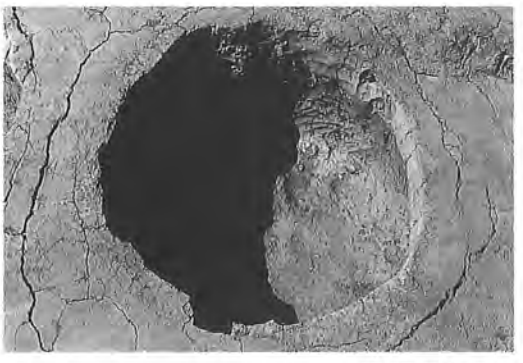
第20号井戸跡

第23号井戸跡

第24号井戸跡



第28号井戸跡

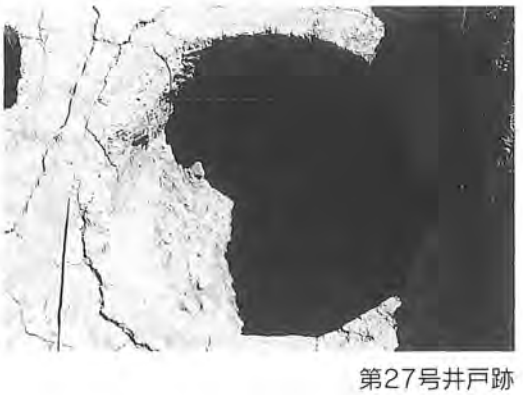


第25号井戸跡

第29号井戸跡

第26号井戸跡

第30号井戸跡



第27号井戸跡

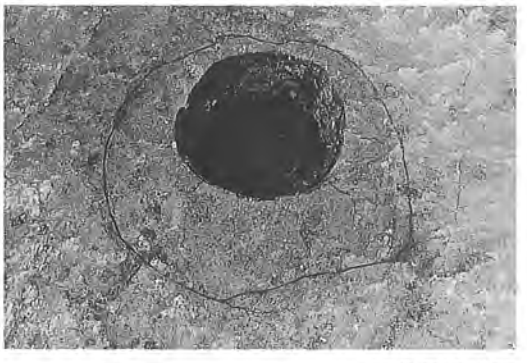
第30号井戸跡　曲物出土状況

図版22

第31号井戸跡

第１号近世墓　古銭出土状況

第32号井戸跡



第２号近世墓

第１・２号近世墓

第２号近世墓　古銭出土状況

第１号近世墓

第５号近世墓

上之古墳群第２号墳
（平成13年度調査Ⅱ区　西から）

上之古墳群第２号墳
（平成17年度調査Ⅱ区　北から）

上之古墳群第２号墳
（平成17年度調査Ⅱ区　西から）

図版24

第１号住居跡　第８図１

第１号住居跡　第８図５

第４号住居跡　第11図１

第４号住居跡　第11図２

第４号住居跡　第11図４

第５号住居跡　第12図１

第７号住居跡　第15図１

第７号住居跡　第15図３

第７号住居跡　第15図６

第７号住居跡　第15図10

第７号住居跡　第15図15

第７号住居跡　第15図21

第７号住居跡　第15図22

第７号住居跡　第15図24

第７号住居跡　第15図32

第８号住居跡　第17図１

第12号住居跡　第23図１

第12号住居跡　第23図３

第12号住居跡　第23図４

第13号住居跡　第24図３

図版26

第17号住居跡　第30図2

第17号住居跡　第30図3

第17号住居跡　第30図4

第17号住居跡　第30図12

第17号住居跡　第30図19

第31図40

第31図41

第31図42

第18号住居跡　第32図3

第18号住居跡　第32図4

第19号住居跡　第32図１

第20号住居跡　第34図１

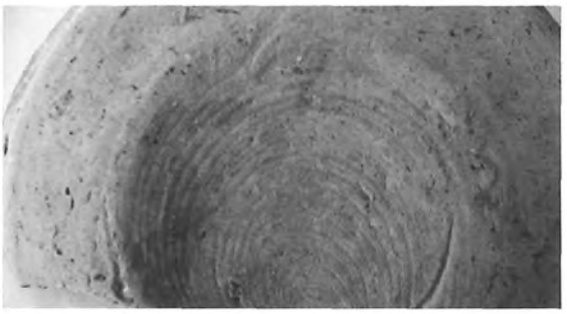
第36号土坑　第64図１

第36号土坑　第64図２

第36号土坑　第64図３

第36号土坑　第64図４

遺構外　第75図11



遺構外　第75図36墨書

遺構外　第77図76

遺構外　第77図78

図版28

第４号住居跡　第11図５

第５号住居跡　第12図６

第７号住居跡　第16図33

第７号住居跡　第16図34

第７号住居跡　第16図37

第８号住居跡　第17図16

第8号住居跡　第17図17

第9号住居跡　第18図8

第10号住居跡　第20図17

第11号住居跡　第22図5

第13号住居跡　第24図6

第17号住居跡　第30図21

第17号住居跡　第30図23

第17号住居跡　第30図24

図版30

第17号住居跡　第31図44

第21号住居跡　第35図5

第20号住居跡　第34図8

第78号溝跡　第58図1

第20号住居跡　第34図11

第36号土坑　第64図6

第２号溝跡　第53図２

第30号溝跡　第55図１

第31号溝跡　第55図１

第65号溝跡　第56図１

第24号土坑　第63図３

第25号土坑　第63図１

第25号土坑　第63図２

第11号井戸跡　第69図１

遺構外　第78図104

図版32

第６号溝跡　第53図１

第６号溝跡　第53図２

第６号溝跡　第53図５

第73号溝跡　第57図３

第73号溝跡　第57図６

第10号溝跡　第54図６

上之古墳群第２号墳　第74図１

上之古墳群第２号墳
第74図２～15外面

上之古墳群第２号墳
第74図２～15内面

第13号住居跡
第24図７

第1号溝跡
第53図10

遺構外
第77図91

第12号溝跡
第55図６

第３号井戸跡
第69図４

図版34

遺構外　第77図89

第２号溝跡　第53図15

第36号土坑　第64図７～９

第５号住居跡　第12図７上面

第17号住居跡　第31図47上面

第５号住居跡　第12図７側面

第17号住居跡　第31図47下面

第11号住居跡　第23図10

第17号住居跡　第31図46

第16号住居跡　第28図22

第17号住居跡　第31図45

第10号溝跡　第54図13

第61号溝跡　第56図1

第83号溝跡　第59図15

第8号井戸跡　第69図2

第25号土坑　第64図12

第52号溝跡　第56図10上面

第52号溝跡　第56図11

第52号溝跡　第56図10下面

第27号井戸跡　第69図2

図版36

第83号溝跡　第59図16

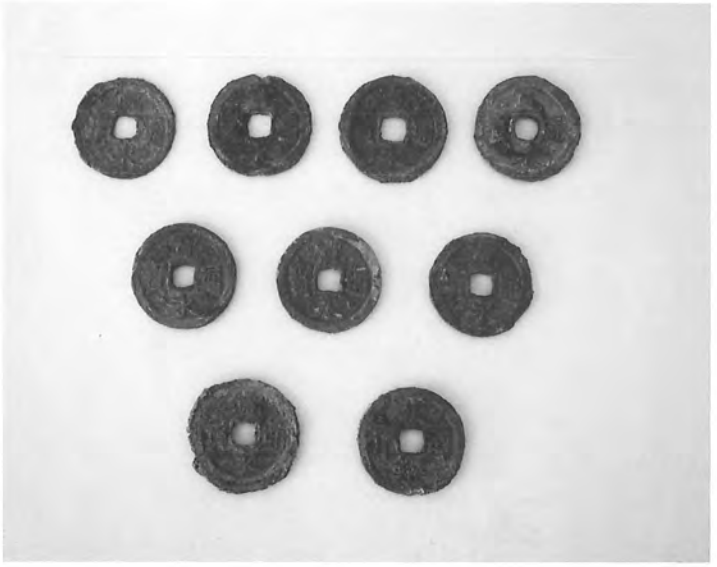
第30号土坑　第64図4

第10号井戸跡　第69図1

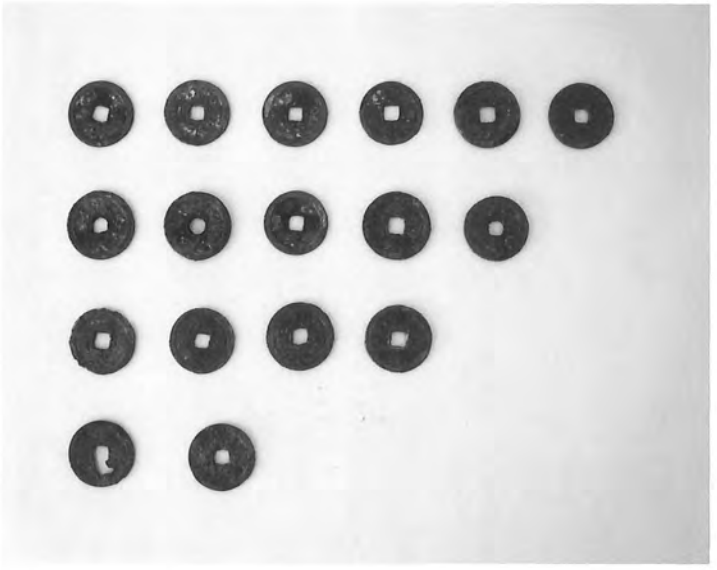
第30号土坑　第64図3

第10号井戸跡　第69図1金泥

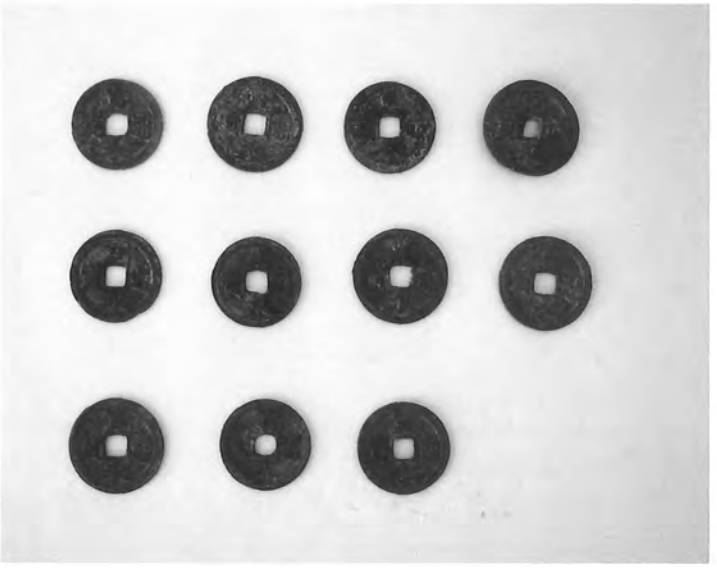
第52号溝跡　第56図9



第１号近世墓　第71図１a～４



第２号近世墓　第71図１a～４



第４号近世墓　第71図１a～１l

報告書抄録

ふりがな	すわのきいせきII・かみのこふんぐんだい2ごうふん
書名	諏訪木遺跡II・上之古墳群第2号墳
副書名	平成18年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	松田 哲
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会
所在地	〒360－0107 熊谷市千代329番地　熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062
発行年月日	西暦2007（平成19）年3月23日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
諏訪木遺跡（すわのきいせき）	熊谷市上之（くまがやしかみの）1903-1他（ほか）	11202	016	36° 9′ 00″	139° 24′ 25″	20010213～20010328	415	区画整理街路築造工事
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1997-1他（ほか）					20010514～20010921	2,143	
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1900-1他（ほか）					20020809～20020913	373.62	
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1893他（ほか）					20031014～20031117	335.4	
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1997-1					20050124～20050128	60	
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1997-3他（ほか）					20050620～20050809	248.5	
上之古墳群（かみのこふんぐん）第2号墳（だいごうふん）	熊谷市上之（くまがやしかみの）1997-1他（ほか）	11202	013-2	36° 8′ 59″	139° 24′ 23″	20010514～20010921	—	
	熊谷市上之（くまがやしかみの）1997-3他（ほか）他					20050620～20050809	—	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪木遺跡	集落跡	縄文時代後期	-	土器	
		弥生時代中・後期	-	土器・石器	
		古墳時代前期	溝跡 10条	土師器	
		古墳時代後期	-	土師器・埴輪	
		平安時代	住居跡 24軒 掘立柱建物跡 1棟 柵列跡 2列 溝跡 16条 土坑 19基 井戸跡 7基	須恵器・土師器 灰釉・緑釉陶器 瓦・土製品 鉄製品・石製品	
		中・近世	掘立柱建物跡 5棟 柵列跡 4列 溝跡 42条 土坑 22基 井戸跡 17基 火葬跡 1基 近世墓 5基 ピット群	陶磁器・かわらけ 在地系土器 瓦・古銭・羽口 土製品・石製品 木製品	井戸跡から出土した板碑の銘文等に金泥が残存していた。
		時期不明	溝跡 18条 土坑 2基 井戸跡 8基		
上之古墳群第2号墳	古墳	古墳時代後期	古墳 1基	円筒埴輪	

平成18年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

—熊谷都市計画事業上之土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書Ⅲ—

諏訪木遺跡Ⅱ・上之古墳群第２号墳

平成19年３月23日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社